

奇譚クラブ

■ 新しい風俗文献誌 ■



5
月
号

昭和四十四年五月号



奇譚クラブ

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



定価三五〇円

5月号 ¥ 350

'69
5

【最近版】粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組 百態 大手札型印画紙 (9×13 種) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇〇円
十組十枚 一〇〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号
其田京一宛お申込み下さい

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴しい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、お好きなポーズをお選び下さい。

- 1 鞭打条痕の臀部 (関谷富佐子)
2 後手は高く縛る (佐々木真弓)
3 八の字の開股縛 (左近麻里子)
4 狂う女体の表情 (ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身 (川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛 (長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極木村 (洋子)
8 白肌縛り股間責 (山原 清子)
9 全身縛りを吊る (大塚 啓子)
10 悦喜に歩泣する (関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒 (山原 清子)

- 12 開股強烈羞恥責 (木村 洋子)
13 妊婦の大鼓腹縛 (中河 恵子)
14 縛りの好きな顔 (一宮百合子)
15 美腕の妊婦緊縛 (中河 恵子)
16 縛り全裸を足 (金原奈加子)
17 憂鬱の佳人縛り (左近麻里子)
18 前面を晒す裸像 (長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面 (左近麻里子)
20 後手縛りを見せる (川越美佐子)
21 難は女体に炸裂 (ローズ秋山)
22 逆まじき臀部晒 (左近麻里子)
23 真白の柔肌責め (左近麻里子)
24 ムチ責めの果て (安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り (関谷富佐子)
26 湯責めにあう女 (山原 清子)
27 変型高小手縛 (川越美佐子)
28 洋子を抱く (木村 洋子)
29 緊縛のホステス (佐々木真弓)
30 柔肌に喰ひ込む (長井葉津子)
31 均客のとれた体 (佐々木真弓)
32 凱歌責めの熱演 (ローズ秋山)
33 脚吊り責め (ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態 (大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り (木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け (ローズ秋山)
37 妊婦強烈羞恥責 (中河 恵子)

- 38 二つ重ねの裸女 (佐々木真弓)
39 縛られた淫慾生 (長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責 (左近麻里子)
41 責め抜いた華女 (安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる (大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り (山原 清子)
44 黒髪ゴム衣縛り (木村 洋子)
45 パンティを剥く (大塚 啓子)
46 緊縛に顔赤らむ (一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り (中河 恵子)
48 後手縛りを見せる (川越美佐子)
49 黒髪をいたぶる (ローズ秋山)
50 後手の重縛り (左近麻里子)
51 縛りし顔の表情 (中河 恵子)
52 炸裂する華女 (安井喜久子)
53 弱がされた布片 (金原奈加子)
54 浴槽と荒縄の責 (山原 清子)
55 髪吊りの裸女 (左近麻里子)
56 高小手縛の裸女 (左近麻里子)
57 海老縛りに泣く (関谷富佐子)
58 恐怖の全身縛り (大塚 啓子)
59 悶える全身縛り (一宮百合子)
60 伸びやかな素足 (左近麻里子)
61 車上の人身御供 (左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め (中河 恵子)
63 股間縛を蒸らす (金原奈加子)
64 市吊りに泣く (木村 洋子)
65 裸身を晒す表情 (金原奈加子)
66 縛り全裸の顔 (関谷富佐子)
67 豊満な臀部晒 (佐々木真弓)

- 68 乳房強調縛 (左近麻里子)
69 媚を撒く縛り女 (佐々木真弓)
70 縛のブラジャー (左近麻里子)
71 逆手吊りの鞭打 (関谷富佐子)
72 逆エビで責める (ローズ秋山)
73 美しき緊縛全像 (関谷富佐子)
74 悶える緊縛全像 (金原奈加子)
75 縄で責める女体 (ローズ秋山)
76 両手吊りで晒す (金原奈加子)
77 豆絞りの猿轡縛 (川越美佐子)
78 あどけない表情 (金原奈加子)
79 厳しい顔の肌 (金原奈加子)
80 白肌にむく縄 (左近麻里子)
81 両手大の字吊り (関谷富佐子)
82 首縛縛りの裸女 (佐々木真弓)
83 美しき全裸股体 (佐々木真弓)
84 柱に繋がれた女 (長井葉津子)
85 尻挙げ海老縛り (安井喜久子)
86 全裸全裸緊縛 (川越美佐子)
87 荒縄縛りの刺青 (山原 清子)
88 設裂きで責める (ローズ秋山)
89 ドレイ洋子の姿 (木村 洋子)
90 後手に縛り上げる (ローズ秋山)
91 滑車吊りの裸女 (大塚 啓子)
92 若々しい緊縛美 (佐々木真弓)
93 S男がいたぶる (佐々木真弓)
94 強烈縛りに泣く (山原 清子)
95 正面全裸縛り (長井葉津子)
96 開股縛りに泣く (左近麻里子)
97 白肌に喰ひ込む (大塚 啓子)
98 尻立て股間縛り (木村 洋子)
99 悦喜に泣く美女 (安井喜久子)

【最新版】美貌女体緊縛写真コレクション集

X組 百態 大手札型印画紙 (9×13 種) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇〇円
十組十枚 一〇〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものを求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

- 1 正面強烈鞭打 (大塚 啓子)
2 美貌は縄に泣く (関谷富佐子)
3 髪を縛る (佐々木真弓)
4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)
5 縛られて打ち (関谷富佐子)
6 縛られて困る (金原奈加子)
7 髪を縛らないで (左近麻里子)
8 縛られて嬉しい (中河 恵子)
9 縛わしの縛女体 (中河 恵子)
10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)
11 豊満女体の縄目 (大塚 啓子)

- 12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)
14 長身の裸身を伸す (佐々木真弓)
15 若肌は縄に美し (長井葉津子)
16 恥らうの女体美 (中河 恵子)
17 何故私を縛る (金原奈加子)
18 感泣する裸縛り (ローズ秋山)
19 鎖くつわの悦喜 (関谷富佐子)
20 荷送り縛りの女 (中河 恵子)
21 足指はく字に (佐々木真弓)
22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)
23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)
24 柱縛りの顔見 (長井葉津子)
25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)
26 海老責めの若肌 (佐々木真弓)
27 全裸の裸は裸 (佐々木真弓)
28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)
29 縄に喰ひ込む (長井葉津子)
30 出訴を晒す縛り (佐々木真弓)
31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
32 首縛縛りにあう (長井葉津子)
33 大の字で晒す裸像 (関谷富佐子)
34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)
35 高小手縛の全裸 (佐々木真弓)
36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)
37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

- 38 竹馬に揺る (大塚 啓子)
39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)
40 縄目に喰ひ込む (中河 恵子)
41 開股縛りの正面 (中河 恵子)
42 猿轡に喰ひ込む (左近麻里子)
43 縛りの肌を足 (金原奈加子)
44 私には縛りが好き (金原奈加子)
45 強烈縛りを味う (金原奈加子)
46 裸身を晒す (左近麻里子)
47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
48 柔肌に喰ひ込む (長井葉津子)
49 柔肌に喰ひ込む (左近麻里子)
50 全裸の女体引退 (中河 恵子)
51 開股縛りを晒す (左近麻里子)
52 突き出したお尻 (中河 恵子)
53 あどけない緊縛 (金原奈加子)
54 首縛縛りの女 (長井葉津子)
55 強烈後手で括る (佐々木真弓)
56 恥しい縛り初め (金原奈加子)
57 海老縛りで泣く (関谷富佐子)
58 縛られる緊縛女 (長井葉津子)
59 豆絞りの猿轡 (金原奈加子)
60 もう寝ないで (金原奈加子)
61 背に転ず股間縛 (金原奈加子)
62 女体は縄に喰ひ (左近麻里子)
63 全裸の裸を見て (長井葉津子)
64 答は柔肌を打 (関谷富佐子)
65 臀部に否は炸裂 (関谷富佐子)
66 この裸身を縛る (佐々木真弓)
67 縛縛の縛り表情 (長井葉津子)
68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

- 69 美貌は縄に喰ひ (中河 恵子)
70 逆まじき臀部晒 (左近麻里子)
71 両手吊りに喰ひ (長井葉津子)
72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)
73 縛られる女体 (中河 恵子)
74 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)
75 麗わしの肌を縛 (佐々木真弓)
76 後手縛りの連続 (ローズ秋山)
77 開股の股間縛り (大塚 啓子)
78 強烈な顔の女 (川越美佐子)
79 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)
80 豊満な裸身の美 (関谷富佐子)
81 羞恥の流し目 (佐々木真弓)
82 肌を喰ひ込む (長井葉津子)
83 縛縛縛りと猿轡 (長井葉津子)
84 投げ出された裸 (金原奈加子)
85 正面の亀甲縛り (左近麻里子)
86 後手縛りの女体 (左近麻里子)
87 柱に晒す強烈縛 (中河 恵子)
88 羞恥の脚挙げ (佐々木真弓)
89 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)
90 美しい女の縛り (佐々木真弓)
91 股間縛りに泣く (長井葉津子)
92 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)
93 椅子坐開股縛り (中河 恵子)
94 無防備な両手吊 (関谷富佐子)
95 息づまる猿轡 (川越美佐子)
96 人身御供の乙女 (長井葉津子)
97 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)
98 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)

作・六・鬼 団

好評の傑作集大成第四弾刊行!!

花と蛇 特集号

定価 五〇〇円 略号 「花」

団鬼六作長篇サディズム小説『花と蛇』は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気で満天下のSFファンを沸かせた傑作であります。過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、堂々三百数十頁の特集に加え四馬孝画伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

四馬孝画 口絵

美女羞恥責 花と蛇 画集

恐ろしい浣腸の末排泄を強要される美女
中腰で縛られた美女の品定めする調教師
清純な美女に初めて縄掛けしていたふる
剃毛の羞恥責めに悶える地獄部屋の美女
全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
俵のように縛られて宙吊りにされた美女
股間縛りの全裸責めにされる絶世の美女
足吊りで強制浣腸を施される全裸の美女

本文内容見出し

発端 美女を狙う狼たち

第一章 清純な令嬢の屈服

(カメラと令嬢・女奴隷・口惜しき陶酔)

第二章 人身御供の令夫人

(燃ゆる美体・狼の酒宴・人身御供)

第三章 深窓の美少女とスベ公

(赤いしごき・再び奈落へ・奸計)

第四章 小夜子への執拗な調教

(鈴と縄)

第五章 変性色事師の登場

(二人のシスターボーイ・化物の計画・京子の哀泣)

第六章 生れかわるスター京子

(崩潰する京子・娘の民・地獄の宣誓・まんじの舞)

第七章 激しいスターへの訓練

(奈落への道・美女と白痴)

第八章 低脳男と令夫人の結婚

(奴隷の花嫁・二対一)

第九章 愛弟子を調教する静子夫人

(蛇の巣・悲しき決意)

第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊

(美花の踊り・薔薇と百合)

第十一章 悪魔たちの哄笑

(白い関係・調教日記・手鏡)

第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄

(甘い調教・挫折)

第十三章 珍芸を開陳する令夫人

(おとし穴・筆と硯)

第十四章 淫靡な時代劇ショー

(三人の風来坊・時代劇ムード・牢獄にて・フランス式)

第十五章 華々しきショーの展開

(ショーの開幕・楽屋の中・検舞台)

第十六章 野卑な妾二人のいたぶり

(珍芸・姐の上)

第十七章 スベ公達の邪悪な責め

(美女と野獣・ある日の回想)

第十八章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち

(美女崩潰・別離)

第十九章 悪党の執拗ないたぶり

(鏡の部屋・卑劣な録音)

第二十章 文夫と小夜子の屈辱的対面

(鏡地獄・断髪令嬢・悲しき対面)

第二十一章 勝ち誇る悪党一味

(受難の姉妹)

第二十二章 中国伝来の秘法

(鬼女よりの招待・中国の秘法・羞しい唄)

第二十三章 緊縛された美女の涕泣

(三悪女の狂態)

第二十四章 新しい飼育への触手

(義兄弟)

第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄

(肉の媒介・美津子の号泣・同志討)

第二十六章 恐怖の責め続く

(地獄の接吻・巨大な責め)

第二十七章 結末なき責めの結末

(調教柱・復讐劇・肉の拷問・京子の珍芸)

奇譚クラブ

△第二三巻 第五号・通刊第二五二号

(昭和四十四年) 五月号 目次

△本文▽

体験記 妄想と現実の谷間	富山 冬樹	(10)
漫文 悪は泳がせておくものさ	牧 高志	(16)
連載小説「大噴火」(第八回)	千葉 青鬼	(22)
縛り随想 プレイのあいま	千草 忠夫	(30)
切腹史談 三村家の人人(中)	中康 弘通	(34)
四疊半被虐戯態三景	藤田 欧二	(39)
レンズの中の女「十人十色」(第一話)	泉野 薫	(42)
コルセツト・ブーツの萌奈	芳野 眉美	(52)
告白 病院での一日	中野 昭子	(59)
懸賞入選「ヌードモデル」(下)	鬼談 仏心	(62)
ほくのイメージ 緊縛美難感	鈴木 三三	(78)
連載M小説「ピエロ床屋」(3)	鬼山 鞠策	(82)
レポート マニア散歩記	赤井 茂	(88)
懸賞告白入選「甘い空想」	有田久美子	(90)



奇クサロン……編集部構成……(233)

変身女性緊縛礼讃	佐藤 敬三
サロン柔我記(第五十九回)	辻村 隆
洋画に現われた人間馬	佐野 寿
奇ク愛読のマゾ男君に贈る	奇クファン
「SMカメラ・ハント」に望む	西野 正一
編集部だより	編集部
A女に捧ぐ五十分「春の責め」	藤田 欧二
イメージ画「発散」	春川ナミオ
映画に見られるFモードの世界	菅原 敏夫
二十二才の泣きごと	井上 洋一
ああ、肥満女性	赤畑 修造
貴誌に再会しての感想	暗愚楽無道
イメージ画「ポーズ」	野江 三郎
八咫歌「新妻讃歌」	菊池 淳子
思ひ出される映画 極秘女拷問	大西 光蔵
地震と夫婦プレイ	早木 夢二
僕のイメージ画「想い出」	室井亜砂路
静子夫人に忠告する	青井 松造
漫回「マゾミちゃん」	九美 淳
合成フォートを楽しむ	桐葉 巧生
妊婦フォートに寄せて	羽鳥 水江
イメージ画「揺らぐ声」	小妻 容子

連載時代伝奇小説「緋縮緬地獄」(12)……白鳥 大蔵……(94)

S・C・R△性問題相談室△回答欄

「尿道異物挿入による性感不全」について……弓削 達人……(10)

夜と霧の群像「箱」……花影 霞……(10)

続・妊婦嗜好あれこれ……羽鳥 水江……(10)

SMカメラ・ハント△飯田カオル・滑川幾代の巻▽

「イン・トリーキョウ第二夜」……辻村 隆……(10)

残酷映画ただいま絶頂上映中……絵面優美子……(10)

要望と提案「花と蛇」の新人について……美津夜静京……(10)

告白 思ひ出の洋子……島崎 慎一……(10)

男性虐待快楽術(第四話)

「半処女繁盛記」(前篇)……馬族 保……(10)

滅跡に想う 落城と妊婦の最期……高野 原美……(10)

連載小説「花と蛇」(続編第五十二回)……団 鬼六……(10)

体験小説 続・お灸いじめ……玉田 静江……(10)

懸賞創作入選「いれずみ地獄」……小谷 和勝……(10)

マニアのノート この醜と美の味……かずとやま……(10)

未完の告白……村山百合子……(10)

読むためのシナリオ「お静受縛譜」……風流極道軒……(10)

読者通信……編集部選……(10)

(目次カット「でんでん虫」室井亜砂路)

(扉 カット「パールの怪」日本武士)

作・六・鬼 団

好評の傑作集大成第四弾刊行!!

花と蛇 特集号

定価 五〇〇円 略号 「花」

団鬼六作長篇サディズム小説『花と蛇』は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気で満天下のSFファンを沸かせた傑作であります。過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、堂々三百数十頁の特集に加え四馬孝画伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

四馬孝画 口絵

美女羞恥責 花と蛇 画集

一、恐ろしい浣腸の末排泄を強要される美女
一、中腰で縛られた美女の品定めする調教師
一、清純な美女に初めて縄掛けしていたふる
一、剃毛の羞恥責めに悶える地獄部屋の美女
一、全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
一、俵のように縛られて宙吊りにされた美女
一、股間縛りの全裸責めにされる絶世の美女
一、足吊りで強制浣腸を施される全裸の美女

本文内容見出し

発端 美女を狙う狼たち

第一章 清純な令嬢の屈服

(カメラと令嬢・女奴隷・口惜しき陶酔)

第二章 人身御供の令夫人

(燃ゆる美体・狼の酒宴・人身御供)

第三章 深窓の美少女とズベ公

(赤いしごき・再び奈落へ・奸計)

第四章 小夜子への執拗な調教

(鈴と縄)

第五章 変性色事師の登場

(二人のシスターボーイ・化物の計画・京子の哀泣)

第六章 生れかわるスター京子

(崩潰する京子・嫂の毘・地獄の宣誓・まんじの舞)

第七章 激しいスターへの訓練

(奈落への道・美女と白痴)

第八章 低脳男と令夫人の結婚

(奴隷の花嫁・二対一)

第九章 愛弟子を調教する静子夫人

(蛇の巣・悲しき決意)

第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊

(美花の踊り・薔薇と百合)

第十一章 悪魔たちの哄笑

(白い関係・調教日記・手鏡)

第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄

(甘い調教・挫折)

第十三章 珍芸を開陳する令夫人

(おとし穴・筆と硯)

第十四章 淫靡な時代劇ショー

(三人の風来坊・時代劇ムード・牢獄にて・フランス式)

第十五章 華々しきショーの展開

(ショーの開幕・楽屋の中・検舞台)

第十六章 野卑な妾二人のいたぶり

(珍芸・姐の上)

第十七章 ズベ公達の邪悪な責め

(美女と野獣・ある日の回想)

第十八章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち

(美女崩潰・別離)

第十九章 悪党の執拗ないたぶり

(鏡の部屋・卑劣な録音)

第二十章 文夫と小夜子の屈辱的対面

(鏡地獄・断髪令嬢・悲しき対面)

第二十一章 勝ち誇る悪党一味

(受難の姉妹)

第二十二章 中国伝来の秘法

(鬼女よりの招待・中国の秘法・羞しい唄)

第二十三章 緊縛された美女の涕泣

(三悪女の狂態)

第二十四章 新しい飼育への触手

(義兄弟)

第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄

(肉の媒介・美津子の号泣・同志討)

第二十六章 恐怖の責め続く

(地獄の接吻・巨大な責め)

第二十七章 結末なき責めの結末

(調教柱・復讐劇・肉の拷問・京子の珍芸)

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

昭和44年5月号

(1969年・5月号<第23巻第5号・通刊第252号>)

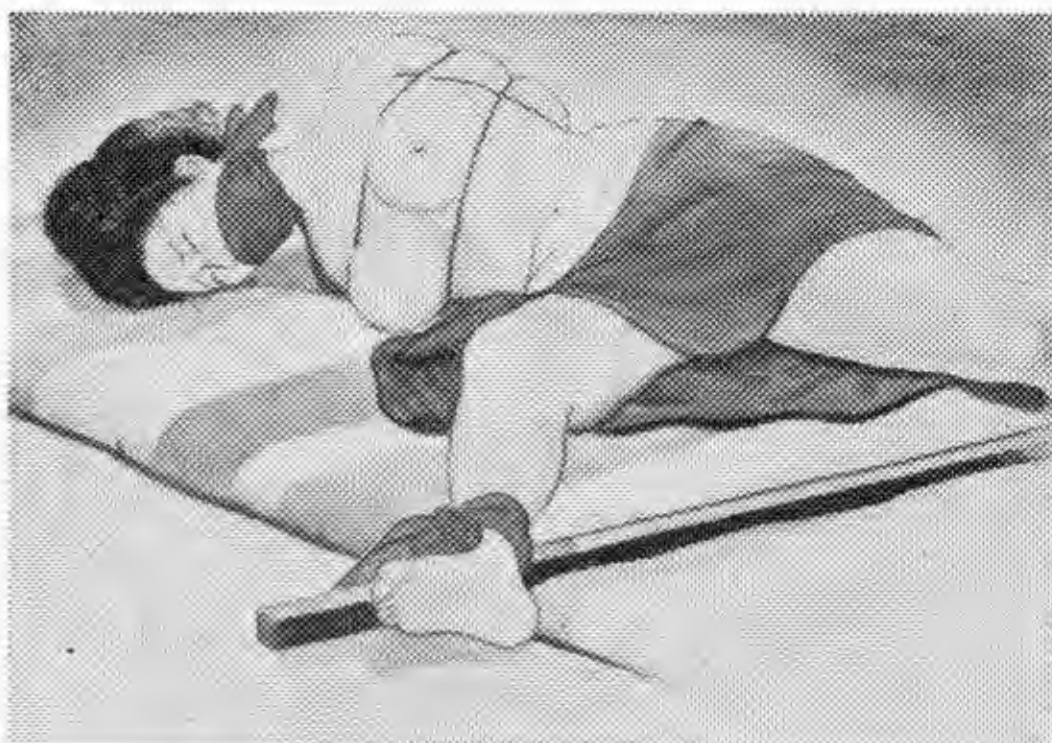


本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。



体 験 記

妄想と現実の谷間

富 山 冬 樹

吸った。

「ちえっ、出がらしじゃネエか」

大袈裟なほど苦い顔つきに、舌打ちをそえながら後を振り向いた。

「この前に、浅草で見たのはよかったなア。

源さんヨ」

「縛りだか鞭打だか知らネエけどヨ。なんだかんだと勝手な文句つけちゃあ、ぼろうとしやがる」

頭をてかてかに禿げ上がらせ、大入道のような大柄な図体をしているのはお茶屋のおやじだ。ぼやきながら大入道は音を立てて茶を

源さんと呼ばれた、顔色の悪い痩せ気味の男。この薬局の旦那が、フチ無し眼鏡の奥にある細い目をしょぼつかせながら、まったくだ、と相槌をうつつを見届けてから、大入道は、ひと膝乗り出した。

「値段も今夜のやつよりはずっと割り安だし、

ヨ。シロクロ、シロシロ、花電車、それに電気按摩器のおまけまでついてるんだから、けっこう値打だったしヨ。おまけにネエちゃんだって、まあまあなもんだったぜ」

何やらこの道に通な風なことを、しきりに誇示するように、大入道はその時のことを身振り手振りを交えて語りだした。他の五人の客達は、だらしなく口もとをゆるめながら、おやじの話に耳を傾けている。

皆同じ年配風の、商店街のおやじ連中だ。申し合わせたように皆もう髪の毛が薄くなっている。比較的若い私を入れて、七人の男達

が、この湿っぽく薄汚い六畳の部屋に詰め込まれているのだ。

実演が始まるまでの待合室といったところだろうが、裏町にある連れ込み宿とはいえず恐しく汚ない旅館だ。やくざ風の若い男が、一応は慇懃な態度で、腰を屈めながら部屋を出這入りする度に、厠のにおいが外の廊下から入ってくる。

私がこの種の催しものに顔を出したのは、これが初めてのことであった。これまでに数回誘われたことはあるが、適当に手を横に振り続けてきた。いわゆるショウというヤツには大して興味がないのだ。

しかし今回のやつはちょっと事情が違う。『縛り、鞭打ち』これらの文句が、私に刃を突き付けた。

責め場を含んだものであるならば、映画であろうと、お芝居であろうと、見るに欠かしたことのない私だが、自分達の手で実際に女を縛り、鞭を打てるといううたい文句は、そのことに対して、これまで遠雲の彼方の妄想の域を脱することの出来なかった私にとり、その衝撃はかなり大きかった。永年にわたる悲願のようなものが、まさに叶えられようと

いうのだから。

正直なところ、昨夜は興奮して夜がしらじらと明けてくる頃まで眠れなかったものだ。今夜への期待に胸が高ぶり、私の持病である妄想病が、昨夜はとくに冴えて止どまるところを知らず、まんじりとも出来なかった。

『妄想』——そうだ。私は妄想と共に生きているのだ。私の生活のすべては、灰色の妄想に包み込まれているといっても過言ではない。

映画、テレビ、雑誌などにその若々しい姿態を見せる女性達。また日常の生活の中で実際に目に触れる女性達も勿論のこと。これらの中で、私の趣味に合うものは、その殆どが私に縛られ、責められているのだ。

いろいろの恰好に縛られ、あらゆる方法で責められ、その誇り高き教養と知性を私に踏み躪られる。逃げ場を失い、恐怖の目をいっばいに見開き、手の甲を口にあてがいながら肩で激しく息をつく端麗なる美女。そこは、暖炉の火が赤々と燃えている中世風の豪華な洋間であったり、微臭い地下倉庫で錆び果てた鉄製ベッドが置かれてあったりした。果ては陽当りの悪い四畳半の湿っぽい畳の上であったかと思うと、今度は、あたり一面、銀景

色に覆われた深山の山小屋の中であつたりするのだ。

そこには常に、苦痛の叫びを迸らせながら怯え切った目で許しを乞い、耐えられない羞恥に身もあらわに悶えさせる、白く清潔な裸身がなければならぬ。そして私は、深い自己陶醉の沼に身を沈めていく。何者も介入することの出来ない私だけの世界へ自由に侵り込んでいくのだ。

これでも私は、責め道具のコレクションだけは、ささやかながらも一応揃えているつもりだ。各種大小の縄、ロープ。洋式の鞭。私の手製による首枷、手枷、足枷。それに多種多様の針を束ねたもの。お灸の道具一式。浣腸器等々。まだ他にもある。ただ残念なことに、これらを使用する機会にあずかったことがまだ一度もないというわけだ。時々女房の目を掠めてはそれらの品々を引っ張り出し、つくづく眺め、時ならぬ妄想の虜に落ち入ってしまうのである。ただそれまでのだ。勿論、今夜も持参してきてはいない。私とても、家にあつては善良なる尻敷かれ亭主であり、よきパパであり、こよなく山を愛するスポーツ店の旦那なのだ。堅実なる一社会人で

ある。自分の内部を他人に感付かれるのは、やはり恐い。

「何時まで待たせる気なんだヨ」

折から火鉢の炭火をつぎ足しに這入ってきた、ちんぴらに向って、大入道が毒づいた。

火鉢に炭火とは、また下町風情の名残り豊かなことである。

「あいすみません。間もなくタレントが到着する頃と思われますので、いま暫くお待ち願います」

ちんぴらは、国電のアナウンスを思わせるような口調を残して、ペコリとするや早々に退散してしまった。

「タレントだってヨ」

大入道の声に、部屋の中が時ならぬ嘲笑で埋められた。続いてあちこちから、期待にはずんだような野卑な言葉が次々と飛び出してくる。それは野卑ではあっても、逞ましく健康的な笑いであった。勤め帰りの人々で混み合う、駅前の大衆酒場的な雰囲気、そこにはあった。

私は、家を出掛けるまで持ち続けていた期待と興奮が、だんだんと冷え始めてくるのを意識していた。私の感情とはまったくうらは

らなものを、この雰囲気から感じ取っているのだ。それは言葉ではいい表わすことのできないものである。自分の心の中に大切にしまいい込んである偶像のようなものを、俗っぽいそして薄汚いところへさらけ出しているような、そんな複雑な気持ちであった。——私などの来るべきところではなかった——。実演がまだ始まりもしないというのに、すでに後悔の念さえ胸の底に湧き始めていた。酒気を帯びた部屋の中の空気が、だんだんと騒々しくなってくるのに反し、私は澁んだようなそこだけの空気の中へ、自分を沈めていくのだった。

ふと襖が開いて、法被を着込んだ中年の男が顔を出し、丁寧に畳の上に両手をついた。「大へんお待たせしました。只今、別なる部屋に準備が整いましたので、皆様方、そちらの方へお移りをいただきます。なお、この機会をとらえてまことに失礼さんとは存じ上げますが、ほんの一言だけ。来る十五日の慣例花札お手合わせ会にご参加ご希望の方がおられますなれば、後ほど、わたくしめのところまでお申し込みの程、いただきとうございます。残り席はまだ四つほど空いております

ので。では永らくお待たせしました。只今こちらでご案内いたします」

ぞろぞろと立ち上がり、部屋を出て行く皆の後ろに従い、薄暗い階段をきしませながらのぼり始めてみると、私としては心にもなかったような、どうしても馴染むことのできないこの雰囲気ではあっても、やはりそれはそれ、これからはじめて目のあたりにするナマの女体責めの場面を想像し、さすがに興奮の甦ってくるのを覚え始めた。しんしんと迫ってくるような冬の夜の冷氣の中で、不思議と寒さは感じられない。

十畳ほどの広間だった。さすがにその部屋では、二台のガスストーブが赤々と燃えしきっている。何の必要があつてか知らないけど二三人のちんぴらが、無意味な緊張をふりまきながら、やたらとあちこちしているのが小うるさい感じだ。空いてる座蒲団に坐った。暫く待たされる。物馴れたおやじ連中が、ここここに至ってまで、くだらない世間話や店の売上げ状態などの話をし合っているのを私は意識の隅の方で恨めしく聞き流しながら体を硬くして待った。

ものの五分も待ったろうか、正面横の襖が

静かに開いて、それらしい女が一人、姿を現わした。

髪を結って化粧してるから女に間違いはないだろう。それにしても何というひどさ。醜悪そのもの。まるでお化けである。歳の見境いさえ掴めないようなご面相だ。色褪せ、薄汚れている長襦袢が、たった今買ってきたばかりと思われるような、真新しい緋の腰の物と相俟って、いとも奇妙なるアンバランスを醸し出しているのが、何とも物悲しい風情である。女が身につけているものといえば、それだけだった。

私のわずかに甦っていた期待は、これでいっぺんに吹き飛んでしまった。

「お客さん方、今晚はようこそ」

ずんぐりとした身体に似合わず、頭のとっぺんから抜け出てくるような声が部屋に流れた。ソプラノが錆びついたような、感情の介入をまったく許さない白痴めいた声である。

「よう、ネエちゃん」

「待ってました!」

さかんな声援が飛んで、部屋の中が急に活潑な空気でみちみちてきたのにひきかえ、私の方は、何だか皮膚の裏側にまで忍び込んで

くるような肌寒さを感じ始めていた。

「どなたか脱がして下さらない」

分厚い唇が動く、完全に云馴らされた、しかし、小学生が本を朗読しているような旋律が洩れてきた。営業笑いのつもりか、無心に笑顔をつくっているようだが、まるで表情のかけらも見られない。注射針を脊髄へ突っ込んで人間性を吸い取られてしまったような感じである。

拍手と野次に送られ、大入道がしきりに照れ笑いをしながら前に進み出た。

やがて部屋の中央正面の畳に、赤い布が舞い落ちて、そこに一個の肉塊が現れ出た。

と、それが、むくむくとした感じで急に動き出し、こちらの方へ歩み寄ってくる。だらしないことに私は急に怖じ気づき、一瞬腰を浮かしてしまった。

歓迎の口笛と声援がさかんに湧き起る。

あたえられたその場の雰囲気、無駄なく盛り立てようとする、連中の恨めしいほどの単純さと、その逞しい生活力のようなものに、私は嫉妬さえ覚えた。目の前に晒け出された非人間的な肉塊に、嘔吐を催しそうになりながら、私は、自分の心の底にひそんでいる妄

想の女神に、今更ながらの強い郷愁と愛着を覚え、今すぐにも此の場から脱け出したいと思った。

女はすぐに身を畳の上に横たえた。どす黒い感じのその体には、無数の鞭あとがみとめられた。まだ生々しく、紫褐色のあざが、あちこちと痛々しい。

「ねエ、お願い。どなたかこの紐で、わたしを縛って下さらない」

甘えた風に無理に語尾を上げるのだが、棒読みの口調に変わりはない。私は、子供に買っただけのお喋り人形を思い出した。まったく人間性の果てといった感じである。

「よしきたっ」

手をポンと叩きながら進み出たのは床屋のおやじだった。商店街の組合委員をやっている男だ。本職は床屋でも、議員選挙のシーズともなれば、その鼻の下に蓄えた口髭の顔が、やたらと忙しそうに立ち廻るのが見受けられる。またしても拍手と声援と野次があたりを渦巻く。女は俯伏せになって自分から両手首を背中合わせさせた。見ていて歯痒くなるような幼稚極まる縛り方だ。

「ゆるいじゃないのヨ。もっと、うんときつ

く縛ってヨ」

女は苛立った声で露骨に顔をしかめた。この女が、自分の感情を面に表わした最初のものである。

「大将、しっかりしろよ」

「興奮して手が震えてるんじゃないのかい」

すかさず冷やかした野次が飛び交う。

立ち上がって覗き込んでる野郎どもの目という目が、少し開き目にしている自分の両足のあたりに注がれているのを意識したのか、女は足の開きを更にゆるめたようだった。なかなか商売熱心なことである。

私はもはや、こんなゲテ物ショーなどは別として、むしろ親睦的な意義の強いこの会合に、半ば諦めの心境になってきた。こうなったら、もう自分なりに何か楽しむ口実を見つけてることだ。私は心の中でサイを投げた。私は立ち上がり、心にもなく皆と一緒に肩を並べてみたが、さすがにすぐ目をそむけてしまった。

と、ちんぴらが変にうやうやしい感じで、鞭を捧げ持ってきた。そいつを目にした時、私の血がちょっと波立ち始めた。これはなかなか立派なものである。ところが、その握り

手のところに紙がぶら下がっていて、何やら書いてあるのだ。それが『一打ち金千円也』

と読めた時、いやはやその抜け目のなさには驚き呆れてしまった。さすがに皆ちょっと考

え込み、すぐにガヤガヤが始まる。これじゃちょっと、ガメツ過ぎるじゃないかというの

だ。例によって、大入道がしきりに口を尖らしてちんぴらに喰って掛るのを、相手は、

「皆々様にこれでお願ひしておりますので」

と物馴れた調子でニヤニヤ笑いながら、軽くさばいている。

「オレ買ったゾ」

声は源さんだった。源さんはちんぴらに五千円札を手渡すと、フチ無しの眼鏡を外して脇の人に預けた。何時もの柔和な細い目からは、想像もつかないような、神経質な風貌がそこに現われた。

「眼鏡なしじゃ、的がしぼれないんじゃないのかい」

何となく遠慮勝ちになってきた冷やかしの声を、まあまあオレに任しとき、と手で押さえながら源さんは、自信ありげに鞭を二、三回宙でしごいた。急にヤジが止まり、静かになった。鞭先が空を切ってひゅんひゅんと

鳴る。私は唾を飲み込んだ。気配で、心持ち女が肩をすばめたようだ。

何という不思議な現象だろう。目の錯覚だろうか。あれほど私に不快の念を抱かせていたこの女の姿が、いま、私の目に、なまめかしく映り始めてきたのである。

突然、*びしーっ*とナマの皮膚を苛む鋭い音が、部屋の中の静寂を一瞬破った。

「くーっ」

女の喉から小さな呻きが洩れ、背中が反り首が持ち上がって顎が宙に泳ぐ。背中について一本のま新しい赤い筋が、鮮烈に私の目を射た。*びしーっ*。今度は臀部が跳ねるように持ち上がった。畳に突っ伏している女の顔が左右にのたうち始め、畳の上に落ちた髪の毛がゆらぎ始める。しきりに口の中で何か呟いている風だ。

源さんの骨張っている頬は、上気して朱を帯びてきた。五発目がおわるまでに、女の躰は、畳の上を二度ばかり裏表に転がった。源さんが物足りない表情で、次ぎの打ち手に鞭を手渡ししている間も、女の髪の毛は畳の上でしきりに悶えゆれている。

次ぎもまた五千円札だ。部屋の中に不思議

な熱気がふくれ上がっていく。私は何時の間にか自分を忘れ、雰囲気呑まれてしまっていた。不気味な静けさは、かえって息苦しいまでの陶酔を誘い込む。聞こえるのは肌に喰い込む鞭の音と、女の呻きばかりだ。そして次第に上ずってきた女の喘ぐような息遣いが部屋の中に激む熱っぽい妖気に油を注ぐ。

何人目かは覚えていない。そういえば最後だったような気がする。気がついた時、私は財布から五千円札を取り出し、鞭を握りしめていた。もはや、私は完全に引き込まれてしまっていたのだ。

手を動かもしないのに、鞭先はまるで生きもののように、勝手に宙で跳ねまわる。かなりの上物だ。それが手許までぐーっと伝わり、鯛でも釣り上げてるような手応えだった。私は夢中だった。女の体が跳ね、髪が乱れ飛び、畳の上を転がる。それがまた、私の手もとから大脳へ突き抜けるような衝撃となつて反応し、身内を烈しい陶酔が駆けめぐり私の頭を痺れさせていく。

五発目がおわった時、私は喉がからからに乾き、かるい眩暈を覚えた。私は熱い息を吐きながら、呆然としてその場に突っ立って

た。女は水揚げされた魚のように、まだ一人で畳の上に体をくねらせ、その肩は大きく下している。

と、その時である。女の転がった畳の上に点々と滴り落ちる粘液性の透明なものを、皆と同じく、私の目も見逃さなかった。

放心したような、女の目のその下にある分厚い唇はだらしく開けられていて、赤ん坊のむづかるような声がそこから洩れていた。

上気した頬に、外の冷気が触れて体が引き締まった。連中はもう普段のちゃんとした社会人に戻っている。これから魚住へ行って飲み直しをしようと、皆、子供のようにはしゃぎ廻っているのだ。

私の気持ちは複雑であった。私の妄想の女神は、ついさっきまで何処へ行ってたのだろう。あの美と芸術の感覚。それに、高度なる人間性に色染められた私の妄想は。先ず美しさ、それに豊かな知性にもとずく鋭敏なる反応が示し出す羞恥と抵抗。それが私の唯一のテーマではなかったのか。

今もって、身内に余韻を残しているこの興奮は一体何者なのだ。周囲の目もはばかりず

自分に勇氣をもたらし、そして自分を忘れさせたさっきのあの無我の境。そして、今のこのすがすがしい満ち足りた気持ち。

私はもう何も考えなくなかった。潜在していた宿命的なものが引き出されたのだろうとか、はたまた、私の妄想なるものは、あくまでも表の部分だけを追っていたものであり、はからずも今夜、はじめて骨の部分に触れ得たものであるとか、そんなことはもうどうでもいいという気持ちになっていた。このあたえられた不思議な満足感。これはこれで、私はやはり大事にしたい。ただ、私の明日からの、いや、今すぐからの妄想が、さきほどの鮮烈なる実感を消化して、それが立体感となつて現われ、これまでの形ばかりの妄想とは大きくかわり、重量あるものに発達していくことだけは間違いなさそうだ。

旦那方の高笑いの上に寒々と冴え渡る三日月があり、その薄明りの下には、充分に慰められたあとの顔、顔があった。私は足どりもかるく、皆と一緒に魚住の方向へ足を向けていた。

(カット・なわふくろつ画)

悪は泳がせておくものさ



よく映画やTVドラマの中で「親分、いいんですかい？ あんなに気安く逃がしたりして……。腰巻お仙と云やア、押しも押されもせぬ名代の女スリですぜ。あっしにも一つ、こっぴどく捕縄でふん縛らせて下さいよ。ねえ親分……」と子分の七五郎か八五郎かにし

つこく喰い下られた時、「いいってことよ。暫く泳がせて置くのさ。その内、あっちの方から仕掛けた網に、ひょこひょこ獲かってくらあねえ……」と云うセリフは、今では常套語のように聴かれるが、この泳がせて置けとは、なかなか意味深であり、けだし秀逸であ

る。四反りに、われわれの住んでいるこの世の中が、何から何までことごとく善人善事ばかりであるとしたら、永久不変に涅槃が池の蓮の上で、あぐらをかくようなもので、その内に味気なくなり、あくび三昧におち入ることだろう。やっぱり悪人悪事は論理的にはないに越したことはないが、拳骨を握り、口角泡を飛ばしてまでも悪の絶滅を図るべきであると叫んだら、四、五才の幼児同様、少々頭が幼稚過ぎはしないだろうか。

名物の団子が、ベタ甘でなく、甘さが機能的に効くのは、甘さの反対分子である辛さ。つまり塩分が、ちよっぴり存在するためである。ところで問題は、その貴重な塩気を、どの程度効かせば、世に云う害毒も流さず、場合によっては、毒を以て毒が制せられるかである。本誌や本誌に類似した雑誌を開くと「プレイ」という言葉に、よくぶつかるが、この意味は、何も相手の女性が、もう憎く憎くくて堪らないから、荒縄でギュウギュウに縛りあげて苛めてやるんだと云う人は、まず居らないと思う。女の首をスパツと斬落とした浅右衛門でも、女を嚴重に目かくしにして射殺した敵国軍の将兵でも、少なくとも、その執行中は公務であり、私的感情は全くなかったに違いない。だからプレイをする場合は

能動的な男性側の、そもそもの動機であるとか、相手の女性を斯くも無残に縛りあげていく過程においては、あるいは極悪非道的な感情に一時支配されていたかも知れないが、結果において当の女性が、こちらの思う存分な形に縛り終えてくると、つまり塩分がべら棒に効いて到底、食べられる限界ではなかったにも拘らず、今度は瞬間的な征服感から急激な憐憫感に変わっていくから、さても妙だと感心する前に、縛る方の男性が、その都度つとめて善人に立ち直ろうとするのを、われわれは必ず発見する。要するに何処を見渡しても、悪が全く姿を消した恰好なのである。曾ての東宝喜劇映画「灰かぐらの三平」で三木のり平の三平が、貰ったキセルを吸えば立ち処に助っ人の森の石松が眼前に現われたと同じ様に、一服欲しいナと思えば、当の縛られた女から、少なくとも男性が断じて持ち合わせて居らない特有な感情が曳き出され、それに存分に酔いしれるといったこの程度の悪は常時ぜび、この世の中に泳がせて置いて貰いたいものである。

毒舌を以て天下に雷名の轟く今東光和尚をほめる訳ではないが、とかく宗教家の中には見え透いた偽善者がえてしているものだ。パイルだって、ああほんの一寸でも彼女を抱いてみたいナ……と思った瞬間、既に心の中で姦淫したるものなりと一方的にきめつけて

いるが、今は故人となった最後の浮世絵師伊藤晴雨老に依れば、向うから女がスタコラやって来る、あれは縛られるナ……と思ったりまたカフェー（今のキャバレー）などに飛び込むと、この女は間違ひなく縛られるぞと思つたのである。事実それを裏書するかのようこの手でその女を後手に縛ってみた。女の方から云わせると、とうとうあの年寄りに名指しで後手に縛られて了つたのよ……と述べて居られる。恐らく画伯は江戸ッ子とあろうものが心の中で秘かに女を縛るなんて土台おかしくて、そんなに縛りたいのなら心の中の姦淫だなんてなまぬるいことを云わずに白昼正々堂々とやればいいじゃないか。万事前向きに俺を見ろツと云いたげである。一生を縛られた女（責められた女でなく）にかけられた翁の面目は正にこの種の悪なくしては出来ない業であると同時に、今なお永久不滅の金字塔となつて輝いているのである。幸いこの種の悪がここでも許容されるなら伊藤晴雨がモデルになつたと云われる彼の有名な脚本、鈴木泉三郎作「火あぶり」の名文句を仇やおろそかに素通りにすることは出来ない。

悪にからみつくサワリのところだけを一寸ひろつてみても、誠に余情髣髴たるものがある。

妾婦が裾を崩して縁側の柱に後手に縛られている。その前でこの家の主人公が脇眼もふ

らずに写生をしている。

妾 「ねえ、先生！」

絵師 「うん……」

妾 「先のお内儀さんも、こうして縛りつけたんだってね」

絵師 「うん……」

妾 「縛られた女の絵ばかり描いていたって、ちっとも売れないじゃないの」

絵師 「うん……」

妾 「どうして縛られた女を沢山描くの？」

絵師 「女は縛られている時が一番可愛いからさ」（註：一応こう逃げているが意味深なセリフではある）

妾 「可哀想だからなの？」

絵師 「そうじゃねえ。女なんぞを、うっかり可哀想だなんて思ってみろ、ひどい目に逢わあ」

妾 「じゃ、なぜ縛られた女を見ると可愛くなるの？」（註：こう迫られると困惑して次のセリフ、つまり男の本音を吐いてしまう）

絵師 「なぜだか知らねえ。とにかく女は縛りつけてみると一番美しいところが判る。むごたらしく縛れば縛る程よく見えるよ……」

云々。

以上は、そのまま劇場上演の開幕早々のセリフとなるのであるけれども戦後、私が観たもの（東横劇場公演）を今回想してみると、いきなりこうなる前のワンカットでもよい前

座的なものが、ぜひ欲しかったと思う。

お妾稼業という商売が、二六時中、貞女であれと望むのが、どうしてもおかしければ、いつでもどこでも常に娼婦的であればなるまい。こうなれば本郷動坂町狹しといえども隣近辺への遠慮は一切無用となるのだ。

絵師 「おいッ、朝めし喰ったら帯を解いていつもの通りだ。いいな」

妾 「あいよ。あッ……お前さん、何するのよ。もうやるのかい？」

絵師 「男なんでものは、心で詫びても、うわべは地獄の鬼さ。今日只今のお前は、もうお前でなくてただの女さ。だからこそ息がつまる程縛ってやるッ。向こうを向いて両手を後ろに回わしな。荒縄で腰巻の上からも、こうしてギューギューに縛ってやるから有難く思え……」

妾 「……でもさ、いつも結局はこうしてお前さんにふん縛られるンだけど、ご近所から垣根越しに丸見えのところ、折角結いあげた高島田の鬘を崩し、赤い湯文字を蹴散らかしてまで男の云うなりになるなんて、よくよく生まれついで因果だねえ。フッフッフッ……」

「……」と喋ったセリフは二の次だとしても、現実には男が感情をおし殺して女を縛っていく過程は、絶対に省略してはいけない。よしんば徳義上さし障りがあるうとも、芝居の幕が開くと、いきなり女が適当に縛られているの

は、見る観客に取って財布に響く損得の問題よりも、基本的には、甚だ以て感心しない部類に入る。ピンク映画でも三文芝居でも、まるで申合わせたように女が手際よく（またはぶきっちょに）縛られていく過程は不思議に省略するが、本当はそれ自体きわめて不自然であって、偽善者同様ひどくわれわれをがっかりさせるものである。悪は時と場合にもよるが、十二分に惜しみなく、しかも活用すべき代物であることを忘れてはならない。

悪のセリフと云えば往年、封切られた松竹映画「弁天夜叉」の中で情婦役の雪代敬子が吐いたセリフは、けだし天下一品であとも先にも聴いたことのない、唯一つのセクシイ的なものである。もうとつきの昔、死んだ子供の齢を数えるようだが、一寸それに触れてみたい。高利金貸しの女主人（高峰三枝子）の用人棒に雇われた浪人（高田浩吉）が拐された女主人を、それとなく探しに悪人溜りの巢に侵入、そこで情婦役の雪代敬子に執拗にからみつかれるところのセリフなのであるが女部屋の隣には果せるかな長襦袢一枚にむかれた高峰三枝子が、途中で三下野郎に猿轡をかまされ、一寸珍しい程、細引で高手小手にきつく縛られたまま、その手下に押さえつけられていく。もちろん隣室のことは高田浩吉は一切知らず、知っているのは当の高峰を縛った雪代だけであるという前提から、そも

そも始まるのだ。

雪代 「私は旦那に介抱して貰いたい。その前にお願ひがある。むずかしいことじゃない。あなたのおかみさんにして呉れというんじゃない。たった一度でいいから浮気をして貰いたいの……」というような催促が、しつこく繰り返されたあと、高田浩吉の用人棒がどうしても耳を傾けないのを素早く察した敬子は「そんなに高峰のおかみが気になるなら……面白いワ、そんならあたしを縛っても探すといいわ。あんたになら縛られてみたい。サア縛って御覧よ。サア縛って頂戴したら。あんたに思い切り縛られてみたい。嬉しいなア。あんたの力で、キューと縛られたらどんな気がするだろう。ホッホッホッ……どうしたのよ。サア男なら、あたしを縛って御覧よ……」という鉄火振りである。女優でもここまで来れば、もう百パーセント云うことなしであるが、この上、恥をさらすなら、斯く申す筆者にも、これと同じような、これは飛んだ告白物になりそうだが想い出話がある。

十中八九は、まず生きられない敵前上陸の前夜（といっても相当前のことだが）さる処で耽溺した時の会話である。戦争は全部が全部悪ではないけれども、吹きだまりに來ると悪になり切らねば出来ない場面が少なからずあるものだ。女性が、しばしば動物扱いにさ

れるのも、その例に洩れない。

女「じゃ、今晚があなたに取ってはこの世の最後なのねえ。あたしも出来ることなら、あなたに代って死んであげたい。もう二度と抱けないでしょう……もう何も要らない。目茶目茶にあたしを苛めて頂戴。今晚は、それこそ何んでも云うことを聴いてあげる。仰言……。あたしが、うんと可愛くなる。ところ、これだと云って……まア？ いわ……だけど、それよりも女についてもう何一つ識らぬことなし、思い残すことなしっていうのは、どう？ 一寸待って……縛るって、それ何なの？ ええ、縛ったってかまわないわ。死んでいくあなたに生身のあたしが縛られたら、それこそ本望。押入れに荷物をくくった縄があるから、あれでキユツと思ひ切り縛って頂戴。そして、あたしの身体を存分にしらべて御覧なさいよ……裸になったって、かまわないワ。だけど大和撫子らしく、赤いお腰一枚の方が、あなたにはいいンでしょう。駄目よ。そうお酒ばかりガブガブ呑んじゃって……サア勇気を出して。随分と男を化した女狐のあたしを、きつくふん縛って逆さに吊るして。ホッホッホ……そこはお腹よ。もう人間じゃない女白狐なから、そのまま逆さに撫でちゃって根輪際文句は云わなくてよ。もうそこら辺にあるあたしの物、皆んなここにさらけ出しちゃってよ。

どうせ、あたし達だって、この先、何処でどうなるか判らないンだもの。女は人間じゃなかったワ。動物だわ。始めから卑しい動物なのね。だから鎖につながれて皆んな男のおもちゃになつたンだわ。だけど、飼主のあなただけは違う。もうどうにもならない汚れた身体なんだけど、一晩だけあなたの可愛い奥さんに、なってみたい。いや、なつてあげる。ねえ、これでいいンでしょ。だから最後の今晚、あたしの身体を思い切り解剖して……パラパラにして煮て喰っちゃいなさいよ。サア、ブツブツ煮て頂戴。どこから斬る？

このおっぱいから斬り取るの？ それともお腹？ ここが一番いいンでしょ。お腰巻が邪魔ね……さア、お斬りなさいよ。思い切つて切り取っちゃいなさいよ。そして誰かさんのようにアルコール漬にして朝晩、拝むのよ。拝まなけや駄目よ。そこら辺におっぱいちゃたりしたら、きつと化けて出てきてやるから……馬鹿！ 馬鹿！ 馬鹿ッ、あんたの馬鹿。男の、ど助平……」（あと省略）

あたしは、こう見えても尻が重くて生まれつき金槌なのよ、と云つたこのA子。特殊看護婦の居室で、あらいだらけ晒すものつてこれだけ……と、すり切れた訪問着が一枚、裾のほころびた紋羽二重の赤い長襦袢が二枚、赤い、メリンスとネルの腰巻が二枚宛、計四枚。色のあせた伊達締めと腰紐、計三コに塗

料の禿げた姫鏡台が一個じゃないの。ホッホッホ……

だが——筆者と、およそ千キロを隔てた同じ紺碧の南方海上において、彼女の便乗した船団は不幸にしてことごとく沈没したのである。海に投げ出された瞬間、着物を入れたあたしの小っちゃな行李も姫鏡台も波間にちよっぴり浮くじゃないの。けど駄目だったわ、本人のあたしの身体の方が海の底へおさらばしてしまつたのよ。あたしって生涯、悪につかれた女でしたのねえ……。御免なさい……という一巻である。

さて話はガラリとかわつて余命の短い一介の老人が戦前、精一杯、悪を泳がせた四疊半物語は、あたかも竹久夢二が描く、夕闇にボツカリ咲いた宵待草のように、余韻が溢れてそれなりにロマンチックの中に一抹の残酷味を漂わせている。昭和六年九月号講談雑誌所載、中山楠雄作、鈴木朱雀絵の「地獄絵」のワンカットを、あわせて紹介してみよう。

巳代子……さる花街の美しい芸妓。他の男

をひたすら断り、目下、芝居の役者某と、あつあつの恋愛中。

客……六十才位。一見みすばらしく口下手な貧相な小男。

場処と時……ある川畔の待合。夜も大分、更けている。

待合の女将「巳代ちゃん。あんたも、こ

いらが考えどころよ。そりゃ、たった一人の役者衆に操をたてるのもいいけど、たまにはためになる客も取らなきゃ、あんたの借金は増える一方なんだよ。幸い今晚は、お前さんをぞっこん見染めて是非にと仰言るお年寄りが、さいぜんから首を長くしてお待ち兼ねになつてゐる。行つて呉れるわねえ？」

たつての要請に、いかな巳代子も断り切れず、重い裾を曳いて客の待つてゐる離れの部屋に入つた。

巳代子 「あら……お酒もすっかり冷えてしまつて……」

客 「いいンだよ。わしは、そう飲めないからね。それよりか、あんたのその優しさを見込んで、一つお願いがあるンだがね……」

巳代子 「何ですの。私に出来ますことなら……」

客 「実は……あんたを自由にしたい。と云つても、すぐ操を売つて呉れと云うのではない。云わばモデルになつてくれさえすればいい。私はあんたの美しい姿を縛りあげたい。それを、ただ眺めていさえすればいいンだ。聞いてくれるだろうか？……」

客は恥かしそうにそう云つて面を伏せた。

巳代子は何よりも金が欲しかった。しかも操を破ることなしにお金が入れば、これ以上、有難いことはないと思つたので「いいわ！」と素直に答えてしまつた……。客の人のよさ

そんな態度と羞かむような身の科こなが、それ以上、相手に恥かしい思いをさせたくない———。客は嬉しそうに礼を云つた。それから、いたわるように巳代子に長襦袢一枚になつてくれないかと要求した。（註：往年の男性は必ず、ここから入門する。）彼女は黙つてうなづいた。同時に男の手が帯にかかつて、するすると着物が剥がれた。客は黙つて自由にされてゐる巳代子を満足そうに眺めながら「少し痛いかも知れないよ……」と云いながら、巳代子の紅いしごきで彼女を後手に縛つた……。

それから、毎晩のように彼女は、その男の席によばれた。男は、今度は緋縮緬の長襦袢を着て来いとか、その上に締めるものは伊達巻でなく芝居風にしごきの方がいいとか、いろいろ注文を出すようになった。

そして幾日かには、少し痛いけれど今日是用意して来たから、これにするよと云つて毛ば立つた荒縄を取り出した……。巳代子は何んだか玩具にされたり、愚弄されたりしてゐるのを感じたけれど、荷物のように部屋の中へ投げ出されたり、床柱へ結びつけられたり、髪の毛を持つて部屋中を曳きずり廻わされたりしてゐるうちに、不可思議な欲求を感じ出して来た。そして恋しい役者の存在さえ忘れていった……。

その間、しばらくたつてある日、曾つての恋人である役者が待合をたずね、意外なことを聴かされたのである。

待合の女将 「そりゃ巳代ちゃんたら変ですよ。あなたの前ですけれど、綺麗に結い上げた髪は毎日、台なしにしてしまふし、それにこの頃は麻縄を何本も女中に買わせたりして、この間も帰る時に見ると、手に縄の喰い入った痕があつて痛そうに血がにじんです。何んでも、あのひとのお風呂に入るところを見たら、身体中、傷だらけなんです。随分おかしいわ。何をしてるンだか分りやしないっていうのは、その離れの部屋へは誰も入れさせないんですもの……」

半ば嫉け気味の役者は、特に許しを得て問題の離れ部屋の側へ近づいて行き、おそろおそろ雨戸のすき間から中を覗くと――、

そこには絢爛無比、悦虐の世界が艶しくも展開してゐた。赤い長襦袢一つで、半裸にされた巳代子は麻縄で高小手に縛られ、口には猿轡をかまされ、結び上げたばかりの島田が、がっくりと根が抜けて、床柱にまるで磔のように縛りつけられてゐた。

明るい電灯がふりそいで、柔らかな胸のあたりにくつきりと陰影をつけてゐた。しかもあろうことか、男はその恥かしい女の身体を鞭のようなもので滅多打ちに打つてゐるのだ。

役者は、あッと云って声を呑んだ……。すると男は、やがて女の猿轡を取った。そして「もう止めようね」といいながら、いたわるように女の肌を撫でていた……。

役者は青ざめたような顔をして女將のいる帳場に戻って来たが、自分の惚れた女がそんな虐待を受けてよろこんでいることを話すが、なぜか悲しい気がした。

「どうだった？」と訊ねるおかみに「もう惚れた、はれたではありませんよ。男女の問題は別ですね。女ほど恐ろしいものはありませんよ……」と告白。そして音もなく待合を去って行った……。

要はこれだけである。だが色の出ないこの文章が、もし総天然色カラーの世界に切り換えられたら、どうであろうか。

筆者はその昔、さる処で芸者衆の温習会に招待され、俄か着付師をやらされたことがあった。

狭い楽屋部屋の中には、脱いだ着物と、これから着る衣裳が林立し、床の上へ展開して足の踏むところもない色、色、色に囲まれた時、何となく、もうこのまま死んでもよいと思っただけ……。

丁度これと同じように四畳半の彼の老人はその時には、この色が直接の目的ではなかつ

たにせよ黒髪の高島田に緋縮緬の長襦袢一枚の女を、黄色い荒縄で後手に縛り、白い肌をちよっぴり覗かせて、踏んだり蹴ったり、鞭で打叩いたりしているうちに、当の女は兎も角、年寄りのわしの方から、もう死んでもよい……と思っただけに違いない。

往年の性学者高田義一郎博士は、このような現象を「性媒」と云われたが、本テーマの悪を今しばらく泳がせて置けば、その後の芸妓巳代子は果たしてどうなったであろうか。作者にも大いに聴きたいところだが、残念ながら続編もなく、この小説は短編のままで終っている。

序でだが、この小説が書かれた昭和六年頃は、いわゆる不景気のどん底で、口減しのために、娘や若妻達がどんな女衞に買い取られ売り飛ばされて行った年でもあるので、正規の金を払って、その女を買い、後手に縛りあげ、鞭で打ちたたいた位は、初めから悪の中に入らなかつたのかも知れない。

女という生物は、あくまでも男達の附随物であって、道具視、いや玩具視するのが普通の感覚であつた時代に生まれ、その封建性のさなかに育った女の中には、しいたげられることは問題にせず、自分だけに注意を集中して貰えることにいじらしい幸福感を見出す女が少なくなつたのではなからうか。

縛られて男の自由になることに幸福を覚え

る女、なんていうと、こじつけもはなはだし理屈のようだが、戦時中には、軍部のつくり上げた理由をウノミにして、自分を弾丸化することに本心から生き甲斐を覚えた若人もいたのだ。環境というものはこわい。

繰り返すようだが、筆者がここで懸命に取り上げた悪なるものは直接、犯罪につながる、いわゆる極悪非道なものとは本質的に全く異つた、ソフトムードで小市民的なものと云つてよからう。

しかも、その温床となる水たるや、悪の花の咲く冷めたいドロ沼か濁ったあくたの水ではなく、水温も肌のぬくもりで、おまけにピンク色に染まっているという、ちっちゃなお池なのだ。

だから、たとえ底が見えすいた池であつてもよい。そんな池の中に、天婦羅のように各種各様のころもをつけた、もろもろの人間共を放り込んでみようではないかと思ひめぐらしたまでである。

幸い飛び込んだ順に、うまく泳いで根を張り見事悪の花を咲かせたなら、チョンと摘み取った上、花瓶に入れて床の間にデンと飾り大いに観賞してみるのも、一興ではあるまいか。

悪は、やっぱり泳がせて置くものさ……。

受 難

本来修道院は自虐的な古代キリスト思想が
オリエント宗教の禁欲主義的慣習の刺戟を受
けて、三世紀の終りごろからエジプトの砂漠
のなかで発生したことをもって嚆矢とする。
従ってオールド（厳律修道）の誓願を立てた男
女の中には多少ともマゾ的傾向を持った者も
尠くなかった筈である。

アン・ブラウンにしても、自分ではそれと
意識しなかったのであるが、秘められたその
個性の深奥に、被虐の種子がソツとかくされ

ていたのかもしれない。それが、思いもよら
ない異常の事態に遭遇して、次々とキャベツ
の皮を剥ぐようにむかれて行って、核芯が露
呈してきたのであろうか。

しいたげられ、いじめられながら彼女は突
きあげてくる不思議な情感の高揚に、ともす
れば、押し流されてしまいうになるのだっ
た。それはあたかも、大群衆のデモに押され
巻き込まれ、とんでもない方向へ持って行か
れる現代人のパレードックスに似ていた。

叫び、哭き、その上にますます加えられる
恥辱と苦痛、心と肉体を苛責なくさいなむ拷
問なのに、何故かアンには、かつて聖体拝受



第八回

前号まで謎につつまれた有明、その原
子力潜水艦ネプチューン号は世界各地か
ら美女を誘拐監禁しつつ航海している。
司令星恵美子は単身テヘランに赴くが、
そこで人身売買秘密組織に囚えられてし
まう。そして五人の犠牲者に混じって競
売された。その一人、イギリス娘で尼僧
のアンを買ったのはアマトルという女で
キリスト教信者の女を責めるのを無上の
快楽としている。一方、星は首領である
殿下と呼ばれる男の持物にされ、砂漠を
ジープに繋がれて引き廻され、とあるオ
アシスであわや犯されようとする寸前、
奇計とボディガード、ジャンの助けで逆
転、かえって殿下を捕虜とし館へ曳いて
帰ることになった。

の秘儀の時に感じたのと同じような、法悦といってもよい程の充足感が湧いてくるのだった。

しかし、若いアンにこのように客観的な自己分析が出来るわけがない。彼女は自分の心が受難に躍っていると信じていた。イエス様をはじめ数多の聖人方は、受難によって一層たかめられ、神秘的な奇跡の具現者となられたではないか。「しかのみならずわれらは苦難をもよるこぶ。苦難は忍耐を生じ、忍耐は信念を生ずと知れり……。(ロマ書第五章)」アンは心の中で、何度も何度もこの聖句を唱えていた。

アンは両足首をたくましいアブドの足首に結びつけられていた。そして、そのグローブのように大きな手がアンの手首をしっかりと握っていた。つまり、アンはアブドの巨大な肉体に磔にされたようなものだった。女にしては脊の高いアンでも、アブドに比べたら僅かに肩のあたりまでしかない。それは嬌やかな羚羊が首根っ子を猛猛なライオンに啜えられて、ひきずり廻させられている姿を髣髴させる。アブドが両足を開くと、アンは股はひきかれそうに引っぱられる。アブドにして見れば、アンのか細い手などは思いのままに

操作できる。

アンが異教の祈禱を拒否した罰として、彼女は自らの五体を甘んじてアブドの四肢に委ねざるを得なかったのである。如何に力をつくしたところで、この黒人奴隸アブドの筋力には敵すべくもなかった。彼女は、手をとられ、足をとられして、あやつり人形のように滑稽な踊りを強制される。

プールのかたわらには、丈の低いペルシャ風の寝台が置かれていて、第三の娘が枕のように横たわっていた。その乳房に肩を托してアマトルは上体を起こし蜘蛛の巣に捕えられて苦悩にのたうちまわる哀れな蝶をジッと観察していた。その手が無意識に動く。寝台の向こうにのけぞった娘の顔は見えないけれどもブルブル震えるその裸身の痙攣から、その娘が複雑な相剋心理に歯を喰いしばって耐えている様子が、ありありとわかった。

鞆皮の装具は、アマトルの肉体を快くしめつけていた。彼女にはホモ・サジスチンらしい傲頑さが生まれながらに備っていた。真黒な皮に嵌められたスマートな下肢が寝台の上で一ぱいに開かれていた。第二の娘は黒いブーツの間にうつぶせになっていた。

彼女の勤めは、アマトルにフランス式の奉仕をすることなのである。

突然、アブドがプールの中に飛び込んだ。水しぶきがアマトルのところまでかかった。アンは悲鳴が、とぎれとぎれに聞こえる。たくましいアブドの下敷きになったアンは、水の中で息をつくことさえできない。アップ、アップと、もがくばかりだった。

アマトルの左手が第二の娘の髪をギュッと掴んだ。しかも、右の手は依然として第三の娘をいたぶっている。

満足そうな含み笑いの声が覆面をした唇から洩れる。アマトルにつかまれた美しい金髪が、おどろおどろに振動していた。

ぐったりしきったアンは身体がビシヨ濡れのまま引きあげられた。

第一の女が電気鞭を持って待ちかまえていた。そのキラキラ光った尖端が、まだ雪をたらしめているアンは乳首にホンの少し触れたと思った瞬間、アンは異様な悲鳴をほとばしらせた。

「フフフ……。私のアブドは電気刺戟には訓練を積んでいるから、少々の電流ぐらいでは、かえって快感を覚えるらしいわ」

アマトルが笑った。

たしかに、アンを襲った電撃は、同時にアブドにも伝わった筈である。それなのに彼はむしろ、満足そうな咆哮をあげるばかり。大の字に吊ったアンの裸身を小ゆるぎもさせないのである。水に濡れた肌が、一層電流の通りをよくしたのかも知れない。鞭が触れる度毎に、アンは激しいショックにのけぞり、死にもの狂いで叫び、助けを呼ぶのだった。

そんなわけで、僅かの間にエネルギーのすべてを使い尽したのも無理からぬことだったかも知れぬ。四肢を解放されても、もはや何

をする意欲も残っていない。はげしく、切ない息づかいにあえぎながら、アンはプールのそばに倒れ伏していた。

その二の腕に、チクツと注射針がさしこまれた。

「これはハシシの抽出液よ。これからあんたを、生きながらビヘシユット（天国）の楽しみに誘ってあげる」

事実、たちまちアンは不思議な幻覚の中に突入して行った。次第に薄れ行く意識の中で媚薬のもたらし幻想が津波のようにふくれ上って、理性の守っている堤防を押し破って行くのを感じていた。

実際、彼女はサカリのついた獣のようにうめき、身をよじってアマトルのいたぶりを待ちかまえるそぶりすら見せはじめたのであった。

「オヤ、オヤ。信仰厚い修道女さまが、何というザマを見せてくれるの」

アマトルが皮肉を

いっても、今のアンには全く耳に入らなかった。アッ、アッ、アッ。低いが、しかし切ないあえぎ声を出しながら、すでにフツ切れそうになった情感をこらえて、のたうちまわるばかりだった。

頃合を計っていたらしいアブドは、アンを別室に連れて行き、そなえつけの寝台に四肢を縛りつけた。

ついて来たアマトルは、アブドを去らしてアンと二人きりになる。それからち、アンが受けたいたぶりは、筆にするのをはばかりようなことであった。アンのその受責の跡は充血してズキズキと痛んだ。鼻輪をつけられた痕がヒリヒリと痛むのと相俟って、屈辱によって倍加された痛みが彼女を責めさいなんだのであった。

この館で受難に苦しまなければならなかったのは、何もアン一人ばかりではない。競売に参加したのは、いずれもこの国の第一級の資産家だったが、通常の家生活では満足出来ない刺戟を求めて、こうした山奥の館に自分の個室を設けているのである。ここでは、どんなに女を苦しめようと、極端に言えば責め殺してしまったとしても、全然訴追され



る心配はないのである。彼等の買った女達は名実共に彼等の『持ち物』だった。多少高価であったとはいえ、犬や猫といったペットを畜養するのとは本質的には何等変わりないことである。生殺与奪の権を持ちながら、敢て殺さないのは金が惜しいからであって、ここでは愛とかヒューマニティとかいった観念はひとかけらも存在しない。

そこで、男の持つ残忍なあらゆる欲望が、ほしいままに、哀れな犠牲者の上に加えられて行く。それは寧ろ、劣情とか痴情とか呼んだ方が適切だったかも知れない。この国民は人を苦しめ責めるためには伝統的な才能に恵まれていた。囚えられた女たちは、このような男にもてあそばされ、餌食とされる運命にあった。

星恵美子やアン・ブラウンなどと一緒に競売された三人の娘らとて例外ではなかった。好色な男達は、自ら金を投じて買ったということ自体にも色情を感じ、結構興奮していたのである。

それぞれの防音装置が完備し、固く隔離された個室は他人の窺い知るところではなかったけれども、その一つ一つで女たちの膏汗が絞られ、その断末魔の叫声と一緒に、すえた

ような熱気が渦巻いていることは間違いないのである。

配給された多量のハシシ（大麻の一種）はこうした男たちによって百パーセント活用されていた。ところで、一たびこの薬が投与されると、如何に貞淑な貴婦人であっても、忽ち、色情狂に堕してしまふのである。大脳皮質が極度に興奮し、あらゆる抑制力がとり除かれてしまふ。

女たちはハシシの魔力で、きわめて容易に寧ろ唯々として見ず知らずの男の胸にとび込んでしまふ。そして花園の深奥へと相手を招き入れることに夢中なのだ。一たび転り始めた石はとどまることを知らない。次第に雪達磨のようにふくれて行く。娼婦は娼情のとりことなり、娼情は一瞬一瞬に地獄を現出していた。かくて、セックス・スレイブが誕生して行くのである。

シェイク・アル・ゼバル（山の長老）とも呼ばれた殿下は、この館のオーナーとして、とりわけ大勢の女達を貯えていた。

その一部は、部下を統率するためにも利用されたのである。

これは十五世紀の大昔から彼等の祖先によって伝統的に採用されてきた方法だったが、特に功労のあった部下達をここに招いて、数日間ハシシと女とで夢のような生活をさせてやるのである。彼等はシェイク・アル・ゼバルの法力によって、生きながらビヘシュット（天国）に生まれたと信じ込んでしまふ。そして命死して、この国に生まれることを熱望するようになるのだ。かくして、死を怖れない結社員が養成されるのである。

こうした部下達は盲目的に主人の命に従い暗殺、暴行などさえ平然として遂行するのであった。テロリズムは権力に連る。この国における殿下の隠然たる勢力はこれを背景としていた。

△ 逆 転 ▽

館に近づいたので、星とジャンは氣息奄奄となっていた殿下に猿轡をかませた上、ジープの幌に包み込んでグルグル巻きにしてしまった。

昨夜出発した脇の戸口に、ジープを横づけにすると、ジャンが殿下を包みこんだ荷物を軽々とかついだ。扉をあけると、全裸の肌に

アラビア風の宝石飾りをつけ、頭に絹のクローフィアをまとった女が、ひっそりと佇んでいた。そして無言のまま二人の前に立って先導して行った。

前と同じように幾つかの部屋を抜け、ズンズン奥まった区画へ進んで行くと、やがて趣向をこらした内庭へ出た。一面に敷物のように柔かな緑の芝生があり、小川が透明な水を流していた。様々の花が咲き、えもいわれぬ芳香を放っていた。そして、此所彼所に美しい女を抱いた男たちが、思い思いに媚薬に酔い痴れていた。殿下の賞にあずかった部下達である。

その中に、星たち五人を誘拐してきたカシムのだらしなない姿があった。又、いつの間に来たのか、例の大男の方もその近くで軒をかいて眠っていた。

出迎えた女は、こんな光景は見馴れているのだろうか、表情一つ変えるでもなく、脇目もふらずに進んで行く。

内庭の向こうに青々とした水をたたえた堀がグルリと囲んでいる城のような建物があった。僅かに一本の跳ね橋が掛かっていた。三人、いやシートに包まれた殿下を加えた四人

は、黙ってその橋を渡った。すると、待ちかまえていたように橋はスルスルと上って、この区画を完全に外界から遮断してしまったのである。

この一画こそ殿下の住居であるらしく、他に類を見ない程善美をこらしていた。入口から数段下って広間があり、十数人もの水際立った美人達が見事な裸身を並べて主人を出迎えるようとひしめき合っていたのが、その姿を見るや電気に撃たれたように床に坐って平伏した。

星とジャンはそれに構わず、広間の右手にあった書斎らしい部屋に入った。出迎えた女だけが部屋の中までついて来た。ジャンが長椅子の上に殿下を包んだシート包みを投げ出して、すぐに境の扉を閉めた。そして振向きざま、女にとびかかると、何時の間に用意したのか麻酔布を顔にかぶせて、しっかりと押えつけた。女は二、三回、手足をバタバタさせて抵抗したけれど、すぐ静かになってしまった。殿下に忠誠な女ならば、星等にとってはお敵であるから、少しも油断がならないのである。

二人の手には特殊な麻酔ピストルが握られていた。新津謙介が横浜で撃たれて、瞬間的

に意識を喪ってしまったヤツである。

ドアを細目にあけて、星が広間にいる女たちを一人一人手招きして書斎の中に呼び込むと、扉のかげにかくれていたジャンが、麻酔ピストルを打ち込んで眠らせてしまうという作戦が開始された。

こうして二人の作業がくり返えされ、城の中に居た美女たちは悉く夢路についたのである。全部で十八人だった。

二人は顔を見合わせてホッと安堵の吐息を洩らした。すでに跳ね橋は上っている、この敵地に於て暫くは小康状態を保つことが出来るであろう。

彼等にとって最も幸いだったことは、ここ殿下の書斎には館全体の図面が完備していたことである。そして、現在個人的に使われている区画が豆ランプの点灯で一目でわかるようになっていた。殿下が集中管理を便にしようとしたことが、とりも直さず星達を助けることになってしまったのは皮肉だった。

「エミー、機械室へ抜ける秘密の通路が、この部屋にあるらしい」

ジャンがいった。図面に点線がつけられていたからだ。

ところが、どこを叩いても押しても、その

戸口は見つからない。とうとう業をにやしたジャンが、殿下を包んだシートをほどいた。裸の殿下は手足ばかりか、もう一カ所もくくられた尻になっていた。猿轡を解くと、自分の書斎にいたことを知った彼は、大声で助けを求める。しかし、女たちは皆ねむらされてしまっているのだから、殿下の声に答える筈はなかった。

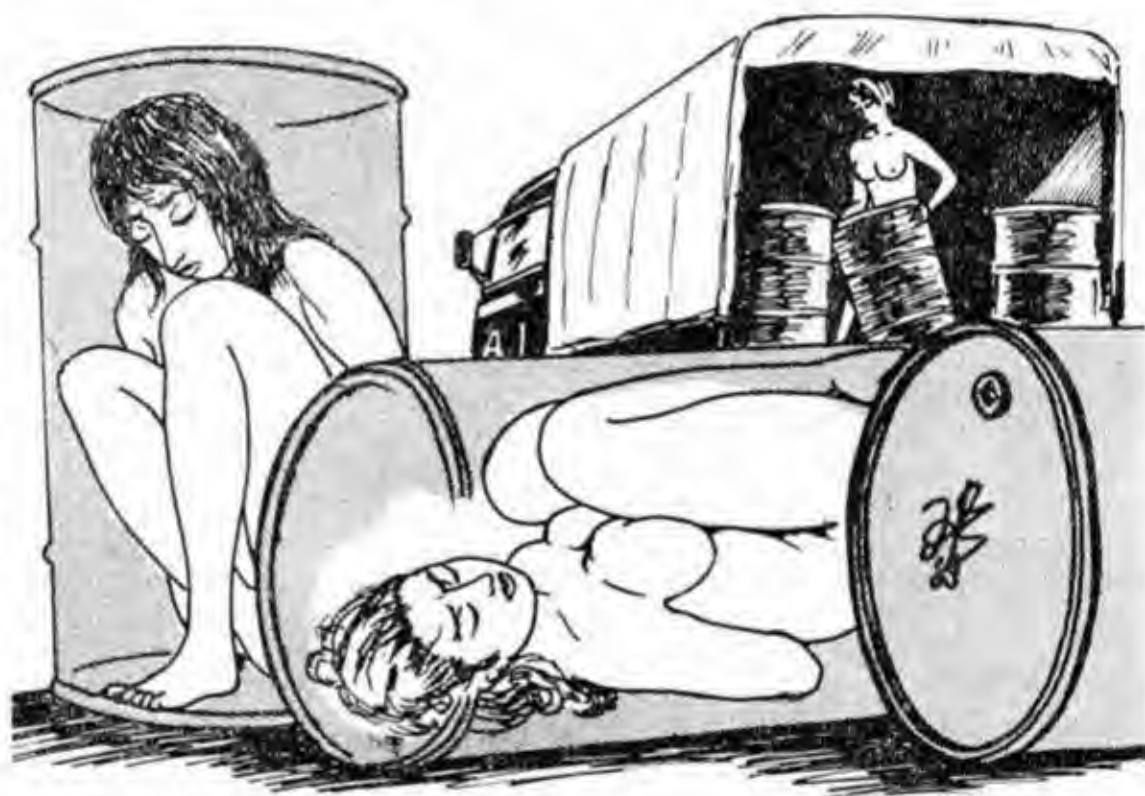
それで星が嗤いを含んで言った。

「何を不思議そうにキョロキョロしていらっしゃいますの。もうあなたの忠実な部下は、いないのですよ。たとえ、いたとしても抵抗することはできません。何故なら、皆意識を喪っているんですから」

そういわれて始めてあたりを見廻した殿下は、ようやく自分が手塩にかけた女達が、累々と死骸のように転っているのに気づくのだった。

ここは殿下のハレムだから、宦官以外の男は入ることが出来ない。その意味で、ジャンは最初に入った男性だということになる。そのジャンが、いらいらした声音で秘密の扉をあけると命じた。

最初はキッパリ拒絶していた殿下も、ジャンの石のような拳が二度三度、頬に叩きつけ



られると、遂に屈服せざるを得ない。秘密の通路への戸口は、殿下の肉声によってのみ開閉されるのだという。そして殿下は、

「ハイヤ・アラール・サラテイ(祈りに来れ)」と二遍叫んだ。

すると、重々しいマホガニーのテーブルが

音もなくズレて、今までその机のあったところに階段が露出して来た。

ジャンが殿下を結えた紐を持って真先に穴を降りる。殿下もそれに従って行かなければならない。あとから星が麻酔ピストルを構えながら進む。

巾一メートルばかりの狭い地下道である。

ところどころに螢光灯がついていて、打ちっぱなしのコンクリート壁に、ざらざらした陰影を投げかけていた。

五、六メートル程進んだかもしれない。突然、ジャンが

「ウッ……」

と、うめいて棒立ちに立ち止まってしまった。同時に殿下が何やら激しくわめきながら後にいる星に体当たりをしかけた。

咄嗟のことで、しかも狭い坑道のようなところである。さすがの星も身体をかわすことが出来ず、もろに胸を突かれて仰向きに倒れてしまった。その上をまたいで、殿下の裸身がはじかれたようにけし飛んだ。転りざま星が捨身の足払いを喰わせたのである。殿下は二、三メートルほど今来た道を戻ったあたりで、うつ伏せにノビてしまっていた。後手に縛られているから、何としても身体のパラン

スがとれないのであろう。

「ジャンー！」

星は立ったまま動かないジャンのそばに駆け寄って、アッと声を呑んだ。

哀れむべし、彼、ジャン・シュレツサーは通路の両側から突き出してきた鋭い槍ぶすまに刺し貫かれ、血だらけになっていたのであった。胸から足まで、何箇所も縫い止められたようになっていたので身動きも出来ないのだ。

星は怒り心頭に発して、殿下のところへとって返し、真中を縛った紐をばげしく引っぱった。悲鳴をあげて起き上る殿下に、畳みかけるように、

「あの刃物を早く引きこめなさいっ！」と命令する。

「アラール・ファラーヒ。（救いを受けに来れ）」

と殿下が弱々しく叫んだ。その声を受けて白刃は何事もなかったように壁の中に戻ってしまった。ジャンの身体がクタクタと床に崩れ落ちた。

手早く殿下の足をくくって転がした星は、かけよりその肩を抱いて、
「しっかりしなさい、ジャン。傷は浅いのだ

から、すぐ良くなるわ」

といいながら、彼の生命の灯がもはや長くは保たないということをまざまざと感じていた。絶望に神にでも仏にでも祈りたいような気持なのである。

ジャンがうつすらと眼を開いた。

「エミー。僕はもうだめだ。しかし、僕は幸福だよ。君と二人っきりで、君に抱かれて死んで行けるのだからね」

「ジャン……」

思わず頬を寄せる。ジャンの涙が星の涙と一緒にになった。

「エミー」

「え？」

「あの日本のタンテイに、気を、つ、け、ろよ。あれは、何かを、つ、かんだ、らしい」
苦しい息の下から、辛うじてこれだけを囁くと、ガックリと顔を垂れてしまった。

「ジャン。ジャン。しっかりして、ジャン」
いくら揺り動かしても、もうジャンの眼は開かなかった。その身体には既に生命が残されていなかったのであった。

しばらくして立上った星は、流れる涙を拭くこともせずに、キラキラ輝く瞳でキッと殿下を見据えて、

「殿下よ、この報いは、必ず貴方に廻ってくる。そのためにのみ、私はあなたを生かしておくのですよ」

といった。その声の調子には、地獄から出てきたように凄じい響があった。絶世の美女の唇から出ただけに、それは殿下を余計慄え上らせた。

星は心ならずもジャンの死体を残して、しかし今度は注意深く、常に殿下を先立てながら坑道を進んだ。

やがて階段があってその上が別棟の機械室になっていた。星は、ジャンの死体からはずして来た肩掛けの鞆を持っていた。その中に強力な睡眠ガス発生装置が内蔵されていたのである。それに点火して、ベンチレーターの吸気孔に投げ込む。各室すべて集中的なエアコン装置になっているから、ガスは忽ち館中に伝播してゆくことであらう。このことは、この館に住む全員が眠りにつくことを意味していた。

翌朝、アングロ・イラニアン石油会社のマックをつけた大型トラックが一台、この館に到着した。荷台にはドラム缶を一ぱい積み込んでいる。運転手は勿論、有明の腹心の者で

あろう。星はたった一人で、この巨大な眠りの館にいて、極めて忙がしく、動き廻っていた。

例によって、彼女は、生け残りにつき人々と、生命を奪わなければならない人間とに仕訳しなければならなかったからである。この二種類以外の処置は許されなかった。しかもトラックは一台しかなく、ドラム缶は僅か三十六個しか積めない筈である。

マスターキーを使って、アマトルの区画に入った星は、四肢を大の字なりに固定されたアンの上に、アマトルが折重なって眠っているのを発見した。勿論、ただの睡眠ではない

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

ことは一眼でわかる。

星は躊躇せずこの二人にマジックで赤いしるしをつけた。赤い符号は、ネプチューン号に連れて行くべき者であることを意味していた。

殿下のハレムを構成していた女達はさすがに極めて上質だった。その中から若いだけをえらぶと十五人であった。

アマトルの三人の女奴隷達にも赤い印がつけられた。星と一緒に囚えられたベルシャ美人達も選に入った。このようにして若い美女達で三十三人、それに男が殿下、カシムとその輩下の大男との三人で、合計三十六名の捕虜が候補に上ったのである。

運転手と二人で眠ったままの捕虜を次ぎ次ぎと運び出し特殊の注射薬で数日仮死状態を続ける様に処置した上、ドラム缶に入れる。勿論、呼吸に支障を来たさない程度の酸素発生装置も一緒に内装される。その上で厳重に密閉されるのである。巻き締め機が上蓋を水も洩れないように嵌め込んでしまう。

積み込みは運転手に任せて、星は再び館の中に引き返した。三十六名を運び出しても、殆んど目立たないくらいに人が残っていた。その中で、先夜の競売に参加した男達は、夫

々心臓を星のナイフで貫かれ、眠ったまま絶命して行った。彼女の裸身は仲間以外には絶対見せてはならないのである。見た者は死ななければならない。

最後に星は、ジャンをもう一度訪れた。彼は星の手で肌を淨められ、眠ったように横たわっていた。その髪は一切れをナイフで切りとってポケットにおさめた。有明に渡す形身の上しるしだった。

機械室では、今度はイペリット系の毒ガスが換気孔から送り込まれていた。残された男女は、一人として生きていてはならないからである。

あらかじめトラックが運んできた高性能の爆薬を、館の所要所に仕掛けておいた。アラビア服男装のままの星を助手席に乗せて、トラックは出発した。後の荷台には三十六本のドラム缶が、その中に昏々と眠っている三十六人の生命を秘めて、ゴトゴトと揺れていた。

二十分程して、館のあったと覚しきあたりから茸のような煙が噴出したかと思うと、暫く遅れて海鳴りのような爆音が星の耳にまで伝わってきた。

(未完)



縛り随想

プレイのあいま

千草忠夫

「アバタもエクボ」のたとえ通り、頭がカッカしてくると、何でも美しく見えてくる。古女房を縛ってヤニさがっているのもそのデンで、昼間シラフで見ている時には「よくもこんな女とあきもせず、十何年も暮らして来たもんだ」と、我ながらその我慢強さにあきれるのだが、夜ともなって素っ裸に剥いて縛り上げる段になると「フム、まんざらでもないわい……」と、妙な気持ちになってくる。更に、

「いや、いや、そんなに見つめないでエ」と、小娘みたいに嬌声をあげて、変なシナを作られる、もういけない。だらしが無いと思いつながら、いとしさに掻き抱きたくなってくるのである。

どんな女でも三十を越すと、男にとっては鶴ねえのようなもので、まことにその心情たるや計りがたいものを感じるのだが、その鶴がひとたび裸にされ縄がかけられると、まるで十四五の処女のような羞じらいを示すのが、また妙である。いや、それこそ鶴の鶴たるユエンなのかも知れないが……。

「古女房なんかを縛って、どこが面白い？」と、かつてその道のベテランに冷やかされたことがある。千客万来、多士済々の彼にとって、女房など有難くもなんともないらしいのだが、私のごとき貞節を保っている者にとっては、やはり得がたい女性といわねばならないのである。

しかし、そう言われて見れば、たしかにつまらぬことではある。体のスミのスミまで知りつくしてしまった女は、いくらひねくりま

わしたところで、そこから新しい何物かが出てくるわけではなく、眼の前の女を素材にして、夢を描いているだけなのかも知れない。と思うと、カッカしている自分がどこか道化じみて来てイヤになり、ベタベタと媚態を見ている女房が、とてつもなくグロテスクな存在にも見えてくる。

で、しばらく遠ざかって頭を冷やす。すると今度は、むこうからそれとなく持ちかけてくるのである。眼の色つやとくばりようで、ハハんとすぐわかる。ここで『よくぞこまで飼育したもんだ』とうぬぼれるのは早計でなに、あきあきしてきたコイトスに変化をお互に求めたに過ぎない。この年令の女になると、快楽のためなら、およそ何でもしたくなるような状態にあるのではないかと推測されるからである。そして、ひとたび味を覚える

と、まことにドンヨク極まりない。

最近ローティーンあたりから、セックスだ失神だとかましいことだが、そんな年令から快楽を追いまわして、いったい三十台になったらどんな性質の快楽を求めるようになるのか、と寒気がしてくる。いったい、男は女に快楽を与えてくれるものときめこんでいるのが僭越のサタで、まずここらあたりから教育をしない必要があるであろう。

「あんた、ダメねエ」とか「ヘタねエ」などと言ったら「バカヤロ、テメエがタルンでるからじゃねえか」と叱りつけ、女に主導権をおしつけておいて、テキが苦心サンタンしているのを、ニヤニヤ眺めているだけのヨユウを持つことが大切である。

二

それはさておき。いくら図々しくても、さすがに肉体のおとろえは自覚しているらしく、そのおとろえを最も強く意識している部分を一番かくしたがる。

第一番が乳房、それから腹。ことに子供を生んでいるのだから、そこらあたりのたるみが最も目立つのである。私にしても、いくらカッカしていても、それくらい識別できる冷静さは残っているから、あまり見ないようにつとめる。

だから立縛りなんて、とてもやって見る気

がしないのは当然で、プレイといっても、やる範囲は狭いものにならざるを得ない。

ただ縛りのありがたい点は、縄をかけることによって肌のゆるみが幾分なりと緊張を取りもどすことで、このことは乳房にきつく縄がけする際には、特に効果を発揮するようである。上下に縄がけし、双丘の谷間と両脇を絞めあげると、どんなにタルんだのでも、たちまち張り切ることうけあいである。

女房もそれを知っているのか、図々しくも胸の縄がけだけは、ああしろこうしろ、ゆるいのきついの、文句を並べる。そして上手に締めあげられて、形よくプックリと盛りあがった形になると、そうなった自分の乳房にほればれと見入っているようなのが、なんとも奇怪である。あるいはこれは私だけの感じで女房の方は、亭主が夢中になる魅力がまだ自分にあるつもりで、自己満足にウットリとなっているのかもしれない……。

他の人はどうかしらないが、私は「形のよい乳房」というものに、我ながら羞ずかしいほどの執着を感じる。気に入るほど大きくなかったり、形が悪かったりすると、どんなに美人であってもあまり魅力を感じないのである。これは多分、実物の乳房に接する前に、あまりにも小説によって美化された乳房に接し過ぎたために、観念肥大を起こしたせいかなと思われる。

いろんなヌード写真などを見ても、これは——と思わせるものには、めったに出くわさない。(ついでながら、私は外人の女はきらいである)

「じゃ、お前の女房はどうだったんだ」

と意地悪く問う方がおられると思うが、実は少々ノロケじみて言いくいのだが、かつての女房のソレは、私の理想に近いものであった。よく「白桃のような」とか「腕を伏せたような」とかいう形容詞が用いられるが、まさにそれであった。形ばかりでなく肌も美しかったから、なおさらのことである。

が、しかし、これはみな過ぎ去った夢で、今はもうズダ袋に等しく、かくて前述のような苦心が必要となってくるのだが……。

いくら苦心してもどうにもならないと覚ったら、見ないようにするより仕方がない。それには俯伏せにして、背中を相手にするのが手っ取り早い。実は、世に満足のいく乳房がなかなか存在しないとさった時から、私は女の背中 of 美しさに魅かれはじめていたのである。

人によると、女の背中ほどノッペラボーで不気味なものはないそうだが、私はそうは思わない。女のアラを隠すには最も良い場所だと思う。背中のみっともない女なんてのは、そうおるものではなく、セムシでさえなければまずまず見られる。ことに、腰を降ろして

ウエストのくびれとヒップの張りを強調するような姿勢を取らせると、なかなかすてたものではない。ノッペラボーのそしりは、後手に縛り上げれば問題とするに足りない。

いったい、女のおとろえは前面にまずあらわれる。顔、乳房、腹など。しかし、背中のおとろえが目立つ——なんてことはあまり聞いたことがない。だから夢のユの字もない古女房から、なけなしの美をしばらく出すのなら背中を探索するに限る。

生え際の蒼ずんだ皮膚、耳朵の裏、あごからうなじへかけての柔らかさ、円い肩先の線くの字に折り曲げてくぐられた腕、背すじのくぼみ、ウエストのくびれ、ヒップの盛りあがり、その上にあるエクボ、等々……（もっとも、背中に灸のあとがある、なんてのは困るが）

こうした眺めを楽しみながら馬乗りになって、ベルトかなんかで尻をひっぱたいてやるのも、なかなかオツなものと思うのだ。

三

後手に縛った女の姿は、どういふのがいちばん好ましいかという、それはやはり横すわりになって、うなだれている所であろう。これは、先に言った女のアラをかくす姿勢でもあると思う。どういふものか、女は縛られると必ずうなだれてしまう。背中をまるくし

腰を引き、膝をこすりあわせる。もっとも、この姿勢はなにも縛らなくても、裸にしただけで同じ姿勢になるようだから、本能的な羞恥の姿と受け取れないことはない。

しかし、それだけだろうか？

無垢な処女なら、羞恥のためと素直に受け取れないこともないが、コウをへた女房までそんな姿をするのは、ちょっと眉ツバもののような気がする。

あたかも羞恥に身も世もないような風情をとって見せることによって、亭主の気を引いているのではないか？

自分の羞恥の姿に自分が陶醉しているのではないか？

そんなことを考えると、そんな姿を前にして、ヤニさがっているのがバカバカしくなってくる。それで、突きころがしたり、くすぐったりして、そんな姿勢を崩してやりたくなくなってくるのだ。S的人間は、相手がみずからそんな感情にひたっているのを見逃しておくことはできないのだ。相手は自分のためにのみ、自分によってのみ動かされるのでなくてはならない。

で、責めも縛りだけではなしに、次第にエスカレートしてくるわけだが、それと同時にこちらの欲求までエスカレートしてくるからどうも始末が悪い。最後のドタン場まで沈着冷静であることが、S的人間にとって、快樂

を満喫する最大の条件だと思ふのだが、なかなか修行がゆきとどかぬ。それで、これから後になると、美しさを楽しむことが忘れられてしまつて、一直線に猛進することになってしまう。テキにしても同様で、羞恥の体面のこととはどこへやら、よだれをたらしたマズい顔をのけぞらせ、正体がなくなっている。膝の力などとうの昔にケシ飛んでいるから、まあ、正気で見たら、眼をおおいたくなるような有様であろう。

とは考えるものの、一度でもいいから、この熱戦のモヨウを客観的に見たいものだという気が強い誘惑となつて残る。残念なことに私はまだ実演ものぞきも経験したことがないのでなんとも言えないが、そんなものが存在し、けっこう客を呼んでいるというのも、案外私のような退屈した男が多いせいかもしれない。そういう意味で、本誌にあらわれる交換プレイなどというのも悪くないな、と考へたりする。もっとも、古女房の顔を見ただけで、相手のかたは鳥肌立ってしまったわであるろうが——

あれやこれや考えあわせると、私の場合は縛ってからチョンまでの間の変化がとぼしくて、直線的に過ぎるような気がしてくる。事実、プレイとはいいいながら、坐らせたり立たせたり、寝かせたりひっくり返したり、などということがとてもおっくうで、たいていは

一種類の縛り方で終ってしまふようである。それ以外に手をひろげるのは、おっくうである。重い体をあつかいかねて、ヨタヨタしている気になれない。それにドタンバタンとハデにやるにはスペースがせま過ぎ、隣室へのハバカリが多過ぎる。せいぜい小道具で変化をつけて楽しむ、程度にとどまらざるをえない。更に横着になって、奇クを読んで空想を楽しんでいた方が、よっぽど変化にとんでよい、ということにいずれはなつてゆくような気配がある。

やはり、古女房では、どんなにカッコしたところで『あばたもえくぼ』になりにくい点がある、というところであらうか。

四

私のプレイが直観的である、ということについて、私はかねがねひとつの見方を持っている。それは女を責める男の側の性能に関する。(女の側にも関係があるのだが、ここでは取り上げない)

即ち

一、女を縛るのは、前戯の一形式であつて、別に縛らなくても、いっこうにさしつかえない。

二、女を縛って、はじめてその気になる。

三、女を縛っても、その時のムードや何かによつてその気にならない時とがある。

四、縛ろうがどうしようが、全然ダメ。

以上の四つの性能によつて、縛りの重味がグンと違つてくることは、当然であらう。私が縛ることにさほど変化を求めないのは、私が(一)に属しているからだ、と思つてゐる。(二)までならば、まだ単純であらうが、(三)(四)ともなると、事はなかなか重大である。

まず(三)になると、自分の『好み』がおそらく絶対的な重味を持つてくるであらう。その好みがあまく満たされないと、ああでもないこうでもない、というわけで縛りは千変万化し、果ては縛りなどというなまやさしいものではすまなくなつて『責め』という言葉がふさわしいような行為にまで進まなくてはおさまらないように思える。

かつて、話を聞いた中にこんな人がいた。縛るのはどんな縄でもいいが、その上に必ずその人の作つた特殊な縄(といつても、イボイボがあつたりトゲトゲがあつたりするわけではなく、ただ手作りというだけのことである)をかけまわすのでなくては満足できないというのである。どういふところからそうなのか、さっぱり理解できないが、こんな人はおそらくまだ軽症の方であらう。

(四)となると、全く想像を絶してゐて、ただただ、自分自身がそうならないことを祈るだけである。

こんな独断的なことを書くと、

「いや、おれは(一)だけれど、妻と長時間、変化あるプレイを楽しんでいるぞ」

とおっしゃる方がいられると思うが、そんな方には「うらやましい」と申し上げるだけで、別に「それはルール違反である」という気は毛頭ない。

しかし、私自身のことなどを、ツラツラ反省して見ると、人間どうも好きな方面のチェはつきやすいようで、ことに本誌のような高級専門誌が実例をあげて写真入りでチェをつけるものだから、つい「おくれてならじ」とばかり飛びつくのではないか——という気がしないでもない。もっとも、どなたの研究成果か知らないが、あぐら縛りと股間縛りのチェだけはありがたく盗用して、交らず愛用させてもらつてはいるが……。

とにかく、いらざる背伸びはよしにして、古びたとはいへまだ紋甲斐のなさはなさそうな女房の反応をたしかめながら、ゆるゆる歩を進めていったほうが、よさそうである。

筆を止めてふと顔をあげて見ると、縛り上げたままころがしておいた女房が、縄をかけられたあたりをムズムズさせてゐる。大分ほつたらかしておいたから。おっくうだが、今日は頑張つてあぐら縛りにでもして、もうひと責めやってやるか……。

—おわり—

談史腹切



三村家の人人

(中)

通弘康中

三松籟悲調

天正三年三月一日、小早川隆景以下の軍勢は成羽に移り、松山攻めの準備を進めるところへ、逆に松山からは、広瀬にある陣屋へ斬り込みを決行した。そこで充分に兵を休め、十六日卯の刻(午前八時)を期して阿部川を

渡った安芸勢は、鷄足山に陣をとり、広瀬の陣屋を奪回した。

松山からは屈強の兵八百騎が駆けおり、まず遠矢の手並みを見せ合うたのち、槍、大刀の合戦になった。折しも安芸勢八千の背後に松山の鉄砲隊二百が潜行し、不意を射たので毛利方もたちまち浮き足立つ。そこを鷄足山

のふもとまで押し返し、しのぎを削って火花を散らす激戦を展開した。

その間、三村親成の手の者をはじめ数多を討ちとったものの、松山でも神原六郎左衛門尉以下多数の死傷を出し、薄暮に至って何方からともなく兵を収めた。

こうして対峙のまま月を超えた四日には、松山から多氣の庄大離の陣屋を攻め、辰の刻に火を放った。多勢に無勢ながら地の理を知る松山勢の奮戦は目覚ましく、引いては返し返しては引いて戦う毛利勢も、その日の暮れ方には後陣の軍夫さえ追い散らされ、陣具までも松山方に奪われる有様であった。芸備防長の兵で松山周辺に討たれる者、数を知らずと伝えられる。

城内の喜びは一と方ならぬものであったが討たれた宗徒の将士を思うて元親は楽しまずひたすら来るべき決戦の策を練っていた。

都合半月を越えぬ合戦に、城方の討死する者は、軽部治部、近藤掃部、布寄左衛門大夫同内蔵介、渡辺、神原、矢内以下が、松山のほとり、石蟹、唐松、穴田手ノ庄、稲田中郡野山、多氣庄古瀬、河西に至る間に、骨を埋めたのである。

ところが、ここに局面を一転する事件が起

こった。四月七日、松山の西北方、河西の寺山という古城に陣を進めた安芸勢は、収穫も近い古瀬付近の麦を薙いでしまった。すると城内から合戦を挑んだので、芸陣先手の児玉三郎右衛門尉、井上又右衛門尉ら議して、城中兵糧とぼしからぬに於ては、わざと頼勢を見せぬように戦いを挑みくるは必定。落城ま近しと察し、兵を退いて様子を見守った。

それとも知らず城中の者は、ますますはげしく追振する。そこで芸陣はまた田に移り阿部西の野の麦を残らず薙いでしまった揚句二十四日には成羽に退いた。

城内には年余の籠城を支えるに足る備蓄もあり、長期戦の構えに入っただのであるが、ここに敗軍の常として内通者が現われた。

すなわち元親譜代の郎党、舟井宗左衛門直定、河原六郎左衛門直久は、小早川隆景の放った間者に誘われ、毛利氏に心を寄せるようになった。元親もほぼ察している様子を兩名が見てとると、策を案じ石川源左衛門尉久武に愁訴して、二心なきことを本丸にお伝え賜わりたい、と嘆願した。兩人の申出でを真実と思いこんだ久武は、側近二、三を引きつれ本丸にのぼった。

その不在中、舟井、河原の徒は進物と称し

て門を開かせ、その隙に家臣大槻伝内、小林又三郎をして久武の妻子を捕えしめた。久武も油断なく手勢三十騎をとどめて警固せしめたのであるが、何分にも人質を取られて進退きわまる折から、毛利の軍勢数百が天神丸に押入って勝鬨を挙げた。

久武は早速にも取って返そうとするところを、元親が、

「案の定、舟井、河原の輩、心がわりしたのであろう。されど、よもや大松山、三本松の者どもは心変わるまい。大松山の軍勢を催おすべし」

と、久武の鎧の草摺押えて引きとめたのであった。時に五月二十日の巳の刻(午前十時)ごろである。

さて元親は、すぐさま大松山を守る三村左京亮親重、同じく太兵衛尉親当、三本松を守る三村親氏、佐内の丸を守る三村助左衛門尉親友、渡辺左京進らに使者を出した。

「天神丸へ敵勢押入ったにつき、早急に出向かうべし。左京進は河上因幡が丸に火を放ち一門妻子を大松山に籠らすべし。相畑には火矢を射かけ、天神丸に早々押寄せべし」との布令である。

触れを受けた面々は、たちまち物具に身を

固め、出陣の支度を整えて、

「攻め口たがえば、われらが働き御高覧に及ぶまいが、死を必して戦うべし」

と、いとも頼もしげに見えたのである。

ところが、大松山と三本松とのあいだに小屋数百あって、そこに籠る者どもの狼狽は、ひと方でない。調べてみると、

「天神丸を攻め落としたとて、今日の命が明日に延びるでなし、敵は早や数千騎、甲の星を並べて岸ぎわ近く寄せたり。三流の旗をかざすは小早川隆景なるべし。運を開くは至難にて、妻子の命は目前なり。天神丸に味方して数千の命助かるべし」

と説く者があって皆同調し、たまたま忠心ある者が本丸に入ろうとしても、子出づれば親とどめ、親出づれば妻子嘆かう有様。右往左往するうちに、寄手の三村親成が攻め入って人質を抜き取りはじめた。一方、相畑へは天神丸から火をかけて攻め立てたので、あえなく楽々尾豊前守以下数百が降った。本丸へは、わずかに吉良常陸、神原与三左衛門尉らが妻子ともども入ったにすぎない。

本丸では、最も頼みに思う大松山の兵が心がわりしたのに驚き、出撃如何と思案に余る折しも、馬酔木を守る新山玄蕃介家佳が、

「時日を延ばしてはなお敵勢加わり申さん。今がよきころあいと存ずる」

この進言に、譜代の者ども、もともと肯いたが、

「天神丸は多勢を得たに味方は意気を失いたり、事を計るとも失敗は必定。危うい戦して何の益があるう」

元親は力なく首を垂れた。そこへ田中藤兵衛という者が進み出て、

「兵法も時によりけり。今日の戦は吾らにお任せあれ」

憚りもなく言上したので、元親、久武らも三百余騎の兵を率いて出陣した。まず三村与七郎以下屈強の面々が相畑の木戸に寄せ、道茂木引き破り、家々に火をかけて、

「忘恩の輩、天罰おもし知れ」

と罵ったので、相畑に籠る内通の者どもは辛うじて天神丸に逃げ込んだ。しかし安芸勢の鋭鋒はげしく本丸に詰め寄るうち、日暮れには、元親の近習小原主計、南江馬右衛門ら五十余人が、元親の制止もかえりみず、相畑さして退散した。

こうして城の周囲に充ち満ちる芸陣の軍兵は雲霞の如くなった中に、松山城の本丸ばかりは堅守して、更に怯む気色も見えない。そ

こで児玉、井上らまた計って、

「城中に残るは決死の者ばかり。強攻すれば徒らに軍兵を損ずるのみであろう」

と策を案じた。すなわち、馬酔木の新山家佳、勢籠が壇の田井長門守ら二百余騎に向かい、矢文で再三帰順をすすめた。

最初のうちは城内でも、

「おびき寄せて討ちとる算段と見える。われらただ一所にて腹切るばかりよ」

と決心を変えなかったが、夕刻に至って、とうとう武装を解き城を出た。

その様子にまた気落ちしてか、渡辺、南江山川など譜代の者も、降人を防ぐと称して城を出たまま帰らず、いよいよ元親の身邊には五十騎の小勢が残るばかりとなった。中にも二十余人が一と間に集まり、

「今生のことは申すに及ばず、死出のおん供つかまつる」

誓言も頼もしげに云い切ったので、元親も敗軍ながら莞爾として、新簾をとり寄せ切腹の場を作らせたのち、別れの盃をめぐらす折しも、馬酔木より鼻の丸かけて寄手が火を放ったので、東南の風にあおられて一里四方は昼をも欺く明るさ。

「この上は早う攻め来よ。腹切るべし」

元親は覚悟定めて涼しげな気配であった。

時に石川久武が膝を進め、

「一とまず遠島へも落ち延びあれ。信長公かねての約束もあることゆえ、まず一身を保ち給え」

しかし元親は肯んぜず、

「遠きを頼むもこう成っては無用のこと。たとえ明日は天下の主となろうとも、ただいま清和源氏の名を汚すこと返す返すも口惜し。予はともかく、貴殿こそ一とまず讃岐へでも落ちのび、重ねて本懐とげられよ。草葉のかげにても怨みを散じようぞ」

冷やかな言葉に顔色かえた久武は、

「おんためと思えばこそ、それがし居城をも捨て、一処に籠城つかまつったものを、誰がために命を惜しみ申そうや。神八幡も照覧あれ、ここ一と足も引き申さず」

叫ぶように云った。家人どもも、主君の腹切るときに見捨てては道でなし。といって、義理を思えばたちまち失われる命ゆえ、ひとまず元親が落ち延びれば良策と、舌の根も乾かぬに、前言くつがえして、久武の諫めに同調した。

元親は思案して、おのれ一人の覚悟で多数を死なせるも不愍ゆえ、まず久武を落とし、

おのれは立ち戻って腹を切ろうと決心、一同で立ち出でた。

さて久武が塀に手をかけると見て元親が引き返すさまに、久武も元親の真意を悟って戻ろうとするところを、家人どもが両将の綿囀み取って押し出し、都合二十余人、二十二日の夜陰に乗じ、岩間を伝い降りてほどなく麓についた。しかし元親は足を滑らせ、岩に右肩を打ち当てて倒れた上、わずか数人に支えられて高梁川を渡り、阿部山に志した。ところが行きつかぬ内に大刀が鞘走り、右膝を深く切った。

あまつさえ左の踵を踏み切り、もはや一歩もかなわぬ有様に、元親は思わず落涙し、「もはや天道も吾を見捨てたり。その方ら四五人付き添うたとて何の験もあるまい。松山に還って身を立てよ」

仲間の加助には国光の長刀を、家人内田には兼光の刀を与え、ひとり家人の石田は敵方にある親を頼れよと暇を出し、涙ながらに去りゆく三人を見送った。

残るは同朋の兄阿弥、舞の弥助の兩人ばかり。藪の中に元親を横たえ介抱すれども一向はかばかしくない。最期の働きするとも甲斐なしと見てとった兄阿弥は、その夕刻に、辺

りの気配をうかがう、と称して行き方知れずになった。

弥助は、先に城を落ちるとき、

「老年の身に遠路のお供はかなうまじ。ご縁これまでにござりまする」

云いざま鎧の袖をまくりあげ、脇差抜いて今ぞ自害と見えたところを、元親が、

「予とて、遠路を落ち延び得ようとも思われぬ。しばらく待て」

と腕を抑えたので、弥助も自害を思いとどまったのである。

従って、ただ一人となって自害せばやと思うたものの、主君が世に在す限りはお供しようと思ひ返し元親のかたわらに付き添うた。

二十三日になって少し気分の落ちついた元親は、兄阿弥は、と尋ね、落ち延びた由を聞いて涙ながらに弥助の忠勤を讃えた。

弥助は更に

「二代のご厚恩に報いるすべもござりませねば、思いまするに松山の岸ぎりにのぼり、み名を名乗って腹切りまする。その間に高田の方へお忍びなされませ」

とすすめるのであったが、元親は肯かず、「その方、松山に参って検使を乞い来よ。予はここにて切腹いたす」

今はすべてを諦め切った言葉である。弥助は黙し、主君を殺すための使いなど出来ませぬ、と断わり通したが、二十四日朝ついに元親の言葉に従い、証拠の品——元親の着衣の切れはしと鬘の髪——を携えて高梁川を渡った。渡ったものの、あくまで主君を殺す使いはせじと心決めた弥助は、単身松山城に切り込み、門番一人を倒し、搦め捕られても口を割らず、二十六日に斬首された。

先に元親と別れ別れになった将士のうち、石川久武以下の主立った者は毛利勢と奮戦の末、同じ二十六日早朝までに悉く討死を遂げわずかに三村右京進政親父子のみが、美作を経て因幡に逃れた。

さて元親は弥助の斬られたことも知らず、ひたすら敵の検使を待つうち、丘にのぼってみれば、高梁川のほとり臥牛山の頂きにそびえる松山城が、指呼の間に望まれる。

「ああ、彼処にて腹切らざりし不覚よ」

嘆声を残して六月一日夜半、菩提寺頼久寺に入って切腹しようとしたが、思い返して、元親最期のほども知れずと云われるも口惜しと、松蓮寺のほとりに忍び、二日の昼前、たまたま通りかかった樵夫を招き、「元親、痛手を負うて山路にあり、検使賜わ

らば切腹いたす、と松山に伝えよ」

伝言を頼んだ。頼みのとおり、栗屋三右衛門尉元方らが、小早川の陣から検使に來た。

栗屋とは旧知の間柄ゆえ、元親も

「介錯お願い申す。この度、城中にて腹切りざりしこと慚愧にたえず。さて謀叛の云われは、亡父家親がため宇喜多への宿怨によるばかり。父のためなれば天道にも背き申すまいが、武運ここにきわまり申した」

淡々と語り、やがて隆景にあてて事の仔細を記し、細川少部少輔はじめ知己に遺詠をたためたのち、辞世、

人と云名をかる程や末の露

きえてぞかへるもとの雲に

書きとめて腰のものを栗屋にわたし、重ね畳に端座して、帷子の袴を押し下げ、

「案内申すとき首打ち給え」

いいつつ居直った。

やおら拔身の脇差を持ったまま合掌した元親は、

銷湯炭清涼殿 劍樹刀山遊戯城

と唱え終わると、脇差を左の脇腹に突立て

右脇に引廻し、胸の下ほど鳩尾の辺りに柄も拳も砕けよとばかり、力一杯おし込んだ。見事に十文字腹かき切りつつ、「いざ」と声を

かけるとともに、悲劇の武將三村元親の首は落した。

元親の子息勝法師丸は、備前の住人伊賀左衛門久隆に捕えられ、本陣に送られた。そのとき、久隆に贈られた金扇の古歌

夢の世に幻の身の生れ来て

露に宿かる宵のいなづま

とあるのを見て、勝法師丸は

「さては本陣に行きなば、殺さるること必定なり。脇差を今まで持ってあらば腹切るべかりしに」

歎声はたちまち隆景の耳に達した。また、

「かつてわが家人たりし者に行き逢うたが、馬打たせて行き過ぎたり。叛かるほどの身なれば致し方もないが、付き添う方々も居らるると云うに」

など、わずか八歳の少年とも思えぬ言葉に

隆景の決心が決まった。

「のちのちまで合戦の種、わずらいのもと、斬れ」

容顔美麗、書道歌道に秀ずという少年の、

最期は無慚であった。

そのほか、三村の残党狩りは極めてきびしく、石川久武の遺子も例外ではなかった。

大類伸氏監修「日本の城」によれば、松山城は海拔四百八十メートル、建造物の現存する山城では最も高い、典型的な山城である、という。もっとも、現存の天守や櫓は、約三百年前の改築によるものである。

歴代城主の中には、造園家で名高い小堀遠州が、慶長から元和にかけて在城しているしまた下って元禄年間には、浅野長矩の城代として、大石良雄が在勤している。

かつて、与謝野鉄幹、晶子夫妻が松山を訪ねての作品が、「日本の城」に引かれているので、ここにも重ねて引用させて頂き、以って三村氏興亡悲史の跡を偲ぶがともしよう。

松山の溪をうずむる朝霧に

わが立つ城の四方白くなる

与謝野鉄幹

しらじらと瀏れる霧の上走る

吉備の古城の山の秋風

与謝野晶子

カット「くの一水中自刃」四馬孝画



その道のベテランには特に目新しくもなからうが、古風な芸者遊びも、遊び方によって面白いものになるうという「M好みお座敷三態」をご披露しよう。

(その一) あけがらす

一流地とはいかないが、ちょっとした料亭の奥まった小座敷。馴染みの芸者とテーブルひとつ距^{へだ}てた差し向かい——といっても、その構図は、いささか変わっている。

お客である男(中年で小肥りの、よくある重役タイプといったところ)はパンツ一枚で後ろ手、足首も縛られて、丸太みたいに、テーブルのこちら側、畳の上に仰向けに転がされている。むろん、さしつさされつというわけにはいかない。

女は手酌。その合間に口にふくんだ酒を男の唇に流し込む。肴も女が箸に取って男の口に運ぶ。一時間でも二時間でも、この奇妙な酒宴は続けられる。やがて酔いがまわって、男は芋虫のようにグニャグニャになり、女は正座しているのが困難なほどになる。と女はやおら三味線を取り上げ、踰^{また}ぎと立ちあがると、男の顔の上へどっかりと臀をおろす。

緋ぢりめんの裾が燃え立つように乱れて男の顔を覆い、視界を閉ざす。分厚く、重量のある肉塊が男の目鼻を^お押し潰し、しかも不安定にぐりぐりと動く。酔った女の体は重い。男はたちまち呼吸困難となりゼイゼイ咽喉を鳴らして呻く。女は懸命に上体を支えながら

おざしきこのみマゾのたわむれ

四疊半被虐戲態

鶴田政二

美しい顔を反らせて、

「^{たえ}仮令この身は淡雪^{あわゆき}とともに消ゆるもいと

わぬが……

といった清元——いや同じ『明烏』なら新内の方が濃艶でいい——のクドキをひとくさり、弾き語りに語り始める。

すでに氣息奄々となった男の喘ぎが浄瑠璃の合間を縫って、凄絶な雪責めに悲痛な叫びを上げて身悶える浦里の苦痛のさまに、迫真の効果を加えるといったあんばい。窒息寸前の虫の息で、男は浦里の苦しみを身をもって感じさせられる。やがて、浦里は愛^{いと}しい男、時次郎に救われるが、同時に男も地獄の責め苦から解放される。

女は三味線を置き、冷えた酒を二、三杯つ

づけて飲む。ややあって、男に口移しする。
——が、これは酒ではない。女の唇から男の唇へ、生あたたかい、ドロドロしたもの、次から次へと吐き出される。それは断続的な痙攣を伴って、女の胃腸の奥から奔流して来る。女の両手でがっちり、挟まれた男の顔は、女の唇から逃げる術がない。白い頸を伸ばし、全身を波うたせながら、紅い吸盤は金輪際、離れないかのようだ。

ごぼごぼと、異様な臭気の、固体とも液体ともつかぬものが、時には鼻孔からも侵入して、男は激しく咳きこみ、身悶えして嘔せ返る。この唇と異物の猿ぐつわに、男は遂に耐えかねて、ゴクゴクと咽喉を鳴らす。それを嚥み込むことによって呼吸が楽になることを知った男は、あとは機械的にこの女からの贈り物を受け入れる。かくして、女の胃の中のものが、すっかり男の胃の中に移った時、この遊びは終りとなる。
あけがらすゆめのあわゆき
『明烏夢泡雪』ならぬ珍味、夢のあわゆき豆腐のご賞味はいかが。

(その二) 紅いしじき

さて、これは文字通りの差し向かい。——だが違ったところがたった一つ。鮮かな紅の

しじきの一端が輪になって男の首にかかっており、別の一端はテーブル越しに女が握っている。恰度「おすわり」をした犬の恰好だ。「どうぞ」

そこは芸者、美しい指に銚子を取り上げ、優しく、かつなまめかしく男に差し出す。

無言でそれを受ける男。なみなみと酒の満たされた盃。男は、やおら口の方からお出迎えといったポーズになる。——と、その盃がいままさに唇に触れようとした一瞬、女が、手にしたしじきの一端をヒョイと引っ張る。「うぐっ」

手許の狂った盃は、男の唇を外れて鼻のあたりに衝突。ぶちまけられた酒は鼻孔から呼吸器に入り、男は咳き込み、苦しがる。吸物の椀に唇をつけようとすると、またヒョイと引く。熱い汁がまともに顔を濡らし、かまばこがおでこにぶつかる。刺身を口に運ぶ。またまたヒョイと引く。男は醤油皿の中へ鼻もろとも突っこんで、顔じゅう醤油だらけ。今度は眼にもはいて、わさびが後頭部へジンとしみ、涙がポロポロこぼれる。こんなことを繰り返すうち、男の顔はふた目と見られないものになる。

しばらくして、男がトイレへ立つ。といっ

ても、「立つ」と書いたのは文章のあやで、実際には両手両足で廊下を這わせられる。女はしじきを引き絞って、後ろからついてゆくが、男が勝手な動作をしようすると、しじきがたちまちその首に咬みつく。四つん這いのまま便所へ到着。男は、片脚を上げてさせられる。たまっていたとみえて、えらく永く続く。支えた一本足が震える。あっと思った時には的が外れて、床に湯気の立つ洪水が出現。女は男の尻を蹴りつけ、罵声を浴びせつつ、口に雑巾を咥えさせて、床の始末を命ずる。男の顔が異臭にまみれる。

ふたたび座敷へ戻ると、今度は芸を仕込まれる。食べ残しの皿小鉢を畳の上に置いて、「おあずけ」や「チンチン」をする。上へはうり上げられた玉子焼を口で受け損うと、女のよくしなう平手が派手な音を立てて男の頬に炸烈する。

顔全体に食べ物の断片がへばりつき、眼も満足に開けられない有様で必死に追い廻すうちに、男は全くグロッキーになる。だが、完全に動けなくなるまで、この調教は続く。これで玉代ぎよぐを払って（もちろん御祝儀もぐっと張り込む）勇んで帰って来られるようになれば、芸者遊びも奥伝免許。

(その三) ひとはだ

これは、女の方がトイレへ行く。

「パパ……おしっこ」

女は、幼女のように甘える。

「ひとりじゃ、いや。抱っこして……」

男は、女を両腕に抱きかかえて便所へ。

「パパ……させて……」

男は、女の裾をまくり上げ、子供にさせるようにする。

「ねえ、シロツって言って……」

女は、だだをこねる。

男は、酔ってグニャグニャになった女の重量に喘ぎながら、一生懸命声をかけてやる。

が、どうしたことが、なかなか出ない。

「だめだわ。もういい」

男は、用意の紙を手にかがめる。

その時、突如として、生あたたかいのがほとばしり出る。したたか飲んだビールの匂いを伴って……。ちょうど身をかがめた男の手

から、顔にまではね返る。この美しい女の華奢なからだのどこに？ と思われるほど、それは永く永く続く。瀑布を浴びた男の手はもちろん、全身が飛沫で刺戟臭に覆われる頃、

女は閉ざしていた眼を開き

「ああ、せいせいした」

あとはケロツとした表情で、男の存在など全く忘れてしまったように、ひとりすいすいと座敷へ帰ってしまう。

男は、濡れそぼ湯気を立てている自分の手を凝視めて立っている。眼を転ずると、磨き込んだ便器の中に、瀑布の名残りが、まだ女の体温を残して馥郁と匂っている。不思議な感動——というより戦慄に似たものが、ゾクゾクと男の背筋を這いのぼり、彼はぶるっと身を震わせる。

「この酒が飲みたいばかりに、おれは芸者遊びがやめられないのさ」

男は、静かに両膝を折り跪く。

「灘の酒だって、こんなに素晴らしい香りはない。それに……」

男の顔は便器の中へ……。

「これが本当の『ひとはだ』というものだ」

新発足 懸賞入告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、体験▽原稿募集

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。



レンズの中の女——第一話『エミ』の巻

十 人 十 色

泉 野

薫

—

「本当はまわしたくないんだけどさ、本人がこっちの仕事のほかに金がほしいというんでな。お前好みのカワイコちゃんなんで、お前にまわしたらどんなことになるかと、今から気になるのさ。フラチなことなんかしたら、おれが許さんから、ようく頭ん中へたたき込んでけよ。ああ、それから写真ができたら、おれに一枚あて、よこすことを忘れんなよ。それだけのお礼じゃ安いもんだぞ……」

こんな電話で、イラストレーターをしてい

る友人のKからまわされて来た（まわされて来た、などと言うと、変な誤解をされるおそれがあるから、ここはお固く「紹介されて来た」と言っておいた方がいいかもしれない）その女は、名前をエミといって、Kの言葉にいつわりない、私ごのみの美少女だった。

「K先生の御紹介で来ました。エミといいます。どうぞよろしく」

戸を開けた私の眼の前で、そのエミはちょっと頭を左にかしげるようにして、人怖じもせずニッと笑った。

明かるい空色の超ミニスタイルと、小麦色

に日焼けした肌、しなやかなロングヘアがその挙措にマッチしていて、私は一瞬、チョコレートの妖精、（そんなものがあるとしたが）に飛び込まれたような気持ちになった。

居間兼応接間のソファに腰を降ろしたエミは、その壁や欄間に所せましと掛けてある私の作品を、興味ぶかげにゆっくりとながめまわした。

どれもヌードばかりである。公表しないもので、修正さえどこしてないばかりか、これとさらにその美しさを強調した撮り方をしてあるのさえある。

しかし、エミは興味ぶかげに眼を輝かせているだけで、別に動揺した様子もない。

「いくらいただけるのでしょうか」

だしぬけに訊きながら、眼はまだ写真をチラチラ見ている。

「お金がほしいんだって？ Kがそう言っていたけど」

「ええ、とっても。でも、ハダカにはあまり自信ないの」

あくまで無邪気である。

「そのことは、あとでみせてもらってから、ぼくがきめる。その前に、お金がほしいんなら、どう、一寸変ったのを撮って見ない？」

これなら〇〇円出せるんだがね」

私は普通のモデル料の倍額を言った。エミは信じられないというように、瞳を大きく見張って、私の顔を見た。

「どんなんですか」

私は、やおら立って壁際の机の抽出しからキャビネ版の写真を数枚取り出し、それをテーブルの上に置いた。

あッ、とエミは、一瞬息をのんだようだった。それから、おそろおそろ手を伸ばして写真を手にとると、じっとそこにうつっているものに眼をこらした。一枚一枚、穴のあくほ

ど見つめている。

私はそんな時いつもするように、エミをひとり残して、隣のキッチンに立った。紅茶をいれる時間の間、モデル志願者をひとりにして決心を固めさせるのである。

写真というのは、言うまでもなく緊縛写真である。それもかなり際どいのもまじっている。しかし、縛られた女の美しさを最もうまくとらえたと自負しているものだけに限って見せることにしているのだ。女性一般の持つナルシズムにうったえようという魂胆なのである。

紅茶をふたつ盆にのせて運んで行くと、エミはまだ熱心に見入っていた。

（脈がありそうだ）

向かい側に腰を降ろしても、別に面映ゆげなふりもしない。たいていの女は照れ笑いをするか、羞かしげに眼を伏せるかするものなのだが。

「どう？」

紅茶をすすりながら声をかけた。

「この女のかた、どんなかた？ プロ？」

「どうして？」

妙な質問に、私はちょっと途惑ってしまった。

「この表情、ちょっとモデルを商売にしている人らしくないですね」

「はほう……」

私は、その眼力の鋭さに、あらためてエミを見直した。エミの言う通り、そこに写っている女は、かつて私の愛した女だったのだ。そして、それらの写真には、かずかずの思い出がこめられている。

「ぼくの恋人だった女だよ」

「お別れになったの？ いえ、こんなことお聞きしちゃいけないわね。あの……あたしみたいなものでも、こんなに綺麗に撮れるかしら」

「そりゃあ……」

「先生の腕をどうってんじゃないんです。あたしもくぐられたら、こんなに美しくなれるかどうか心配なんです」

「多分ね」

「それとも、先生にふかあく愛されるんじゃないですか、ダメかしら」

そんなことを、まだしみじみと写真を見つめたまま言うのである。

かなり女をあつかって来て、説得には自信のある筈の私も、これには、何と答えていいかわからなかった。

「まあ、それは後のことにして、ビジネスからすましてゆこう。どう、やってくれる？」
「ええ、やりたい」

私は内心ホッとして、紅茶を口に運びかけた時、エミはとてつもない事を、何の苦もなく口に出した。

「あたし、先生に愛されたい。愛されて、この人に負けない素敵な写真をとってほしい」
キラキラ眼を輝かせているエミの顔を見つめる私の表情は、おそらく世にもおろかなものであったに違いない。

二

モデルに手を出すな、というのは写真家にとって最初の、そしておそらく最後のいまいめであろう。しかし私が今までそれを固く守り通して来たわけではない。後で話す機会もあると思うが、普通のヌードと違い、緊縛写真となると、問題はさほど単純にはいかないのである。

しかしこれまでのところ、たとえモデルと割ない仲になったとしても、それは相手と納得ずくのこと、トラブルが起ったことは一度もなかった。しかし、このエミのような初対面の時からそんなことを言い出す女はは

じめてである。愛されたい—と言って、まさかプラトニック・ラブのことを言っているわけではあるまい。そうしたら、とんだカマトトだ。

「まあ、そんな話は追い追いにして、からだを見せてもらおうか。こちらへ来給え」

隣のアトリエ——といっても寢室を兼ねている八畳間だが——に案内されて、そこにデインと据えてあるベッドを眼にしたとき、さすがのカマトト嬢もたじろいだようだった。それでも、

「ちょっと手まわしがよすぎるようね」

固くした頬をこちらに向けて笑った。

「折りたたみベッドだよ。気になるんなら片づける」

「いいの。さっきの女の人もベッドの上で縛られていたようだから」

「縛りの写真とベッドはつきものなんだな。ストリップパーとバタフライみたいなものだ」

言っている間にも、エミはひとりでサッサとその衝立の陰に入った。かすかな布ずれの音がしている。

「はじめは、ブラとパンティはつけたままでいこう」

私はベッドの下からしまってあるロープを

ひっぱり出した。ライトとカメラは、いつでも撮れるように準備してある。しかし初回から撮影に取り組むつもりはない。からだをならすことが第一である。

エミが衝立から出て来た。別に下着だけのからだを恥ずかしがる様子もない。

「あ、そこに立って……」

衝立の前に立たせる。近頃の若い子はテレビでショーなどを見なれているので、自然にポーズをとるから面倒がなくていい。

「いいからだをしているね。プロポーションも理想的だ」

エミは満足げに微笑むと、右手をあげて肩の辺に垂れた髪をサツと背の方へ払った。

海水浴の陽灼けの抜けきらない肌は、つい今オリーブ油を塗り込んだようにつややかに明りを吸い、ブラやパンティの端からほの見える陽に灼けなかった白い肌が、妙に心をくすぐった。

「いくつなの？ いやならべつに答えなくてもいいが……」

そんな問いを発したくなるほど、エミのからだはピチピチ引き締まった中にも、豊かな肉づきを肩や腰まわり、太腿のあたりに見せていた。

「十九」

(処女?)

きこうとしたが止めた。たとえ処女でないにしても、それほど経験がありそうにも思えなかった。

「モデルは初めてなの? もちろん、ヌードでという意味だ」

「ええ…」

あまり私が見つめるものだから、こそばゆい気持ちになったのか、エミは身じろぎしはじめた。そのたびに引き締まったからだの、ほうぼうが深い陰を作るのがみごとだった。

「ブラをとって」

「はずかしいな。おっぱいにはあまり自信ないの」

「そうとは見えないよ、さあ」

口で言っただけで、エミはすぐ素直に両腕をくの字に折って背中にまわした。その恰好が後ろ手に縛った時のことを連想させて、私の心が瞬間ときめいた。世なれたような挙措を見せたエミの姿態から、そのとき、はっとするような幼なげな風情がこぼれ落ちたからである。

(平気をよそおっているけれど、大分ムリをしているのかも…)

ブラジャーを肩から抜き取ると乳房を左腕でかくして、右手でそれを床に落とした。それからちよつとうそ寒げに肩をすくめると、左腕を下へさげて、乳房の下あたりに右腕を組むポーズになった。

「ちいさいでしょう」

自分から言って、ポツと頬に血をのぼらせるところが、すごくチャーミングである。

「どうしてどうして、とても可愛らしい。きみのからだ全体によくマッチしてるよ。形もいい」

事実であった。

男の愛撫にみがき抜かれた女のそのような豊かさこそなかったが、固く張って突き出したそれは、これから成熟期に入ろうとする女の、春を想ってときめく胸のシンボルのように見えた。

夏の間じゅう陽の眼を見なかったそこだけが、周囲ときわだって白く、その頂点のつぼみが薄紅色に小さく色づいているのが、ふくらみ全体のあどけなさに、どこか悩ましげな匂いをもし出している。

「うしろを向いてごらん」

私に言われて、エミはすぐわれたようにクルリと背中を見せた。セパレートの水着のあ

とが、乳房から脇の下、そして背中へと続いている。まっすぐな背すじが深いくぼみを見せて、純白のパンティの中に消えている。そこらあたりの張りが素晴らしい。

エミは不安げな瞳を肩越しに投げていた。

「両手を背中にまわしてごらん」

命じておいて、私はそっとロープを取りあげた。幾十人の女のおぶら汗を吸ったか知れない手なれたロープである。

私は予告もなしに、おずおずと両手を背中握りあわせている、その左手首を掴むと、素早くロープを巻きつけた。

「あ、くくるの?」

ハッとあらがいそうになるのを、無言のうち威圧しておいて、私は手早く両手首をくくり合わせた。

「いや…いたいわ…」

肩をよじってエミは抗議する。

「腕くからさ。優しくするから、じっとしてまかしておきなさい」

手首を縛ったロープを胸にまわして、形通り乳房の上下を締め上げ、それだけで縄尻を留めた。

「さあ、できあがったよ」

抱くようにしていた腕を解いて、私は縄尻

を握った。

エミは肩をすくめるようにして、そこにヘタヘタとすわってしまった。

「どうした、痛いのか？」

縄尻をチョッチョと引っ張っていたが、しながらたずねたが、エミはうなだれたまま、体をかたくなに縮こめている。はらりと前に垂れたすなおな髪の間から、ほっそりと幼なげなうなじがあらわになって、いたいたしいほどである。

「立ってくれないかな」

黒髪が激しく左右に揺れた。

「いや……やめます。ほどいて……」

「だって、きみ……」

「いやなの。こんなこと、いやッ」

泣き出しそうな声に、私はあわてた。いましめを解くと、エミはそこに落ちていたブラジャーをつかんで、素早く衝立の陰に逃げ込んでしまった。

「痛かったのかい？ 大分手加減したつもりなんだけどなあ」

「痛くなんかなかったわ……でも……」

「くくるのがいやなら、ただのヌードでもいいから撮りたいな」

「……」

私は裏切られたような気持ちで、イライラとロープをベッドの下へ投げ込んだ。そして体を起こすと、眼の前に全裸になったエミが立っていた。胸と前を両手でかくして、ちょっと照れくさそうな顔をしている。

「ごめんなさい。びっくりしたの。ヌードならいいわ」

そう言うのと、羞恥をかくした手をパッとどけて、顔をおおい、立ちすくんだ。

その動作があまりいじらしかったので私はあやうくその肩を抱きしめようとしたくらいだった。そのいじらしい姿に彼女が心の奥に秘めている幼ない羞恥を、あらわに見る思いがした。くっきりと区切りのついた、統のようには輝く白さは、むしろ痛々しいくらいであった。

その日は、ありきたりのポーズで数枚撮っただけで終わってしまった。

三

それから二三日というものの、私はイライラと仕事も手につかなかった。

「ごめんなさい」

私の顔も正視出来ないといった様子で、口の中に小さく言いながら、小走りに去って行

ったエミのことが、脳裡に焼きついて離れないのである。

最初のような、何事にも平気な態度で終始していたら、私もこれほど心を乱されるようなことはなかったろう。ところが、その後で見せた可憐な素顔のかずかずが、それを中途はんばな所で逃がしただけに、私にとってはこの上もなく貴重なもののように思えてならないのだ。

「どうだったい」

翌日、Kから電話がかかって来た。

「うまくゆかなかった。まるで逃げられたも同然だったよ」

「エッチなまねをするからさ」

「軽く縄をかけただけだよ」

「お前みたいな縛りズレした奴には軽いつもりかもしれないが、ウブな生娘にとっちゃ犯されるも同然じゃねえか」

「そうかもしれん……」

いつもの手で、いきなり縛りにかかったのがいけなかったのかもしれない、と柄にもなくマジメに反省した。たいていの女は「さあ縛りますよ、用意はいいですか」などと言ったら、トタンにおびえるのだ。だからウムを言わせず縄をかけることにしているのだが……

また縛られてしまうと、女というものは、たいてい、おとなしくなってしまうのだが……
こんなことを埒もなく考えていたところだったから、一週間ばかりたって、ヒョッコリエミが訪ねて来た時は、ほとんど信じられないほどであった。

「こないだは、ごめんなさい」

バツの悪そうな顔をして、大きな瞳で上眼づかに私を見た。

「いや、ごめんは、こちらだ。実は、ゆっくり話を聞きたいと思ってたんだ」

私は体を傍へどけて、エミを通しながら言った。

「それは聞かないで……そのかわり、今日は本当に決心つけて来たんだから、わがまま言わないで縛られます」

「おやおや、たいした心境の変化だね」

「ふふふ。だってお金がどうしても要るんですもの」

「お金お金って、そんなにいるんなら、用立ててあげてもいいんだよ」

「ありがとう。でも、ただほど高いものはないって言うじゃない？」

「おいおい、それじゃ、こっちがまるで悪者みたいじゃないか」

「ごめんなさい。ちょっとたとえがまずかったわね。決してそんなつもりで言ったんじゃないの。ただ、あたしの力でお金をかせぎたいんです」

「わかった。さっそくかかろう」

なんだか小娘に翻弄されているようで、しやくになつて来た。いまに見ている、ギューのめにあわせてやるから——と舌なめずりする気持ちで、アトリエに入った。

エミはすぐ服を脱いで衝立から出て来た。

「パンティだけはいいでしょう？」

「ああ、縛ってしまえば、こっちで取ってしまいたい時は、ウムを言わず取っちゃうからね」

「いやッ、エッチ」

胸を抱いたまま、からだをくねらせた。

「なら、自分で脱ぐことだな」

私はかまわずに、ロープを用意した。エミは、そのまま私の動作を眼で追っている。

「いいんだね？」

ちよっと哀しげな眼を私に向けたが、すぐコクリとうなずいた。

「うしろを向いて、縛りやすいように、両手を背中へまわしたまえ」

私は、わざと残酷な言葉を使った。エミは

ためらい勝ちに両腕をうしろにまわしてパンティのゴムの上辺りに両手首を交叉させた。それに、私は手早くロープを巻きつけた。

「ね、きつくしちやいやよ」

エミは不安げな視線を背中に向ける。

「少し痛いくらいが写りがいいんだよ。フガフガじゃ、サマにならない」

手首をくり終えたロープを、グツと上の方に吊り上げて、エミにひと声叫ばせてからその縄を胸にまわした。その動作のふとしたはずみに、手がふくらみに触れると、エミはおおげさに悲鳴をあげた。

乳房の上下にかけまわして、いったん手首の所にとめた縄を、今度はふたつに分けて肩から胸にまわし、そこでひとつにして、先の胸縄にくぐらせてしめあげ、さらに下におろして、ウエストのくびれを締めあげておわりにした。縄尻はまだ十分残っていた。

エミはじつとうなだれて、為すがままになっっている。時折ホッと吐息をつくようにして膝をキュッと引きしめ引きしめする。なにかを必死にこらえているような様子である。

（ふふ、だいぶ感じているな……）

ほくそ笑みながら、私はエミから離れた。とたんに、エミはそこに崩れるようにうずく

まってしまったのである。

おさなげに、肩をいやいやするようにゆすり、高々とくしあげられた両手をしっかりと握りしめて、そこにしゃがんでいるエミに、私は何枚かシャッターを切った。

「顔をあげて、こちらを見て……」

強く言われて反射的にこちらを見上げた。怨むような表情に、私はすばやくフラッシュをひらめかせた。

「いやッ、いじわるッ」

あわてて顔を伏せる。そこをすかさず縄尻を引いて、床の上にかかるがせる。

「あっ、いやよ……」

あられもない姿勢でこちらへ仰向けざまにころがったところを、パチリ。

「いじわる、いじわるウ……」

ごろごろころげまわってレンズからのがれようとするのを、かまわずシャッターを押し続けながら、

「ぼくに愛されたいなんていつてたのは誰だったっけ？」

「しらないッ」

「しらないとは今更言わせないよ。さあ、立つんだ」

あばれるのを抱くようにして、アトリエと

居間の境にある柱の所に引きずってゆく。

木造の安アパートの有難さで、ふたつの部屋をつなぐ廊下のドアを開けっぱなしにする、そこに忽然と節だらけの柱があらわれるのである。このアパートを借りた大半の理由は、実はこの柱にあるのだった。

柱を背に負うように押し立てて、縛りつける。足へは後のことも考えて、わざと縄をかけずにおく。

エミはガックリうなだれて、乱れた髪で顔も見えない。縄で締めあげられた乳房が上向きになって喘いでいる。

「さあ、顔をあげるんだよ」

言われても、首を振って膝頭をこすり合わせている。

私は長尺レリーズをセットして、傍に寄って行った。髪をかき上げてそれを左手にひとまとめに握り、グイとうなだれていた顔を正面に向かせる。

「あ、いやよ、いたいわ……」

叫ぶ所をパチリとやったが、どうも面白くない。やっぱり奥の手を使わないとだめらしいと思いはじめる。

四

私はそっと柱のうしろにまわった。そしてエミが不安げにからだをよじろうとした時をねらって、ゴムに手をかけて、ゆるゆる引き降ろしにかかった。

「いやよッ、それだけは……あ、あ、いやだった……」

身も世もなくからだをゆすって大声をあげるところを、私は手からはなさないレリーズで、たてつづけに撮りまくった。

やがて精根つき果てたように、ガックリとなってしまったエミの足の爪先から、それを抜き取った私は、なぜ彼女がそんなにいやがったのか、その歴然たる証拠をまざまざと見ることができた。

「いやッ……ああ……」

それを意地悪く眼の前に突きつけられて、エミは首すじまで真っ赤に染めて顔をそむけた。ピタリとざした膝頭が、心なしかブルブルふるえている。

「こうならないと、きみの言う素敵な写真が撮れないんだよ。これが愛されたいっていう気持ちのあらわれなんだなあ」

わざと耳元で熱っぽくささやいてやると

「いや、いや、言わないで……はずかしい」
固く眼を閉じあわせて、うわごとのように

つぶやく。眼とは逆に花びらのような唇は開いて、白い歯並みの奥から熱い吐息をついているのである。肌が汗ばんで、しっとりとした輝きを見せはじめている。

私は、さっき残しておいた縄尻を取ると、あっと息をのんで、膝に力をこめるスキも与えずに、それを前にまわし、ウエストをくびっている縄に止めた。

「痛いわ……ゆるめて……ね、いやよ、こんな」

必死に抗議する声も次第にかすれて、噛みしめた唇が、わなわな、おののいている。

私はそんなエミの傍を離れて、カメラの側で一服つけた。じわじわとにじみ出てくる被虐の美を待とうというのである。

エミはもう顔をそむけてばかり居られない落着かない気持ちらしく、しきりに白いのどを見せて、のけぞったり、頭を激しく振ってみたり、切れ切れの呻きとも悲鳴ともつかぬ声をあげてみたりしている。そして、ねっとりとうるんだ眼を、振り乱した髪の間から私の方に向けて、何かしきりに訴えたげである。

下肢にキュッと力が入ったかと思うと、ハッとあわててゆるめ、それでも耐えられないように、愛らしい膝小僧をこすり合わせるよ

うに動かす。

「ね、ね、見てばかりいないで……」

時に喘ぐように吐く言葉は、ソツとするほど艶っぽく変わって来ている。そして言ってしまうてからハッと我に返ったように唇を噛んで、顔をのけぞらせる。細く尾を引く呻き声が、やがてすすり泣きに変わった。

私はともすればうわずってしまいそうになる気持を無理に引き締めて、レンズの焦点をあわせてはシャッターを切った。

それから、縄掛けはそのままにして、柱かだけは解いた。すぐ腕の中へ崩れ込み、熱し切った唇を半ば開いて突き出してくるのをわざとさけながら、ベッドへ抱くように連れて行った。

「もうすこしだよ、痛くても我慢して。傑作が撮れるよ」

しかし、ベッドの上に投げ出されたエミはハッと我に返ったようだった。膝を合わせて縮こまり、ともすれば弱々しくなり勝ちな瞳を強いて張って、

「ゆるして。……だめよ、ね、おねがい……」

「感違いしちゃ、いやだぜ。写真を撮るだけじゃないか」

「だって……」

「それじゃまるで、そっちからさそっているみたいじゃないか」

「言わないで。……いや、いや……」

「いやなら止すよ。どうなんだい。撮るの？ 撮らないの？」

「今日はダメ。ね、起こして。こんなにしたらダメになっちゃう……」

何かを必死の思いで耐えているようなエミの言葉に、私はハッとなった。

「じゃ、撮らないんだね？」

エミは枕に頬をうずめるようにしたまま、小さくうなずいた。

こうなっては私も写真家の端くれとして、欲望のおもむくままに——という甘い考えにつかり込んでしまうわけにはゆかない。またしても裏切られた、という苦い心を噛みしめながら、縄を解きはじめた。

エミのほうは、ああ言っておきながら、いましめがひとつひとつゆるんでゆくたびに、どこかに名残りおしげな吐息を、からだ全体から、はき続けていたのである。

汗を拭き、服をつけ、顔を洗って髪をとかしつけたエミは、アクが抜け落ちたような顔のまぶたにだけ、わずかに興奮の名残りをとどめて、ドアの所に立った。

「ごめんなさい。今度ね、今度こそきつと」
早口でささやくように言うと、まぶしげに
睫毛を伏せて、階段を駆け降りて行ってしま
った。

五

エミは約束を守った。そして「きつと」と
云い残した言葉の真の意味を、私に知らしめ
てくれたのである。幼なさを感じさせる無邪
気さと、快楽を知りつくした女を思わせるあ
ふれるような情感をこもこも見せられて、私
はほとんど為すすべもなく、だらしくも溺
れ込んでしまった。かんじんの写真のことは
どこかに、けしとんでいた。

荒れ狂う大波にもまれもまれて、浜辺に打
ちあげられたようになってる私の耳に、エ
ミは何を思ったのか、小さくささやいた。
「あたしの初体験は、高校二年のときなの。
家庭教師に来ていた××大学の学生にあげち
やった……」

「……」
「でも、こんなになっただのはじめて」

中年男を喜ばす言い草か——とも考えたが
先刻の瞬間瞬間の印象をふり返って見ると、
あながち嘘でないようにも思えてくる。

しかし、エミはもっとビックリするような
ことを、まるであたり前かなんかのよう
に、しゃべり始めたのである。

「彼、三派系の闘士なの。こないだまで大学
にたてこもって、機動隊と渡りあっていたの
よ。もう、降服してブタバコに入れられてい
るけど……」

私はにわかに信じられないような気持で、
エミの顔をあらためて見やった。エミは私の
視線を見上げて、ニッと笑った。そのくった
くなげな表情には嘘をついている様子はみじ
んもなかった。

「あたしがあんなにお金があつたのは、
籠城してアルバイトもできない彼に、差し入
れるためだったの」

「ええっ？ まさか……」

「ほんとよ。パンだとかバターだとか山ほど
買ってね。それにエロ本なんかも欲しいって
言うのよ。ムリないわね。そんなものを窓か
ら降ろすバケツに入れてやるの。スリルだっ
たわ」

「……」

「あたし、そんな人たちのためにヌードにな
るくらいなんでもないと思ってたのよ。ね、
愛する人のために身を売って話、よくある

じゃない。でもね、いざ開城って段になって
みると、ちょっとガッカリした。濡れしよぼ
たれて、みじめで、両手を頭の上に組んだり
してさ。それに、あの学生の中に女の子もま
じっていたっていうじゃない。なんだかバカ
バカしくなっちゃったの」

「へえー、そんなもんかねエ」

「そうよ。どこかの大学じゃ、女子学生を素
っ裸にして、リンチなんかしたっていうじゃ
ない。あたしが、こんな羞ずかしい思いをし
てまで差し入れてあげてるのに……でもな
いかな？ フフフ」

私は開いた口がふさがらない。

「この前の時『今度きつとね』って約束した
でしょ？ あれ嘘だったのよ。でも、本当に
なっちゃった。彼があんまりみっともないか
らよ。あそこで、ソーレツな戦死でもしたら
よかったのに」

エミとの関係はひと月ばかり続いた。そし
てフツと足が遠のいたきり、今日に及んでい
る。

それらの日々に写した写真は、勿論一枚残
らずエミにも渡したのだが、それをタンネン
に眺めながら、エミは満足げな吐息について

S.C.R. (性問題相談室) 開設

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の方々の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差し支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

いたものであった。

「彼がブタバコから出て来たら、お名残りにこれみんな見せてやるわ」

と言ったり、また、

「今度、男の子が口説きにかかったら、これをおがませてやるのよ。今の男の子ったらチヨロイから、おじけづいて逃げて行くわよ」と言っただけに笑ったりした。

「さあ、逃げるかな？」

わざと云ってやると、ケロリとして答えたものだった。

「なら素敵なんだけどな……」

私の知った数多くの女の中でも、エミのようなのは空前、おそらく絶後であろう。それだけに、エミが私の掌中から飛び去ったのがおしまれてならないのである。

しかし、いつかまたひょっくり訪ねて来て「ねエ、この子に縛り方、教えてやって。とてもニブいのよ」

などと言って、ボーイフレンドかなにかを紹介するかもしれない。

くやしくはあるが、それでもいいから、もう一度会いたい気が動いてならない女なのである。

コルセットブーツの萌奈^{モナ}

芳野眉美



オミナ川春カット

A

ストレッチレザーのタイト式のコルセットブーツをはいた萌奈の長い髪が風にゆれていく。あくまでも長く、しなやかな脚が快活にアスファルトを踏みしめる。

交差点で信号待ちしていたロータス・ヨーロッパの若い男が、コルセットブーツの萌奈に口笛を吹き、萌奈がウインクすると、驚いたように萌奈の顔をまじまじと見た。信号が青になったのに発車するのを忘れていた。

萌奈の上唇は光のあるパールタッチの口紅で、下唇はオレンジ色の上に更に青い口紅を塗ったドラキュラススタイル。ロータス・ヨーロッパの男は、白昼お化けに思ったのに違いない。

人を驚かせるのが、萌奈のいたずら。

交差点を渡ってから、萌奈は一人の中年の男があとをつけているのに気がついた。ショーウィンドウに伏眼がちな男の顔がうつっている。ちらちらと萌奈を見る。

萌奈は噛んでいたガムを歩道に吐き、そしてらぬ顔で男のかたをうかがった。男はわざとハンカチを落とし、ハンカチをひろうふりをしてガムをひろった。そのガムを、男は噛

んだ。泥がついているのに。

萌奈ののびのびした四肢がネオンの海に泳いでゆく。ストレッチレザールのコルセットブーツは、まるでGパンのようだ。ブーツの下に萌奈は何も着ていない。小さなまろやかな尻がカッコいい。

ふっくらとふくらんだパフスリーブのブラウスもゴージャズなママが、萌奈の元気な顔を見て微笑んだ。そでに細かいギャザーを寄せて、あまみのあるふくらみをもたせているのはママの好みなのかもしれない。ママは自分でデザインする。

ショーツスカートでなく、ミディなのは、懐古調ムードにひたっているらしいのだが、裾の華やかでクラシック調の刺繍が、メルヘン的な複雑なまとまりをみせていた。

このあまりにも対照的な二人は、店の前なのに、抱き合って接吻し、歩いている男どもを呆然とさせるのである。

ネオンに、ヌードスタジオとある。萌奈はヌードモデルだ。

ママと萌奈が接吻しているとき、もじもじしている中年の男がいた。萌奈の捨てたガムをひろって口に入れた男である

「お客様なの、ママ」

萌奈は男の腕をとり、二時間分二千円を払わせた。二時間といっても、三十分。千円で二十分が相場だが、それ以上は勝手に短縮してしまう。そうでないと客の回転が悪いからだ。この二千円は、ママと萌奈で半々にわけが、チップは全額、萌奈の収入になる。

椅子が二つ置いてあるだけの個室。黒い幕だけがフォトスタジオらしくみせているが、カメラがあるわけでもなく、申し訳に何も画いてない画帳とちびた鉛筆が置いてあるだけである。

椅子に客を腰掛けさせて、萌奈は客と対座した。タイト型のコルセットブーツで足を組み、レザールのジャンパーを脱いだ。半カップのアップブラジャーが、セクシーな乳房をはちきれそうに盛り上げる。

そのブラジャーもとって両手でかくした。そのまま男を見つめる。男の眼は、そわそわして落着きがない。やや中年肥りの程度で、そう醜くないのが、萌奈の自尊心を傷つけない。ダイヤの指輪をしているのがちょっとキザだが、財布はふくらんでいるとみた。

「もっと見たい？」

萌奈は男にいった。男がうなずいた。萌奈は男の前に手をひろげた。千円札が一枚男の

財布からひきだされる。萌奈は首を振った。もう一枚。

長い髪が萌奈の乳房をかくし、立ち上った萌奈はGパンをさげるように、コルセットブーツを少し上げた。

さげたまま椅子にすわり、足を組んで男の顔をまじまじと見た。萌奈は囁んでいるガムを風船のようにふくらませては破いていたのである。男の顔に狼狽の色が走った。

萌奈はガムを床に吐き、コルセットブーツで踏みにじってから、ブーツの底についたガムを男の口のあたりに突き出した。

「たべてもいいわよ」

「――」

「さっきは、たべたじゃない」

「えっ」

「見ていたのよ。どんなタイプの男か、試験をしたわけ」

「そうだったのか」

「罠にはまったといたいのでしょう」

「つけていたのを知っていたとは、うかつだったな」

「気が楽になったでしょう」

男は苦笑した。気が楽になった……か。

「四つ違いになって」

と萌奈は男に命令した。

「ガムをおたべ」

男の唇がブーツの底をまさぐり、ガムをようやく底からはぎとると、

「綺麗にお舐め」

萌奈はブーツの底を男の舌で清めさせた。

「時間よ」

というママの声がし、早いなと男の不平そうな、つぶやきがもれた。

四つ這いになった男の背中に、ストレッチレザーの黒光りするブーツをのせ、男の背中を、かかとで、こつこつ打ちながら、

「どうする？」

と萌奈は男にきいた。

「お馬遊びでもする？」

「しよう」

と男はいった。このまま帰る気には、どうしてもなれなかったのに違いない。

個室のドアの中央は、その筋のお達しで四角いガラス窓になっているから、廊下を通る人は覗けるわけであった。が、これにも死角はある。一番奥の部屋を使ったり、離れた個室を使えば、覗かれる心配はない。

また二時間、といっても三十分、いや、今度は四十分ぐらいは時間をくれるだろう。萌

奈がママに金をあずけてきて、プレイは再開された。

萌奈のチップが一万円に、はねあがった。

背広を脱ぎ、ワイシャツ姿になった男の背中にまたがり、つややかな伸縮性にとんだタイト式ブーツで男のわきを締めつけながら、萌奈は、どうして男はお馬遊びが好きなんだろうと、おかしく思うのだ。

せまい個室を、B 95 W 58 H 91の萌奈をのせた男は、半カップのブラジャーの轡をされながら、よたよたと這いまわった。

「女性上位時代」では裸になったカトリックスパークが、トランティニヤンに馬のりになり、快感をおぼえて、抱き合う前に馬のりを要求するというお話である。

「元禄女系図」の第二話でも、加虐と被虐のどうしようもない悦楽に酔い痴れる、越後屋の娘おちせ（葵三津子）が、手代長吉（石浜朗）を四つ這いにさせて馬乗りに跨り、鞭をふるうシーンがある。

もっとも、馬乗りシーンで有名なのは谷崎の「痴人の愛」のナオミで、ナオミズムという新語が、生まれたほどであったが、こうも一般化するとは思っていなかっただろう。

ママがレモンティを運んで来て、まあまあ

と言葉にならない声を発して、人間馬を見下ろした。

「ママもおのりよ」

ママも、こんな奇妙な客が多くなったらしく、そう驚いた風情でもなく、

「面白そうね」

と優雅なミディのスカートをからげて、男の尻のあたりをまたぐのかと思ったのが、男の頭から首すじにまたがり、萌奈と向い合っ

て抱きあったのである。ストッキングのサスペンダーが丸見えになり、意味ありげなカギのジュエリーが飾られているのが妙に悩ましかった。

「歩け、古馬」

ママは楽しそうに男の頭をヒップで圧しつぶし、薄い透明なビキニパンティでは、男のうなじがちくちくして痛い、のどをころころさせて笑うのである。

あまりのさわぎに、ヌードスタジオの女の子たちが集り、Hねえ、と男馬を軽蔑した眼で見下ろすのである。

ママが首筋のあたりにヒップをのせたので前のめりになり、男は這うこともできず、荒い息を吐いた。

萌奈がレモンティをとり、男馬の背中でマ

マと乾杯したあと、コルセットブーツの黒光りする靴の先で男のあごを撫で、ロングブーツにレモンティを滴らした。

「このレモンティは、ママのサービスなんだよ。有難く頂戴しなさい」

男の長い舌がブーツをつたわるレモンティを舐め、ヌードスタジオの女の子たちは、顔を見合わせて笑い転げた。

「こぼすんじゃない、馬鹿」

ママが受皿で男の頭をなぐった。

二人の重みにたえかねて、男が床にのびたとき、男の頭はママのクラシック調の刺繍で飾られたミディのスカートにすっぽり包まれて見えなかった。

ママは男の頭をヒップで押し潰したまま、萌奈を激しくのけぞらせた。

床の泥を舐めさせられて、男は苦しそうに呻めき、手の甲を女の子にブーツで踏まれたりした。

ママと萌奈がレスビアンらしいことは、跨上の接吻といい、こどもも見せつけられては疑う余地はない。レスビアンでも男の要求をきいてくれるものなのだろうか、男が不安を感じたとしても当然であろう。

ヌードモデルで積極的に露出するような女

の子はSEXに対してもかなり変わっていて攻撃的なものが多いように見受けられる。

店に客があったらしく、ママも女の子たちも散って、また二人だけになった。が、ママがすぐ顔をだして、萌奈に向かって、常連の客が来たことを告げた。

「おすわり」萌奈は、男を床に正座させると「そのまま二十分ばかり待っておいで」といい捨てて、でていった。

B

男のワイシャツもズボンも泥だらけで、スタジオをでるときどうするつもりなのだろうとママがきくと、買いますよ、と笑いながら男は答えた。ズボンはともかく、ワイシャツは新しいのを買ったほうが、よさそうであった。かなりM的要素のある男である。

「萌奈ちゃんがくるまで、ママがお相手しましょうか」

椅子に坐って脚を組んだママの悩ましい眸が笑った。

「よかったら、ママのパンティをあげてもいいのよ」

「かまわないのですか」

男の顔が喜色満面になり、男は半分立ち上

ってママをおがむ仕草をした。

「そうしてくれると有難い」

「そのかわり、高いわよ」

ママは指を二本だした。

「こういう遊びなら、高いなんていってられない」

中年の男は背広の上着の内ポケットをさがし、財布から手の切れるような一万円札を二枚出した。

「萌奈には内緒」

ママのほうが上手のようであった。もしかしたら、萌奈は二十分で帰って来ないのかもしれない。

「ママの寝室にいらして」

奥の階段から二階に案内し、黒いドアを押した。そう広くない部屋なのだが、フロアはぶ厚い絨毯が敷き詰められ、天井にはシャンデリヤがきらめいている。

レースの天蓋で飾られたベッドも、サイドテーブルも椅子もラベンダーで、ママの服装のような華やかな復古調で色どられていた。

「ここへは、大切なお客様しか御案内しないのですけど」

ママはベッドに腰掛けて、呆然として突っ立っている男にいった。

「わたしを信用してくれたのですか」

「名刺をいただきましたから」

「えっ」

「萌奈と二人でお馬に乗ったとき、背広のポケットから一枚。いけなかったかしら」

「そんなことはないが……」

「そうでなければ、ここには御案内しませんことよ」

「それならば仕方がない」

男は観念したらしい。プライベートをあまり知られたくなかったら、名刺は持っていないほうがよさそうである。が、あまり秘密にしても、遊べるものが遊べないこともある。いたし、かゆしであろう。

「お脱ぎになって」

とママは男にいった。

「ここには窓はありませんわ。裸になっても誰も覗きません」

ママのしなやかな指が、男のネクタイをほどいた。

全裸にした男に、ママはレザーのサポーターをつけさせたが、そのサポーターは、かなりふくらみが大きく、筒状に作ってある妙なものであった。

更に、そのサポーターは金の鎖が腹部と背

中のあたりに二本つけられており、首環で二つの鎖がつながっていた。ママは男の首に金色の首環をはめた。

鎖の長さが短いらしく、立っていると、サポーターが締めつけられるらしい。男はへなへなと分厚い絨毯に四つ這いになって、背中を丸めた。

サポーターの内部に、何か仕掛けがあるようだったが、小さな皮の輪の連続というだけで、男にはそれがどういう目的のためか、よくわからない。

犬の首環をはめられてから思いもかけぬ激痛と陶酔を、同時に男は感じたのであった。

その責めから解放されることは簡単にできるが、ママの蠱惑的な微笑で見下ろされると、男の激痛からの逃避は容易には出来ないうであった。

「いかが、馬から犬になった御感想は」

ナチュラリストッキングがママのほっそりした脚を包み、赤いハイヒールの先が男のあごを突き上げた。

「萌奈のブーツの底を舐めさせられたのでしよう。じゃ、ママのヒールの底も舐められるわね」

赤いハイヒールの底が、遠慮なく男の顔を

ひしゃげた。

「どう、おいしい？」

男が首をもたげると、ママはベッドに腰掛けたまま足を引っ込めた。男の首がのびて胸を走る金の鎖が引っ張られ、レザーサポーターが締めつけられる。

「痛い？」

ヒールの底を男の顔におしついたり、ゆっくりと男の舌で舐めさせたり、つとはなしてみたり、ママは四つ這いの男をいようにかかった。

そんな内でも、新しい客があると寝室のサイドテーブルに置いてある青や赤の小さな電球が点滅し、何号室に入ったのかわかるしかけになっていた。いちいちママを呼ぶ必要はなく、どの女の子に客がついたかわかるようになっていた。

小さな眼と小さな鼻の穴があいているだけの全頭式皮マスクを男にかぶせると、ママはベッドに横になったまま、寝室の色と同じラベンダーの華麗なビキニパンツを脱いだ。

全頭式皮マスクの口のあたりはファスナーになっており、ママは透明な小さなビキニパンツを丸めると、男の口に詰め込んでファスナーを閉め、カギさえかけてしまったので

ある。

「いかが、わたくしの匂い」

ママの白いしなやかな肩が妖しく動いておかしさを表わした。

「キスをさせてあげてもいいのだけど、それでは舌もだせないわね」

男はママが脱いだばかりの馥郁たる香りに悩まされても、体液をあふれさすわけにもいかず、呻めき声をあげながら、ベッドに近寄り、ママの開いた美しい脚にレザーマスクをすりよせるのである。

男がベッドに両手をかけたとき、ママの手が翻って、男の両手は冷たい手錠で固定された。男は赤いハイヒールであごを蹴られ、乱暴に絨毯にひっくり返った。

男の足に、砲丸のついた足枷がはめられ、男は完全に自由を奪われてあえいだ。

そのとき、ドアが勢よく開けられ、上半身裸のコルセットブーツだけの萌奈が入ってきた。

「ママったら、また鴨を連れ込んだのね」

「お客様はお帰りになったの」

「皮鞭を買ってきて、これで打ってくれというから、願い通りなぐってやったわ」

「服の上から」

「あら、ワイシャツをまくってよ」

「背中を打ったのね」

「ブーツを舐めさせながら打つものだから、これでもテクニクがいるのよ」

「この犬も鞭で打ってやったら」

ママはステンレスの手錠と足枷をはめられている男の頭を撫でながら萌奈にいった。

「ごちそうは、腹一杯たべさせないほうがいいわ」

「それもそうね」

「新しいごちそうがほしくて、すぐ尾を振りながら来るから」

「そうしましょうか」

萌奈は全頭式皮マスクの口のファスナーのカギをあけ、男の口からぐちゃぐちゃに嘔まれ、男の唾液で濡れたママのパンティを引き出した。

「あらあら、もうごちそうをたべさせちゃったの」

「それだけよ」

とママは意味深な微笑を浮かべた。

「この犬にキスも許してはいないわ」

「萌奈がキスしてあげる」

「あっ」

抱き合ったままママと萌奈はベッドに倒れ

込んだ。

「だめよ、萌奈」

パフスリーブのブラウスがとられ、ミディなスカートの裾がはぎとられ、花模様も美しいブラジャーも飛んで、ママは黒い細いガーターとナチュラルストッキング、赤いハイヒールだけにされてしまった。

くびれたウエストにストレッチレザースーツだけの萌奈の両手がかかり、ギリギリと締めつける。

「だめだったら、萌奈」

萌奈の舌がママの制止もきかずに肌をすべり始める。

全頭式皮マスクの小さな二つの眼から、中年男の眼が異様に光り、開けたままのファスナーの口から、唾液が垂れて糸を引いた。男が動かなかったのは、足枷の二つの砲丸が、意外に重たかったからかもしれない。

ママの寝室で、客が四つ這いになる位置がほぼ決まっていた、砲丸のついた足枷はいつでも所定の位置に置いてあるようであった。客の粗暴な行為をとめるためと、責め道具をかねているわけであろう。

やがて、赤いハイヒールが黒いコルセットブーツにからみ、女性二人の戯れは、犬の見

ている前で大胆に展開されるのであった。

「やめて、萌奈」

萌奈は無言だったが、ママの消えいるような悶えは、長く尾を引いて寝室に漂った。

萌奈がむっくりと起き上った。そして、ふと床の犬を見て、

「お前にやるよ」

と、ファスナーの口から、手の中に丸めた紙を男の口に押し込んだ。

「たべておしまい。ママのごちそうだよ」

失神したママを抱きあげ、萌奈は隣室に消えた。やがて湯の流れる音がし、萌奈はママの汗を流してあげているらしかった。

全頭式皮マスクのあごが動き、男はガムを噛むように、今与えられたものをたべているように見受けられた。

「すばらしいわ、萌奈」

とママの声がし、ママは失神からさめたようであった。

「あの男に、見せすぎてしまったようね」

「大丈夫よ、ママ」

甘ったるい萌奈の声と、湯を浴びる音が重なった。

「あの男の財布には、まだ十万がとこ、はいっているわよ。特別会員にしてしまえば、い

いじゃない」

「いやだといったら」

「そんなこと絶対いわせないわ」

「強気ね」

「男のほしいものを萌奈もママも、まだあたえていないじゃないの」

浴室のドアが開き、全裸の萌奈が男の前に立った。長い黒髪が、かろうじて萌奈の肌をかくしている。

「聞こえただろう、話が」

男は口をもぐもぐさせて、うなずいた。

「いつまでそんなものをたべているのだい。早く飲み込んでおしまい」

全頭式皮マスクの上から、いつ手にしたのか皮鞭が、うなりを生じて打ちおろされた。がしっという音がして、男は頭をかかえた。

「お前は、ママや萌奈のものが飲みたいのだろう」

「――」

「ここに来るM男はみんなそうだから、安心していいよ」

男は頭を手錠をはめた両手でかかえながらうなずいた。

「それには特別会員になってもらわないと、やらないことにしているんだ」

萌奈の言葉は、かなり乱暴になった。

「いやならいやでもいいんだよ。でも、さっきの、あたい達が見せてやった見学科は、それ相当なお代をいただくけどね」

「――」

「どうする」

男は不自由な両手でファスナーをあけ、
「特別会員にして下さい」

と、あえぎあえぎいった。あわてて紙を飲み込んだらしかった。

「財布の中味を見られたんじゃ、仕方ありません」

「それは皮肉かい」

萌奈の皮鞭が空を切り、男はしたたか裸の背中を打たれて、のたうった。

「いくらM男だといっているでも、鞭で打たれたこともないのだろう。この空想家め」

「お許し下さい、女王様」

「やっとM男らしい言葉がでたね」

「お二人の奴隷にして下さい」

「そのつもりになったのなら許してやるよ。入会金は十万。しかし、遊ぶ金はまた別だから、いいね」

「はい、承知しました」

「おいで」

萌奈は、男の足枷についた砲丸だけをはずし、男にはめられた首環をにぎって浴室に引っ張っていった。

全頭式皮マスクをとり、男の首だけを浴室のタイルの上にだして、男を寝かせた。

「ママ、入会したから、飲ませてあげてよ」「いいわよ」

浴槽からあがったママは、濡れた身体を拭

こうともせずに立った。

湯の雫が、ママの白桃のようなすべすべしたヒップからしたたり、男の顔に落ちてはじけた。

立ったまま、ママは男を見下ろしていた。

「口を開け」

男が重い口をあけた。

「もっと大きく開けなければ、目標が決まら

ないじゃないか」

男は、せい一杯に大きく口を開けたようであった。顔がひきつり、妙に醜くゆがんだ。

「いいかい」

一条の白線が弧を描いて、したたか、男の顔にはじけ散ったのである。

(終)

告

白

病院での一日

中野 昭子



自分で思い立ったこととは云いながら、N医大の玄関をくぐった時には胸がときめくのを感しました。今日は直腸の診察をもとめる為の来院です。

外科の診察室は廊下の両側にベンチが並べであり、多勢の患者さんが順番を待っています。かなり早く来たつもりですが随分待たされました。途中で、こんなことまで思い立つ

自分の行為が恥ずかしく思え、幾度か帰ってしまったかとも考えましたが、既に診察券を提出していることでもあり、じっと辛抱して待っていました。

そうこうしているうちに、やがて名前を呼ばれ、診察室に入りますと、まだ学生さんのような若い先生の前に導かれました。(インタインなのかしら? 失礼)

先生は真面目な顔で「どうしました?」と尋ねられました。

「ハイ。実は……」

内心はドキドキしましたが、待っている間に何べんも繰返して練習していたお蔭で、案外スラスラと説明が出来ました。

お通じが不順なこと。一週間程前に『いぢく』を用いたところ、血液のようなものが

混ったこと。不安なので、病氣の本を見て調べたところ、若い人でもかかりやすいこと等直腸癌の症状に似ているような気がして心配でたまらず、一度診ていただきたいと思って来たこと等々。

先生はうなずきながら聞いておられました。が、「それでは下着をとってベッドに上って下さい。診察します」と傍らの診察台を指さしました。

覚悟していた、というよりそれを望んで来たこととは云え、ちょっと悲しい気持ちになりややためらいましたが、看護婦さんにうながされて台に上りました。

仰臥、足は空中であぐらをかくように組合せ、自分の手で足首をしっかりおさえさせられます。まことに妙なポーズですが、先生の方からは足がじゃまにならず、診察しやすいのでしよう。

始めは外部、続いて拡張器を用いて内部、最後に触診。かなり入念な診察でした。

終わりますと先生は、良いとも悪いとも、どんな具合なのか何とも云わず、奥の部屋に私を連れて行きました。そこには白髪の、かなり年配の先生がおられました。多分、教授なのでしよう。

若先生はまるで小学生のような態度で大先生に私のことを報告します。要所要所はドイツ語？　なので、私にはよく分りませんでした。大先生は難しい顔でうなずいていましたが、黙って診察台を示します。今度はお腹の診察だけでした。

「大分心配なようだから、器械を入れて調べてあげる」とだけおっしゃると、もう出て行っても良いと云うように、あごで出口の方を示されました。ていねいにおじぎをして、若い先生に肩を抱えられるようにして廊下に出ますと、丁度若い看護婦さんが通りかかりました。すると先生は呼びとめたばかりではなく、

「君！　この人、直腸の検査をするから、浣腸してあげて下さい」

と大きな声でおっしゃるのです。随分意地悪な先生と、本当にうらめしく思いました。

廊下にはまだ沢山の患者さんがいて、一斉に私の方を見るのですもの。中でも、女子高生生の二人連れは、いかにも興味深げに私の顔を見つめています。

さすがの私も恥ずかしくてたまらず、ベンチに小さくなって腰かけると、じっと下を見つめていました。

逃げだしたいような気持と期待にふるえる気持との混った、複雑な感情を噛みしめながら暫くすると、頭の上で名前を呼ばれ、それが全く突然のような気がして、びっくりして顔をあげました。眼の前にイルリガートルを持った看護婦さんが立っています。

「浣腸しますから、こちらへ来て下さい」

と云われ、診察室の隣りの処置室に尊かれましたが、多勢の視線が、私の腰のあたりに注がれているように思えて、足がすくみましました。

この病院の部屋の配置は、浣腸液の準備などをする看護婦さんの詰所が処置室の向かい側になっているため、いろんな道具を持った看護婦さんの出入する姿が、自然に待っている患者さんの目にふれてしまいます。誠に不都合な、と腹を立てても今さら何ともしようがありません。

浣腸は五〇〇CCでしたが、既に何度か経験していることでもあり、比較的冷静に受けることができました。

ただ終ってから廊下に出た際、またまた意地の悪い他の患者さんの目を意識してしまい閉口しました。

トイレからもどったあと、又随分待たされ

ました。正午を過ぎ、待合室に誰もいなくなりかけた頃、やっと名前を呼ばれました。忘れられていたのではないとわかってホッとしました。

「もう一度浣腸します」と云われ、先程の部屋に入りましたが、今度は一廻り太いイルリガートルです。目盛りの数字がないのでハッキリとは分かりませんが、多分一、〇〇〇CCだったと思います。

前回と違ってさすがに時間もかかり、圧迫も感じました。看護婦さんも「がまんせず、直にトイレに行ってもいいですよ」と云って下さいました。やれやれと思い、上半身を起こした時、とんでもないことをしてしまいました。私の体は初めて体験した一、〇〇〇CCの重みに対し不用意だったようで、レザーの上に少しもらしてしまったのです。皮膚に冷いものが伝わるのを感じ、慌てて又横になりましたが、さあ大変なことをしてしまっ

たと思うと急に悲しくなり、手で顔をかくし自然に泣いてしまいました。看護婦さんは私の様子を見て察してくださったらしく、直ちに大きな脱脂綿を当てがってくれました。

「さあ、平気だから、押えたまま早く」

と、せきたてます。スリッパもはかず、夢

中でトイレにかけつけましたが、本当に恥かしい思いでした。幸い廊下には誰もいないので助かりましたが。

次に、最初の診察室に連れて行かれ、若先生の手でいよいよ検査を受けることになりましたが、用意された器械を見て、びっくりして尻込みしてしまいました。私はせいぜい指の太さ位と想像していましたが、三〇〇CCの浣腸器の筒位の太さで、長さは三〇釐以上もあります。こんな太いものが、と思うと恐しくなりましたが、もう間に合いません。

今度はベッドにひざをつき、先生は後に回されました。

上半身は胸のあたりまでベッドに密着させ腰だけを高く後につき出した、あまり楽でないポーズです。

今にも張り裂けるかと思う程の痛みを感じますと、一気に奥まで奇妙な感じが走り込みます。

続いて空気を送り、腸壁を上げられるのですが、グイグイと空気が入れられるたびに下腹が物すごく張り、脂汗が出る程の苦しさでした。かなり長い時間かかりましたが、終わった時は全身、汗でびっしょりでした。

「器械を入れてみた範囲では、異状ありませんね。ついでですからレントゲンもとってあげましょう。暫く休んで下さい」と云われ、

最後

最後のレントゲン室では冷い板の上に腹ばいになります。着衣は胸のあたりまで、まくりあげたままの姿でした。

少々足を開き加減にすると、台が頭の方を下に傾斜され、バリウムが注入されます。ゆっくり注入しながら何枚か写真がとられた様

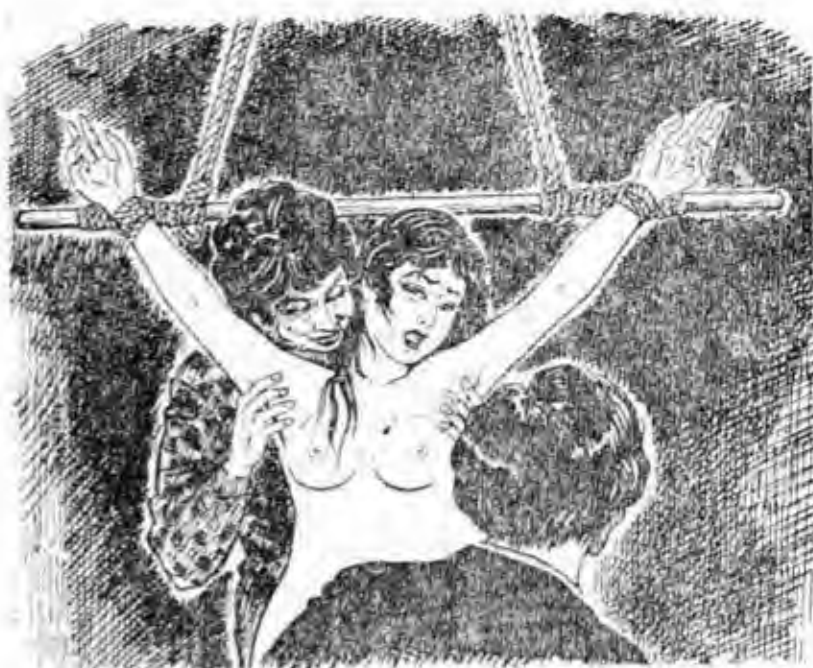
でした。

「来週検査の結果を聞きに来て下さい」と云われ、又「あとで痛くなるといけないから使うように」と、坐薬を渡されてやっと病院を出た時は三時過ぎだったでしょうか。

――〇――

すっかり疲れてしまい、足がふらつく程でした。診察・浣腸・浣腸・検査・レントゲンと随分何回も恥かしいところを見せてしまった後悔と、或種の満足感と半々に胸に抱きながら帰途についたのです。

以上



(四)

ぐいっと身をのり出そうとした先生が激しく咳き込んだ。続いて崩れる様に、上体を折り曲げた俣かがみ込んで了った。

その気配に振り向いたひとみが、裸の身も忘れて思わず馳け寄り、咳きこむ背中を擦り始める。そんな姿を憎々し気に見降ろしながら、勝ち誇った様なマダムの毒舌が追打ちをかけてくる。

懸賞「創作」入選作品

ヌードモデル

(下)

鬼談仏心

「あんただって、少しは役に立ちたいって云うんなら、ひとみの一人位、口説き落として社長のモデルに使わせたらどうなのさ。昔は随分といろんな娘を上手に口説いて、ヌード撮って来たじゃないの。今じゃ、ひとみさえも口説き落とせない位うらぶれちゃったのねえ。恐らくもう、カメラ持たしたってピント合わせも出来ないんじゃないの？ 写真の婦人科じゃあ一流だなんて云われたのは昔の事だねえ」

その言葉に、瞬間きつと斬りつける様な先生の眸が投げ返された。

「よしッ。それなら本当の写真というものを

見せてやろう。いいか、撮影というものは、劣情のマスターベーション並のお遊びとは一緒には、ならないんだ。俺が一回だけ、その社長さんとやらのカメラマンになって、本物のヌード撮影、ってものを見せてやろうじゃないか」

その語気は鋭く、とても病人とは思えない気魄であった。

「ただ、いやらしく女を苛めて、薄汚ない欲望を満足させて居る奴等のカメラと、本当に女の身体の衰しさを写しとるカメラの違いをそこでトツクリと眺めながら較べてみるがいい。おい、ひとみ。お前、俺のカメラの前に

立って呉れよな」

ひとみは黙って、うなずいた。

何か口を開けば、すぐに涙になりそうで、物を言う事も出来なかった。

だが、この先生のカメラの前でなら、どんな云いつけにでも飲んで従って行ける様な気になって居た。

義父の面影が臉の裏に浮かんで来る。

「私は、義母さんを裏切った。それに義姉さんの心も傷つけて来たんだ。きつと義父さんだって、私が居たばかりにあんなに……」

ひとみは、自分を罪深い女だと思った。

その罪の償いにも、これからこの先生に、自分の総べてをさらけ出して、思いきり腕きまわってみたいような自虐的な心理が燃え上ってきた。好きな先生、恋しい先生から、カメラの眼を通して、存分の仕置を受けることが出来る。そう思ったとたん、ひとみは肌がそそけ立つ様な、叫び出したい程の昂ぶりを感じた。レンズの中で、責めさいなまれて、悶えのたうち狂いながら、処刑されてゆく自分の姿に、身体の蕊から疼き出す様な燃え上りを覚えて、我知らず頬を染めて居た。

「社長さん、私はね、これでも芸術家の端くれだなんて自惚れた昔もありましたんでね。」

社長さんの名作品の様に、矢鱈と淫虐な写し方は致しませんかね。それに、急なことで、

気に入った道具立てがありませんから、鎖も縄も使いません。ヌードだけです。ただね、社長さんのお好みは、よろしく承知致して居りますから、精々、御期待に副い奉る様、努力しましょう。ただのヌードが、撮り様によってどんなに迫力が出てくるものか、じっくり味わって下さいよ。……それから、痩せても枯れても、年期の入った私がカメラを持て、モデルが御覧の通り、減多に見当らない様な美女です。料金は高う御座居ますからね。おい、お前。お前は遣り手婆らしく、こちらの社長さんから料金を頂戴して懐へ入れな。そっくり呉れてやるよ。ただし、それでひとみの前借は帳消しにするんだぜ」

馬鹿丁寧に嘲弄する様な先生の言葉は、その俚、現在の先生自身への自己嫌悪と自嘲に聞こえて、それがひとみの心を哀しくゆすぶった。その心の振動が、じいーんとつき上げて来る様な切ない思慕の炎となって、恋する女の胸を熱く沸きらせて居た。

それから二カ月余り過ぎたある日、ひとみの誕生日を後三日に控えた日の夕方、先生、

いや義夫は、ひとみのアパートで静かに息を引き取った。

あの初めて、ひとみがヌードモデルとして先生のカメラの前に立った夜、先生の指導の俚に、いや、ひとみの方から進んで、そのしなやかな美しい曲線をモデル台の上で描いて見せた時、夜明けの遅い冬の朝も既に白みかかって居た。

先生はその朝、マダムの止める手を振り切って、ひとみと一緒にこの部屋へ来た。二人は物言う気力もない程に疲れ切って、赤茶けた畳の上へ倒れ込む様に辿り着いたが、それでもその畳の上で、冬の朝の寒さも忘れて、しっかりと抱きしめ合った。

その時から、ひとみにとって、先生は、先生ではなく「義夫」になった。

義夫はその俚、ひとみの部屋の主となって再びマダムの所へは帰らなかつた。

ひとみもマダムの店を辞めて、銀座のバーのホステスとなった。義夫が、そのバーを紹介したのであったが、行末短い自分の生命への予感がそうさせるのか、義夫は、ひとみを熱愛して、外出の時以外には片時も手許から離すまいとするようであった。

ひとみも、そんな義夫の愛をこよないもの

と受け入れて、二人は身も心も、毎日をお互の情熱の中に燃やし尽して悔いなかった。暗い、不吉な陰に隈取られた純粋な愛の燃焼が一期一会の昇華を美しく彩って居た。だが、義夫の健康は、既に限界に来ていたのだ。仕事はおろか、薬餌に親しむ以外、何の活動もその身体には許されなかった。

ひとみは義夫の病魔とも闘いながら、ホステス以外の副収入を求めなければならなかった。義夫が名付けてくれた「ひとみ」と云う名を、ひとみは義夫の愛情のしるしとして、その尽生活の場にも離さなかったのだった。副収入を求める為に、ひとみは何のためらいもなく、ヌードモデルを選んだ。

店に来る客の中で、ひとみに云い寄る男も多く居たが、ひとみは身体は許さず、ヌードモデルとして撮影のみを許した。

客の中には外人も居た。が、ひとみは拘泥（こだ）わりなく割り切った気持で、これ等の男達の前に裸身を晒した。

「家ではお母さんと二人だけの暮しでしょ。今度のお母さんのお誕生日に、二人で何処か静かな山の温泉へでも行こうって、今から、とても楽しみなのよ」

そんな言葉の一つ二つが、男達に最初決め

られたモデル料を惜し気もなく増額させた。
「あの女、あんなきれいな顔して居て、とてものこと、物凄（ものすご）いそうね」

「そうらしいわね。未だオネンネさんみたいなクセにさ。……今からあんなじゃ、先が思いやられるわ」

「若いコのほうが案外、何でも平気なんじゃないの」

同僚のホステス達の囁きが、当てこすられる様に耳に入る度毎に、ひとみは却って無反応となり、ますます大胆になって行った。

客の中には、わざわざひとみのヌード写真を店へ持って来て、こっそり他の女達に見せる者も居た。

「まあ、ずいぶん大胆な恰好ねえ。これ、こんな手足を大きく拡げて、こんなのを、大の字、って云うのね」

「こんなに眼を開いちゃって平気な顔してるわ。恥（は）ずかしいのかしら」

「でも、可愛い顔してるわ。それに、お乳は余り大きくないけれど、きれいな身体の線してるのねえ」

「あのコきつとアクロバットもやれるのね。ほら、この写真なんか、股の間から顔を出してさ。苦しくないのかしら……」

「これなんか、まるで平均台の倒立開脚ってとこよ。こんなヌード撮らせるなんて、一寸変な趣味あるんじゃないの」

一度だけ、店の中でそんな会話が囁かれるのを聞き、支配人からも注意された事もあったが、その時、ひとみは、その写真を持って来た男から、後で充分な小遣いを取り上げ、その上、男の会社の応接室で、脂汗が滲む程の訥びを入れさせて来た。

——あの最初のモデルとなった夜、義夫がひとみに要求したポーズの数々は、とてもこんな生易しいものではなかった。

背中を壁に押し付けて、手足を大きく拡げ伸し、爪先立つ様にしながら息をぐっと吸い込むと、形の良い胸が更にくびれて、実に均斉の良く取れたヌードが作り出される。

冷たい壁の肌ざわりを背中にざらりと感じながら、ひとみは、犯して来た罪の代償に、磔（はり）にかけられた女の実感をまざまざと身体で味わって居た。

後頭部を床に付けた体、身体を壁に逆さに立てて、やや腰をねじり気味に、両脚を水平に開くと、ひとみのきれいな両脚の美が太腿を通して、ふくらはぎからアキレス腱のあたりのくびれ迄、見事な曲線を大胆に繰り展げ

て美しい。

引き吊って裂ける様な筋肉の痛みに、義夫への愛に殉じる殉教者の様な、倒錯した股裂き刑の歓びを感じて、ひとみは身体の火照りに眼を閉じたものだった。

身体を後に弓なりに反らせながら最後には両脚の間に顔突き出して両手で両足首を握った時、マダムも社長も息を詰めて、ひとみの肉体の曲折限界ぎりぎりのヌードに魅了され、義夫の切るシャッターの音だけが冴え冴えと鋭く響き渡っていたのだった。

息苦しさに顔を充血させながら、ひとみは無防備にどぎつく曝け出した疼く様な自虐の心の焰が、官能をかつと燃え立たせて来る意識に、我知らず充血した眼をきらきらと輝かせた。

数々の大胆なポーズが、淫靡な恥じらいの中からではなく、義夫とひとみの激しい情熱のぶつかり合いの中から生まれて来ただけに単純な劣情ではなく、もっと深い所から盛り上って来る本能の歓びに、ひとみは生まれてから始めて体得する肉体の雄叫びの序曲を感じ取って居た。

あの夜、自分自身の心の奥深く揺れ動いてうねる様に盛り上って来た身体の妖しいばかり

りの目覚めを思う時、ひとみは、今でも「自分は本来マゾヒズムなのかしら」と考えて了う事もある――

この日頃、ひとみのヌード撮影を望む客に自分の身体を投げ出す時、息を呑み眼をぎらつかせる男共を眺めて、ひとみは、無防備な裸形を晒しながらも、男共より優位に立つもう一人の自分になり切って居た。

無表情の尽、次々に大胆なポーズを演出するひとみのそんな雰囲気、却って清らかな媚と艶めきを見出し、劣情とは別のそれに魅かれて、取り憑かれた様にひとみを誘う為に通って来る男も多かった。

だが、無表情に堪え切れず、ひとみの方から隠した羞恥を掴み出される様な、やり場のないいらだたしさの渦巻きに絶叫する思いの幾時間を過ごした事もある。

普通のヌード撮影をする時には、荒々しい男の息遣いが耳もとに感じられ、ともすれば触れてくる男の手をさらりと外して、爽やかな微笑みを返しながら軽いひと言、ふた言の囁きで、そんな時の男達の興奮をさり気なく外らす事が出来た。

所が小道具に使われるロープや手錠がひとみの身体を自由を奪った場合には、為すが尽

に翻られて、暫くの時間を男の好奇と猥欲に任せなければならなかった。

だが、そんな時、大抵の素人の縛り方ならば、身体をよじらせ、手首を激しく動かしながら細抜けする事も、ひとりでに覚える事が出来る様になった。それでも目的が達せられぬ時には、突然激しく咽び上げる様に哭き伏して、男の欲望の昂ぶりを制止する事も出来た。ひとみの涙は、そんな場合の男の気持を妙に白々しく鎮めて、少女の名残りをとどめたひとみの変形が、瑞々しい情感を男達の心に泌み入らせ、男達は狼狽しながら、ひとみを優しく労わり慰めるのが常であった。

それでも構わず、ベッドの上などに手足を拡げて縛り付けられた場合等、最初、身体を悶えくねらせながら避け様とする努力が徒勞に終るものと直感した時は、ひとみは、とたんにその我身から、我が感情を抜きとることにした。冷たいなきがらに等しい無表情さに急変されると、男達は却ってうろたえ、それぞれその人なりに手を尽してひとみの気嫌を取り結ぼうと努力した。ひとみは、そんな男達に、無表情の尽、ポツリと「帰りますから……」と一事云う事によって、収入が増える事も体験によって知って居た。

義夫との本当の愛というものを身体に刻み込んで居るひとみにとって、これらの男達の軽薄な遊びの手が肌に触れても、それがひとみの節操を犯すものとは思えなかった。

義夫は、ひとみの肌に残された赤黒い縄目の跡などを時折見出しては、ひとみの副収入の方法を追求した。ひとみは、それには答えず、唯「私を信じて」とだけを繰り返した。事実、義夫に対する愛情は何者の介入も許さぬひたむきな真実のものであり、純粋に思い詰めた一念は何処迄も変らなかった。だが、ひとみが事実を述べる事は、ひとみだけではなく義夫も傷つける結果になろう、とひとみなりに一途な稚い判断を持って居た。

「傷つくのは、私一人で充分だわ。義夫さんは、ママとの十数年を通して、一生を泥沼にまみれさせて来た人だもの……」

そんないじらしい思いやりが、ひとみの胸を人知れず熱く湿らせて居た。

「もう、義夫さんに心配かける様な事は、なくなりますから——」

その言葉に、病状が進んで来た義夫が弱々しくうなづく頃、ひとみは、熱い湯と冷たい水をタオルに浸して交互に軽くマッサージする事によって、肌につけられた鬱血の跡が消

え去る知恵も身に付けて居た。

この尽死んで了うとすれば余りにも惨め過ぎる——何とか助けて上げ度い——ひとみは義夫の病勢の進む様を見ながら、毎夜枕を濡らした。

入院加療をすすめても義夫はそれに従わなかった。義夫にとってひとみと暮す一日一日が、残された僅かな生命のたった一つの拠り所であり、踏みつけられ痛めつけられた心身の欲びの全てであった。例え、その為に死期が早められようと、今のこの倖せをしっかりと抱きしめた俥、心静かに死んで行き度いと思つて居た。

義夫は、二、三の雑誌のグラビヤで、ひとみのヌードモデルを知つて居た。だが、それを口にする事はひとみの心を惨めにするだけだと思つた。最初、ひとみにモデルの手ほどきを与えた者は自分なのだ。

「君は乳房が未だ弱いから、そら、そうして手を上げる時には気を付けて。そう、そうすれば乳房の線がきれいに出てくるだろ」

「何だ、そのポーズは……こんな時、中途半端な羞恥心を持つから、全体のポーズがいやらしくなるんだ。そう、その調子で……自分の身体の線が、どうしたら美しく表現出来る

か、それだけを考えるんだ」

「君にはね、未だ成熟した女のふくらみがないんだ。だから、そら、その肩の力を抜いてその瞳の特長をこのライトの光で強く打ち出す様な気持になればいいんだ。そう、そんな感じが却って清潔で純な艶めかしさが出来るだろう」

あの夜、高熱にうなされた様に酔いの勢を借りてしごき上げたひとみの身体が、いま見違える様な開花を見せてグラビヤに躍動して居た。が、あの夜、あの時のひとみが——自分が最初で最後に一回だけカメラに収めたひとみが、一番、美しく活き活きして居ると思つた。

いじらしい女だ、と思う。自分が居てはひとみをそれだけ不幸に追い込んでゆくのだ、と理性が囁く。何度か、そっと家を出て人知れず、ひとみの倖せを祈りながら身を果てたいと考へた。

一途に尽してくる、ひとみの健気な真心に甘えてはならぬ、とも自らの心に云い聞かせては見た。けれども、ひとみに魅かれるもう一人の自分の心身が、義夫に最後の決断を許さなかった。

血みどろの生活の中で二人は倖せだった。

(五)

——可愛いお夏を、小舟に乗せて

花の清十郎に、漕がせたや——

ひとみにとっては、生まれて初めての座敷遊びだった。

日頃、店の常連のSが、今日は初対面の客を一人紹介がてら、昼食を兼ねて誘ってくれたものだった。Sは、商社会社の常務をしていると噂されていたが、身許を明さない事で店の女達から好奇心を抱かれて居る五十がらみの、落ち着いた紳士だった。紹介された新しい客も、銀髪の小柄な紳士で、大柄なSと並ぶと対照的だったが、物柔らかな雰囲気の中に、何処か、きりっと引き緊った風格が滲み出て立派な人柄を思わせた。

座敷では、地方の二丁三味線の爪弾きに乗せて、二十三、四の女が踊って居る。濃い化粧に作られた白粉の顔が、人工の美しさを見せつけて、花の袂がゆらりと舞い匂う。

——清十郎殺さば、お夏を殺せ

生きて思いを、しようよりは——

ひとみは金が欲しい、と思った。

義夫との今の倅を一日でも長く続ける為には、義夫が心から安らげる様な部屋の雰囲気

気と名の通った医師の処方欲しかった。義夫が口に出して語った事はなかったが、良い生れ育ちの芸術家肌の坊ちゃんが、ひとみの四畳半のアパートで一日毎にその生命を蝕ばまれてゆく姿を見て居る事が、堪えられぬ程に辛かった。

Sが、そんなひとみの相談を親身に聞いて呉れた事が、ひとみには嬉しかった。

その時は、何も云わなかったが、Sは、今日、この新しい客と一緒に、ひとみを昼食に誘ってくれた。都心を少し離れた料理屋町の中でも古い門構えの落着いた料亭で、その離れに席が用意されて居た。

「今日は、このとおり可愛い子を一人、おともに連れて来たからね、お座つきも合わせてくれよな」

Sの言葉に、こんな手踊りが始められた。これならば、ひとみにも馴染めて、Sの心遣いが嬉しかった。

盃の受け応えの中で、初めての座敷遊びではあったが、ひとみは、ほんのり頬を桜色に染めながら、ほろり酔心地に、何時か、この場の雰囲気溶け込んでゆく自分を感じた。料理も珍しい色彩を添えて、遠慮勝ちに、つまみ上げる箸の先の味覚も美味しかった。

義夫さんに食べさせたいな、とそっと思っ
て見たりする。

思い切って作らせた結城紬が、芸者達の座敷着に見劣りしない事で、ひとみは、ひそかに、ほっと小さな安堵を感じて居た。そんなささやかな安堵が、義夫との生活の苦しみを僅かの間だけでも忘れさせて、ひとみの気持が浮き立つ様にやわらいで来る。

こんな人達と一緒に食事出来るのだ、と微かな優越感が心を弾ませた。

「この子の年じゃ、一寸無理かも知れないけれど、行く行くは、店の一つも持たせてやりたいんですよ」

Sが客に話しかける。

酌をしながら流し眼にひとみを見据えて来る芸者達の眼の中に、興味と羨望の色を見てひとみは嬉しかった。

「どう、こちらのFさんと僕の相手ということにして今日一晚、店を抜けられないかな。出張のつもりでお礼はさせて貰うよ」

昨日今日、小康を取り戻して居る義夫の病状を咄嗟の間に思い浮かべながら、ひとみは喜んでSの申出でを受け入れた。「こんな人達から可愛がって貰えれば、屹度良い事がある」そんな打算も素早く頭に閃く。義夫は寝

る時、必ず少量の睡眠薬を常用して居るから朝、眼を覚ますのが十時を過ぎる、それ迄に帰れば良いのだ。今迄にもそんな事が三、四回はあった。ひとみはこの人達の為ならば多少のサービスをして良いと思った。

車が呼ばれて、三人はひとみを真中に箱根へ向かった。

車の中でSは、無言の儘、数枚の写真を、ひとみに見せた。十日ほど前ひとみが始めてSに身の上話を打ち明けた時、Sがひとみのヌード撮影をしたその写真だった。写真の中のひとみは湯もじ一枚を身につけた姿で、高手小手に縛り上げられ、その縄尻が湯もじを縦に割って背後に廻り括り上げられて居た。

ひとみは、Sの意図を諒解した。この銀髪の小柄なF老人もそんな趣味の持主なのであろう。それならばそれで、一夜、身体を任せて二人に喜んで貰い度い、と思う。ただ、あの日のSの縄捌きが、何気ない様に見えるながら、高手小手に縛られた時、背後に組んだ手首がぐいと持ち上げられた痛さを思い出して居た。あの後、その縄尻がひとみの身体を縦に締めつけて来た時のロープの力強さに、思わず異様な感情が身内に走って、Sの縄捌きの鮮かさを身体の芯に感じた事が、今更の様

に生々しく記憶に甦って来て、思わず訳の分らぬ羞恥に頬を染めて居た。

ヌード撮影を好む男の中には、意外に女体を責め苛むサディズムの者が多かった。その他には、所謂、四十八手とか云われるポーズを要求する場合が殆んどであり、大鏡に身体を密着させて女同志の何かを連想させるポーズを好む者も居た。又、例外なく、ひとみの柔らかな裸身が大胆に繰り展げてゆくアクロバチックな曲線の動きには眼を奪われ息を呑んだ。

ひとみは、SもFも満足させられる自信を持って居た。だが、恐らく、今日も、冷たい無表情の儘、ひとみの裸身に見入るこの二人を優越感を持って眺める事になるであろう。と考えた。

そんなひとみの心中の計算を知ってか知らずか、Fが、横からその写真を取り上げながら、Sに囁きかけて居た。

「君、この子の表情がどれもこれも皆、少しも変ってないねえ。それが又良い所なんだろうけれど、表情を殺しながら次第にその我慢が失われて、悶えながらも悦虐の感応が出てくる様なところまで、追いつめて行かなきゃ駄目だなあ」

バックミラー越しに運転手の反応を気にかけるが、ひとみは、思わず身体を固くして居た。

箱根の宿は母屋から半町ばかり離れた別棟で芦の湖を眼下に見降ろす四間続きの立派な建物だった。その中の一間は、そこだけ張り出した様に他の三間と隔てられ十五畳の広いものだった。内輪の凝った小宴を張る場合等に用いられるものの様に見えた。

真冬の、凍え付く様な粉雪のちらつきの中を、一步屋内に入ると、寒さを忘れる様な別世界が、そこにあった。それでも、十五畳の間は、人気のないせいか、しんと肌に沁み入る様な淋しさが冷え冷えと感ぜられて来る。

それぞれ、湯へ入った後、Sは、その十五畳の間に酒肴を支度させて居た。女中を退けてから、Sはひとみに酒をすすめた。

「眼もとがね、ほんのり染まる位に、ほろりと酔って呉れた方が、楽しめるんだよ」

「あの、写真撮るんでしたら、お化粧をしましけれど……」

「そうだね。こうして傍で酒の相手をして呉れるんなら、薄化粧か、却ってひとみの場合なら素顔の方が良いんだけど……写真の時には、少し、アイラインを濃いめにして、全

体に強い位の印象を作るほうがその眼の特長が生きてくるからね。そんなつもりで顔作ってごらん」

ひとみが小半刻近く念入りに化粧を済ませてくる間、Fは、黙々と盃を空けて居た。

「いいかい。それから明日の朝帰る迄、ひとみは囚人なんだからね。どんな時にも諦め切って云いなりにするんだよ。例えばね、仮りに番頭さんや女中さんが入って来ても、裸で居る様に^{いけ}って命令されたらその儘で居なければ不可^{いけ}ないんだからね」

ひとみは、心に観念の眼を閉じて、つぶらかな眸を大きく見開いた。小さくうなずく。今迄でも、これから仕事に入ると云う時には今日の様に、割り切った諦めを、自分の心に云い聞かせたものだった。何時でも、最初、衣類を脱いで肌を曝す時だけが一番恥ずかし、それから後は、却って落着いて男達の姿を冷静に見詰められるのだ。

「さあ、裸におなり。いいね、素裸になるんだよ」

「最初からですか」

「そら、その口応えが不可^{いけ}ないんだよ」

Sの物腰しは優しかったが、ひとみの裸身にかけられてゆく高手小手縛りのロープは酷

しく、うっ、と息が詰る程に両肘を鋭く背後で締め上げられる。この前の時と同じ様に、縄尻が体を縦に割って、背後の手首に連結された。だが今日の場合、気づかぬうちに、縦縛りのロープに瘤が作られて居た。それが、何か、非常に大きなものに思われて、Sに突き飛ばされてよろよろとよろけるはずみに思わず、「ひいーっ」と顔をしかめる痛さが伴ってくる。

結局、この人達だって、普通の男達と変りないんだわ

それならそれでいいのだ、と、ひとみの気が冷めたく湧えて来て、何時もの軽い蔑すみをこめた無表情の眸が据えられて来る。

「このままで、あの庭の松の木をひとまわりして来なさい」

Sの言葉に、粉雪のちらつく真冬の庭を、ひとみは素足で歩き始めた。素裸で、土の上を歩くと云う事は、ひとみにとって初めての経験だった。全身がそそけ立つ様な無防備感が、ひとみの心を宙に浮かせてゆく。

一足毎に、柔らかな綿ロープの瘤が、改めて存在を強調するかの様に、いやでも意識させられる。

必死に唇を噛みしめてその疼痛に堪えなが

ら、たまらないくらいに吹き上げて来る屈辱感を、男達への軽蔑にすり換えて、ひとみは無表情の儘、一心に歩み続けた。

「よし、これで引き廻しは終りだ。今度は、身体を暖めて、磔の処刑をするからね」

Fは、Sの言葉を片耳に聞き流す様にしながら、囚女から眼を離さず、薄暗くなりかけたあたりの静けさの中で、時折、ストロボの閃光をひらめかせる。

後手の縄が解かれて前手錠がかけられ、ひとみは二人の男に挟まれて、風呂場へ連れ込まれた。Sも、Fも、自ら拘束したひとみを不似合なほど勞りながら湯槽に沈める。

「さあ、洗ってやろうね」

風呂場の低い棟木に手錠の間を通したロープが吊り上げられて、ひとみは高々と両手吊りの姿態を男達の前に晒した。足下のタイルが、ともすれば亡り勝ちとなり、その度にひとみの重心ががくつと失われて手首に激痛が走る。

そんなひとみを見上げる様にしながら、Sは、石鹸の泡をひとみの全身に隈なく塗り付けた。身体が洗われてゆく。ぬるぬるした石鹸のぬめりが、Sのごつごつと強張った掌の感触に撫で廻されて、その儘、叫び出したく

なる様な狂おしさに、ひとみはじっと耐えて居た。

湯煙の中からFの淡々として取り澄ました顔が置き物の様に見え隠れする。ひとみは、そのFに屈服して許しを乞い度くなる自分を哀れにもおぞましく思っただけで情けなかった。

湯上りの肌をバスタオルで拭かれて、ひとみは床柱の前に引き立てられた。

丸い床柱の冷めたい木の感触をびたりと背中に押し付けられて両腕を太い床柱の後側へ吊り上げられる様に磔けられた。大きく踏み開かされた両脚首には、それぞれにロープが結び付けられて部屋の両隅へびいーんと張り結ばれて居る。

がらんとした十五畳の部屋の広さが、ひとみに空しさを感じさせて来る。

その空しさが、余りにも惨めな羞恥を逆に煽り立てて来て、ひとみの結んだ口元がやり場のない口惜しさに血の滲む程噛みしめられた。

突然、腋の下にちりつく様な痛みが走る。

続いて、又。腋毛が抜かれてゆくのだ。ひどい。残酷な……とひとみは怒る。

脇腹に突き刺す様な衝撃を感じる。ひとみの裸身がのけぞる様にのたうち狂う。割り箸

の先が、磔柱の美少女囚を苛み、処刑する様に執拗に責めつけてくる。

これじゃ、本当の磔刑だわ——ひとみは心の中で歯噛みする。

義父の事、義母の事、義姉の事、そして義夫の事。一瞬頭を掠める思い出の数々が、今のひとみの磔刑に結びつけられて来て、ひとみは、過去の罪の決算が、今、磔られ処刑されてゆく自分の受けるべき、当然の報いなのかも知れぬ、と思った。

室内とはいえ真冬の寒さの中で、素裸のひとみは、磔柱と化した床柱を背負いながら、のけぞり悶えつつ、全身に滴るような脂汗を流して苦しみ続ける。手首を後に交差され吊り上げられた腋の下が引き吊って、息が段々苦しくなってくる。踏み上げた両脚に、たらたらと流れ落ちてゆく汗の滴りが、処刑される、女囚の血の滴りのような錯覚を起こさせる。

そんなひとみを、じいーっと見据えながら

SもFも一言の口もきかない。

漸く責めが終って、ひとみはがくつと首をおとした。肩が大きく喘いで、流石に吐く息が荒々しい。

Sがひとみの乳房を小刻みに觸り始めた。

Fの手も、ひとみの苦汗にまみれた肌を這いずり廻る。苦痛に喘いで居たひとみの表情が放心した様な無意識の中から、何か、官能的な喘ぎを見せ始めた。

そこには羞恥の感情もなく、ただ、哀しい女の性が、二人の男の四本の手に導き出される俤に従っているというに過ぎないようであった。ひとみの苦痛に歪められていた表情は何時の間にか、恍惚をたたえて、歓喜の吐息がむき出しに洩れて居た。

Fのカメラの焦点が合わされ、続けざまにシャッターが切られてゆく。

ぼんやりと焦点の定まらぬ眼を見開いたひとみの唇から微かな声がうめく様に

「義夫さん、義夫さん」

と呼び続けている。

SとFは互いの眼を見合わせて、にっ、と笑う。

再び立ち上ったSの手にビール壺が握られた。

乾き切った喉に、ひりつく様な刺激を与えて、ひとみの口に、次から次へとビールが流しこまれてゆく。半顔を泡に埋めて、ひとみはそれを飲み続けた。

顔をそむけて飲み足りたその後迄も、執拗

なSの手は、ひとみの鼻を押え、思わず開く朱唇の中へ割り込むように流し込み続ける。ひとみの肌にビールがこぼれて、泡を残して流れ落ちてゆく。

朦朧とした意識の中で、ひとみは、急速に全身を拡がってゆく酔いの深さをぼんやりと感じて居た。

両手を吊られ、両脚を裂けるばかりに拡げられた俛で礫られたひとみの、自制に堪えかねて失禁の瞬間を捕えようと、Fのカメラが待ち受けて居た。

こうして、音もなく降り積る雪の夜の昔の湖畔の宿の一夜に、ひとみはマゾヒズムの欲びを、そのしなやかな美しい身体に刻みつけられていった。

(六)

ひとみが箱根から戻って六日目の夕方、義夫は帰らぬ人となった。

ひとみの箱根行も、義夫はひとみの云い訳をその俛素直に受け入れ、少しも疑わなかった。そうして、後僅かとなったひとみの誕生日を指折り数えて、二人でささやかな誕生祝をすることを子供の様に喜んで待つて居た。

それもかなわぬうちに、静かにそっと死ん

で行った。その死顔は、長い間の闘病生活にやつれてこそは居たものの、美しく冴えたものだった。

箱根の一夜、ひとみは義夫には与えられなかった異常な欲びを、身体に刻みつけられる様に知る事が出来たが、それが義夫への背徳として罪の意識に絶えず苦しめられて来た。

それ迄、ヌード撮影の時、何度となく男達に弄ばれた事はあったけれども、何時の場合にも、ひとみは表情を殺した俛、無反応に男達を受け流して来た。それがあの箱根の一夜では、生涯消え去る事のないであろう傷痕を心に残しはしたものの、ひとみは混濁した意識の中で義夫の名を口走りながら、知らぬ間に生まれて初めて味わう被虐の末の歓喜を燃え上らせて居た。その時は意識が朦朧として居たが、その後になってもひとみの身体にはあの時の不思議な欲びが、どす黒く渦を巻いてうねり続けて居た。ひとみは、それを義夫への背信であると自らを責めた。

無邪気にひとみの誕生日を待つ義夫の澄んだ眼に見入りながら、この人は全部を知って居て、却って、ひとみに新しい恋人が出来た事を、別の意味から喜んで居てくれるのではないか、と心が騒いだ。

僅かに残された生命の灯の不吉な予感が、ひとみの再出発を祝って、それがこんなに美しい眼になって表われるのではないかと、ふっと考える事もあった。

それだけ、余計に義夫に対して済まぬと心に詫びた。相手が病人であり、又、事柄が事柄だけに、打ち明けて、思いきり叱責して貰えぬ事が哀しかった。

義夫が死んで見て、始めて、ひとみは義夫の事を何一つ知らない自分に気が付いた。お互いに愛し合う事だけが全てであり、お互いの愛情を確かめ合い信じ合う事によって何もそれ以上の事は必要がない様に、一途にひとみは考えて居たが、義夫が死んだ後になると死亡診断書を始めとして、数々の鬱陶しい事務的な手続が必要となった。

ひとみは義夫の身体の隅々、心の裏の一筋一筋迄、知り抜いて居るつもりであったが、義夫の本籍地さえ知らなかった。

二人の固い愛情の中へ割り込んで来る世俗の規則や習慣が疎ましく思われて、義夫との美しい思い出がこれ等の闖入者によって汚される様に感じた。

だが、事実表面上では、ひとみは、死んだ義夫にとって、全く縁の無い第三者に過ぎな

かった。

ひとみは、あの地下室の一夜以来、音信を絶って居たバーの吉見へ連絡を取り、必要な手続を終える事が出来た。吉見は、何くれとなく小まめに働いてくれて、一人ぼっち取り残されたひとみの心をほんのりと和らげてくれた。時折、そっと貰い泣きでもする様に臉を赤くする吉見の姿に、ひとみは何と云う事なしに胸をしめつけられる思いがした。

「義夫さんも、こんなに入達から慕われて居たのね」

傷つけられ泥沼に喘ぎながら、索漠とした短い一生を終えた義夫が堪まらなく哀れにいじらしく唄ばれて、小さな骨箱の前で過ごす一人寝の夜が切なかった。

実家への電報の知らせには、何の返事も来なかった。——いいわ、私が大切にお守りして、その中に、きつと立派なお墓を立てて上げるから——ひとみは自分の心にそんな言葉を云い聞かせて居た。

「ひとみちゃん、あんた、偉いねえ」

「だって、今、これまで持って行かれちゃったら、私、何か頼りなくて、きつと死にたくなっちゃうわ」

吉見に答えながら、ひとみはその言葉が、

ありの俤の今の自分の気持だ、と思った。

「ひとみちゃんは、噂で聞いたんだけど随分、偉い人達につき合いがあつて、可愛がつて貰つてゐるんだってね。俺、驚いたよ」

「それ、何のこと？」

「FさんやSさんの事だよ」

吉見の言葉遣いも何時の間にか「ひとみ」と呼び捨てにせず「ひとみちゃん」と云う様に変つて来て居た。ひとみは、何気なく吉見の口から出て来るFやSの名を聞くだけでぞくぞくと背筋に冷たいものを当てられた様に感じる。感じながらも箱根の一夜が思い起こされて乳首から身体の蕊に、じいーんと熱い痺れが走るのを覚えた。それが、随分遠い昔の様に思われ、又、昨夜の出来事の様にも生々しく思い出されてくる。ひとりで血が上つて来る頬の熱さに、そつとさり気なく話を外らせて、ほつと熱い吐息をついた。

「吉見さん、何時かの、ママが義夫さんを病気にしたって話、あれ本当？」

「いや、はっきりは分らないけれど、そんな噂もあったし、それに、ママのやり方を見てると何だか、ありそうな話にも思えてくるしなあ」

ふつとひとみの心がどす黒い疑惑の雲に覆

われて来る。その事実を曝き出す事によってママへの復讐が考えられた。そんなひとみの心に、Fに責められた時の感触がまざまざと甦つて、奇妙に煽り立ててくる。何の脈絡のない結び付きではあつたが、その事が、ひとみの感情を鋭く研ぎ澄ませて来た。義夫への背信に対する贖罪感と、SやMに培われたマゾの情感が反射的に、ママへのサディスティックな感情となつて、生理的な復讐への快感がひとみの胸にぱつと燃え上つた。訳の分らぬ生命の充実感がひとみの眼を妖しく輝かせた。

「吉見さん、今の話、内緒にして。……でもそつと私に手伝つてくれない？ 私、あなたの云う事、何でも聞くから……」

吉見は、ためらいながらも協力する事を約束して、温順しく帰って行つた。

義夫の死から十日近く過ぎたある日、吉見から電話がかかって来た。管理人の部屋へ行く為階段を降りながら、ひとみの心はひとりでに弾んで来る。電話口の吉見の声も、何か押し殺す様な興奮が感じられた。

「未だ、店へ出ないの？」

「明日あたりから出よう、って思つてゐるんだけど。何か分つた……」

「その事で話があるんだけど、それよりも昨日、Sさんが見えてね、随分、骨折って探したらいいんだけど、この店が分ったんだね。それで、ひとみちゃんの所へ連絡つけてくれ、って云うんだ。よければ、今夜、一寸来てくれないかな。外で落ち合って、それからSさんの所へ行こうと思うんだ。その時、ママの話もしたいんだけど、都合、どうだい？」

ひとみは、吉見と落ち合う時間と場所を定めて電話を切った。

あれ程の惨めな酷しい恥ずかしめを受けながらも、久し振りにSの顔が見られると云う事が、ひとみの化粧を念入りにさせた。風呂へも行き、忙し気にスーツのチャックをかけながら、いそいそと支度をする自分に、ひとみは訳の分らぬ憤りを感じて居た。

約束の場所に、吉見は早くから来て待って居た。吉見の顔見知りのスナックバーらしくパーテンは吉見を先輩として扱って居た。時間は未だ宵の口で、客の数も少なかった。

「ここへSさんがみえるの？」

「Fさんも来られるらしいんだけど、あの人達、どうも、ひとみちゃんの面倒を見たいらしいね」

ひとみの心を見透かす様に吉見の眼が覗きこんで来る。

「ひとみちゃんが、店を持ったら、俺、使っておくれよ。きつといいマネージメントさせて貰うよ」

吉見の追従笑いに、多少、煩わしさを感じながら、ひとみは話の先を促した。

「ママの話、どんな事があるの？」

「うん。その前に、何か、フィーズでも頼もうか。いや、久し振りに俺がシェーカー振って、ひとみちゃんに味わって貰おう」

吉見は、勝手知った自分の店の様に、カウンターの内側へ入って、シェーカーを振り始めた。

「どうだい、この店は材料が違うから、味が良いぜ。レモンだって、うちの店なら爆詰使ってるけれど、ここじゃ、生レモンを絞るんだからね」

ひとみは、一口つけて、美味しい、と思った。その唇、ごくんと口に含むフィーズの味が、ちりっと喉を刺す様に流れて、思わず、

「いいお味ねえ……」

と吉見の顔を見上げる。

ふわっと身体の浮き上る様な快い軽い酔心地が、脳の蕊迄沁み渡る様に拡がって、ぼう

ーっと眼先の吉見の顔が、幾つにも霞んで見えて来る。

誰かが自分の肩を持ち上げる様に起こし上げた。伸された腕がその男の肩に掛けられて宙に浮いた身体を、ひとみの背中から廻した手がしっかりと抱き寄せる。

「もっとしっかり押えて……」と叫んだつもりが、声にもならない。確かり掴まえて居てくれないければ、自分は何処へ行ってどうか分らない様な、漠然とした不安が、ふくらんだ肺の中から吹き上げてくる。

誰でもいいんだ、とひとり言する。

何処かへ運ばれてゆく。ふっと腰の辺りが軽くなる。自動車のクッションに投げかけられた自分の身体が、自分の様に思われない。又抱き起こされる。階段を降りてゆく。義夫さんのいる所へ会いに行くのかも知れないと思う。暗い。暗い。こんな所でひとりぼっちなんて、可哀想な人だと哀しくなった。今、行くから待ってて、義夫さん。そんな気持ちがじいーんと胸の奥からこみ上げてくる。

誰かの手が、身体にかけられた。物倦い虚脱感の中でひとみは、すうーっと涼しくなったように思う。軽い、解き放された様な清々しさが素肌に快い。

Fさんだ。Sさんも居る。ここは箱根かも知れない。「いやよ、いや……」ひとみは身体をくねらす。ひとみの身体が、曲げられる。二人がかりの男の力が強い。自分の太腿に押しつけられた頬が、腿の冷めたさにころよい。

「私って、こんなに冷めたい脚してたのかしら……」そんな事が大切な発見の様に驚かれる。今度は身体が逆に返り返らされてゆく。苦しい。息が出来ない。背後にぐっと反らされた両脚の間に、ひとみの頭が、突っ込まれる。その俛、縛り上げられる。苦しい。息が詰る。Fが、Sが、縄がけされたひとみを馴れ始める。Fの掌が懐かしい。燃え上ろうとするひとみの歓喜が、逆さ海老の苦しさで邪魔されて、思うに任せない。

「解いて、解いて……」ひとみは叫び続ける。手足が自由になった。義夫だ。義夫がひとみを抱きすくめてくる。嬉しい。嬉しい。

「義夫さん、待っててくれたの」ひとみも義夫の身体を離さじと抱きしめる。冷めたい。ぞっとする様な冷めたさだ。思わず手を離してその顔を見る。蒼白い。訝え切った蒼白さだ。切れ長な眼に、ぎくっとなる様な冷たい光がこめられて、切り付ける様な眸の色に、

ひとみは、たじろぐ。

義夫の両手が、ひとみの両足首を握った。ぐいっと引き裂かれる。痛い。張り裂かれる様な痛みが、ひとみの全身を、突き抜ける。「やめて……」と絶叫する。身体が冷えてくる。凍えつく様な寒さだ。はっとなって我に返る――。

ぼんやり見開かれたひとみの眸に、目覚えのある顔が、いくつか覗き込んで来た。吉見の顔がある。社長の顔がある。マダムの顔がある。

「ここは、何処だろう……」

何時か、遠い昔の出来事が、その俛、現在迄、続けられて居る様に思われて、思わず、ひとみは、どきっと心を凍らせた。

夢を見て居るのかも知れぬ、と思った。だが夢ではない。ひとみは、何時かの地下のスタジオに居た。

素早く起き上ろうとする。が身体が自由にならない。コンクリートの床に押し付けられた両手首が、背後でがっちりと手錠をかけられて居た。

動かそう、と思った両脚が、左右に張り広げられて思うに任せない。

両側の壁に埋め込まれたアンカーボルトに

ロープが通されて、両脚が一直線に吊り上げられて居る。下半身だけが逆さ吊に宙に浮いて、ひとみの浅間しい股裂きの姿が、明るい電灯に照らされて居た。その電灯の光を、ひとみは眩しいと感じる。ぎりぎりとし込んで来る腹部の痛みが、ひとみの脳天迄激しく突き抜けて来る。

「負けるものか！」と、ひとみは反射的に唇を噛んで呟えた。

「あんた。私が先生をどうにかしたって、嗅ぎ廻って居るそうね。今迄、その吉見が充分に、あんたを自由に弄んでやったから、今度は、お仕置きにかけるよ」

ひとみは、一人一人の顔を憎悪をこめて睨み返してゆく。

「おーっ、恐い眼して。……ねえ、あんたは吉見の云う事何でも話く、って云ったそうじゃないの。だから吉見が素直に遊んでやっただけよ。それに、後で、ちゃんとあんたにも報告出来る様に、社長さんが写真撮ってくれてるわ、天然色でね……」

勝ち誇った様に云い募るマダムの肩越しにバンドを締め直して居る吉見の姿を見つめながら、ひとみはすべてを悟り、暗い絶望の谷間へ突き落とされて行った。今迄カメラの前

にヌードは晒しても、そんな姿を写真に撮られた事はなかった。義夫のヌード指導を胸に刻みつけられたひとみは、どんな大胆なポーズでも、それが、肉体の限界ぎりぎりの線から描き出されてゆく女体の哀しい美しさを表現してゆく事に、自分なりの芸術的欲びを感じて、それを心の支えとして来た。

「この娘、何時でも同じ様な顔して平然と澄ましこんでるけれど、今日は、充分に、泣いて謝らせてやるからね」

「何を、こんな連中なんかに……」

ひとみのそんな眸の色を読み取る様に、マダムが吉見へ何か云いつける。

バケツが運ばれて来て、マダムがそれを受け取った。

ひとみの眼尻から、白露の珠が三つ四つ、電灯の光に、きらっと輝いて、その尽、すうーっと頬を伝って耳朶へ流れ落ちてゆく。幾筋も幾筋も、後から後へ糸を引いて滴たり落ちてゆく。きれいな肌をこる様に、訳も無く涙が溢れて止まらない。

「この娘、泣いてるよ」

ぎゅっとひとみの引きしまった腹部が、マダムのハイヒールで踏みこじられた。挟る様な痛みに、身体をねじらせて呻く。

吉見が、崩れたひとみの髪の毛をぐいっとその手に巻きつけて顔の位置を固定させた。身体をくねらせながら、ひとみは大きく肩を波打たせて喘ぎ苦しむ。

マダムのバケツから水が注ぎこまれる。

その水が小さな滝の様に、間断なくひとみの鼻から口へ注がれてくる。顔全体を水浸しにしながら、ひとみは無茶苦茶に、その汚れた水を飲み込んで居た。冷えと飲みこんでゆく水に、下腹が張って来る。

「こんな逆さ吊りの恰好で失禁する時は、どうなるんだろうね」

下卑た笑い声が、二人の男の口から低く洩らされる。

「あっ」

マダムの軽く蹴ったハイヒールの爪先を下腹部に感じて、ひとみは抵抗しようとする氣力が、一度に身体から消え去ってゆくのを覚えた。汚辱にまみれて為すがままに裸身を投げ出すひとみに、ぎらつく様な三人三様の眼が注がれて、火の氣のない地下室のスタジオの中で、あの箱根の夜の様に、ひとみは全身に脂汗を吹き出して居た。

足首のロープが解かれても、仰向けに身動き一つ出来ぬ全身の疲労を感じて居た。そん

なひとみの内腿を突き刺す様なマダムの足蹴が襲ってくる。

「あんた、明日っから、社長さんだけじゃなく、私が云いつけた時には、何時でもモデルになりに来るんだよ。さっきの吉見との写真だって、ちゃんとこっちの手に握ってるんだから——」

ひとみは微かに首を横に振る。それが残された最後の氣力だった。

「未だ、お仕置きが足りないんなら、充分に可愛がってやろうじゃないかい」

近寄せてくるマダムの顔に、「べっ」とひとみの唾が飛んだ。

さっと、マダムの眼に狂氣の光がこめられて、ひとみの身体を起こしにかかる。

今迄、ひとみの両脚を裂き張って居た両側の壁のアンカーボルトに、再びロープが通されて、両腕が左右に引き伸ばされた。両脚を前に投げ出して坐った尽、伸ばし責めの激痛が腋の下を引き裂く様に襲って来る。ぎりっと嫌な音がして、腕の関節がばらばらにされる様な苦しみと闘いながらひとみは、必死に、義夫の面影を追って居た。

果物ナイフが吉見の手できらりと光った。そのナイフに、晒し木綿がきりきりと巻き

つけられてゆく。

恐怖に歪んだひとみの眼が、大きく飛び出す様に見開かれた。重苦しい沈黙があたりの空気をどんより沈ませて、電灯の光だけが、やけに明るく眩ばゆい。

吉見の手のナイフは痛くはなかった。だがその晒し木綿の下に包みこまれたナイフのきらめく様な刃の光が、ひとみの感覚を、真黒な恐怖へと塗り潰してゆく。全神経は、その一点に集中されて、瞬時の息抜きも許されない。絞り出す様な脂汗が、全身から噴き出す様に湧いて来る。

何の咎で、自分はこんな刑罰を受けるのだろうか、ひとみは考える。突然、飛び上る様な痛みが、ひとみの腋の下を襲った。瞬間ひとみは、「ひいーっ」と呻いた筈、気を失った。薄れてゆく意識の中で、ちりちりっと燃え上る自分の腋毛の、嫌な煙の匂いを嗅いで居た。

眺方近く、凍えつく様な寒さに、ひとみは正気に返った。真暗なスタジオの中で、手探りに電灯のスイッチをひねった時、明るい光の中で、一夜繰り展げられた淫虐で凄惨な私刑の跡を、まざまざとその眼に見た。

放り出されたロープの束。手錠。晒し木綿

に包まれた果物ナイフ。パケツ。濡れそぼったコンクリートの床。これ等の責め道具が、ひとみの心身を飽く事なく責め苛んだ名残りであった。ひとみは、がらんとしたスタジオの暁暗の中で、白々した気分に着ちこんで行った。

「一体、こんな事が、あの人達の何になるんだろう」ひとみは、鳥肌立つ思いに自分の身体を眺め返して見た。処刑の後の悲が斑々と黒く変色して見える。ひとみはそんな自分が急にいとおしくなり、自分で自分の素肌を抱きしめ度くなる様な、激しい衝動に駆られて立ち竦んで居た。

(七)

ひとみは、義夫の遺骨を前に、凝然とうなだれて居た。

吉見に裏切られ、あの残酷な私刑を受けた後、何故か、吉見が憎み切れなかった。

「あの人は、最初から、私が好きだったのかも知れない」ふっとそんな考えが閃めいた。突飛な思い付きではあったが、その考えが真実の様に思われてならなかった。吉見のひとみへの愛情が、歪められ変型してあの様な陰惨な表現を選んだのではないだろうか。吉見

は、Fや、Sの箱根行きに加わった自分を知って居た。義夫に愛し愛されたひとみを遠くから焦がれる様に見詰めて居た。その事々がかなわぬ恋の情熱のはけ口を、あんな形で表して来たのではないだろうか。だが、ひとみは、憎み切れない気持とは別に、吉見を好きになれなかった。

Fのサディズムの中へ馳け込んで、しっかりと抱きしめて貰い度い様な衝動が、ひとみの身体の高に、突き抜けて走った。それは愛情ではなく、ひとみのマゾヒズムが求める官能の焰に外ならなかった。

一体、人間なんて何なんだろう。そんな素朴な疑問が、ひとみの心を切り苛んだ。

義夫への、混り気のない愛情の他に、Fの苛烈な鞭りを追い求める自分の身体が、うとましく、いじらしかった。

このお骨箱は、誰にも渡し度くない。だがこの義夫の遺骨を抱きしめる資格は自分にはないのだ、と思った。

何もかも打ち捨てて、Fの煉獄の中へ飛び込んで行けば、ひとみの身体は、充実した被虐の欲びを、その一日一日に味わいながら、何を考える事もなく、本能の俤せに浸り切る事が出来るであろう。

だが、魂を捨てた身体だけ俸せならば、生き身の残骸に等しいのではないであろうか。義夫への愛情に献身した頃の自分の毎日が美しく偲ばれた。だが、それも今は返らぬ思い出となった。

今のひとみの身体は、義夫の死とともに、愛への献身だけで充たされぬ何かの悪魔が乗り移って居た。あの虐たげられる時に身体の蕊から燃え上って来る歓喜のうねりを思う時ひとみは、女の性の哀しさに、我と我が身をどうする事も出来なかった。

だが、考えて見れば、ひとみを罵り弄ぶ男達の嗜虐の後のひとみにやって来る白々しい空しさは、どう説明したらよいのであろうか。

征服迄の充実感、それを遂行し終った時

一瞬、寂漠とした佗びしい空間に置き換えられて、惨めな裸身を晒すひとみのそれよりも尚、惨々とした寂寥に包まれてゆく。

義父がそうだった。あの社長も、Sも、Fも、吉見も、皆そうだった。

そうして、義夫は、今、この世を去って行った。ひとみは、女と云わず、男も含めて、人間の性の空しさと哀しさに、暗然とうなだれて居た。

義夫の存在を絶えず頭に描いていたからこそ、かすかすの男の縄目に裸身を委ねることが出来たのだ。彼の手と想えばこそ、肌を這う男達の掌も許し得ていたのだ。彼あってこそヌードモデルだったのだ。

その義夫が、もうこの世には居ない。ひとみの眼がうつろに流れた。

早春の花の香が、この片隅のひとみの部屋の窓からも、静かに、ほんのりと流れこんで来る。ひっそりと漂って来る春の匂いの中にひとみは、自然の生まれ出ようとする生命の息吹きを感じて居た。そうして、人間だけがその自然の中から疎外された様な苛だたしさに、胸を切なくさせて居た。

何時の日か、自分にも、こんな自然の中へ溶け込んで行ける日が来るであろうか、と考えて淋しかった。

隣の部屋から、歌謡曲が聞こえて来る。俸せな家庭の夕餉の時間でもあろう。

——青い夜霧に、灯影が紅い。

どうせおいらは、ひとりもの——

強い被虐に眼覚め、異常な快楽を持ったひとみは、平和な家庭生活の団楽から疎外されて、今、一人で悩み抜いて居る。

——花のホールで、踊っちゃ居ても春を持たない、エトランゼ——

義夫に取り残され、寄る辺を失ったひとみは、異邦人の深い孤独に落ちこんでゆく。

ひとみは、心の底から、町子の昔に還り度いと思った。それが、血を吐く様な、たった一つの願いだった。

天星社刊

《限定版グラビア写真集》

在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉り出し、その美しさを最高度に發揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかすかすを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いします。



=ぼくのイメージあれこれ=

緊縛美雑感

鈴木三三

ぼくにとって好きな女優さんとは、個性的な緊縛イメージを与えてくれる人、ということになります。時代劇の女優さんでよく縛られ役をやり、なかなか良い縛られ姿をみせてくれる女優さんとは別な意味で、映画・テレビでは縛りシーンとは無関係な役を演じている人でも、その容姿がぼくの緊縛イメージの中でのモデルにぴったりの人、ということですね。いわばぼくの緊縛イメージの中におけるファッションモデルになる人たちです。

ある女優さんをヒロインとして緊縛シーンを思い描く。ということは殆どの緊縛マニアに共通のところですが、ぼくの場合は、ある緊縛物語を仮想し、その中のヒロインとしてその女優さんを登場させるという、イメージ（もとよりそのようなイメージも思い描きますが）より、口絵、または一枚写真式の緊縛容姿のイメージの対象、モデルとして思い描くのです。

あるいは殆どの人は、物語構成をとまなわぬ緊縛容姿は物足りなさを感じられるかも知れませんが、ぼくにとっては、強烈な変形的な緊縛容姿は、ありきたりの物語構成をとまなわぬ、かえって不自然さがとまらない、イメージが弱まってしまう感じで、緊縛容姿そ

れ自体のみの方が、よりイメージが深まります。美女が縛り上げられている姿それ自体、すでにある物語性が秘められている姿ゆえ、それ以上の余計な粉飾は、この際不必要といった気持なのです。

次に二、三の例を挙げてみます。

原田系子さん。西野バレエ団の踊り子の中で、ぼくの緊縛イメージのモデルさんとして最も魅力があります。

長袖のバレエ着、極く短いパンツ姿の彼女が、魅惑的な脚を恥ずかしいあぐら縛りにされ、伸びやかな長い両腕は、後手高手小手に背中に高々と十字に組み合わされ首なわで吊られている。自慢の美貌を涙が濡らすのをぬぐうこともかなわず、縄目のくいこむ後手を首筋ちかくで空にもがかせ、痛みと恥ずかしいポーズに堪えながらバレエ練習所の床に坐らされている姿。

浜美枝さん。東宝の女優で、エキゾチックな容姿は、緊縛モデルとしてさまざまなイメージを与えてくれます。ぼくにとっては緊縛モデルのナンバー・ワンです。

皮のインデアン・ズボン。上半身裸にむかれ細い革ベルトで二の腕、胸に幾重にもくいこむ厳重な高手小手後手の緊縛。両足をアブ

ミに結ばれ馬に乘せられている姿。口にも皮布の猿轡がきびしく頬にくいこみ、鼻孔は不恰好に曲げられてのぞけた哀れな美貌。後手首は、上体を緊縛しつづける皮ベルトのいましめの苦痛と屈辱をこらえるように、二つの拳が固くにぎりしめられている。

辰巳典子さん。所謂ピンク映画の女優さんの中で、最も好む人、豊かな乳房の持ち主。肉体女優さんでありながらスレンダーな姿態であり、清純さと色気をかね備えています。

金属製の、揮状の貞操帯をつけさせられた全裸姿。後手高手小手緊縛で、なわ尻を鴨居に吊られ、足首を揃えてくくられた不安定な立姿。首にお守り札のように貞操帯の鍵を吊るしている。

以上のような次第です。この他縛り上げたまま便器をまたがらせる姿。鼻孔への巻き煙草による責め姿、あるいはもっと喜劇的タッチの縛りポーズ等、各々のモデルになる女優さんにより、さまざまな緊縛容姿のイメージがあるわけです。マニアの人は、縛りシーンのない映画などつまらないから見ないという人が多いのですが、緊縛イメージを与えてくれる女優さんの出る映画は、その女優さ

んの示すさまざまなスタイルが緊縛イメージを誘発してくれるので、ぼくにとっては楽しく見られます。

原田糸子さんなど、縛りとは無関係な存在ですが、彼女の場合は演技よりスタイルに工夫をこらす点が、他のタレント以上なので、とさらに目を楽しませてくれます。(二月から「俺とシャム猫」という軽いタッチの活劇に出演しているので彼女の縛られ姿も見られるかも知れません。共演は若林映子、小山村ミ)

このような口絵的・一枚写真的緊縛イメージを、ぼくは勝手に緊縛ファッションと名づけています。辻村隆氏のカメラ・ハントは奇巧誌の公開実験室的存在なので、氏の好みもさることながら、出来得れば緊縛ファッション的、実験も、行ってもらえれば幸いです。辰巳典子、谷ナオミ嬢を再度ハントして彼女達の演技と恥じらいの、魅惑的な緊縛ファッションの容姿が登場することを期待して止みません。

さて次には、物語的な緊縛イメージについて書いてみます。

さき程、物語性をつけることは逆にイメージを薄めると書きましたが、それはあくまで

も一枚写真的イメージの場合であり、女優さんから誘発されるイメージにおいての場合です。

ぼくのイメージにおける物語的構成は、例えば「花と蛇」「緋縮緬地獄」的な構成とは多少異なります。新婚夫婦や恋人同志におけるプレイの要素とも一寸性質を異にする「飼育」的要素の構成です。具体的に次に一例を書きましょう。

状況の仮想……青年写真家の不思議な魅力にひかれた、さまざまなタイプの美女たちがモデルとなり、やがて緊縛モデルとして育成されてゆく。女達は、次第に自分の緊縛姿が青年の目をひきつけることに、喜びとモデルとしての自負を感じるようになる。女達は互いに嫉妬し、競争し合い、青年のために自分の緊縛容姿をつくり上げてゆく。

イメージの一節……美都子が身につけているものはなわ目のみだった。白いなめらかな上体を、後手高手小手に緊縛している幾巻きもの麻ロープ。ふっくらした臀部に羞恥をうずかせるようにくい込んだ、三筋のピンクのビニール・ロープ。青年はソファに坐ってビールを飲み、美都子はテーブルの脇に立たされ、青年のグラスが空になると、腰をかがめ

麻ロープできびしく交叉され縛り合わされた後手首で、テーブルのビール瓶をつかんで、上体をかがめたまま不自由な恰好に傾けてビールをつぐのだった。

ビールをつぎ終ると美都子は青年の顔をみる。しかし青年の横顔は冷い。美都子は悲しかった。美都子の悲しさは、自分がいま羞恥に満ちた姿でいることではない。一昨夜も昨夜も美都子はこの姿で青年のビールの相手をつとめた。そして青年の目はその間、美都子にそそがれつづけ美都子は言い知れぬ喜びにひたっていたのだ。ときに青年は美都子を床の上にかがませ顔を上向けさせ、可愛いオツマミだ！と口に出して美都子の形の良い鼻を指先でつまみ上げたりした。美都子は自分の美貌の誇りにしている鼻をつまみ上げられる度に、ふるえるような喜びと陶醉を感じ、青年の脚にペットののように顔を、高い鼻をこすりつけもしたのだった。

しかし今夜は、思いがけない時間にライブルの啓子が現われ、いま青年の目は美都子をはなれ啓子の方にひきつけられてしまっているのだ。美都子は後手にもったビール瓶をテーブルに置くことも忘れ、口惜しさで悲しさにビール瓶をつかむ指先に力をこめた。

今夜の啓子は、たしかにいつもの啓子とは違う新鮮な魅力を発揮していた。美都子がおっとりしたお嬢さんタイプであるのに対し啓子は混血児的な彫りの深い、肉感的な美少女だ。ポニーテールに長く垂らした髪が自然に弾むような若々しい姿態だった。その啓子が普段に着ている胸のひらいたドレス風なワンプiecesに代えて、今夜はショート・パンツ袖無しのチョッキ風の上衣といったスタイルだ。肉づきの良い、しかしすらりと長い四肢が、わざと小さめに作ったのかと思われる程にきっちり着こなした服装から、はちきれんばかりにむき出されている。啓子はそんな自分を、より魅力的にするため、長々しい細い革ベルトまで持参していた。その上、革ベルトに合わせるための猿轡用に、革の布までも。

革ベルトに後手に緊縛され正座している啓子は、啓子自身の計算通りに美事な緊縛容姿だった。更に啓子は青年の目が美都子から自分の方にそそがれたのを意識して、上体を前屈させたり左右にねじ曲げたり、そしてその都度、後手の指を、これをみよがしにゆっくりと空を掴むようにもだえさせた。

またそんな啓子の緊縛容姿に一段と魅力的

な効果を与えていたのは皮の猿轡だ。皮布が豊かな頬をきっちり緊めつけたため、鼻孔が上向きにくっきりと魅力的にのぞけられ、その鼻孔のあえぐような息づきは、ときおり体をいやいやをするように左右にゆすっては、訴えるように上向ける顔に、緊縛された美少女の羞恥と切なさの表現効果を十二分に与えていた。

美都子は、今夜の啓子にはかなわないと思った。体から力が脱けてゆくようだった。やがて美都子のかすかな尿意を感じはじめ、意識すると急速にたかまった。美都子は両脚をもじもじさせはじめた。美都子は脚のみではなく、腰と後手を、自然に動かしはじめていた。でもいまトイレに行かせてなどと頼んだら完全に啓子に負けてしまう。美都子は我慢した。そして訴えるように青年の方を見たとき、美都子は青年の目がいつか啓子から自分の方に移っているのを知ったのだった。

尿意をこらえている姿が、啓子から青年の目をうばい返した。美都子はそう思うと、もうトイレに行かせてと頼むまいと覚悟した。たとえこのまま我慢しつづけて失禁してしまってもいい。いま美都子はためらうことなくむしろ意識的に、緊縛された全裸の尻を、腰

を、脚を、後手を、体全体を必死になって、もたえゆりうごかせつづけていた……。

とまあ、こんな次第なのですが、吊り縛りむち打ちの類を好む人には、物足りないかと思ひます。ぼくはそのような類の縛りや責めは好まないのですが、そのため、縛りの方法が数少く類形化し、責めも物理的な方法をとらないので、ムード的、心理的にかたむきます。

しかしぼくの考えでは、緊縛美の主体は、縛りの方法や責めの方法自体にあるというより、被縛者の容姿、性格にこそあるものだと思うのです。天性緊縛美の資質を備えた女性であれば、後手縛りのみでも、食事・排泄・用事・入浴等の日常性の行為において、充分魅力を発揮し得るものと思ひます。

捕えられた美女が悪人に責められるところにのみ緊縛行為があるのではなく、衣装による女性美の発揮と同様、なわ目が衣装と同様女性の魅力を発揮するところのものとして現代的に展開されるところに、ぼくの緊縛美への夢があるといえます。

プレイにおいて拷問やお仕置きの真似事をするよりも、緊縛という行為を生活の中にとけこませてプレイする方が、ぼくの好みに合

うようです。ぼくにとって女性のマゾ性は、むち打たれ、吊り責めにあって陶酔を感じる方向にではなく、縛られ羞恥に満ちた自分の容姿に、恥ずかしさを混えた不思議な喜びと陶酔を感じる、といった方向の方が、前者の封鎖性にくらべて開放的であり、現代的な発展性があるものとして望ましく思うのです。

このような要素から成り立っている小説やイメージを考えているのですが、どうもうまく描けません。同好の人も多いと思ひますので、奇ク誌上にてご協力下さい。

最後にぼくの見解はさておき、ピンク映画界の女王、谷ナオミ嬢の緊縛イメージを幾つか綴って筆をおきましょう。

(一) ネグリジェ姿を、三面鏡の前でなわ掛けされているナオミ。柔かなネグリジェに包まれた豊かな上体に、ひしひしと麻ロープが締めつけてゆく。正面の鏡の中でうなだれるナオミ。側面の鏡の中では、背中で縛り上げられた手首、固くにぎりしめられた拳が羞恥にうずいている。

(二) コンクリートのみに囲まれた地下室。小さなくぐり扉の鉄扉は固く閉され、ナオミは素裸で後手に緊縛され、太い鎖での股間縛り、腰から垂れた鎖の端は床に置かれた重石

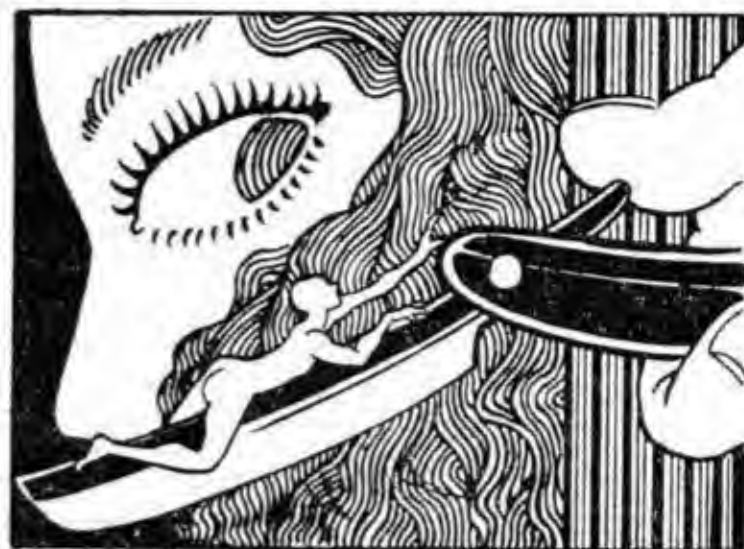
につながれている。便器が一つ。うずくまっ

て悲しみに耐えるナオミ。

(三) 二の腕のあらわな支那服姿。閉店したバーのスタンドの椅子に後手に緊縛され、据えられたナオミ。ウイスキーを無理にのまれむせぶナオミ。次第に廻ってくる酔に、縛られた胸元が妖しく息づいて耐えている。

(四) パンツにブラジャー姿のナオミ。梁から垂れたロープに後手縛りに吊られ、床に置かれた大きな四角の氷の上に素足で立たされている。足を交互に踏み代え、臀部を振りつけて冷たさをこらえているナオミ。

(五) 朝の家庭。ショート・パンツ姿。袖無しブラウス。ナオミは両手を前手に細い鎖で括られ、その手で男にコーヒ―、食事、煙草、靴磨き等の世話をする。やがて外出する男。ナオミはロープで後手高手小手縛りにされ、柱になわ尻をつながれる。ショート・パンツの下には、冷たい金属製の貞操帯。ナオミはなわ尻をいっぱいに引っぱり、上体を伸ばしてテレビに顔を寄せ、鼻先でスイッチを押す。テレビドラマに熱心に見入る、猿轡におわれたナオミの顔。ときおり所在なさそうに縛り合わされた後手の指をうごかしたりしている。



肉の格差

長い間、渡り職人として、ただ自分一人の享楽に耽って来た政吉が、四十八才にして始めて身をかためる決心をした。若い美貌の妻を得て、たとえ小さくとも自分の店を持ったときの喜びは天にも昇る気持ちだった。

店の名も、最初は「斧田理髪店」と名づけた。店名は、少し硬すぎるので、愛する栄子の名をとって「バーバー・エイコ」と、モダンな名前に変えたのだった。

連載 M 小説

ピエロ床屋

(3)

鬼山 絢 策

あれから五年、政吉はほんとうによく働いた。職人の友市が来てからは、店の収入も倍加した。だが一年ぐらい前から、友市と栄子のために受けた心のきずが悩みながらも、十五も年の違ふ夫としてのひけめから、自分の行く道を割りきって考えたつもりだった。

友市が栄子と喧嘩して去ったときは、ホッとしたのだったが、それも束の間、栄子はまた、悩みの種を店にまくと云う――。

だが、それは妻を溺愛する夫としての立場からみた悩みで、店の繁栄を考えれば、職人は必要であり、当然なことだった。また職人

を置いたからといって、前の友市と同じような事態が必ずおきるとは限らない。政吉が職人を置くことに反対する理由はなにもないのだ。

栄子は長襦袢姿で立ったまま、夫の政吉の肩を跨いで、太股深く顔をはさんで締めつけた。

内股に、次第に力を加えて行くことによって、苦しみ喘ぐ夫を上から見下ろして「妾と此奴の間に、はっきりと格差をつけてやるんだ！」

政吉は、きつと清太郎と関係したことについて疑わしい言葉を吐くに相違ない。その機会をつかんで逆襲し、妻と夫の間の格差をつけてやろうと、帰る汽車の中から考えてきたことなのだ。

抵抗もせずに、この苦しみと屈辱を受けている夫に、栄子は征服感を肌で感じとっていた。

前号までのあらすじ

政吉は五十三才。妻の栄子は十五も年下でグラマーな女盛り。栄子の故郷、大田原市に理髪店を開業したが、栄子は職人の友市と関係する。だが栄子は、友市と喧嘩してクビにする。

しかし店にはどうしても職人が必要なので政吉は東京の兄弟分、清太郎の所に職人を世話してもらいに行ったが、求人難で断られる。代って栄子が行き、清太郎に一夜身をまかせて強引に富岡善夫という三十三才の美男で腕の立つ職人をまわしてもらうように話をつける。

政吉は妻が目的を果たしてきたのは清太郎と何かあったのではと疑うが、それを口に出した政吉は後悔する。

政吉は甘い肉の香りの中に、息のつまる苦しみの中から、

「俺だって、もう少し一生懸命頼めば、清太郎はOKしてくれたかもしれない。栄子の言う通り、俺に誠意がなかったから不成功に終わったのだ。その裏側には、俺自身「悩みのたね」の生ずるのを拒む気持ちがあったからこそ、努力が足らなかったのだ。罪は、やはり俺にある。」

と考えていた。

栄子は誇らし気に

「わかったかい、お前の能なしなことが」

グイグイと頬を締めつける。

「ウー、ムウ……」

口もきけぬくらい、肉の締め木にかけられた政吉は「わかった、わかった」と言っただけだった。

「清太郎と栄子の間に、どんな取り引きが行なわれたか、それは想像するだけで、おぞましいことだ。だが疑えば自分自身を責めることになる。それならば疑わぬ方がよいのだ」と政吉は自分に言いきかせた。

「疑いの言葉を吐いて、もし栄子が潔白なら怒るのは当然だ。いま、その折檻を受けているのだ。それは当然、受くべき罰である」

「もうお前なんかには、この店の主人の資格はない。この店は妾のお店だよ」

栄子は内股でひと締め、ひと締め、念を押すように締めあげながら言った。こうしなから言うと、ふだん言いにくい言葉も、何の抵抗もなく、スラスラと出るのである。

「この店の主人は妾なんだよ」

はちきれるほどたわわな肉塊に埋もれて、政吉は息も絶え絶えになっていた。

「もうそろそろ此奴は気絶するころだろう」

両手を後に突張って、顔の上に踏み跨がられた重圧と肉扼を必死に頑張っていた政吉の腕の力が抜けた。

栄子が、ちょっと気を抜いて太股の力を弛めてやると、政吉はバタリと栄子の足の間に倒れて、フーフーと荒い息使いをした。

「フン、だらしない男だ……」

すでに、いままでも閨房では、栄子が主人で、政吉は奴隷のようにかしずく夫でしかなかったことは、ここ一年の間に、はっきり格差がつけられていた。それは政吉も認めていることだが、この機会に「夜の主人」だけでなく、昼間も栄子が主人として君臨する権利を獲得しておこうと考えた。

「何から何まで意気地がないんだから、もっ

と男らしくなれないのかい」

足の間に仰向けに倒れて、口を大きくあけて、息をさらしながら、政吉は栄子を見上げる。

「もしも俺が男らしくなったら、お前と喧嘩して夫婦別れまで行っちゃうだろう」

それはできない。金輪際、避けなくてはならない。

そのためには、弱い男になるよりほかないのだ。

「ふふふふ、ばか！」

勝ち誇った栄子は、裸の脚をあげて、夫の顔の上にペタリと足のうらを押つけた。

「ホラ、これをはね返してごらん、男なら」

足をのせる瞬間、栄子は政吉の眼を見ないように、足の指で眉毛の上までふさいで乗せた。内心、政吉の怒りのまなざしを見るのが恐かったのだ。

だが足を乗せられても、政吉は逆らう気配を見せない。

栄子は足にちよつと力を入れてグイグイと踏みつけながら、足の先から政吉の眼を出しどんな眼の色をしているかを見た。

だが政吉は両眼を閉じて、諦めきった表情をしている。

フニヤリフニヤリと出っぱった鼻が顔へめりこむような、くすぐったい感触が、栄子を快くさせた。

「こんなもの跳ね返すのは、わけはない。だが、俺はいま罰を受けているのだ。能なしの夫としての屈辱を甘んじて受けなくてはならないのだ」

政吉は、そう思って我慢した。

そのくせ、苦しめられれば苦しめられるほど、欲情がたかぶってきた。

これは、どうしたことだろう。

殴りとばして

政吉は独り者の頃、女を抱けない夜は、よくエロ雑誌を買ってきて読んだものだった。

その中には、風俗なんとかと言うのや、奇談なんとかという変態性のことを書いた雑誌もあって読んだ。

サドだとかマゾだとか、同性愛だとか、さまざまな変ったセックスが描かれてあったが政吉はそのどれにも興味をもたなかった。

「どれを読んでも空想の世界だ」

と政吉は思った。現実には数々の女を体験している政吉には、嘘が眼についた。

好奇と空想の世界。

それは誰にもあることだ。政吉の空想の中では自分はむしろサドを好む方だと思った。

女を痛めつけて喜ぶというほどの激しさはなかったが、捨てた女が泣いて怨むのは、可哀想だと思う反面に、すでに新しい女に心が傾いていたから、男としての優越感を味わう気持もあった。

他人の細君と密通し、夫に感づかれて夫婦間に大きな波紋がおきたことを、女を通じて知ることにも悪魔的な快感があった。

そんな経験を、さんざんしてきた政吉である。

だがいま、栄子に顔を足で踏まれている。

若いときは恋人の二人や三人は欠かさなかった政吉には考えられぬことだった。

「女なんかに足で踏まれたりしたら、そんなことした女は顔のはれ上るほどは倒してやる。唄の文句じゃないが『殴りとばして別れよか』で、いいじゃないか」

だが、そんな屈辱を受けたことは一度もないし、また夢想もしなかったことだ。

それが今、現実には、しかも最愛の女房に顔を足で踏まれて嘲罵を浴びているのである。

だが若い頃と違って、怒りをほとばしらせ

ないのは、どうしたことだろう。いや、怒りを感じなくなっているのは、どうしたことなのか。

ことによると、昔読んだ本に書いてあったマゾヒズムというのが、俺の心の中で目をさましたのであろうか。

苦しみの中に感じとる何とも言えぬ陶醉の境地。しかもそれが、おのれの欲情をかき立てているではないか。

いま彼は、栄子の折檻が済んだら、夫婦としての営みを望んでいる。

それを円滑に遂行するためには、ここで栄子の御機嫌を損じては、まずい。

そういう打算のもとに我慢し、あまんじて女房の足下に屈従しているのであらうか。

たしかに、それもある。

だが、そればかりではない。では、あとになががあるのだ。

政吉の理性では解明しがたい官能のうずきが、被辱によって芽生えているのだった。

相対的に栄子は、口ごたえひとつできずにおとなしく従っている無力な夫に、サジスチックな興味がわいてきた。

最近、夫婦の交わりの前に行う前戯、栄子の好む前戯の方法があった。

その方法は、年とった夫と若い妻との間によく行なわれる、女性が優越感を満足させる方法であった。

それが次第に強くなり、方法も少しずつ、変化していった。変化の方法は栄子の方からリードして行った。

だが顔を足で踏みつけてやったのは、今度がはじめてであった。

「とうとう、ここまで落としてやった。これが妾の亭主なのか」

栄子は、足のうらにその実感を確かめながら、

「妾の足の下で、ひき蛙のようにもがいている可哀想な男が、妾の亭主なのか」

完全に征服してみると、そこに頼りなさ、空虚さが、わいてくる。

これほど素直にしている夫が、ふびんにもなってきた。

「この位で許してやろう——」

あとは女房らしく、なぐさめてやろうという気になった。

「御免なさいね。妾、怒ると、つい乱暴になっちゃうのよ」

栄子は政吉の傍に立ったままで、いたずらっぽく笑うと、パンティを脱いで、フワリと

政吉の顔の上へ落としたりした。

政吉は、かぐわしい匂いを嗅ぐと俄然、元気が出た。ムックリ起き上って、栄子の太い脚にタックルした。栄子は足をとられてドスンと尻餅をついた。

「あらア、何すんのさア」

甲高くはずんだ声は、娘のような嬌声だった。政吉は栄子の、むっちりとした脚の間に突進した。

栄子はハッとしたり。

いつもする前戯だから、どうということはないはずだったが今夜ばかりは違っていた。

政吉の唇が内股に這い上ってきた瞬間に、栄子は清太郎との情事が脳裡に浮かんだ。

いつもは快く迎えてやるはずの、このうすのろの「ペット」を、今夜はなぜか拒むポーズをとった。

だが政吉は、委細構わず突入を続行した。

「ブン、何も拒むことなんかないんだわ。妾は店のためを思って、正しいことをしてきたんだから。それに、此奴は奴隷で妾は主人なんだから。奴隷が好んでする奉仕を、主人の妾が、なにも羞かしがることなんかないじゃないか！」

栄子は、ふてぶてしく両脚をひらいた。

政吉は「おあずけ」を許されて、餌にとびつく犬のように首をのばしてきた。

もうひと息で「餌」に口が届く間際で、栄子は政吉の突進を両脚で、はばんだ。

それは夫に対する妻としての「良心」の残滓であるのかもしれない。

だが拒む理由はないのだ。政吉の強引さに押されるように拒絶のポーズは解かれた。

いつものことだが、今夜は処女がはじめて接吻された時のような、ジーンとしびれるシヨックがあった。

政吉は積極的だった。一切の疑念を捨て去った姿だった。

それは奉仕の態度ではなく、挑みの姿であつた。

栄子は眼をつぶり、自分に堪えた。まぶたに清太郎と政吉の顔が二重焼きに映って、笑ったり、怒ったりしていた。

そのあと、政吉は普通に挑んできた。

今夜の政吉は、すばらしかった。

二十代の若者のようにはげしく燃え、力強く栄子を愛した。政吉にこんなスミタナが残っているとは、政吉自身も考えられないくらいな強靱さをみせた。

ふたりの愛がひとつにとけ合って、無我の

境地に没入できた。

栄子は政吉の積極さに満足した。

快い疲労。二人とも、汗をビッシヨリかいていた。栄子は政吉の額の汗を、やさしく拭いてやりながら、

「あんたも若いのね。見直したわ」

「そうかい、そんなに思えたかい」

政吉は嬉しさがグーッとこみあげてきた。

妻を満足させ、夫としての機能を完全に果たし得た欲び、いまさっきの屈辱から愛情と信頼をこめた妻の言葉をきけようとは、政吉にとつては望外の歓喜であつた。

「栄子、俺はお前を愛している。ほんとに心から愛している。お前が居なくては生きていられない……」

栄子の豊かな乳房の間に顔を埋めて接吻した。眼の先が桃色のヴェールで掩われたような幸福感に、政吉の眼から涙があふれて栄子の乳房を濡らした。

「俺はしあわせだ。お前のためにこそ生き甲斐があるんだ。一生、捨てないでくれ」

ジーンとこみあげてくる熱い涙は、とめどなく乳房の谷間を流れて行った。

政吉の涙を受け栄子の胸もあつくになった。「わかってるわよ、あなた。妾だって、あな

たを……」

子供のように乳房の間で首を振る夫を、栄子は右手で抱えて、薄くなった頭髪を撫でてやった。

善さそうな男

五日ほどして富岡善夫よしおの荷物が届き、その翌日、善夫が現れた。

「あら、いらっしやい！」

栄子が娘のような華やかな声で客の前も構わずに迎えたが、善夫は栄子に会釈しただけで、まっすぐに政吉の前へ行き、

「富岡善夫です。今日から、お世話になります。よろしく御願いたします」

と丁寧に挨拶した。

「ああ、よく来てくれたね。こんな田舎のちっぽけな店で気の毒だが辛抱してくれや」

「ハイ、旦那のことは、うちの旦那から、かねがね、お噂を承わっております。どうぞよろしく、御指導下さい」

丁寧に頭を下げると、栄子の前へ来て

「先日は失礼いたしました。遅れまして申し訳ありませんでした。今日からお世話になります」

政吉に向かつては、にこやかな笑顔で挨拶していたのに栄子の前へ来ると笑顔が消えてムスツとした顔になったのが、栄子には気に入らなかったが、顔では愛想よく笑って「ほんとによく来てくれたわね。あれから、いつ来るかいつ来るかと、首を長くして待ってたのよ」

「荷物、届きましたか」

「エエ、昨日ね。二階においてあるわ。二階の六畳があなたの部屋ですからね」

「お世話さまでした」

「疲れたでしょう。裏に風呂屋があるから、ひと風呂浴びて、荷物でも整理しながら、今日は、ゆっくり休むといいわ」

「ハ、有難うございます」

善夫はチラと、待っている客の頭数を見て「大分混んでるようですから、手伝わして頂きます」

「あら、いいのよ、今日は」

「いえ、旦那と奥さんが働いていらっしやるのに、僕が休むわけに行きません」

プツリと言いきって政吉の方へ行き、

「恐れ入りますが白衣を貸して頂けますか。」

荷物の中にはあるのですが、出すのが面倒ですから」

「それは構わないが、まあ一服して休めよ。疲れたろう」

「ハイ、有難うございます」

善夫は白衣を借りて直ぐ仕事にかかった。汚れた作業服に草履ばきの若い工員に、

「いらっしやいませ。どうぞ……」

都会風の洗練された物腰で応待した。工員は少なからず面喰った。

「あんた、東京から来たの」

「ハイ、どういう風にいたしましょう」

「ど、どういう風って……」

「では普通でよろしゅうございますか」

仕事にかかると、栄子や政吉が話しかけても「ハイ」とか「イイエ」とか、短い返事しかせず、仕事に打ちこみ、みるみる頭数をこなして行った。

その腕は、前の友市などとは比較にならぬほど熟達していた。

「清太郎は、えらい奴をよこしたもんだ」

と政吉は驚いたくらいだった。昨日までは二人きりなので定刻の七時には終らず、政吉などは八時、九時までのびることがあった。

それが、今日はいつもの倍近い客が来たにもかかわらず、六時半には綺麗に片づいた。

「今日は善夫さんも疲れてるだろうし、これ

で閉めようよ」

早仕舞いして善夫を風呂にやったあと、

「たいした腕だなあ。いい職人だ」

「だろう。ところで、お給金いくら上げたらいいかしらねえ」

「まだ決めてなかったのか」

「腕を見てからということを決めなかったんだけど、友市とは段違いだから、五万は出さなきゃならないねえ」

「そんなには要らないだろう。地方には地方の相場がある。三食つけて二万五千というのが相場だ」

「そりゃ半人前の若僧だよ。十年以上も年期が入ってるんだから」

「だから奮発するんだ。まあ独り者でもあるし、最初は四万五千円でいいだろう」

「清太郎さんに悪くない？」

「四万五千なら恥かしくない」

栄子は迷った。一応、三カ月で交替という

約束である。ほんとに三月で替るのなら、五万でも六万でも払ってやる方が、清太郎に対して聞こえがよい。だが栄子は何とかして

善夫を引きとめようという肚があった。それには最初から一ぱいの給料を払うと値上げできなくなる。

前の友市でこりているので、三月たったら
思いきって値上げすることを考えて、同意し
た。

「妾は言いにくいから、あんたから言ってお
くれよ。あんたが主人なんだから」

栄子は都合の悪いときは政吉を「主人」に
した。

おいしいえもの

夕食の膳は善夫を迎えて、いろとりどりの
料理が並んだ。

「あんた、独り者だって言うけど、もうそろ

そろ、お嫁さんもらったらどうなの。東京に
好きなひとが居るんでしょ」

「とんでもない。まだ、そんな気持ちになり
ません」

善夫をじっとみつめる栄子の眼に、情欲が
ギラギラ輝いているのを見て、政吉は眉をく
もらせたが、それをふりはらうように、

「ところであんたの給料だが、四万五千円で
どうかね。まあ田舎じゃ、あんたぐらいの年
だと三万五千か四万というところだが、何せ
うちは朝が早いし、お前さんの腕は大したも
んだ。そこで、うちとしては、これが目一ぱ
いのつもりだが」

「ハイ、結構でございます」

存外あっさり、決まってしまった。

栄子は酌をしながら善夫に話しかけるが、
話題はどうしても仕事の話になり、東京と地
方のお客の差。昔はこうだったとか、政吉と
の話が多くなり、栄子の話にはのってこない
のが癪にさわった。

「ちき生、まじめづらしてやがるけど、いま
に必ずモノにしてやるから！」

酒に紅潮した善夫の整った横顔を見ながら
栄子は、どうして誘惑してやろうかと考えて
いた。

(つづく)

マニア・レポート。。。。

マニア散歩記

赤井

茂

いつの間にか数冊のスクラップ・ノートに
は、集った我が性の遍歴とも言ふべき、浣腸
に関しての新聞、雑誌の切抜きが一杯に貼ら
れて分厚くなった。ページを繰って見ながら
我ながら良く集めたものだ、と感心するので
ある。

一枚の挿画にも、数行の記事にも、それぞ
れの思い出がある。時には一枚の挿画だけに
数百円も払って入手したのもあり、また数行
の浣腸記事のために、人手を煩わして入手し
たものもある。しかし決して後悔の念にかられ
たこともなく、むしろ楽しく素晴らしく思う

のも、マニアなるゆえんなのだろうか。久し
ぶりにページを繰って、いろいろと回顧して
みたいと思うのである。コレクションは終戦
直後から始まった。戦前の物も少々ある。二
度と入手できない挿画もあり、末長く我が人
生の宝としたいと思っている。二、三紹介し
て見よう。

婦人雑誌の附録の広告の抜萃記事である。
戦前もので「主婦の心得・医師が来るまでの
急病人の手当法」と、大きな見出しがあり、
家人の心がけ……家庭に急病人が出来た時
急に高熱を發して素人に病氣の見分けのつか
ない時、医者が来るまでに若し適当な応急手

当を心得ておくならば、医者も患者も大助かりな事は勿論、それに依って危い一命を取り止める事もあるのです。

最も間違ひのない手当法……素人が下手に手当をしてそのために病気を亢進させる事は勿論、恐しい事です、そう言ふ心配の絶対にはない素人でも何でもこれだけは是非心得ておきたいと思ふ応急手当法は、浣腸であります。

先づ第一に浣腸＝便秘とか急性腸カタル、と言ふ種類はもとより、婦人の頭痛、メマヒ食慾不振、突発的に来る子供のヒキツケ、発熱、エキリ等には、先づ浣腸をしておいてから医者を迎へて下さい。

軽便な浣腸器＝併し浣腸と一口に言ってもなかなか厄介な事で、突然な病氣の際など、あわてたりしてかへって手がかかります。平常、浣腸のすぐ出来る準備をしておくことが必要です。この頃、大層重宝なセルロイド製の浣腸器が出来まして、美しい容器に薬液が入って居り、その先端に孔をあけますと、そのまま浣腸器となつて……。

と、あり、イチジク浣腸が誕生して間もない頃の広告なのです。参考までにこの頃の価格は子供用十銭、大人用十五銭、徳用十七銭とあり、大いに価値ある記事だと思つてゐるのです。

病氣のためとはいえ、苦痛と恐怖のため、

泣きわめきながら否応なしに施術されて、最後にペコリというセルロイドの音に、今となつて遠い日の記憶を想起する人もあらうかと思ふのです。

以前、透明なアンブルのが登場したとき、こんな話を聞いたことがあるのです。

「どう、奥さん。A子ちゃんの具合は？」

「エー、大分良くなりました。でも、お通じがないものだから、浣腸を買ってきたの」

「そう、大変ね」

「でもね、今は便利な浣腸になつたものね。中味が見えるのよ」

「アラ、ほんとうね。私達の頃はセルロイドの固いので浣腸されて、痛いのと苦しいのでイヤでならなかったものだったワ」

と立話していましたが、私には楽しい一駒でした。

いろいろ集めた記事の中には素晴らしいものもあり、また面白い記事もあります。現在でもこのようなところもあるのかと思われる実際の話なのです。ある学校の先生が市内から五十軒もはなれた僻地での話。

先生が転任して間もなくの出来事。医者は月に一回か二回しか巡回診療があるのみ。それ以外は全くの無医村なのです。ある日、病人が出たのです。学校の先生ということで行っぱり出され、行ってみると、十二、三才の少女が高熱で苦しんでいるので、良くみてみ

ると、お腹がポンポンにはっているので、便秘しての高熱と判断し、先生が転任する際に救急用として持ってきた医薬品の中からイチジク浣腸を取り出して、その母親に浣腸の仕方の説明して帰ったそうです。翌日、母親がきて、昨日すぐ浣腸したところ、ビクビクするほど排便があつて高熱は嘘のように下つたとのことで、良く聞いたところ、近所の人も浣腸なるものを知らなかったという話で、この事件があつてから、この先生は一躍、名医にまつり上げられてしまったとのこと。

また、これは後日談ですが、救急薬でいろいろと間に合わせてきたある日のこと、少々脳の弱い娘さんが先生の部屋を訪れて、先生に、「かんちようしてくんろ」と言ってきたそうです。ちようど食事中であつたので、しばらく待たせてからイチジク浣腸を渡してやったのですが、娘さんはそのまま帰って行ったのです。三十分ほどしてから、また先ほどの娘さんが「先生、かんちようしてくんろ」と言つて部屋に入ってきたのです。先生が何べん説明しても納得がいかず弱っていると、ちようど先生のところへ遊びにきていた別の娘さんが笑いながら「先生、浣腸じゃなく、勘定してくれ」と言うのだ、とのことで「浣腸と勘定」の飛んだ落とし話だという面白い記事なのです。僻地の生活も、素朴で全く楽しいものである、という先生の随筆でした。



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

甘

い

空

想

有田久美子

源氏鶏太の小説に「御身」と云うのがありました。一人の少女が自ら希望し三カ月、三十万円で或青年社長に自分の凡てを売り、その期間だけ煮て喰おうと焼いて喰おうと自由に身柄をゆだねるテーマで自分が買われると云う行為故に不思議に魅せられた事がありました。昔パピロンの奴隷市で女奴隷が鎖で吊るされ、体のすみずみ迄その良否を調べられ油ぎった王侯、貴族に買われてゆく光景を夢想します。そうです。それに書く事でひっそ

りと、しかしどんなハレンチな夢でも描くことが出来るんですから。これから展開される私の願望も次から次へと拡大する私のモウ想劇の一幕だと思って下さい。どなたか、この二十三才の女を一人買って下さい。丸顔で色白ですがそんなに目立った特色のある顔はしてませんが体だけが普通以上？ だと思っています。それぞれ何程か自分で測った事はありませんので、すみずみまで調べ上げて、宜しかったら買って下さい。

一人でも複数でも良いのですが、せり売りにして一番高い値段でと云いたい所ですが、それはその時の事にしておきます。何故なら一番高い値段よりも、思いきりみだらな男に買われたいのです。それは素敵な方と見合して、じっと見つめられた時の胸のおのきと云いましょうか、出来るだけ短いミニスカトから出ている膝小僧に集まる視線に、ジーンとくる恥ずかしい刺戟とでもいった様な期待なのです。

こんな事を云う様では、この雑誌の多くの読者よりずっと平凡であたりまえの、一寸した好奇心に心をワクワクさせている程度の女の子なのかもしれません。毎号私を魅きつける記事は、辻村さんのカメラハントの他は二三の小説位で、他の多くは恐ろしい、ちょっと近づき難いことが多いのは正直いって事実です。出来たら次の様な男性に捕えられたいと思います。年齢は四〇〜五〇才以上。ただ

「はい、では幾らですからどうぞ」と云われて、のこのこ出かけて行くなどと云う心臓はともありませんので、だまされてつれて行かれるのでも、借金のカタでもよいのですが最終的には金の力の他に暴力で自由にされ、思いのままに罵られてしまう為の、或程度以上の腕力を持った方ならばどんな御老人でも良いのです。

決してスマートな若いハンサムな男性は望みません。かえって一見淫らで冷酷な、長い間一人の女の子を計画的にネチネチと、どの様な恥ずかしめを与えようかと舌なめずりしている猥雑な男がよいのです。どうか貧乏くさい気の弱い方は私を買わないで下さい。バカバカしくお金持ちの好色漢に征服され飼育される方が、ずっとたまらないと思います。

私が想像も出来ない様な、変態的でエロチックな恥かしめをお前の身体に加えてやると名のり上げて、私に呼びかけて下さる方の出現をばーっと夢みます。

第二に、せめて一週間。長くても最初は十日位で許して下さい。偉そうなことを云っても先ず丸一日、罵り責め続けられたら、きつと音を上げてしまうでしょう。そしてもう金輪さいこんな体験はこりごりだと思わない様に、全く未経験の処女を翻弄する手順やコツは、充分心得ていらっしゃる方ばかりでしょうが、興にのって金にあかせて限度を忘れられると、とってもこわいのです。

第三に、決してムチで打ったり、体を傷つける様な事はしないで下さい。読者通信に出る女性の方の希望の多くの方の様に、女は大体、血を流す様な責めは嫌いで、もっとムードのある恥ずかしめを望むものではないでしょうか。そして体をけがさない様に、などと云ったら余り虫がよすぎるでしょうか。

その代り、どんな屈辱的な恰好に縛られても、逆さ吊りでも、禪、浣腸（私はそれにすぐく羞恥を感じます）櫛りでも我慢します。全裸に晒してハリツケのままお友達を招いて肉体鑑賞会をしてもよいのです。そういう方

々が、お前のような奴はこうして虐めてやると、具体的に誌上に名のりを上げて下さい。私は猫に捕えられしゃぶられて「ヒイヒイ」泣いている小ねずみの様に、小さくふるえながら、体をほてらせてそれを読みふけることでしょう。

淫靡な館に大金で購われ、力づくでつれ込まれた私に加えられる淫らな責めのはじまりは、必ず「ぬがされる」と云う事でしょう。「どんなエッチな事でも痛くないなら我慢する」と心で思いながら、いえ「我慢出来ない限度まで追いつめて！」とか「耐えようとしても耐えられない状態で正気を失わせて！」などと云いながら、平凡なボーイフレンドのつき合いしか知らず、一度も裸身など男の方の眼に曝らした事もない私は、きつと、せい一杯あばれる事でしょう。

私の生殺与奪の権を握った男は、私を柱に縛り上げて、衣服をナイフで切りさいてゆくでしょうか。もっとも恥かしい恰好に縛り上げて、引きむしられるかも知れません。

もの狂わしい身も心もとろける様な空想が夜毎に、私の想念にクルクルと転換しはじめぐっしりと冷汗で肌を濡らす今日此頃の私なのです。

真赤な絨毯を敷きつめた広々とした洋間には、豪華な応接セットが並んでいます。その一つに深々と腰を下ろした彼はプロレスラーの様な黒いショートパンツ以外には毛むくじやらの裸体をさらし、眼を細めては、不動の姿勢でその眼前に立たされた私の肢体を、上から下へゆっくりと見つめています。ワンピースの服のままの私ですが、静かな薄笑いを浮かべる男の顔をとでも見てもらえません。

「体を全部、調べさせてもらおうか」

「どんな恥かし事をしてもいいと云ったね」

「……」

私は「ああ、嫌っ」と声を上げたいような衝動に突きあげられながら、恐ろしくて声にもなりません。ただ首を「いや！ いや！」と振っただけでした。

「痛い事は何にもしないし、とって喰いもしないよ。その代りといっちゃ何だけど、お望み通り、死ぬ程恥ずかしい事をしてやるぞ。いいね、さあ、うんと泣きな」

そして急に大声で、「両手を上にあげなさい」と命令しました。

椅子に腰を下ろしたまま彼は、私の洋服の上から、そろそろと撫ではじめます。その淫らな感触に、私は夢中で顔を振り、体をくね

らせてもがきました。もっと激しく抵抗出来たのですが、両手をあげたままじっとしてないと、服を一枚ずつぬがしてゆくと云うのです。一回反抗する度に、その罰として一枚引きはがすと宣告して、彼の十本の指先が、脇腹から胸へ、そして背中からヒップにかけて、動き廻るのを必死でこらえ、こらえ切れない切なさ、低いとぎれとぎれの悲鳴と哀願で耐え続けていたのです。

一枚のブラジャーと薄いビキニパンティだけで顔を覆ってうずくまり泣きじゃくって許しを乞う迄何分かった事でしょう。云いつけにそむいてしまった為に、次にもっとひどい攻撃にさらされる緊迫感に、全身を熱くほてらせていると、予期した通り「縛り」が始まります。

私は体を出来るだけ押しまげられ、いも虫か荷物の様に固定される責めと、又反対に、中に浮き上る程両手万才に引き上げられ、両足を大の字にこれも、思い切り引きさかれた露出的な縛りを空想しおのきます。

応接セットのフカフカとした椅子が用いられます。両腕を後に縛られ、椅子に坐らされて、私は両足を思い切り強引に持ち上げられました。両足を、椅子の両肘に跨らせられる

のではなく、もっとおりまげて、顔の両側に引きつけられたまま椅子の裏側に縄を廻してギッチリと固定されます。最後の上一枚ずつが脱がされるのは、息苦しいまでの緊縛のまま、出来るだけゆっくりと、そして自由に動かせないで済められる方が、残酷さがずっと強く感じられるのです。

でもここまでされると、とってもプレイだなどと云っていられません。さらけ出された太腿のつけ根から敏感な内股にかけてジワジワと何かの穂先で縦横に擦り撫ではじめるのです。

でもいいんです。予定通り男は——御主人様は、気ままにそして冷静に、楽しんでいらっしゃるれば宜しいのです「もう……許して！」「だめ！ かんにんしてえ！」などと、死ぬ様な悲鳴を上げる女の子なんぞに、これっぽっちも同情などなさらないで、処女の女の子なんぞ思いもつかない行為を実行なさればよいのです。

そうです。彼はこういう時は、いつもこう云います。

「なんだ、泣き声がたりないね。この位は平気なのかな」

「ほら、ここはどうだ」

彼の手に握られたカミソリは、ブラジャーの紐を「プツンプツン」と切ってゆきます。

そして「ほら、あんまり動くとずりおちちゃうぞ!」と云いながら、やおら細紐で、今度は胸のふくらみの上と下を二重に、椅子の裏にギッチリと固定してしまいました。これで、上手にピンで止められた蝶の様に、私の肢体は恥かしい姿勢に折りまげられたまんまただくねくねともだえるばかりです。

そのうえもう既に半分むき出しになっている胸から、ブラジャーをそっと持ち上げてしまいました。「ああ、恥かしい……」胸の中がスーと寒い風が吹き抜けた様で、それでいてカッと熱が噴き出る様なたまらない恥かしさで、私は猛烈に首をふってあばれました。眼をつぶってはあき、あいてはつぶって私は羞恥と戦いました。何故って、彼は仁王立になって眼を細めては、とてもいやらしい事を云うのです。

「ほう、かわいいおっぱいだ。うん、けどもう一寸訓練すると、もっとつやがでるぞ」とか

「今、きれいにクリームをぬってあげるよ」などと云って、私の顔を、のぞき込むのです。眼をつむると筆先の恥かしい感覚が一層

こらえられないので、又眼をあきます。

「なんだ、まだそんな声しか出せないじゃないか」

外側からまるく円を書く様にして頂点までゆっくりと廻しながら筆先にこめられたクリームで乳房がぬりつぶされる迄、きっと私は拷問に苦悶し続ける囚人の様な表情で耐え続けたことでしょう。

でも気も狂う程の本当の責めはこれからでした。私の体に残された最後の小さな一枚は下半身の無理な姿勢の為ピンと張って肌を覆っていたに違いありません。あんな薄い布ですもの透けて見えるのではないのでしょうか。そのすぐ後に彼は坐りました。彼の吐く息が僅かに私の肌にかかります。45°いえ90°近くも開かれています。頂点の部分に、そっとカミソリで白い薄い布を縦に「スー」と切り裂いたのです。真中から左右に自動扉でも開く様に切り開かれたのは云う迄ありません。

この強烈な瞬間は、とても言葉では表現出来ません。唯、緊縛された白い肉のかたまりが、真赤な火の様な羞恥の結晶となって、正気を失った声を二度、三度と叫んだ事はたしかでしょう。

彼はしかし、何もませんでした。きっと

甘いシャンソンの調べでも楽しむ如く、むしろ私から少し離れて、私の全裸に近い像をじっと眺めては、何かを飲んでいるだけです。

『さらしもの』そうです。このスタイルのまんま、全く無防備に放置されたままでした。

一週間の捕われの身になって、その第一日の淫らな責めはこうしてはじまったのです。それからとうとう気を失う迄、言葉のいたぶりがこの『さらしもの』に対して続行されたのです。次から次へと発する彼のそれは、嫌らしい、ハレンチな質問と要求。そしてどうして答えられない命令で、身も心も真赤な雲につつまれて、ただよう様な恥かしい甘美な一日が終わりました。——そして私の空想はフーッとここで一息ついて現実にもどってしまふのです。

いいえ、二日目も三日目も、もっともっと凄惨、計画的で徹底的な責め——身をよじる様な甘い拷問が、チラチラと頭をよぎるのですが、とてもペンにする勇気がなくて、そして空想に疲れてしまうのです。どなたか男の方で、空想家さんがいましたら、この続きを男のペンと心で、すさまじくも又華麗に、つづけてはいただけませんかでしょうか。

緋

ひ

縮

ぢり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(第十二回)

白鳥大蔵

泥棒猫

見世物師やレツケの岩松は、腹のなかで、しめたツと手を叩いた。巨大な赤鼻が、思わずうごめく。

お仙が、とうとう吐いたのだ。

立花屋久六の胴巻きのなかに、抜け荷の割り符が隠されていることを、お仙はついにしやべってしまったのだ。

この数年間面倒をみてもらった旦那の久六だが、病的なほど執拗な岩松の攻撃の前にはさすがにしぶといお仙も、降参せざるを得な

かった。

いつまでもこのまま抵抗をつづけていたら殺されるか片輪にされるか、そのへんがオチだ。

お仙にしてみれば、恩だの義理だのと言ってられない。

「いま言ったことは、まさか、嘘じゃねえだろうな？」

岩松が、いかにも猜疑心の深そうな目で、お仙を凝視した。

「ここまで追いつめられて、どうして嘘なんかつけますのさ。冗談じゃありませんよ」
縄を解かれたお仙は、もういつもの自分に

もどって、媚態とふてくされを、交互に使いわけている。

「もし、一時のがれの方便だったら、ただじやおかねえからな」

岩松は、凄んだ声音でいった。

「ご念にや及びませんよ。あたしの言ってることが、嘘や方便だったら、あたしのこのからだを、八ツ裂きにしておくんない」

お仙の口から、ようやくこの女らしいタンカが出た。

「よし、その言葉を忘れるな」

岩松は、にやりと笑ってうなずいた。そして、腰をかけていた木箱から立ちあがった。

立花屋久六の懐中にあるというオランダ歌留多の半片を、さっそく奪いに行くつもりで岩松だ。

ぐずぐずしていると、またどんな邪魔が入らないとも限らない。

その久六は、この裏庭にあるべつの土蔵のなかに投げこまれて、手負いの獣のように、うごめいているはずだ。

寺尾半九郎に右腕を斬り落とされ、その傷口も癒えないうちに、こんどはお静のかんざしで、右眼をつぶされた久六である。

いくら不死身で執念ぶかい久六でも、ここまで手ひどくぶちのめされては、もう、立ちなおることはできまい……。

岩松の胸中は、欲と色とをひとり占めにできる期待で、妖しくふくれあがった。

こんな幸運に出会えることは、一生のうちそう幾度もあるもんじゃねえ……。

立ちあがって、扉のほうへ歩きかける岩松の背中へ、

「親分、お供しましょうか」

と、如才なく子分の定が声をかけた。

「その土蔵へ行くだけだ。供なんかいらねえ。いや、待てよ。お仙、お前だけこい」

岩松に呼ばれて、お仙は露骨にいやな顔を

した。

そのお仙をみて、岩松はゆがんだ笑いを吐きだしながらいった。

「お前は、おれの女になったはずだぜ。それとも、まだ久六に義理だてするのか。おい、お仙。お前、まだ久六に惚れているのかい」

「よしてくださいよ。惚れてなんかいるもんですか。あんな化け物みたいなやつ、いまさら惚れちゃいけないけど……」

「いやなら、いやでいいんだぜ。無理にとはいわねえ」

凄んだ岩松の声音に、お仙はあわてて尻をゆすって立ちあがった。

「行きます、行きますよう。だから、そんなこわい顔をしないでくださいよう」

岩松は、むくんだような赤黒い顔を、二人の子分にむけていった。

「おい、お静とお雪を逃がすんじゃねえぞ。この二人は、これからのおれの仕事に、大切な人質なんだからな」

「へい」

と、こたえて定と政は頭をさげた。

頭をさげながら、この二人の子分は、一瞬同じことを考えている。

親分とお仙のアマがこの土蔵から出たすき

をみて、お静とお雪の肌に、いろいろと悪戯をしてやろう……。

ヤレツケの見世物師の子分は、しょせん泥棒猫のような卑しい神経しか持ち合わせていない。

「いいか、しっかり見張ってるんだ。逃がすんじゃねえぞ」

岩松が、かさねていった。

「へい、かしこまりました」

二人の子分は、腹のなかでべろりと舌をだしながら、そろって頭をさげた。

岩松は、お仙に顎をしゃくると、肩を左右にふって土蔵の外へ出た。お仙を、もう情婦扱いにしているのだ。

しかたなく、お仙もあとからつづく。

定と政は、それを見送ってから、土蔵の金網扉を、ふたたび内側からしめた。

こうるさい岩松親分は、当分のあいだ、この土蔵へはもどってこないだろう。

二匹の泥棒猫は、示し合わせたように、柱に縛りつけてあるお静とお雪へ、改めて卑しい視線をむけた。同時に、ごくりと、のどを鳴らす。

黒光りする二本の大黒柱へ、うしろ手にされて、きびしい縄目で縛りつけてある母娘だ

った。

うすぼんやりとともる金網行灯の灯が、その二人の縄にくびれた痛々しい裸身を、ほの白く、そして、なまなましく浮かびあがらせている。

柱に縛りつけられたまま、かすかにあえいでいる二人の女の姿態が、定と政の眼には、別人のように新鮮にみえた。この土蔵のなかにいるのは、いま男女四人だけなのだ。

息のつまりそうな、熱っぽい、ただれた、澁んだ空気が、さっきよりも濃厚に、うす暗い土蔵のなかにたちこめた。

たがいになすきあうと、定はお静の膝の前へ、そして政はお雪の前へ、猫のように足音を殺して忍び寄っていった。その不穏な気配を敏感に察して、お静とお雪は、ひくつと息をのみ、全身をすくませた。

|| う め き 肌 ||

「お願いです、あたしはどうなってもかまいません。お雪ちゃんだけは、お雪だけはゆるしてやって！」

お静は、縄に固定された胸を、必死によじってさげんだ。さげんだつもりだったが、激

しい疲労のために、声はでなかった。

むせび泣くような、かすれた声しかでなかった。

唐辛子粉をまぶしたタンポ槍の先端で、さんざん突きなぐられた肉体は、ことに下半身が、まだ炎のように燃えていた。まるで火傷をしたように、ヒリヒリと熱かった。

身をよじるたびに、そこは激しく痛んだ。

その痛みをこらえるお静の額から、汗がしったり落ちていた。額だけではなく、白い肌のすべてから汗がふきだし、油をぬったように光っていた。

「お雪だけは助けてやって！」

お静は、汗にまみれながら二人の男に哀願をつづけた。

お仙がタンポ槍の攻撃に屈服して、割り符の隠し場所を吐いてしまったおかげで、お雪だけは、そのタンポ槍の難をのがれたのだった。

しかし、餓えきった政の、狼のような眼をみたとき、お雪は絶望した。

こんどこそは……こんどこそは、もう駄目だ、と思った。狼の牙や歯に、自分の白いやわらかいからだ、むごたらしく食い荒らされる光景が、お雪の脳裡によぎった。

お雪は眼をこじ、歯をくいしばった。

紅白の布を巻いた竹の棒の両端に、お雪の両足は左右に裂かれたまま縛りつけられている。女の身にとって、これ以上の無防備はなかった。

となりの柱に縛りつけられている母親のお静は、しかし、あきらめなかった。

いまここでお雪のからだを狼どもの牙に汚させてしまったのは、夫の天津屋彦兵衛に対して、申しわけない。お静には後妻としての、そして継母としての使命感があった。

「やめて、やめておくれ。その娘だけには、手をつけないでおくれ！」

お静は首をのばし、顔をくしゃくしゃにしてがちがいのようになめいた。

お雪と同じように、紅白だんだらの布を巻いた竹の棒の両端に、左右の足首を縛りつけられたままの姿だった。それが、どんなにみじめな、あさましい恰好か、お静にはいま自分をかえりみる余裕はなかった。

「娘だけは、かんにんしてやって！」

うしろ手に、固くいましめられた身を、ねじるようにふるわせて、二人の男に哀願をつづけるお静だった。

縄と縄のあいだにしめあげられた女盛りの

豊満な乳房が、声をあげるたびに、ゆらゆらと揺れた。

うす赤い左右の乳首が異様なほどふくれて固くとがっていた。乳房の色はむっちりと白く、青い筋が透けてみえるのが、むしろ神秘的な美しさだった。

「見れば見るほどいい女だ。たまらねえ」

定が、じつくりと上から下までのぞきこんで、うなるように感嘆した。しまりのない唇から、よだれがこぼれそうだった。

「これほどのいい女が、こんなあさましい姿で涙を流している図なんてえのは、ちょっとやそつとで、お目にかかれるもんじゃねえかな」

政が合槌をうった。

お静の必死の哀願も、頭に血がのぼった二人の男の耳には、蚊の鳴くほどにも入らなかった。かえって、獣の心をかきたてるだけだった。

「さあ、親分のもどってこねうちちに……」

定が、眼を血走らせていった。

「唐辛子の粉を、よく拭いておいたほうがいいぜ」

と、政がもっともらしく忠告した。

「そんなことあ、百も承知だい」

定は、鼻の上に卑しい皺を寄せて笑った。

お静の眉間に、ふかいたて皺が寄った。

顔を仰向け、こまかいけいれんを見せながら、唇がひらいた。

のどの奥から、声がふきあがった。タンポ槍で突かれたときとは、べつの声音だった。

内臓がうめき、のたうち、泣きもだえるような声色だった。

四肢を縄できびしく縛りあげられ、さらに身動きできないように、太い柱に胸からくりつけられたお静の自由は、ただ顔を左右にふって、定の唇の接近を避けることだけだった。

しかし、その抵抗にも限界があった。お静は疲れ、定の獣くさい唇に、強引に唇を吸われた。お静の唇はひらかれ、定の舌が侵入した。うめき声は押しつぶれ、定の声が、うわごとのように、それに混った。

「たまらねえ。おれは娘のほうだ」

政が、足踏みをして、どなった。

たちまち、お雪の悲鳴があがった。観念していても、声をあげずにはいられない十六歳の娘だった。

背中で重ね合わされて、固く縛りつけられている細い手首が、折れるかと思うほど引き

つれた。

ふたたび、痛烈な泣き声が、お雪の口からふきあがった。

そのお雪の悲鳴も、もう母親のお静の耳にとどかなかった。

不死身の男

だれかがそばへ寄ってきたような気がして立花屋久六は、眼をひらこうとした。

熱があるせいか、まぶたが縫いつけられたように重く、眼の前のものがよく見えない。

右の眼は、お静のかんざしに突かれて、すでにつぶされている。その血が黒く乾いて凝り固まり、眼窩に不気味にこびりついて異様な形相になっている。

たよりになるのは、残っている左の眼だけである。そのまぶたが重くてよくひらかないで、久六の視界は、うす闇に閉ざされていた。

のどが、ひどく乾いていた。これも、からだに熱があるせいだろう。

全身がけだるく、寝返りをうつ力もない。

この土蔵のなかに投げこまれてから、一昼夜、ぐったりと同じ位置にぶっ倒れたままで

ある。腹がへったのはあまり感じないが、しきりにのどが乾く。

「水、水、水をくれ……」

近寄ってきた影に、うわごとのように久六は訴えて、手をさしのべた。

その手も、右腕は斬り落とされていて、残っているのは、左手だけだ。

さしのべたその左手が、近づいてきた男の草履に踏まれた。

「兄貴、おい、久六兄貴。どうやら、まだ生きていらしいな。ところで、ものは相談だが、兄貴の胴巻きに入っているオランダ歌留多の半きれを、おれにゆずってくれねえか」

久六の左手を、念入りに草履の裏で踏みにじりながら、その男がいった。

久六は、顔面の筋肉をひきつらせながら、けんめいになって左眼をひらき、その男をみあげた。

ヤレツケの岩松だった。そして、そのとりには、お仙が白い顔にうす笑いをうかべて立っていた。自分の手を踏んでいるのは、岩松なのだ。

「岩松、て、てめえ……」

久六は、のどをひゅうひゅう鳴らしながら声をだした。

「おっと。いくらこわい顔をしたって、もう駄目だぜ。鬼と呼ばれた拘摸の大親分立花屋久六も、いまじゃ片眼片腕、青息吐息の化け物だ。兄貴の縄張りには、そっくりおれと、このお仙が頂戴することになったのさ。まあ、悪く思わねえでくれ」

せせら笑いながら、岩松はなおも久六の首を土蔵の床板に踏みにじった。

その苦痛をたしかめるように、岩松は久六の顔をのぞきこんだ。

久六は身をよじり、白眼をむいてうめき声をあげた。だが、岩松の足をはね返すだけの体力は、もう残っていない。

「お、お仙。て、てめえまで、お、おれを裏切るのか！」

久六は、怨念のこもった形相で、お仙をみあげた。

「あたしゃ、ほんととは旦那を裏切りたくはなかったんだけどね、たったひとつしかない命が惜しかったのさ。だって、命あつての物種っていうじゃないか。これでも、あたしゃまだ若いんだからね。この浮き世をもっともつと楽しみたいのさ。これまで親分には、いろいろとお世話になりました。改めてお礼を言わせてもらいますよ」

しゃあしゃあとして、お仙はいった。
「て、てめえ！」

激怒し、わめきながら、久六は背をまるめて咳きこんだ。傷口が痛みだしたのか、あぶら汗を流してうなりはじめる。

「面倒くせえ。引き剥ぐとしようか」
冷酷な眼で久六を見おろし、岩松は手をのばした。

一度久六の脾腹を思いきり蹴りつけておいてから、その帯を解き、着ているものを左右にむしり剥ぎ、さらに胴巻きをひきずりだした。

しかし、オランダ歌留多の半片は、どこからも出てこない。

お仙も手伝って、胴巻きの裏を返し、着物の袖をひっくり返して調べてみたが、歌留多どころか、鼻紙一枚出てこないのだ。

「おいおい、なにを血まなこになって探していやがるんだ。なんだって？ オランダ歌留多だって？ なにを寝言みてえなこと言っていやがるんだ」

苦痛に顔をしかめながらも、久六はふてぶてしく嘲笑した。

嘲笑されて、岩松の視線が、残忍に光ってお仙にふりむいた。

「お仙、てめえ、やっぱり、嘘をつきやがったな！」

お仙は、ふるえあがった。

「う、うそじゃない。嘘じゃないよ。あたしやたしかに、久六の胴巻きのなかに、オランダ歌留多が入っているのを見たんだよ！」

「ばかやろう！」

岩松は大きな舌うちとともに、お仙の頬をなぐりとばした。

ふふ、ふふふ、と久六が小気味よげに笑った。

「いつまでも胴巻きの中にしまっときやしねえよ。おれはそんな、まぬけな男じゃあねえよ。こんなこともあるかと思って、ちゃあんと、べつの所に隠してあるんだ。どうだ、岩松。これでおめえは、おれを殺すことができなくなったぜ。おれが死んだら、あの歌留多の隠し場所は、だれにもわからなくなるんだからな。ふふ、ふふふ……」

「くそッ」

と、こんどは岩松がうなる番だった。

久六のいうとおりだった。

ここでうっかり久六を殺してしまったら、元も子も無くなってしまふ。半死半生の久六に嘲笑されながら、手も足もでないのだ。

「ちくしょう！」

岩松は、腹立ちまぎれに、またお仙の横ッ面を張りとばした。

ひいッ、と、黄色い声をあげて、お仙はよろめいた。

「なにするんだよ。あたしゃもう、お前さんの女なんだよ。自分の女に、そんな無茶な乱暴をしないでくれよ！」

お仙は、両手で顔をおおいながら、くやしげにわめいた。

「なんだと？ おめえが、おれの女だど？」

おいおい、その気になるのは、まだ早いぞ。オランダ歌留多の半きれがみつかり、おれが大津屋から、千両箱をまきあげたとき、おれの女にしてやる……たしか、そういう約束だったぜ」

岩松は、にくにくしげに、お仙の顔をにらみつけた。

ぶっ倒れたまま二人のやりとりをきいていた久六が、ふふん、と鼻のさきで笑った。

着ているものを剥がされたために、久六の素肌があらわになり、あばら骨が浮いて出てくるのが見える。この土蔵のなかに投げこまれて以来、ことに衰弱がひどいのだ。

しばらく風呂にも入っていないために、臭

気がひどい。それでも、敵を前にすると、毒気のような氣力をふるいたたせる久六であった。

「岩松、てめえもたいした悪党だなあ。さすがはおれの弟分として、いままで面倒をみてきた男だけのことはある。たのもしいぜ。よし、お仙はてめえにくれてやる。女としての味は、まあ悪くねえほうだ。ありがたく抱きやあがれ」

ぜいぜいとのどを鳴らしながら、久六は執拗に毒舌を吐きつづける。

「こいつは一本まいったな。よし、この場はおれの負けだ。お仙、こい」

岩松は、負け惜しみに唇をゆがめて笑い、お仙の手首をつかむと、土蔵の外へ出た。

Ⅱ いましめの床Ⅱ

裏庭伝いに廊下へあがり、自分の居間へもどると岩松は「疲れたから、すこし休む」といって子分のひとりに夜具をのべさせた。それから、有無をいわせず、お仙を裸にして、うしろ手に縛りあげた。

久六から受けた屈辱の腹いせに、お仙の手足をめちやくちに縛りあげてなぶろうとい

うのだ。

「あんな死にぞこないの化け物野郎にバカにされて、このままじゃ、おれの腹の虫がおさまらねえ。お仙、おれは腹が立つとしつこくなるんだ。覚悟しろよ」

言いながら、岩松の欲情は異様にたかぶってきて、手に触れたお仙のやわらかいところを、思いきり強くつねりあげた。

お仙は、ひいッと悲鳴をあげて、全身を弓のようにのけぞらせた。

「ちッ、ちくしょう。さっきはあたしのことを、まだ自分の女にはしないなんて言やがったくせに！」

お仙は、髪をふりみだしてもだえた。岩松の手が、まだ離れないのだ。

「そうさ、てめえはまだ、おれの女じゃねえよ。てめえなんか、女じゃなくて、犬だ。めす犬だ。だから、おれは、こうしてふん縛って、こんな恰好にして、めす犬のつもりで抱くのよ」

岩松の手が、お仙をふかくえぐり、お仙はまた派手な悲鳴をあげた。

縄は蛇のようにお仙の肌の上を這いまわって締めあげていく。

「わかった、わかった。あたしゃ、なんでも

お前さんのいうことをきくから、そんなに、もう、縛るのだけは、かんにんしておくれよう。あたしゃ、縛られるのは、大嫌いなんだよう！」

お仙は、子どものような泣き声をあげる。

「そんなに、縛られるのは、いやか」

といいながら、岩松は縄をお仙の乳房の下にまわして、ぐいとしごきあげる。

「いやだよう、縛られるのが好きなやつなんて、一人だっていないよう」

「ふふふ……おれは、生まれつき、用心ぶかい男なんだ。長いあいだ世話になった旦那の久六をあつさり裏切るような女と一緒に寝るときは、こうして、両手をしっかり縛っておかねえと、安心できねえのさ」

「まあ、なんて意地の悪いことをいう人なんだろう……あッ、痛い。そ、そんなところへ縄をかけちゃ痛いようッ」

「女ってえものは、てめえに限らず、どだい安心できねえものさ。まして、てめえみたいな、ひと癖もふた癖もあるしたたかな女と肌を合わせるときには、用心に用心しなけりやなあ……」

岩松の脳裡には、久六の右眼をかんざしで突いたお静の姿が、まだ灼きついていのか

もしれない。

お仙の両手首を、もう一度背中にくくりつけると、十分に上のほうへ引きしぼっておいで、その縄をさらに乳房の上につけ、幾重にもぎりぎりと縛りつけるのだった。

「あッ、痛い、痛いッ。な、なにもそんなに強く縛らなくなつて。あたしゃ、なにもしやしないよ……あ、ああ、痛い、痛い。息がつけやしないじゃないか！」

お仙は胸を前に倒し、肩を左右にゆすつてもがく。

むちむちとよく肥えた年増盛りの白い肌に縄は容赦なくくいこんでいくのだ。

「ふふふ……まるで、つきたての餅みてえにやわらけえ肌をしてやがる。こんなにやわらけえ肌を、久六のやつは、どんなふうにしてかわいがりやがったんだ。ええ、おい、どんなふうにして、責めやがったんだ。おい、なんとか返事しねえか、お仙……」

縄にくびれて、むっくりと盛りあがっている肩のあたりの肉を掌でつかみながら、岩松がいった。

「ちくしょう、痛い、痛いよう……たのむから、縄を、縄を解いておくれよう……あたしやもう、お前さんのものなんだ……これから

一生、あんたのために尽くすから、こんなひどいことをしないでくれようッ」

お仙は、ポロポロと涙をこぼし、胸と腰を大きくくねらせながら、岩松に哀願する。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊

それがまた、ぞっとするほどの女っぽいしぐさとなって、かえって岩松の心を警戒させるのだ。

警戒させると同時に、べつの心は、お仙の

一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に八本号にて前金切りの判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

毒花のような魅力のなかへ、ずるずるとひきずりこまれてゆく。

裸にされて縛りあげられた羞恥を、必死になつて隠そうと腰をもじもじうごかしながら男の眼が、いま自分のどこを見て、どんな気持ちになっているのか、お仙はちゃんと計算している。

泣いたり、抵抗するふりをしながら、巧みに半身をひらいて、岩松の触手を誘っているのだった。

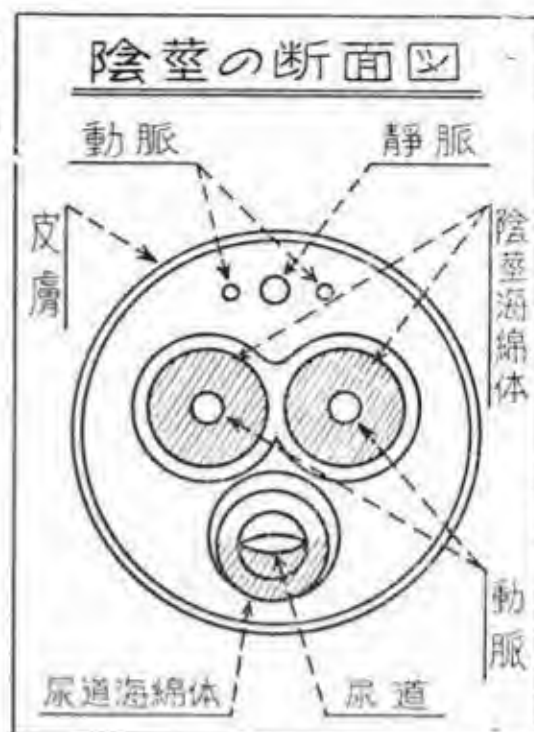
「お仙。おめえ、本当に一生、おれのものになるつもりか」

うめくようにいって、岩松はお仙を抱きしめ、そのおそろしく肉づきのいい胸へかじりついてゆく。

「あたしゃ、お前さんのほかに、もう、頼るひとがいないんですよう……」

お仙は鼻を鳴らしながら、早くも女特有のあえぎを洩らしはじめる。

両手はきびしく背中に縛りあげられていても、こんな男が相手なら、どんなに追いつめられても、切りぬけられる自信を胸に秘めているお仙だった。



質問

男性 年齢？ 独身？ 職業？

私は五年位い前に、尿道に異物を入れて、尿道を太くしてしまい、そのため、射精時に尿道への圧力がないため、性感がほとんどありません。尿道を細くなおすことができるでしょうか。今は本当に困っています。人に恥ずかしくて言えません。そのようなことを扱う病院を教えてくださいましたら光栄に思います。本当に困っています。一、〇〇〇円同封致しましたけど、とっておいて下さい。

回答

この質問には二つの問題点があります。一つは「尿道に異物を入れて尿道を太くしてしまいました」ということであり、その二つは「射精時に尿道への圧力がないために性感がほとんどない」ということであります。

S・C・R △性問題相談室▽ 回答欄

尿道異物挿入による

性感不全について

医学博士

弓削達人

以上の二点に、異物挿入の場合の注意を加えて回答と致します。

(1) 尿道に異物をさし込むことによって尿道が太くなることはありません。図を参照して次の説明を聞いて下さい。

尿道はゴム管のような長い管で、その内壁は弾力に富んだ繊維からできており、その下部を尿道海綿体、その上の部分を陰莖海綿体で包まれています。

この海綿体はペニスが勃起する時に、大量の血液を含み、勃起作用に大切な役目を果たすところでもあります。

以上のような構造を有していますから、非常に弾力に富んだ部分であって、尿道の中に鉛筆などをさし込んだからといって、弾力を失うといったものでもなく、また拡大してしまうものでもありません。

あなたが、近頃尿道が拡大したように思う

といわれるのは、尿道挿入になれるに従ってたやすく異物が入るようになり、また粘膜が肥厚して、痛みに対しても次第に感じなくなつて、より大きな物が入るようになったことから錯覚されたのだと思います。

従って「拡大した尿道」を元に戻そうという手術はないわけでありです。

(2) 次に「性感がない」についてですが「尿道は拡大してない」のですから「射精時に尿道への圧力が弱くなっている」こともないわけです。(粘膜が肥厚して感受性が鈍くなつても、これとオルガスムスとは無関係であります)それに性的快感—オルガスムス—は精液が尿道を通る時の圧力によって生ずるものではありません。

そこで、まず勃起から射精に至るまでの、生理的な過程、及びオルガスムス発生機序を理解してみして下さい。(もうすでに、皆さん

ご存じのことと思いますが、模型的に書いておきます)

ペニスが勃起するのは、異性を眺めたりすることによって生じた大脳の興奮や、ペニスなどに加わった生理的な刺激などが、腰髄の勃起中枢を興奮させ、この興奮がペニスに伝わって勃起するのであります。

次に射精は、同じく腰髄にある射精中枢が興奮し、この刺激が伝わって精囊、前立腺が収縮し、精管膨大部の痙攣となり精囊の中の精液が圧出されることになるのです。

オルガスムスは、精液が尿道を通過する時の尿道壁との摩擦などとは関係なく、先ず次の各部の痙攣収縮によって生ずるものといわれています。

尿道筋、尿道括約筋、球海面体筋、坐骨海面体筋といった陰莖、およびその附近の構成筋、並びに腰腎部の諸筋、殊に挙肛筋などの痙攣様の収縮であります。

次に射精感というものが、オルガスムスの一部を構成します。射精感とは、精囊から圧出された精液が、非常に細い射精管の中を通り、水鉄砲のような勢で噴出し尿道壁にうち当たるときの感じですが。

従って射精せずに勃起をつづけることもできるし、勃起せずに射精することもできるのであります。また射精はあってもオルガスムスのないこともあり、オルガスムスはあったけれども

ほとんど射精しなかったということもあるわけです(前者の例としては、前立腺のマツサージの射精、後者の例としては、多数回性交時の空鉄砲)

故に、あなたが快感が少なくなったといわれるのは、何か外の心理的な要素があるのではないかと思うのです。そのことについては、便箋に十行足らずの質問の内容からは、残念ながらお答えができません。従って一般的な回答を誌上で致したわけです。若し更に「あなたの場合の回答」を望まれるなら、後記の部分を読んだ上で編集部に連絡して下さい。尚尿道に異物を挿入することの危険性については、四三年一二月号の相談室でふれておきましたが、その際、一つだけ書き落としたことがあるので追加します。

それは「尿道に挿入するものは、細いものの方がかえって危険があり、太いものの方がむしろ尿道を破る危険性は少ない」ということです。

直径5ミリのビニール管というのがあります。したが、これは極めて危険です。尿道には、鉛筆位の太さのものは割合入りやすいものです。先のとがったものは避けられる方が無難であると思います。

記

この質問をなさったWさんへ

(1) 質問用紙に一、〇〇〇円添付してあり

ましたが、この相談室は無料でありますのでその御配慮には及びません。お気持だけは有難くおうけ致します。

(2) 連絡先を局留めにしておられたので、別記質問を現金書留にて郵送しましたが、かえって来ました。お金は小生の手許に保管してあります。

(3) 若しさらに個人回答を希望されるならば、次の項目に答えて下さい。

(1) K・K誌の3月号に、質問なさる方へのお願いと要領という記事がありますので、それをよく読んで、それぞれの項目に詳しくお答え下さい。

(2) 現在でも、尿道刺激オナニーをしているのですか。

(3) その際に用いるもので、一番大きいものは何ですか。(数字も示せ)一番かたいものは何ですか。

(4) オルガスムはあるか(射精する以前にくすぐったい感じ、快感があるか)。

(5) 刺激するとき疼痛はないか。

(6) 尿道その他が化膿したことはないか。その際の治療をしたか。

(7) 全身の発熱を生じたことがあるか。

(8) 淋病その他に罹患したことがあるか。

(9) 治療は自費でもよいか。

入院—一週間程度—できるか(検査のため)

以上

〈夜と霧の群像〉

箱

花影

叢



二フィート四方ほどの床、高さは三フィートもあろうか。

箱の一方だけが鉄棒の柵造りになっていて同時に箱のふたの役割ももっていた。

膝小僧を胸に近く引き寄せるようにして、ようやく、からだは箱におさまる。そのまま多少の身動きはきいたが、からだの向きを交えることはできなくなった。

SPの事務所、センターの地下留置所から手足錠、腰、首かせ、に鎖つきのまま表へ引

きずりだされ、すでにトラックに積みこまれている箱のなかに追いあげられ詰めこまれてしまった。

留置所から引きだされたのは女ばかりで、八人いた。どれも丸裸にわずかにまとった衣裳にさえ見える鎖かせの同じ姿だが、とりわけアンナのところにひびき、傷を逆なぜされる痛みをとまなわなければ、その姿を見ることのできないポールの妹マーシャがいた。おう、ポール！

とアンナは胸のなかで叫んだ。ここはすでに地獄であろうか？ わたし達の恋は遂に地底の深淵へ墮ちてしまったのだろうか？

たとえ地獄へ落ちようと、とたしかにあの時の二人は誓いあった。この恋の一時に悔いはない……炎に灼かれ、身をよじりながら、苦痛がこれほどの快楽を呼ぶ奇蹟に酔いしれた、その報いがからだに喰いこんでくる鉄の冷たい肌ざわりなのであろうか？

ああポール、こたえてちょうだい。

しかし、言葉をもって問うすべもなく、あごがせいっぱいこじりあけられて鉄丸がつめられている箱口具が、アンナのうったえを封じていた。

六フィート四方ほどの留置場は女三人が押しこめられていた。はじめはアンナひとりのところへ、二人がやって来て入れられた。中年の小肥りな色の白いひとと、少女ともいっていい、まだ青いからだの、少し病的な痩せこけた娘だった。

留置所の鉄柵で仕切られた入口は、コンクリートの床から一フィートぐらいの高さしか得られない変則的なもので、そこを這うようにして出入りする意地悪い意図のままに造られている。それでコンクリートをなめるようにして首から二人は押しこめられたのだが、娘は細いからだを器用にたいらにして入ってきたのに、中年のマダムは無器用で、首を先に突っこんで来たのはいいが、それ以上は手足がもつれてひっかかるらしく、進めない。うしろ手錠で、足錠もいって間隔以上にひらかなないので、うまく姿勢をとれないのも無理ではないが、普通以上にマダムは不器用だった。やたらに腰をもくもくあげてもがくの

だがその腰が邪魔でつかえているのだった。

二人を連行して来たSPが、もりあがった肉塊をうしろから鞭の柄で突くと、なおマダムはあわてるらしく不様にうごめいて、こちらに来て顔を激しく振る。箱口具のために、口から下の間がのびている顔に一生懸命な表情がうかんだ。

檻房には灯がなく、せまいこちらにくらべてガランとひろがった廊下には、高いところに灯があり、黄色いうすばんやりした光を送ってくるので、人の影もこまかい動きはとらえかねるくらいなのだが、マダムの必死の表情は気配から伝わってくる。

アンナは正直のところ、マダムと同じ自分の姿も忘れ、短い間のことだが、滑稽感が湧きあがって来て、思わず笑いだしそうにさえた。が、マダムの表情が距離を通り越して迫ってくると、その眼尻を濡らしている涙のつめたい感触を凄まじいものにおぼえて、ぶるっと身ぶるいした。それは、やはり滑稽としかいえないような姿を忘れて、いわば、なりふりかまわず生き抜けようとする動物の本能のような、その底の悲しさが伝わってきて、アンナを恐怖にうたれたようにした。

盲目の巨大な虫のような、腰から臀部のう

ごめきだった。

はじめに入って来た少女は知らない顔であったが、後で記憶をさぐってみてアンナは、たしかに見覚えのあるマダムのことに行きあたった。

ズーゾンの新聞の社交欄に常連の顔として出て来た、たしか、ズーゾン織物業界のボスであるストリックローゼン氏の夫人、というのがアンナの記憶である。

ズーゾンの街ッ子でも下町に生まれ育ったアンナには銀行家やホテルの持ち主、ズーゾン新聞を拠点にする少数の芸術家やジャーナリスト、ストリックローゼン氏のような事業家、教育界を牛耳っているズーゾン教国教会の司教たちなどで構成され、避暑避寒で遊びにおとずれる、ボーヘン共和国やジャーク人の名士たちを客とする山の手の社交界は、いままで縁遠いものであって、貴族や姫君のおとぎ話にも似た世界のできごとであり、人たちだった。

メーク党のSPによるイスヤ人狩りは、むろんズーゾンの社交界などは歯牙にもかけなかった。ズーゾンの経済面をにぎっていたのもイスヤであり、社交界のメンバーも当然イスヤが多かったが、風聞ではこれらズーゾン

のイスヤ名士たちは、今度のイスヤ人狩りの嵐の到来を予知していて、財産は中立国の銀行へ預けてあるということだ。

ズーズン地方のジャーク人と本国メーク党が連携しておこした、いわゆる「ズーズン割譲運動」問題による国際間緊張で、強腰を押し通すメーク党と独裁者ケスラーの見幕に、紛糾を恐れた大国ブルドンの首相チャートレーの音頭とりで開かれた列国会議によって、遂に「世界平和」のためボーヘンからズーズンをジャークに割譲せしめたのだが、国境にご自慢の機械化兵団を先頭とする大軍を集結させていたジャーク軍は、なだれをうって侵入し、ほぼ半月をもって完全にズーズン全域を占領下においた。その会議中、すでにイスヤ名士の退去はほぼ完了していた。

下町のイスヤ人会も手をこまねいていたわけではない。国境の軍団の動静は、列国会議前にすでに威圧を越えていることは伝って来たし、無産者でも家を捨てて逃げだすものもいた。しかし、家業のレストランに愛着するアンナの父は、腰をあげようとしなかった。

店は、魚河岸の立関口であるマートン橋の畔に近く、河岸の買いだし客や食い道楽を客として朝早くからひらき、午前十時には、ア

ンナ亭のおやじはすでにワインをしこたまきこし召していて、客も主人もない気楽な雑談と賭け将棋にうつつを抜かしているのだ。

厨房をとりしきるのは父の妹で、料理人と結婚し、第一次世界大戦で兵士として征き死んだ連れあいのあとは、寡婦を守っているマルタがとりしきる三人きりの家族。父も母をなくし、ひとり娘のアンナと、どこか片ちゃんだが、不足といっていない水いらずの日常であつた。

父は流れ者の料理人で、ドーチェ通りのホテルに雇われてズーズンに来たのだが、魚河岸に通ううちに縁ができ、アンナ亭に入り婿となつた。アンナの母も名はアンナで看板娘だつた。アンナもアンナ亭の伝統を継いだひとり娘というわけである。

「なに、いくらジャークのメークのつていつたって飯は食わにやなるめえ。とすりや魚河岸をぶつつぶすわけにも行かねえ。河岸がそのままならアンナ亭もそのままってわけさ。お偉がたの理屈はわからねえが、胃袋ってやつがあるってのは、おれがよく知ってる」

料理人としての腕を持ち、若いころ流れ職人として世を渡って来た父の自信は強く、それに財産といつてもアンナ亭の建物だけで目

ばしい物もなく、何より父はズーズン河の川魚料理を、ズーズン南のボーヘン山系に南面する台地でとれる地酒のワインを、朝方の魚河岸のいきいきした活気を愛し、首をおとされるまでは、アンナ亭のテーブルから動かないつもりだつた。

アンナも、父とまったくその点では同じ心境だつた。自分がイスヤだといわれても、アンナはあまりイスヤの血は感じない。そんなことの以前に、アンナはアンナ亭の看板娘であり、魚河岸を遊び場として育った根っからのズーズンの下町っ娘だつた。

朝、暗いうちにおきると長靴をはき、息の白く凍る戸外へ飛びだして行く。このところ父は、朝の河岸が好きだといつてもなかなか腰があがらなくなり、仕こみ仕入れはもっぱらアンナの専門になってしまっている。すでに河岸にもやった船からは荷あげがはじまっ

ていて、仲買人たちの飛ばす取引の符牒のやりとりが夜明けを姦しいものになっている。仲買人の店の若者たちが、遠慮のない大声でアンナを呼びとめ、挨拶をおくる。若者たちの多くはアンナ亭の常連客で、同時に魚や肉、野菜などの売り手だつた。アンナも負けない大声でこたえ、品物に注文をつけ、値切

り、じゃれる仔犬どうしのように乱暴にからだをたたきあう。

アンナは大柄で、伸び伸びと發育した手足と腰、くびれた胴、先がとがって豊かに熟した乳に、道具だてのクッキリと印象づけられる派手な顔だちをもった娘で、動作は男のこに負けず機敏で、物いいはきはきし、見るからに華やかに明るく、若者たちに人気があるのはもちろん、仲買のおやじ連中も、普通にいわれれば品物にけちをつけられた気がするのだが、アンナの口にかかる処置なしといったありさまで、とって置きの逸品をとり出してもうけ抜きでくれてしまう。もっともほんの小半刻あとに料理されたそれを、アンナ亭で自身の胃に運びこむ破目になることも度々。いわば、うちわの台所手伝いのようなものであった。

朝もやのなかで、ズーズン織の工員や陶器職人が家を出かかるころは、すでに河岸はしまい、アンナ亭のワインが主役になる。

子供のころから店の手伝いを、仕事とも思わず片づけているアンナには、年配の客は近所のおじさん、若者たちは友達に過ぎず、主客の意識もなかった。おたがいに遠慮などみじんもない言葉のやりとりを楽しみ、だれも

それが自然で、アンナの出過ぎをとがめる者としてない。

父には目に入れても痛くないひとり娘。生まれてこのかた叱言など聞いた事もなく、またその心要もない。母のないせいか、父の身のまわりにも女らしく気を配り、口は悪いけれどすべての男に優しい心情も失わない、できのいい看板娘だった。ただ代々の母系、ひとりかふたりの娘しかなさな家系のせいかな男まさりで気が強い。子供のころから喧嘩などしても、男のこを乾分にして一方の頭分であった。

父の意見をそのままに、メーク党だのSPだのに怖れ気ひとつ抱かなかったのも、気の強さにもよる。もうひとつ、やはり魚河岸の世界しか知らない無知にもよる。

SPに体现された権力の大きさと兇暴さはアンナの常識をはるかに超え、気がついてみたら、自分は生まれた時そのままの赤ん坊と異ならない無力な存在になり果てていた。

ジャーク軍団の進駐は、静かに、それゆえに圧倒的な力でズーズンを侵し、一夜にして街の権力中枢は消え失せた。そんなことは、アンナは知らない。変らない朝があり、ちょっと男たちに元気がなく、馴染みの若者たち

の顔がポツリポツリ欠けていたが、やはり平常通りの買いだし、店びらき、胃袋の饗宴とあって店じまいの正午近く、突然、黒い制服をまとった十人ほどの男たちの集団が店に入ってきた。

「アンナ・ボルニーヤ、だな」

「あんたたちは誰？」

と、つい知らぬ男たちには、強い問責の言葉がアンナの口をついて出た。本能的に冷たい敵意がはしり、アンナのからだはこわばった。男たちのひとりが遠慮えしゃくもなく、アンナの手をつかんで来た。ものすごい鉄の機械のような男の皮手袋につつまれてひやっとなると、すでにつかまれた方の手に銀色に光る手錠をうちこまれていた。

「逮捕する」

残ったいっぽうの手をつかまれかけて、アンナは滅茶苦茶に手足をふるって抵抗した。

「何するの！ けだもの」

といった気がする。しかし言葉も抵抗も男たちには無力のようで、次の瞬間、横顔がガーンと鳴り、アンナは目がくらんだ。たちまちうしろ手にされ手の自由はきえ、からだごと宙に持ちあげられ、ふわっとしたかと思うと地面が兇器になって襲ったように、からだ中

にぶちあたって、それが暗いトラックの後ろの幌のなかだった。父が、まるで河岸にあげられる魚のように、明るいとこからほうられて飛んで来た。つづいて伯母のマルタ。SPたちが間にいるので口も交せない。というより、衝撃でアンナは口をきくのも忘れていた。

それが春のことであった。

着のみ着のまま、アンナ達はトラックでSPたちの用意した収容施設のゲートをくぐった。

部屋を与えられ、粗末な人絹と綿の交織物らしい毛布を寝具用に一人一枚配られた。部屋には床にじかにわらのマットが敷いてあった。そこに寝ろという意味らしいことはささったが、毛布一枚の夜は耐えがたい程寒く、眠れたものではない。夜明け前に、冬でも寒さなど何でもなく飛びだして行けた昨日までの朝が嘘のようであった。

トラックでいくらか走らなかつた距離はだいたい目算がつく。河岸の街から場末のザッツ街の方へ走った。二マイルも行くまい。トラックをおろされたところは、妙な木造の仮設の劇場のような建物の前であった。建物の前は広場のようになっていて、しかし木いっ

ぽんの緑があるわけでも、石一枚の舗装がしてあるでもない無愛想な荒涼とした砂地の広場だった。路がいっぱん通っているが、先はやはり仮設の学校のような建物にさえぎられていて、見通しはさしてきかない。学校のような建物は、劇場のような建物をとりかこみほとんど見廻してもその建物のならびだけでそれらが、いちようにくすんだ土色なのだ。

後でセンターと呼ぶようになった劇場ふうの入口に机が並べられ、SPがふんぞり返り父を引きたてて行くSPのうしろへアンナとマルタもつづいた。何やらガミガミと四角ばったジャーク語のやりとり。そしてやはり父を引きたてたSPの後について、アンナも建物のひとつに入り、部屋に導かれたのだ。午後から夕刻、夜にかけて廊下に行くSPの長靴の音と、ややひめやかに殺したような人の足音がたえま間なくつづいた。手錠をはずさず、SPが去り、やっと少し人ごちをとり戻して、足音のする廊下をうかがおうとする。とドアには鍵がかかっていた。窓はガラス戸だが、その外は木の柵が、たて横に首も通らないほど打ちつけてある。窓ひとつで、ぼんやりと薄暗い、四方厚い板壁の辺十二、三フイートの部屋だった。

長い、やがて静まった夜。やっと来た夜明け。たしかにズーズンとは遠からぬところの同じ朝であるとはとても思えない、骨身にしみる寒さで、毛布をしがみつくようにまといながら、アンナはいつまでも震えつづけた。

寒い春にはじまった収容所の生活。

アンナは、はじめて他人というものの存在を知った。隣室の他人、同朋としての他人、SPの他人。他人にとりかこまれ、その視線を常に浴びていなければならないことは、苦痛のなかでも一等のものだった。

アンナ亭を中心としたアンナのこれまでの生活に、他人はいなかった。そもそも事のひとつひとつに自他を分けて考えることなど考へつかないことだった。自由に自然にふるまうていて、それが普通であり意識することなどはなかった。

収容所では、それがまるで違った。彼女の目の前に現れ消えるすべての人間は、何か予測のつかない悪意をいつも抱いていて、彼女をおとしいれ、苦しみを与え、理由もなく力を及ぼして去って行く。

他人の第一は父のなかに現れた。ちよつと考えてみればそうなるのも当然であったたる

うが、やはり父のなかには以前からアンナの知らない他人が棲んでいて、寒くなると急に活撥に働きだす風邪ウイルスのように、環境をえて面を現わしたような感じだった。

長年やっていたアルコールが中毒にまでなっていたらしく、アルコールがきけると妙なふうになった。たいていは痴呆のようにぼんやりしてしまい、一日中毛布にくるまってじっとしていることなどもあるが、衝動的に動きだすと、家族のわずかな手もちの衣裳などをかかえて外へ飛びだし、物資の闇売が横行しだしてから、どこからともなく入ってくる質の悪い蒸溜酒とかえてしまう。

アルコールには弱くなっているらしく、わずかの量で足りるらしいのはいいとしても、へべれけになって戻って来て、驚いたことに伯母にいどみかかるのだった。アンナははじめそれに気がつかず、何か伯母に気にいらないことがあり、折檻するつもりで伯母を押し伏せるものと思っていた。そういう時はさすがに娘の目を意識してか夜、毛布の下で隠微に行われたが、寒いのでいったん眠ってもすぐ醒めてしまうアンナの意識のなかに、うごめきの音や息使いの激しく高まるさまは、目をつむっていても耳から入って来てしまう。

父と伯母は、幼いころはいっしょに暮したことはないが、たしかに兄妹で、父の血は違ふという事だが母はたしかにひとりのはずであつた。はじめから考えてもしかするとアンナ亭のころから二人の関りはつづいていたものらしく、伯母に当然考えられる抵抗の姿勢がなかった。そのことに思ひいたると、アンナは総毛だつ悪感に襲われた。おたがいに自由で水いらずな日常と思われたことに、不吉な黒雲がすでにかかりかけていたのだ。

しかし、その時はアンナの感性にかかわる事で、目をつむってすまずことも出来た。アルコールがやはり断ち切れず、着のみ着のままで来たため、生きて行くための最後の持ち物である衣裳を、一枚一枚はがされて行くのにはたえがたい。先にまず自分と伯母のものから手をつけたのは良心のせいだろうが、やがてこころにためらいながら、やはり娘のセーターなどへ目がつくらしく、肉親の間でこんな用心は浅間しく気がとがめても、アンナとしては父から目を離せないのだったが、やはり隙があつて持つて行かれてしまった。さいわい、夜の寒気もようやくゆるんで来て、これからは夏。厳しい長い冬のためにやや厚着の習慣があるので、だいたい余裕は生じるも

の、またすぐやってくるだろう秋から冬と考えると背筋が凍る。

徴用制のために、料理人の腕を買われて父と伯母が収容所の外へ出られるようになってからは衣類をはがれる恐れはなくなったが、毎夜のへべれけが激しくなり、ほとんどアンナの存在を意識しない狂態をくりひろげる。

アンナは十九才。健康な女からだはずでに充分成熟していて、その事を考えると頭が熱くなって、何もそれ以上考えられなくなるが、あのはじめツンツンと小さく突きあげてきて、やがて満ち、たまらなく切なくなり、動物にかえり気も狂う、あの快楽、快感をすでにアンナは知っているのだった。

しかし、それは快感とはいえても快美とはいえない。アンナに痛切な悩みと苦しみと後の灰色のしこったような憂悶を与えて、くり返されるものだった。

ほかならない、アンナを動物にしたて、いようにもあそぶのは、憎んでもあまりある、あのSPたちなのだ。

SPのふるう鞭で、アンナの自尊心も、従来の勝気もすべてコマ切れにちぎり飛んでしまう。むきだしにされたアンナの雌は、ついには行きどころのない袋路地のどんづまり、

陰湿な、あの快感へ行きついてしまう。

そのいまわしい行事である月曜日の検診。

○

命令されたとおり、アンナも四ツ這いになるはかなかった。うしろから風が吹きとおるように感じる。空気中にただよいだすような腰部の頂点がぽっかり浮かびあがっているイメージが、アンナの頭を横切っていった。

「股をひらけ」

という。

「ド阿呆、足をひろげりゃいいんだ」

とSPがののしる。

うしろを歩くSPの靴音が、びんびん床にひびく。

「足のひざを横に張る」

といわれて、アンナはどうやるのか判断に迷った。ぼんやりしていると、歩み寄って来たSPの足音が、まうしろで止った。

「アホ、それで張れるか。爪先きを外にするんだ。思いきり、ぐっと」

鞭の柄でうしろをこづいてきた。ぐりぐり痛みが喰いこむ。アンナは思わず、それを避けて腰をひいた。

「こら、このスベタ、お上品ぶりやがって。」

もっとぐっと張るんだ。そら、爪先きを外にむけて」

腰を、ひざ裏をぐりぐりこじってくる。それから逃げているうちに、膝がひらいた。

「顔を床につける、手を曲げて」

ふいにアンナはバランスを崩した。ななめ前にのめりこむように倒れた。頭がガンとした。半身を床で打って、そのままSPの方をむいていた。長身の男の影は異様に大きい。その顔の辺りをアンナは見あげた。倒れた時の衝撃で眼尻に涙がにじんだ。涙の玉はふくれて目全体が熱くなった。うつむくと鳴咽がこみあげて来た。泣くまいと思ったが駄目であった。

鞭の柄があごをこびりあげて来た。おおいかぶさってくるようなSPの黒い影が、ふたび視界いっぱいにひろがった。何か眼前に光るものがぶらぶらした。アンナは、それが手錠であることをほとんど意識しなかった。

「ここは女学校じゃねえぜ」

とSPの声が落ちて来た。

「豚にされてえかい。赤毛のお嬢さん」

鳴咽がとまった。いま自分の顔はみにくくゆがんでいる、とアンナは思った。いつの間、こんな卑屈な表情をおぼえたのだろう。

はじめて何か熱い感情がつきあげて来た。それにささえられて頭が回転しだした。

しかし判断して、いまの裸ではSPに対してどうしようもない。しかし、このままSPの意志を、ここで絶ち切ることはできる。何か無力な人形のようにあやつられてしまったが、もうごめん。

SPがかがんでアンナの瞳をのぞきこんで来た。アンナは目をそらさずに、石になったつもりでじっとした。

どういうわけか、そんなアンナからSPは離れて、命令どおり、ガニ股の四ツ這いになり、顔は床をなめている女たちのうしろの列の中央にもどり、アンナを無視して命令をつづけた。

「奥の部屋に行くと軍医殿がおられる。その前でお前らはこの姿勢をとりご検診を待つ。いいな。それでは、そのまま名前を呼ばれるまで待つ」

アンナは石になりつづけた。SPのそれからの動きもいっさい見なかった。涙のあとがかわいてむずがゆいのがまんして、じっとうずくまったまま身じろぎしないでした。

女たちの名前が呼ばれる。呼ばれた女は姿勢をくずし、腰の辺りが痺れたのだろう、よ

ろろしてSPの指し示すドアのむこうに消えた。

うずくまったアンナをちらっと見て行く女がいる。あからさまに見るものはいない。視線をむけないで通り過ぎる女もいた。あいにく、アンナのうずくまったところは、十人いる女の列でドアにもっとも近い。九人は、そうしてアンナの前を通って行った。

この部屋に入った時、SPは自分の命令にしたがわなかった者の見本を十人の女たちに見せた。うしろ手錠に、首に両膝を連結された鎖と鎖を引かれて現われた中年女の肉塊。それが「豚」であった。

SPが豚の鎖をひいて、アンナの前に進んで来た。

アンナの前に豚を引きすえ、手錠や鎖をはずして行く。最後に床にガラガラ音ひいて鎖が肌から離れた。拘束をとられても、豚はもとのまま、うずくまっている。骨の節々が痺れて、簡単に立つこともできないのかもしれない。なかった。

「行け。これで今日はいかんべんしてやる。行って軍医殿の前に今度はおとなしく這いつくばれ。妙なことをすりゃ、またすぐ豚にしてやるぜ」

SPはいつて、いきなり足をあげて、赤裸にもどった臀部を蹴った。突んのめったところをまた蹴る。蹴りとばして、とうとうドアのむこうまで蹴こんだ。

「さて、いそがしいや。お次のトン公は、こいつか」

こうしてアンナは豚にされた。

一日に二百人ほどのイスヤ人がセンターで検診をうける。受けつけが九時まで。受けつけにおくられたり指定日に出頭しなかったりすれば、きつい取調べをうけ、処分されるといふ事だった。ただの豚にされるだけではすまないらしい。

二百人をほぼ五時間ぐらいかかって診るのだから、SPや軍医もけっこういそがしい。規律を厳しくして能率をあげないことには職責が果されないわけだが、そのために考えだされた方法は、やはりイスヤ人そのものを豚にしたてあげることが加味されている。

現実に見本の豚にされるのは一人か二人だが、それを見せつけることによって、すべてのイスヤ人に豚の資格を強制するのだ。

微用でとられた男女は、検診をセンターで受ける義務はなかったが、各職場でやはり受

けるようであった。

軍医の検診そのものは機械的で、四ツ這いの姿勢をうしろから覗きこむくらいだった。SPの鞭による脱衣や姿勢の方が、大げさでシヨウ的だった。

十人ほどが控えの脱衣室へ入る。それから三組にわかれて軍医のところへ行く。

豚にされたアンナは、それから十人とSPのシヨウに十回ほど見本を勤めさせられて、最後にひとり検診を受けた。豚の扮装のまま引きすえられ、肛門鏡をみせつけられた。SPが立ちあっていて器具を押しつけてくる。「ほう、こいつは処女だね」

と軍医がいった。

「そうですか、初もののブタですか。とすると使えるのは、こっちだけですわね」

とSPがこたえた。

SPどうしが使うのは詛りの強いジャークの地方語でほとんど聞きとれないが、軍医に話す標準語はアンナにもわかる。しかしそんなやりとりの内容をさっする余裕はアンナにはなかった。真紅に火と灼けた鉄棒で、串刺しにされたような激痛に、口のなかの鉄丸をくぐり、叫び声もれた。

それから軍医の引きあげたあと、係りの数

人のSPたちが集って来て、たらい廻しにアンナをなぶった。

浣腸をされて、そのあともくまなくSPたちの視線にさらされた。口の封が、やっと取られると今度は本物の豚の泣き声をまねて泣くことを強要され、さっきまで自分のからだのなかにあったものをなめさせられた。水で洗われて、顔と下あごを固定され、喉でおぞましい奉仕をさせられた。

SPの笑いがはじけ、世界が火花と散り、アンナは地に墜ちて、もっと深く、暗い底へ転落していった。

夕刻、ボロ切れの一片になってセンターからほうり出されて、ほとんど這うようにしてアンナは部屋にもどり毛布にくるまったが、いたぶられた跡がいつまでも焼けただれていて、悶々と夜明けまで、もだえ抜いた。

その時、残ったのは苦痛だけだった。

それからくり返されてやって来た月曜日。

アンナは特別に目をつけられたらしく、できるだけ目に立たないようするのだが、意地の悪い鞭がとんで来て、難くせをつけられ、ついにはまた豚にされてしまう。苦痛を与えるだけの方法から、やがて微妙にポイントを責めてきて、とうとう、たえきれず身もたえし

てしまうと、SPたちの笑いはさらに露骨になり、手段も巧妙になってくるのだった。

アンナは火照りに火照って、かえってもとの苦痛のみを求めてしまう。

苦痛と、縄ないによじれたうらはらの感覚は、アンナを狂気にかり立てて、嵐にもまれる小舟のように高潮の波にひるがえる。

豚そのものになったアンナは、SPに誘導されるままに、所かまわずべろと舌を這わせるのだった。

夜、毛布のなかでその感覚がよみがえると父の狂態など、もはや何でもないものになってしまい、いつの間にか、体を火照らせてぐったりと疲れた後、いい知れぬ暗いべっとりした穴が胸のなかにポツカリあき、それはアンナひとりの穴で、ほかのだれにもいう事もできない病巣なのだ。

他人は父や伯母のなかだけではなく、自分のなかにもいた事にアンナは気づく。

急速に、アンナは変貌した。ものいわぬ、行動も、のそのそと、何をやらせても物憂さそうに、配給のジャガ芋ひとつ満足に煮ることもできない、ヘマばかりを無器用にやらかす娘になっていった。アンナ亭の看板娘とこれが同一人とは以前のアンナを知っているも

のには咄嗟に思えないくらいの変化が外観にも表われて、しかし見る人が見れば、奇妙にバランスの欠けた感じだが痴呆的な魅力のほの見える「女」になっていることがわかる。

ひとり切りになるひるまは、ほとんど部屋から一步も出ずにアンナは過ごした。もの憂く、からだを動かすのがおっくうだった。時々窓から指しこむ春の陽光の縞のなかに、マートン橋や畔のアンナ亭などが白昼夢としてうかびあがったが、それは遠い夢のなかの風景で、まるで現実感がなかった。

春がゆき、夏が来かけていた。

ズーゾンの夏は、その爽やかな事で知られている。雪の深い冬とともに観光シーズンである。特に初夏の白い陽光は、階段状にならんだ色とりどりのズーゾンの街並みを、鮮かにさせる。

しかし、もと兵舎の収容所は、爽やかさとは無縁で、砂地は陽光を吸いこみ、河床に近いせいか湿気をたちのぼらせて蒸した。アンナは、いっそうだらんとしていたが、この二三週ただの検診だけでSPのいびり手が伸びてこない。たぶんあまりにもふやけてしまった感じのアンナに手を出す魅力がなくなったか、あきたかであろうが、そんな事で一時は

蒸し暑さに火照りが増したが、やがて調子の落ちが底をつき、徐々にアンナは回復しつつあったのだ。

ある日、久し振りに表へでて見る気になりゲートの方へ歩いて行った。門衛に近づくことは避けて有刺鉄線の柵にそって裏の方まで行った。ズーズン河岸に近い倉庫が鉄線のむこうにならんでいる。

砂地にところどころ雑草が芽生えていた。青味をおびた香りが風にのって鼻腔をそそってくる。アンナは、草の特に生えこんだところに腰をおろした。

ふいに涙ぐんだ。草のいのちの匂いは、いじらしい。アンナは自分の墮落を思った。涙ぐんだりするのも感傷にだらしくなっているからだ、と草に対してアンナは恥じ、濡れた目をぬぐった。

と妙な事に気づいた。建物の礎石があり、空気抜けであろう隙間があいて、暗い床下が覗けるが、その手前の草がところどころちぎれていて、地に倒れているものもある。何か重い荷物をひきずった後のように見える。

アンナは頭を草に近づけて礎石の隙間をのぞきこんだ。何事もないようだが、興味が手をそこに突っこませた。と、指の先に礎石と

あきらかに違うざらざらした木肌が触れた。さぐったところでは木箱のようである。

「君！」

とふいに上から呼ばれてアンナはギョッとした。SP、と思った。人影が立っている。靴は、しかしSPの長靴ではない。アンナはおそろおそろ視線をあげた。洗いざらしのズボンと白いシャツを着た若者が、たしかにイスヤらしい若者が立って、寝そべった恰好のアンナを見おろしていた。

「君！」

と若者は驚いた声を出した。

「君はアンナじゃないか。そうだ、アンナだね」

「そうだけど、あんたは？」

「僕はポール。ポール・ニザンだ。といって君は知らないだろうけど、河岸で配達夫をしていた」

「そう。ポール、ポールっていうのね」

「アンナ亭に行った事はないけど、君のことは知っている」

とポールは、さっとかがみこんでアンナの腕をとった。

「何をするの！」

「お願いだ、アンナ」

と殺した低い声で、しかし情熱をこめてポールはいった。

「大きな声をたてないでくれ。ここを立って少し離れてくれないか」

強引だが、どうやらポールはおかしなことをするつもりで自分の腕をとったのではなさそうなことにアンナも気づいた。自分の力でアンナは立ちあがった。

しかしポールは手をゆるめず、強い力でアンナを引き、建物の影にいざなおうとする。アンナは少し腹が立った。この男も自分勝手に、SPにでもなったつもりでいる、と思った。

「やめてよッ！ 乱暴なまねすると声をたてるわよ」

ポールははっとして強く引く力を抜いた。「アンナ。ごめん、つい夢中で。人の目につきたくないんだ」

いって、それがますます誤解をまねきかねない言葉だとさするとポールはあわてた。

「アンナ。僕は悪い男じゃない。お願いだ、ちょっと話を聞いて欲しいだけなんだ」

「手をはなしてよ」

ポールは、はじめて自分がアンナの腕をにぎっているのに気づいたかのように、どぎま

ぎして少し赤くなり、手をはなした。

「話なら聞くわ。いってちょうだい」

アンナはうながした。自分の方がどうやら優位に立っているらしいことにアンナは気づいた。しかし用心しなければ、相手は力も強そうな男のことだ。

ポールは目を伏せて、ちょっと考えているようすだった。決断して、目をあげた。

「アンナ。君は知ってしまったね」

「知ったって、何を？」

「君が、さっき手を入れていた」

「ああ、箱のことね」

とアンナは明るい声でいった。そうか、そんなことでこの若者は心配しているのか、と気が抜ける思いだった。

「約束して欲しいのだ、アンナ。その箱のこととは、だれにもいわない、と」

アンナは、すばやく頭を回転させた。箱のなかみは何だったのだろうか。よほど若者にとっては大切なもののようなが。ポールとかいったが闇商売でもやっているのだろうか。それにしても、

「だけど、どうしてこんなひるま、あなたがここにいろの？」

アンナは疑問を口にした。若者の年なら微用にとられているはずだ。

「僕の行っている工場にSPの手入れがあって組織の責任者がひっぱられたのだ。それで工場がしばらく閉鎖で、僕は待機というわけさ」

考えて言葉をさがしながらポールはこたえた。

「組織、というと」

「イスヤ抵抗組織、さ」

何か決然としてポールはいった。

「アンナ。僕の目を見てくれないか。君もイスヤ人だ。これだけいえば、わかってくれるね。——箱のことはだれにも言わないで欲しい。とても重要なことなのだ、アンナ」

闇物資などではないらしいが、とアンナは思ったが、となると見当がつかない。ポールの真険な目にアンナは少し自分の方がうしろめたい気がした。物を隠しているのはポールの方なのに、おかしいことだった。

「いいわ、約束するわ」

「ありがとう。君を信じるよ、アンナ」

ポールはやっと視線をはずした。また少し考えこむ。

「信じるっていうけど、まだ心配みたいね」

「そうなんだ。アンナ。まだ心配なんだ。たとえ君に悪意がなくとも……」

「大丈夫、喋らないわ」

「うん、その点は信じる」

とポールは年なりに幼くなった。

「しかし、アンナ、君と一度、徹底的に話しあわなければいけない」

アンナは、自分の部屋をポールに教えた。

日中はひとりでいる事も。

それで別れた。別れてから、なぜこんな事をポールに教えてしまったのか、と少し悔いた。軽卒な気がする。ポールの握力の強さを思いだし、そのなかにはポールの他人がいるようで、他人は信用できない。

翌日の午後ポールはアンナの部屋にやって来た。廊下に足音がなかった。ゴム底の靴をポールははいていた。こそそした感じはなかったが、とても用心深いようすである。

ポールの話は、アンナの理解を超えていてほとんど、何をいつているのかわからなかった。ただ、イスヤ人はこのままではメーク党の奴隷にされてしまうこと。いやメーク党の究極の目的はイスヤの皆殺しにあること。それに対してイスヤは団結してあらゆる手段を

とって斗わなければならぬこと。民族意識をもって味方を信じ敵をしぼって斗わなければならぬこと。など、ボールのくり返すこととはわかった。が、SPに対して、やはりアンナやボールは無力すぎるようで、何をしてもいかかわからない。ボールの話もそこまでまた来るといってボールは帰った。

それから検診日があり、アンナはちょっと要領を使って豚になることをまぬがれた。相変らず無気力ですっかり駄目になったふうに装ったのだ。SPの目はアンナを通り過ぎていった。アンナは、自分が変わったことを意識した。どういうふうに変ったかわからないがSPなどに負けないでやって行けそうだ。ボールのせいだろうか、とアンナは考えた。ボールの話はさっぱりピンとこないけど、ボールの口の動きを見ているだけでも気持ちよく元気が湧くようで、また来るといった日が待ちどおしい。

ボールはたしかに他のイスヤ人と違っていた。気力があり、若者らしく卒直だった。河岸の若者など皆そうだが、収容所に入れられてまでこうなのは珍しい。第一、アンナ自身が、草を見て涙ぐむような気力におちいってしまったのではないか。このひとは特別製なの

だろうか、とアンナは思った。はじめて見たときは寝そべっていたので長身の男に見えたが、さしたる体格のボールではない。ひきしまった筋肉は持っていそうだが、見かけはやせて骨太でもない。精神だけが特製の生一本のようだった。

話の途中、

「ボール」と思わず声をかけてしまった。

「ボール、ちょっと顔を見せて」

「え？」

とおかしな顔をした。顔を見せるにも何にも、手のとどく近さで目を見あわせているのではないか。両手を出して、アンナはてのひらにボールの顔をはさみこんだ。少しいぶかしげだが、やはり澄んだ瞳は美しい。アンナは突然に情熱にかられた。いきなり唇に唇を押しつけて、手をしっかりボールの背にまわして抱きしめた。

「ね、ボール、いけなくなんかない。いけなくないわね、ボール」

とうわ言のようにアンナはいった。

ボールは少しあわてたようだった。が、少したつと、ぎごちない手つきでアンナを抱いてきた。こわれ物をかかえるように、そっと抱いてくるのに、アンナはじれた。

「きつく抱いて、ボール。ぎゅうっと。ああボール」

こうしてはじまった恋は幼いものだった。閉ざされた、ほとんど囚人に近い世界で、アンナは、はじめて得た恋に燃えた。

ジャークではメーク党が政権をにぎると、さっそく政令で、次には立法でイスヤ法が成立した。婚姻については特にきびしく、夫婦関係以外の関係は姦通私通として重罪に処いすることになった。結婚にはさまざまな条件がつき、むずかしい。ズーブンがジャーク領になると同時にズーブンイスヤ人にも適用されて、収容所のなかでもそれは同じことだ。施設のなかでは、新しい結婚は承認機関の欠落で不可能なことになり、密告制度がSPに奨励されて、私通はビシビシ検挙される。

ボールはアンナの情熱を入れたが、しばらくはストイックに一線を持っていた。ボールはまだ明らかにしていないが、レジスタンスの一員であることは、アンナにもわかった。アンナを冷く拒否しているのではなく、そちらにやはり多くの力点をボールはおいて、行動の基準にしているのだった。

そういうボールがやはりアンナは好きなの

だし、ポールの意志に邪魔を入れたくはなかったが、アンナとしては、やはり行きつくところまで行って全身的に恋に賭けてみたい強い衝動をおさえ切れなかった。SPになぶられ感覚的にアンナは性の魔力を知ったが、不思議なことに処女のままだ。考えてみれば、ただ一片の純潔だが、それゆえにこそ、ポールに万斛の想いをこめて、そこで結ばれたかった。

軍医がそれを発見するおそれはあった。その時は口が裂けてもポールの名はいわず、地獄へなりとどこへでも行く心がまえをたしかに用意した、とアンナは思った。

アンナはポールをいとしみ、ついにいざなって二人はひとつになった。快感などほとんど感じる必要がなかった。何も感じなければならぬことなどはなかった。

ポールが徴用工場へまた行くようになり、ひるまのしのび逢いがたたれて、夜空のもとにもつ臥戸だった。夜はひるより格段に危険だった。男たちが帰っていて、アンナ達のような恋もあるし、秘密組織の連絡、会合もあってSPの目が光る。砂地を背に受けて、アンナはしかしすばらしく豪華な、胸溢れる思いだった。満天の星が、よろこびにうるんで

いた。

検診日に軍医の目は逃れ得た、と思った。特別に目をつけた者以外の診方はほとんど視線をとめることすらなくなっている。二時ごろの終りがくりあがって正午には終わってしまった。しかし、それだけ精力は、豚に選ばれた者にかかるようで、人数も十人くらい残され、いろいろな器具や、刑罰法などが案出され、SPの兇暴性はいやましている、ということだった。

夏から秋、アンナの恋はとめどなく深まって行くようだった。逢う場所も工夫して、建物の縁の下を求めたり、階段の下の物置を見つけたら、秘密党員の活動にも匹敵する気のまわりようだった。

その秘密組織といえ、ポールは恋とそれとはっきりわけていて具体的な実態はなかなか明かさないが、暗にアンナにも参加を考え求めている、紅色ルーシアの政体を熱心に説明したり階級論で魚河岸をえがいて見せたりする。アンナのアンナ亭の生活はプチブルでその享樂した自由も自然もプチブルのわくのなかのものだ、といわれると、プチブルが悪いかどうかかわらないが、たしかにアンナ亭の自分は、せまい猫のひたいぐらいの世界で

かりそめに約束された日常をすごして来たのだという実感は湧いた。世界はその外にひろく存在し、そこではSPのような獣たちがわが物顔に横行しているのだ。難しい事はわからないが、ポールの世界へ入って行き、ポールと共に生きることなら何でも私はやる、とアンナは興奮して内心に誓った。

○

夜明けの寝こみを、襲ってきたSPの長靴の足音で、眠りを蹴破られたアンナは、恋の終りをさとした。いや、終りとはいえない、恋はこれからアンナの肉が亡ぶまで生きつづけるに違いはなかったが、段落をひとつむかえたことは確かだった。

後手にねじあげてくるSPの蛮力にアンナは抵抗しなかった。ここは平静だった。

父と伯母とアンナは、たちまちじゅつなぎで縄尻をSPにとられ鞭に追われてセンターまで歩いた。父と伯母は木の柵にならべられてつながれた。SPの手は容赦なく、アンナの衣裳をむきにかかってくる。

最後の一枚まで赦さず、とり去られ、鎖と錠と鑑の拘束具がピシピシとポイントに喰いこんでくる。人形のように相手にまかせたか

らだにその時、驚きの波が走った。路のなかに一団のSPが現れ、その中央に、アンナはポールを見いだしたのだ。何かしら自分がポールの名をさえいわなければ、ポールにはSPの手は及ばないものとアンナは思いこんでいた。平静はたちまちに消え、アンナはすでに口につめられた鉄丸の存在も忘れて叫んだ。身もだえた。鎖がひかれ、アンナの動きは無力にごろんところがつて、わずかにうごめいただけに終わった。

ポールの家族が柵につながれた。老人のボロをまとった父母が、捕縄の胸や手首に喰いこむのが痛々しい、ポールがもっとも愛していた者としてよく語った妹のマーシャの姿もあった。

ポールがアンナと同じ姿にされて地面にころがされた。それからSPの振るう鞭がおそいかかってきた。

鞭は、からだを寸断する痛みを走らせて、ところきらずやってくる。アンナは痛覚にはじめて、ごろんごろんと丸太のようにころがって、冷い体液が肌ににじみ、そこに砂がついて、動くことすれた。

建物に人の気配が動く。人が集ってくる。こういう時の見物は奨励されていて、人がこ

ないとSPが駆りだすくらいなのだ。陽が出て、純色の空だが、地面の砂が白くなり、汗が速度を得て流れはじめ。鞭の動きの休むとき、アンナは呼吸をととのえて、ポールの方をうかがった。ポールの瞳をとらえたかったのだ。

恋をたしかめて、もう一度アンナはポールに信じてもらいたい。自分のなかに生きつづけるであろう恋を信じてもらいたい。

瞳をとらえないうちに、またSPの鞭が襲ってくる。ごろんところげだす。世界が中心を失ってぐらぐらとゆれる。しかし度かさなるうちにアンナは、鞭の空気を切る音を聞いて本能的に方向を知り、肌を縮める自分に気がついた。ポールを目のすみにチラッと見た鞭の力を利用して、ポールの方へ寄ろうとアンナは覚悟して、空気を切り裂く気配がやってくるのを待った。

ピューとくる一瞬前に体位をはかってととのえ、痛苦とともにめざした方向にころがった。一度ではとどかない。ポールを襲う鞭でせっかく縮まった距離がまたひらく。しかしポールの表情をチラリ見ることができた。かすかに眉をしかめポールは目を閉じていた。恐らくすべて見ることをポールは拒否したの

だ。と思う間もなく、鞭音。アンナは思い切って跳ねるように腰を振り、ころがった。

世界が回転すると、止った位置に思いがけなくポールの肌が、唇に触れそうに近づいていた。ポールにともなくアンナにともなく、次の鞭がやって来た。アンナはポールにぶつかっていった。ポールの瞳がひらいたのを見た。その瞳の深い奥底を一瞬间にアンナは胸に呑みこんでしまった。ポールはいじめられてなお力を張らせ威張って頭をもたげていた。アンナはほとんど惚然と全身がとろけた。触れたのを幸いにして頬を寄せ、唇をあてた。

SPが何か侮蔑の言葉でのしった。アンナは聞いても、まるで聞こえないも同じだった。鞭が襲った。引き裂かれた。はじめて悲しみがアンナの胸を突きとおった。

「お前らがチンチンカモカモしとる事なんぞは前からわかつとる。いいか、そんなことを聞いとるんじゃない。ポール・ニザン。お前は紅色スペクトルだろ。そこまではわかつとる。お前の組織における役割りは、どうやら武器集めらしい。この、われわれがお前らイスマの豚のために支度してやった寝倉のどこかにも武器が持ちこまれ、隠されていること

もわかつとる。いいか、その場所は、どこだ——それからお前らの細胞とかいうそうだがその本拠はどこだ。この二点、吐くのはどっちかひとつでもいい。すなおに出りゃ、お上にもお情けがあるってものだぞ」

ポールは目をつぶり、眉を軽くしかめつづけている。

「吐いちまえ、豚め！ 後になりや必ず吐くんだ、どうせな」

SPが苛だちはじめ、長靴の音をたてて歩き廻る。セクター地上の、四面コンクリートの部屋だった。椅子に鎖でくくられているポールの前に、アンナは引きずり出された。SPの目的を悟ってアンナは悪寒に慄えた。ポールの前でアンナを責めて、ポールの口を割らせようとしているのだ。それがポールに与える苦痛を咄嗟に感じてアンナはふるえた。

「いいかポール・ニザン。お前は見まいとしているようだが、見たくなきゃあ見んでもいい。ここに雌ブタが一匹ころがってる。アンナとかいう雌ブタだ。そいつがいま、鞭や焼火箸のごちそうを喰ってヒイヒイ鳴きよるかな。よく聞いとけや、いいか」

前置きがあつて、アンナの口を覆っているものが取り去られ、鎖がひかれ、ころがった

腰部に第一撃がおそつて来た。

おお、ポール！ だいじょうぶよ。あたしは、ちっともかまわないのよ。

思わず叫び、呼びかけて、アンナは懸命に声を噛みこらした。呻きが低く、喉につかえて、咽んだ。続けざまにムチはやってきて、臀部を中心にアンナの肌は燃えて赤黒くふくらんだ。しかし意外にアンナは苦痛になれて耐え忍び、ついに低い呻き以外に声をたてない。SPは鞭をあきらめてほうりだした。短い鉄の棒らしいものをつかんだ。アンナは目にして、さすがにぞっとした。火箸といったが、どうやらハンダづけに使う電気ゴテのようだ。すでにスイッチが入れられて、先端が赤く燃えている。

首の鎖につながる鎖を引いてSPはアンナの顔を膝下に折り敷いた。熱い尖端を鼻の先に突きつける。

「どうだ。こいつで焼き豚ができるぜ。顔をお望みかね。豚らしくねえ鼻だから、豚らしくしてやろうか。そうそう、こちらの旦那にも、ちよっと熱いところを知っておいてもらわにやな。それっ」

猿轡をのばして、いきなり棒の先でポールの胸を突いた。ジ、と音がして、煙がとぶよ

うに立った。ポールはさすがに、ギ、とも、ガアともいう音を口のなかで立てて、首をのけぞらせた。

「やめてえ！ やめて」

と思わず、アンナは叫んだ。

SPがにやっと笑って、手をひるがえし

「それ」

といった。

獣の断末魔のような咆哮を喉いっばいにほとばしらせて、アンナは気絶した。

水をかけられてよみがえったアンナに待っていたのは、また火の棒だった。

目ばりをされ、目を見開いてポールは、アンナが足の裏から臀部、股、腹、乳、うしろ手の手のひら、腋と順々に焼かれ、その度に失神し水を浴びよみがえり、ほとんど人間の声とはおもえない叫喚とともに仮死にいたるさまを見せつけられ、しぼり出されるような脂汗を流しつづけたが、ついに言葉らしいものを出さなかった。

「強づくばりめ。お前ら、自分が人間なみだと思つとるのか。こっちの事はけだものだとか何だとか思ってるんだらうが、お前の方こそ間違なくけだものだ。いいか、同じけもの

でもおれたちは狼だ。お前らはブタだ。本物のブタ以下だ。いはい、今実物を見せてやるからな、よく見とけ。こっちの雌ブタが、雄ブタにさかられてヒイヒイいうだけじゃねえぞ。すりこぎでも電気のタマでもいいのさ。それが雌ブタのしょうこ、だ。いはい、見てろ」

そうして、アンナはあの恐れていた自分のなかの他人、恥知らずな快楽をSPの手でひきずりだされた。狼の雄の襲撃をうけて、メス豚の隠れていたものは露呈し、豚は悲しげに糸ひくような、すすり泣く鳴き声をたてて悶絶した。

いやしげな響きを含んだ哄笑が、わざとらしく立てられるのは、まりのように転がり廻っている哀れな豚の周囲だけだった。遠巻きにして投げられている多くの視線は、すべての感情を失った恐怖の凝集のようであった。もはや怒りも憎悪も通り越し、あるものはただ怯えと放心。ざわめきすらない中で、狼の鞭音と吠え声だけが際立って飛び跳ねる。

ボールの瞳孔の焦点が呆けて、やがて虚ろに所在を失った。

「このやろう、呆けてしまいやがった」

SPが、いまいましげに舌うちした。

○

ストリックローゼン夫人のようすは、しだいにアンナの胸をしめつけて来た。ほとんど無駄な努力を、まるで考えないでつづけている。腰をもちあげ進んでつかえ、へたってまたもちあげてくる。足は錠で動きはとれにくいだろうが、なんとか処理すれば腰は低いまま進めるのだ。それを飽かずうしろからこづいていくSPの手の動きも異様だった。

マダムの表情は必死だが、口が突きだしているので緊迫感があるものの、瞳がどうもおかしい。よく見ると脂汗をながしながら、虚ろに呆けている。

気が狂っている。

この人も気がふれている！ とアンナは気づき、ぞっとした。気がふれてなお、女体は拘束され、本能の恐怖にうごめきつづけないければならないとは。

その時、SPが長靴をあげて腰を踏み、ぐっと力をこめた。夫人は、踏みつぶされて、蛙のようにべたっとへたった。変な織い、笛のような音をたてて、足の下で動かない肌を波うたせた。その動きと音は――

あの陰微な、けらんを語っていた。

うっと息を吞んで、アンナは自分の動かない手で耳をふさごうとし、目を固くつむったのだ。

その狂ったマダムとたしかに同じ荷台に乗せられて、トラックは走りつづけていた。

――外は闇の夜のようなだ。

マーシャもいるだろう。しかし、アンナはまったく孤独だった。だれの存在も実在感をもって考えることはできなかった。自分でさえも、すでにここに在る感じがしない。在るのは、十二立方フィートの闇であり、闇のなかを走りつづけている闇、それだけだった。

(了)

――〇――

後記 本誌43年12月号に発表した「検診日の朝」の続篇であります。併読願えれば、筆の足りないところが、いくらかでもおぎなえ立体感が生じるのではないかと附記するしだいです。

(カット・柿淳五郎画)



続・妊婦嗜好

あれこれ

羽 鳥 水 江

■三月号を見ると、私が大分前に投稿しておいた文章が、思いがけなくのせられていました。昨年十二月号までしか見ていない時点で書いたものですから、もうとっくに没になったと思っていたのですが。但し、引用の部分が長かったせいか、大分削られています。それで、今日はまた調子にのって、続きを書いてみる気になりました。

これもまた、いささか古い資料で、昨年の12月10日号、週刊誌「プレイボーイ」です。目次には「へ女の診察室」ゲスト・野村悦子、ドクター・前田武彦、とあり、それだけでは

分らないのですが、本文を見ると、大きな活字で「妊娠中のコの裸を撮りたい」という見出しがついています。おやっと思って読んでみると、次のような対話なのです。

ホモの写真をとったり、山谷のドヤ街を探訪したりした若い女性カメラマンの、例の前田武彦さんによるインタビュで、まず、「ホモの写真を撮ったそうですが……」

というしゃべり出しで、次に、「ホモじゃなく、ほんとの男性ヌードは撮りたい?」

という質問に対して「特別に意識しないけど」

「男の身体で一番美しいのは、どこですか」「肩からお尻のあたりに感じます」

という具合に進行します。それから少し雑談のようになって、いよいよ核心的な質問に入るわけですね。前田さんが、

「どんな人間の姿を撮ってみたいと思う?」と聞いたのに対して、野村さんは、驚くべきことに、突然、

「妊娠8、9カ月の女性の裸を撮りたいんです」

と、ハッキリ答えています。ところが前田さんは、この重大な返答の意味を理解したのかしないのか、あっさりと、

「人の姿を撮るより、あなたが妊娠したほうが早いんじゃないかな(笑い)」

という風にはぐらかして、話題を変えてしまいます。もっと突っ込んでしかるべきところ、私などには非常に残念に思えます。

あと、セックスの話、ドヤ街での体験、結婚とか恋愛についての話で、この対談は無念にも、無事に終わってしまうというわけです。

これ以上、突っ込むのは「プレイボーイ」向きでない、ということかも知れませんが、「ほう、それは面白い。妊婦のどういうところに興味を持つの?」

ぐらいは聞いてほしかったところです。

「変わってるかも知れないけど、子をハラんだ女って、その、すぐくお腹が大きいでしょ膨らんじゃって……何か、グツと感じちゃうんです」

という具合に対話が進めばよかったのに、と思います。この最後の対話は水江の創作です。でも、今からでも聞いてみたい。

私だけでなく、妊娠中の同性のヌードを撮ってみたいという若い女性があらわれたことに、いくらか意を強くしている私なのです。

「プレイボーイ」の読者はどう受けとられたかは知りませんが、本当に妊婦のヌードが、一般誌にもものるようになったら、すばらしいと思います。

例によって、もう少し空想を続けます。

買いもの袋をさげて、街角を行く若い腹が大きい女性。午前十一時頃。野村悦子さんが近づく。妊婦が不審そうに足をとめる。

「あの……ご迷惑はかけませんから、あたしとちょっとつき合って下さいませんか？」

「え？」

「すみません。よろしかったら、そこらでお食事でも……怪しいものじゃありませんわ」

「でも……」

「おねがいです。だしぬけでびっくりなさったかも知れませんが、失礼なのは許していただいて……おねがいますわ」

「何だか知らないけど、それじゃあ……」

半信半疑の若い妊婦を先に立てて、レストランに入り、ランチを注文してから、

「あたし、カメラマンなんです。女で、おかしいかしら？ それであなたに、はじめてお目にかかるけど、おねがいがあるんです」

「だって、わたし、何のことか……」

「もっともですわ。ごめんなさい。それで、また変なことうかがいますけど、奥様、今何カ月ですか？」

「何カ月って、わたし……」

「妊娠何カ月かっていうことですわ」

「まあ、そんなこと……でも……臨月、もう今週にでも生まれるわ」

「おいくつ？ 奥様のお年だけど」

「十九だわ」

「あら、すてき。とっても若いんですのね。すばらしいわ。ますますおねがいたくなっちゃった」

「何のことかしら？」

まだあどけない少女のおもかげを残してい

る妊婦は、いくらか打ちとけて来た様子。

「じゃあ言うわ。モデルになっていただきたいんです、ヌードの。でも真面目な話なの。芸術写真なんです。顔も分らないように、お礼もはすみませすわ。承知していただける？」

「でも、お腹が、こんな……」

「いいのよ。あたし、妊婦のヌードのモデルを探してたんです。あそこに立って、あなたのお腹が一番大きそうだったから、声をかけたんです。それに、とても肉体美だわ」

目で笑って見せて、おだて上げると、妊婦も、まんざらでない様子で、気が動いたのか今度は向こうから聞いて来た。

「それで、どうすればいいんですか？」

「まあうれしい。承知して下さいましたのね。お礼は二時間位で×万円じゃどうかしら？ 特別はりこんだつもりだけど」

「いいですわ。でも、どこで、どうして？」

「心配だといけないから、ちゃんとしたスタジオを借りるわ。今から電話して見るわ。それで、よかったら今すぐ。どう？」

「ええ、いいわ」

こうして美しい妊婦ヌードが、写真雑誌のグラビアに大きく出ないものかと思えます。

|| S M カメラ・ハント || ^ 飯田カオル・滑川幾代 V

イン・トーキョウ

第二夜

辻 村 隆

— 妊娠七カ月の新妻を縛る —

☆ 肉 塊 の 蠢 き ☆

飯田カオルの巻

かなり熟睡していた。遥か地底の彼方から辻村さん……辻村さん……と、夢幻の世界から引きもどすような声——。ハッと眼醒めると、ソファのシングルベッドの上布団を乱して、コーポの一室で、一夜を過ごした私自身を確認する。そうか、ここは吾が家ではなかったのだ。東京青山の、コーポの隠れ家の、

一室であることが、寝起きの混乱した頭にもそれはすぐ理解出来た。「随分よく眠っておられましたね。何度も起こしたのですよ。これじゃ泥棒に入られたって分りやしない。もう午前十一時前ですよ」賀山社長の大きな図体が、私にのしかかるようにしてニコニコ笑っている。

「ああお早うさん。どうも昨夜の渚マリのイメージが強烈すぎたのか、眠ろうとするんですが、振り払えど振り払えど、彼女の白い体が脳裡に浮かんで、とうとう午前三時頃まで眠れなかった」

「昨夜、彼女を送る途中ヒドイ眼に会っちゃいましたよ。数カ所で検問にあいましてね。散々うるさく聞くんですよ。何か逃亡犯人の非常警戒なんですが、私の車のナンバーと五番違い。末尾が3と8じゃ、こりゃ拗っこく止められるのも無理ありませんがね。お蔭様で帰宅が二時間ぐらい余計かかったちゃって、女房、御機嫌がわるい」

「それは、まっすぐに帰ったという言訳？」
「生理中の女は嫌だといったでしょう。勿論



マリのアパートの近くで、さっさと降ろしましたよ。でも若し、そうでなかったら分らなかったかな。いや本心はね——」

「プレイのあと、すぐ寝るなんてことは、確かに体によくないね。第一、印象が生々しすぎる。それに、コーポには、私がボツリと独りっきり。これじゃ、考えるなといわれても考えますよね」

「ハハ、辻村さんらしくもない。いやにデリケートなんですね。まあ、彼女は彼女。いよいよ、今日の行動開始ですよ。ホラ、いったたでしょう。例の妊娠六カ月の妊婦。勿論妊婦だから人妻だけど、若い女性ですよ。新婚

で、去年の三月に結婚したのだから、未だ十カ月も経っていない」「へえ、よくハント出来ましたねえ。そもその、なれそめはどうなんです」

「話せば長いことながら、かいつまんで話すとですね、実は彼女とは結婚以前からの知合いなんです。新劇女優の卵、いわば研究生ですね。ものにならないうち、同じ劇団内の若い青年と出来ちゃった。金もないのに闇雲に同棲しちゃっ

て、挙句の果てがズルズルべったりに結婚したってわけですが、その彼女の学生時代、仲の良かった友達が、うちの会社のBGなんです。時々遊びに寄っていたが、さして関心もないうち、ヒョンなこと、公演会の切符十枚許り、無理矢理に押しつけられて買わされちゃった。殆んど人に呉れてやりましたけどフト興味を抱いて小劇場を覗きにいったんですね。ホンの端役で出ていましたが、華をつけてやる気で、寿司の差入れをやったんですよ。奴さん、すっかり感激しましてね、自分の方から誘いにのってきた。既に青年と出来ていた頃で、処女性はありませんでした

が、肉体の提供が、彼女の唯一の感謝のしるしだったのでしょうか。まあ、なるようになった夜のひとときを過ごしました」

賀山氏は一息切って二本の煙草に火をつけて、一本を私に差し出した。私は黙々と煙をふかしながら、彼の次の言葉を待つ。

「正直いって、続いてもう一度、前後二度の交渉があつて、私も青年の存在を知り、むしろ意見めいたことをいって、それから交渉を絶ったのです。うちの会社の事務員から、それとなく、彼女のことをきく程度で、同棲していることを知りました。事実、その時点では、もうゆきずりの娘に過ぎなかったのですが……」

それがヒョッコリ、去年の十一月の末頃、私の会社を訪れてきたのです。うわべは友達をたずねてきたような素振りですが、彼女の眼が、判っきり私に物言いたげでした。その時既に、彼女の腹部は、隠しようもない膨みを如実に示していたのです。オヤッ、妊娠しているな——。私はすぐ察知しましたよ。社内では何しろ謹厳な社長の仮面でしょう。ヘンな冗談もいえませんし、その時、妊婦に興味を持っておられる辻村さんのことをフト思ひ出し、このチャンスに一度当ってやろうと



秘かに心をきめたのです。連絡なんてわけもありません。近頃どうかねとか何とかいって近寄りながら、そっとメモを彼女の膝に落とす。用事にかこつけ外出するからといって、車をメモに書いた場所にとめていると、息せき切って駆けてきた。

・食事をしながら話をそれとなくその方に向けてゆくと、男の収入が少ならしい。彼は搔爬せよというが、本人は愛する男の結晶をうみたいんですね。それとはいいい出しかねてもじもじしているんです。少し纏まった金が欲しいんですね。身重の体を無理して、パートタイムで某所に勤めているが、さした収入でもないらしいんです。新劇の卵で、しかも妊婦ときちゃ、使う側も余り役に立たないのでしょうね。彼女はセックスの代償にと思っ

てるらしいが、私にしちゃこの身重の体にそんな気分も起こらない。プライベートの小切手帳開いて、万単位で片手の金額書き込んで渡したら涙を泛かべた。可憐なんですよ。私のためなら、何でもやる気になっていましたよね。しかし、心

の底で、チラリと良心が咎めるのか、朋友の事務員や、夫にはくれぐれも内緒にしてくれと念を押すのです。勿論そんなこと、言えといわれたって言やしませんかね。仕事もあるから、パートタイムあけの午後七時過ぎか、日曜日にしてくれという。しかし夜となると主人が不在を怪しんでもいけないので、次の日曜日早速会いました。午後一時までは体が空いているのですが、連れ込みホテルへ、朝っぱらから行けもしませんしね。日曜日のその日、十二月の始めでしたが、私はカメラと縄を準備してゆきました。奇異に思ったらしいですが、私のSの趣味をズバリいってやると、黙っていいなりに手をうしろに回し、私の好きなようにポーズをとりました。軽い飼育を終って二回目、男が福島の方へ巡業中の

ある午後、このコーポで、かなり強烈なものをとりました。セックスにかわるバイプレーターの活躍で、彼女は燃えに燃えました。この二回です。小切手の金額は、二回のプレイにしては、余りにも高価な代償ですが、年末が押しつまって、どうしても越年の金がいるのか、彼女はプレイの前提条件のもとに、どうしても借用したいといってきたのです。少し調子にのっているかと、一寸イヤな感じしたのですが、彼女にとってみれば真剣だったのでしょう。私はこの時ヒョッと辻村さんの、正月上京の時の愉しみに、彼女を確保しておこうと思いつきまして、いさぎよく小切手をきってやったのです。貰った俵で逃げて、約束を果たさぬような女性でないことは、彼女の誠実な気性から分っていましたから信用していました。だから、今日のプレイは、いわばその代償ともいえるべきものなんです」

「なるほど、それなら絶対にくる可能性があるわけなんですね。いろいろとお膳立てしていただいて、本当にどうも……」
「いいですよ。それが同好者のスキな道なんです。気になさなくていいですよ」
「その人、あんな話では、確か妊娠六カ月とか仰ってましたネ？」

「そうですよ。彼女が自分でそういうのだから多分、間違いないでしょう。でも、それは去年のこと。今日なら月が変わって、もう七カ月に掛かっているんじゃないかな」

「とすると、かなり膨れているから、目立つでしょう」

「ええ目立ちますね。脚やふくらはぎに妊婦特有の静脈が浮き上っているし、それに少し肌にシミが出来た感じですね。興味ありますか、妊婦の彼女に？」

「そりゃ、勿論。ところで、その彼女の名前は？」

「飯田香。香水の香って字一字で、カオルってよむんです」

「いくつ？」

「昭和廿二年、亥年生まれだから、二十一才かな」

「ほう、若い——」

「ところで、辻村さん。誠に申し訳ないんですがね。あたし今日は御一緒、出来ないんですよ。決して飽きちゃったというわけじゃないんです。是非ない用事が出来ましてね」

「おや、どうしてダメなの？」

「おひるに家内の弟が、恋愛進行中の彼女を私にみて欲しいって連れてくるんです。本人

同志結婚を誓った仲らしいんで、家内もやいやいいいますし、日曜日だから、まさか仕事があるとも誤魔化せなくて、折角愉しみにしていたのに弱っちゃったですよ」

「じゃあ、今日のハント、明日の夜に延期してもいいですよ」

「明日は明日で又、予定あるでしょう、編集部より連絡あった人。だから一応カオルに手筈はしておいたんです。律気な子だから十中八、九、間違いなく来るでしょう。でも辻村さん、独りでハントしたっていいじゃないですか。いつもは独りのくせに——」

「そりゃ、私は構わないけどさ。何だか社長がいないと勝手が悪いし、それに社長に気の毒ですよ」

「いいんです。もう数度もプレイした人だし、まあ今日の処はお任せしますよ。ああ、それからこのコーポ勿論自由に使っていた方がいいんですよ。ここへ来る時、ピーコックスストアで少し許りだが食糧やウイスキーを仕込んできました。」



冷蔵庫へ入れておきましたから御自由に。それから、ついにてに事務所へよって、この鞆、持ってきました。ホラ先日、京都へ志摩桜子といった時、持っていた縄やパイプですよ」

「オヤオヤ、何から何まで済みませんねえ」

「それはこちらこそ。わざわざ引っ張り出しておきながら。プライベートの用事で辻村さんをおっぱり出しておくんですから、誠に申し訳ない」

私は、数々の社長の好意に、衷心から恐縮した。

「まあ、それじゃ私独りで、やるとしましう。ところで、ここへ訪ねてくるんですか」



やなら、キャンセルしてもいいですよ」

「とんでもない。喜んで頂戴しますよ。しかし悪いなあ——」

「まあ、東京へ来たなら、私に任せておいて下さい。その代り関西にいった時、世話になりますよ。梨花さんなんか紹介してほしいですからね」

社長の本心がチラリと覗いた。

「そうしようかと思ったのですが、それじゃ少し飽気ないでしょう。多少は東京の空気も吸ってもらおう気で、実は午後一時、ホテルオークラのロビーで待つよう申しました。電話で予約してありますから、ホテル内にある、中華の『桃花林』で食事して行って下さい」

私にとって、ホテルオークラは未知であった。少し心細い気もする。社長はそれを逸早く察してか、素早く一万円札を私に握らせてくれた。

「私の名をいってチェックしておいてもいいのですが、間誤つくと困りますからキャッシュで払っておいて下さい。ええ、中華がおい

「タクシーの運ちゃんに、赤坂葵町のホテルオークラっていえば、眼をつぶっていても連れてってくれますよ。アメリカ大使館の隣りで、デラックスなホテルだから、すぐに分ります」

このぜい六の、お上りさんの私に、社長はねんごろに説明してくれた。彼はチラリと腕時計をみて、

「おや、いけない。もう十一時半だ。ひる飯と一緒に喰う約束なので、そろそろ帰らなくちゃあ。じゃあ、コーポの鍵、ここへおいときますから、しっかり頑張って、精々いいハ

ントを撮って下さいね。若し体の都合がついたら、夕方にでも来るか、来られなかったら電話しますから。そうそう、お風呂のガス栓到着するなり、すぐひねっておきましたからもうおっつけ沸いてるでしょう。寝呆け面、さっぱり洗い流して出掛けて下さいよ」

到れり尽せりの巨軀は、既に玄関の扉に半分かくれて聞えていた。彼を送って借着のパジャマ姿で道まで出た外は、生憎のしとしとと降る小雨に煙る、薄ら寒い天気模様であった。さっと直線にバックすると、車一杯の道幅を馴れた車は勢いよく四ツ辻を右折して瞬間に消えた。

東京ハント第二日、一月十二日の、私の未知の世界はこうしてあけた。

× × ×

少しぬるかったが、じっと体をつけていると、湯温は急ピッチで熱くなりつつあった。

髭を剃り、丹念に体を洗って、再び独り浴槽に沈む。妊娠七カ月の飯田カオルの容貌が、さまざまな衆知の女性の顔にダブってくる。

しかし結局は、その誰一人として飯田カオル自身ではなかった。幻想しても妄想を逞しくしても、未だ見ぬ彼女の容貌を脳裡に描くことは所詮、無理であったのだ。

支度をととのえて、時間は少し早かったがコーポを出る。小雨だが傘の持ち合わせもなかった。オーバーの襟を立てて小走りに大通りへ出る。知らない街で唯一人、雨の舗道に立つ。恰度おあつらえ向きに、タクシーが走ってきた。手を挙げると気持ちよく止まってくれる。個人タクシーだった。乗車拒否が激しいというのがウソのようにすら思われた。ホテルオークラを告げると走り出す。混雑する大東京とは信じられぬくらい、雨の日曜日の昼過ぎは舗道に車も人も少なかった。

「いつも、こんなに空いてるんですか」

「いいえ、お客さん、日曜日だからですよ。」

しかし珍しいですよ、こんな状態は——」

私の関西弁で、すぐ察したのか、この親切な初老の運転手は、走る道々あれこれと建物を説明してくれた。

十数分でホテルの玄関につく。恭々しくドアボーイが敬礼する前を通って、回転ドアを押す。

高級なハイソサエティの雰囲気、正月気分さめやらぬロビーに充満していた。目立って外人が多い。正面中央の松竹梅の松の、その壮大さに内心畏怖しながら、私はとも角、ロビーをぐるりと見廻す。



飯田カオルの顔を知らないのが、心細かった。社長と一緒にだと思い込んでいたものだから、彼女のフォトを見せてもらおうというような気も起こらなかっただけに、この突然の変更是、どうも心もとない。何か重大なことを数々聞き忘れたような気がする。

第一、飯田カオルは社長に代って、私一人来ることを知っているのだろうか。第二に彼女は私との一対一のプレイを潔ぎよく承諾するだろうか。第三に、若し許容したとしても緊縛のプレイがどの程度まで行なえるのだろうか。第四にカオルはM性なのか、それとも金銭的に己むなく割り切っているのか。第五に社長が来ないことを知って、彼女が現われ

なかった時はどうすればいいのだろうか。

正面入口の扉の見える位置のソファに腰を降ろしながら、私はこうした数々の不安にさいなまれていた。こんなことなら、社長に無理をいって、せめてこのホテルで彼女を正式に紹介してもらい、プレイの引継ぎをしてもらってから別れるべきであった。そんな悔恨も心をよぎる。既に消費したであろう年末の幾許かの代償に、約束を守って彼女は現われるであろうかと、そんな疑問すら頭を拾げてくる。

タクシー拒否を見越して早く出たのに、あっさり到着し過ぎて、約束の午後一時には、未だ二十分近くもある。詮方なく私は、ロビーを右往左往する、着飾った若い女性や、外人の女の圧倒的ボリュームのある臀を眼で追っていた。時計の針は遅々として、こんな時に限って、いやにおそい。

一時に少し前だったろうか。それとなく正面入口を注視する私の視野に、それらしい女性の姿がハタと灼きついた。

女性の服飾にうとい私は、それが何という



のか知らない。在り体に書けば、ハトロンの
のオーソドックスなバーバリコートを、襟を
立てて無難作に着こなした茶のブーツの女性
が、辺りの人々に視線をめぐらせて正面フロ
ントに佇立していたのである。髪は無難作に
黒々とうしろに垂れていて、何の技巧も凝ら
してはいなかった。私の眼は、さっと彼女の
腹部に走る。ころなしに膨れているように
思われる。不躰にきいて人違いであっても困
惑するので、もう少し観察することにした。

立止まっていた彼女は、思い直して、ツカ
ツカと歩いてくると、私の前を通り過ぎて、
空いている四ツ許り向うの正面ソファに腰を
一旦おろした。立上るとバーバリコートを脱

いで、二つ折りにする。薄いクリーム地のミ
ニのワンピースに、襟は毛皮の洒落た妊婦服
が、はつきりと私の視野に入る。広い東京の
こと、妊婦ではホテルオークラを訪れるのは
飯田カオル一人ではないにしろ、時間とタイ
ミングが、直感的に彼女をそうだと心にきめ
てしまった。オーバーを席においた俤、私は
おもむろに近寄ると、静かに声をかけた。
「失礼ですが、飯田さんじゃあないでしょ
うか——」

「ハイ、飯田ですが……」

ハッと緊張した顔が、マジマジと私を見上
げた。

「賀山社長から聞いて、お迎えに来たのです
が……」

「間違ったら御免なさい。関西の辻
村さんじゃないでしょうか」

「そう、辻村です」

「お噂かねがねお伺いしております
た。社長さん、お見えになりません
の？」

「突然の急用で来られなくなりました
た」

「そうですか——」

意外に、飯田カオルは冷静であっ

た。細いアイシャドウのない生地 of 眸が微か
に光った。

席に放った俤のオーバーをとり戻って、
私は飯田カオルの横の椅子に席を占める。

「私を御存知だったのですか——」

「ええ、正月には関西からお見えになるって
お聞きしておりました」

「それはよかった。真実ホツとしましたよ。
或る程度、お聞きなんですね」

微かに笑って、彼女はうなずく。

「社長さんには義務があるんですわ私——」

「聞きました。それで私と、一対一で差支え
ないんでしょうか」

「己むを得ないでしょう、御用事なら」

割切った返事だった。

「大変でしょう」

妊娠七カ月の身重を指しての言葉だった。

ツツといえはカーと応える察しのよい、理智
的な彼女は、すぐ言葉の意味をさとる。

「ええ、まあね——。唯、私、こんな体でも
いいんでしょうか？」

勿論、緊縛のモデルに対しての言葉であっ
た。

「それは又、それで……。でも無理は出来ま
せんね」

「社長さん居ないからいえますけど、あの随分、乱暴なんです。でも仕方ありませんわ、私から、むしろお願いした恰好だから」

諦めに似た悲しい言葉であった。

それに応えず、現実話を戻す。

「御食事、まだなんでしょう」

「ええ。でも近頃余り咽喉を通りませんの」

「よかったら、ここで如何ですか」

「御馳走になります」

私達は礼儀正しい紳士淑女のように、並んでフロントを歩いた。二階の片隅に中華料理「桃花林」がある。食事時で、かなりテーブルは混んでいた。奥まったテーブルに二人は腰を下ろす。

好みの一品料理数点と老酒。氷砂糖を入れて彼女にも一杯すすめ乍ら、私達の未知の關係は、食事と共にいつしか、ほぐれてゆく。

「どうして私を御存知なんです」

「先日電話で、関西からいらっしゃるて聞きましたものですから……。失礼ですけど何をなさっていらっしゃる方？」

私の素姓は知らないらしい。

「特殊なプレイが好きなのコレクターとでも云っておきましょうか」

「まあ、コレクターだなんて。私ウィリアム

ワイラーの「コレクター」って映画みました。が、彼のコレクターの気持、分る気がします」

「ハハ、大変ですね。社長のされるような、ああした行為、どう考えられますか？」

「エッチだなんて言葉だけで言い切れないですよ。エゴの極致でいうのかしら。世の中金と暇があれば、男は誰しも、多かれ少なかれ、何らかの方法で、女性を翻弄し、自由気儘に扱ってみたいくなるのでしょうか」

「そんな気持、理解出来ますか」

「征服者の優越感でしょうか。物質で左右されるような恰好でいやすけど、フランスあたりの上流家庭の甘い生活も、煎じつめれば似たりよったりじゃありませんか？ わたくし判っきり申し上げて、今の様な境遇で、そうした行為を甘受するのは或る種の屈辱を感じるのです。しかし、衣食足った時、こうしたプレイという言葉で表現する、サド・マゾの割り切った遊戯には、むしろ惹かれますわ」

ハキハキと理路整然とした論理であった。新劇の研究生を志しただけあって、どこか一般の若い女性にくらべて、その論理は飛躍していた。



聡明さが全身に溢れている彼女の、その癖、愛する男の子供を生もうとする観念は、古めかしい古色蒼然たる、女性本能の現われに過ぎない。形式の貞操観念を見事に打破して置き乍ら、その心の奥底には矛盾した母性たらんとする女の執念にも似た思想が渦巻いている。飯田カオルは、受胎した女の、醜い生々しい全裸を露出する代償として、確固たる夫の愛情を掴まんがため、懸命に愛のきずなをつくらうとしていたのであった。

生活の糧なら、羞恥をかなぐり捨てても、唯ひたすらに、夫と妻という二人の間に、夫婦の結晶を得ようと必死にあがいているこの様相は、大正生まれの私にとっては、最早到

底、理解し得ぬ、昭和元祿の奇妙な現象であった。

この場合、ハントにそうした、もっともらしい倫理は不必要であった。すべてを割り切った妊婦の新妻と東京くんだりまで、ハントしに來た私は、すべては理窟抜きで、刹那のひとときの、SMのプレイに耽溺すればいいのだった。

しとど降る雨はいつしか上り、薄陽が寒々と黒い影をホテルの正面に落としていた。

順番を待って次々到着するタクシーに列をつくり乍ら、私はいたわるように、この可憐な妊婦をそっと抱きかかえていたのである。

× × ×

コーポにぬくもりの余韻が微かにあった。

飯田カオルは、いくらか含羞^{はにか}んだ表情でソファに腰を降ろした。

バスの湯加減を見に行くと、大分さめている。ガス栓を全開にして、引返すと彼女と向かい合って坐る。何から話せばいいだろう。

「出てゆきがけに、湯に入っていたのですよ。少しさめています、すぐ沸きますよ。

先にお入りになるでしょう。部屋も、じき温まりますからね」

黙って彼女は頷いた。私は昨夜の、渚マリ

の撮り残しのフィルムの入ったカメラに、さりげなくストロボを装填し始める。既に緊縛プレイを諒解している彼女に対し、改まっての説明の必要もなかった。

「お茶を淹れましょうか？」

辺りを見廻して、彼女は立ち上りかける。

「さあ、ほしいんですが、社長のコーポだけど勝手、分るかしら」

「一度、来たことあるんです」

「ああそうでしたね。それじゃ」

小さい茶瓶に水を入れると、ガスに点火する。冷蔵庫の上から、茶缶と湯呑み、茶漉しを持ち出してくる。やはり女房稼業をしているだけに、しつとりとその動作が身についていた。私は彼女に正対した儘、黙って数枚スナップの閃光を走らせる。

「私、化粧していませんですよ」

「いいですよ、その儘で——」

彼女はハンドバッグを開くと、二、三葉のフォトをとり出した。

「これ、舞台写真なんです。全然、違って見えるでしょ、素顔と……」

手にとってみると、成程彼女のいう通り、まるで別人のようであった。眉を描き、切長の細い眼に青黛を入れ、コスチュームをつけ

髪型を変えると、こうも違うものなのだろうか。女優族もピンからキリまであるが一樣に舞台化粧と、なまの顔は驚くほど変貌する。昨夜の渚マリは舞台化粧の顔だったが、私には、むしろ、なまの顔が在りの儘でいいように思えた。しかし人によっては、濃い化粧を必要とする場合もあった。

飯田カオルの場合、今の顔の方がむしろ、素人めいた新妻然としていてよかった。妊婦が化粧のみ濃いのも、反って不自然に思われたのである。しかし彼女にとっては、華やかな過去の、扮装を凝らした澁刺たるポーズをやはり夢に描いていたに違いなく、こうして今、私にその数葉を見せたのも、そうした心の表われではなかっただろうか。

「すごく綺麗ですね」

お世辞でなく感嘆すると、一寸照れて笑顔になり、

「そうでしょうか——。私なんか、とても」
口では謙遜していても、矢張り内心は嬉しいらしい様子である。こうした女性には芸能関係に限ると、持参のフォトをとり出す。

「去年、11PMに出た時、藤本さんや安藤孝子さんと撮ったフォトですよ。こちらは立川談志が、私の家を訪問した時のフォト……」

彼女は確かに驚いたようだった。まあいってマジマジとみつめ、それから急にしょげた顔になった。

「こんな知名の方とお知り合いじゃ、私の写真なんかとてもとても……お見せするんじゃないかったですわ」

「とんでもない、買い取りですよ。私なんか本当に名もない巷のコレクターですよ」

「本当に仰有って？ こんなオナカの大きい女に興味などおありにならないんでしょう」

「反対ですよ。判っきりいって、モデルになる女性は数多くおりますよ、関西にも——しかし妊娠のチャンスを撮る機会はそうそうザラにはないんです。そうした意味からも得難いのです。況して貴女は綺麗だ。そうでしょう、奥さん——」

「カオルと呼んで……」

「ええ、カオルさん」

「それが真実なら自信がつけました。いいですわ、協力します」

「胎児のこともありますから、無理はしません。しかし縛りますよ」

「結構ですわ、どうぞ」

「偶然で、一対一になりましたが紳士協定は守ります」



「燃えるかも知れませんが、わたし……」

カオルはその時、妖しく瞳を光らせて、深い眸の淵で微かに笑った。その心を測りかねて私は絶句する。この若妻は、私に何を求めようというのだろうか。

「プレイで割切れればいいじゃありません？」

東京育ちの新劇の卵は、流石にドキッとするようなことを判っきり言い切る。判断に困る私の顔をみつめて、さっとカオルは体をかわした。

「兎も角バスへ入れていただきますわ。一寸辻村さん、向こうむいて下さらない？」

× × ×

充滿した腹部に、パンティのゴムが一杯に伸び切ってピタリとくい込み、豊かな臀部の肉が盛り上がる様にハミ出している。

臍窩の凹みが押し出されて、膨張した胎内のふくらみを如実に示していた。

暗紫色に黒ずみを帯びた乳量は、白磁のたゆとう乳房とは対照的に、鮮烈に彩色され、初産の吸われぬ尖端は、赤いダイヤさながらに、つややかに光っていた。

一刻も早く全裸にしたい内心の慾望を、辛うじて押えながら、私は直立するカオルの背後にダンダラ縄を握って回った。

和室で待つ私のところへ、バスから上った彼女は、このパンティ一枚の姿で、襖を開いて現われたのであった。

社長の紙袋から、バッグから、ありったけ放り出した、たたみの上の縄束にチラリと眼をやって、案外彼女は平然としていた。私が

彼に進呈した、初期によく使ったダンダラ縄も、かなりくたびれた姿で混っている。

ふと懐かしう思つて、その短くなったダンダラ縄をとり上げていた折も折であった。

胸に二重廻し、乳房の下へ廻して、背後で両手を縛ると、縄はもうぎりぎり一杯であった。ごく単純な縛りに過ぎない。カオルの表情は笑いも苦痛もない、冷たく冴えた能面に似た顔付きで、私のなすが尽になっていた。

七カ月の腹部が、かすかに息づくように波打つて、屹立する壮大な乳房が鼓動につれて震えているかに思われた。突出した腹部に反比例して、白い背すじが深く彎曲し、かつてはウエストのくびれを誇った腰の曲線が、今は羞恥を燃え立たせるかのように、奇妙ななまめかしさを一枚のパンティで僅かにくるんでいた。

立ったポーズを撮り、その場に正座させて尚も前後左右から数枚撮ると、いよいよ本番である。緊縛のトレーニングは、もうこれぐらいで沢山である。縄を解くのに十秒もかからない。私の第二弾の縄は、カオルの両手をかなり逆手に挙げさせて、背で揃えて縛る作業から始まっていた。縛った二本の縄を肩を通して胸に降ろしてここで交叉させて、搦き

立てのかがみ餅のような乳房を、抱えあげるようにしてその下を伝わせ、背後に廻す。膨満した腹部を二重、くびるようにして二巻きして締めると、縄はギリギリに背骨で結び合わされた。臍窩が半ばポツリと飛び出しているのが印象的であった。さして表情もかえず、一寸、息を荒くしたが、カオルは全然、拒まなかった。長く垂れた髪が、乳房に垂れて、ピーンとはりつめた赤ダイヤをサラサラとくすぐっていた。

急速に嗜虐の血が、身内に煮えたぎってくるのを覚えて、私は太く丸いロープをとり上げると、尚も上半身をその縄の上から滅茶苦茶に縛り上げていった。左のオッパイの尖端がギョツと、無惨にも押し潰されて、はみ出していた。しかし尚、飯田カオルは無表情の表情を持続していた。そのくせ、成熟した女の匂いが、近付けば私の胸を灼くように立ちのぼっていた。だが、この無表情さはどうだろう——。まるで義務のつもりで縛られているのであろうか。もっと感受性の強い女性だと思つたのは私のひが眼か——。しかも先程、まるで私の野獣の心をそそるかのように、謎



めいた笑みを泛かべて、燃えたいといったのではなかったか。こうして私が縛ってゆく間彼女は、ずっと無言であった。この部屋に入ってから、殆んど一言も発していない。

「どうかしたの？」

遂々、私は無言の行に負けて、声をかけてみた。

「いいえ、別に——」

その時だけ、彼女は私の眼をみて応えた。

「それならいいんだけど……痛くないね」

「少しは苦しいですけど、これといって」

何故か彼女の口数は少ない。始めて相対する男性への、羞恥と緊張が、彼女をそうさせたのかも知れない。と、善意に解釈して、私

の緊縛のプレイは次の段階へと進めることにした。

「いい？」

パンティに手をかけて聞く。

「いいわ、見ないで丸めてね」

真新しい純白のパンティであったが、妊婦特有の失禁の汚水を気にしている言葉であった。スルスルと下げると彼女は両足を外す。眩しいものにカメラを向けて、私は輝く裸身のありのままに光を走らせる。諦観の眼を閉じて、カオルはじっと立ちすくんでいた。縄を解いて、私はすぐさま次の行動に移っていた。



手にした紐は、いつかあの日、志摩桜子を縛った、真田紐である。さして痛くないが、よくしまるし、白い肌にバラエティもあって面白い。志摩桜子を縛った式で、胸から乳房へ、腹へ、腰へ、股へと、長い真田紐は際限もなく女の体を、しめ上げてゆく。

乳首が変型し、乳房はひしゃげ、妊んだ腹は押しつぶされ股縄は深々と喰い込んで、陥没した紐の端が、双丘の谷間から腰に覗いて両手に繋がってゆく。

飯田カオルは自在に縛られながら、表情を変えようとしなかった。茫漠とした憂愁の眼が、あらぬ方をみつめて、唯、私のなすが保になって佇立していた。痛いとも苦しいともいわない。いや、軽い呻きすらもらさず、平然としているのであった。まるでそれは魂のぬけたなきがらに似た、感情を何処かへ置き忘れてきた人のようであった。

顔を蔽って長く垂れ下った髪を、払おうともせず、凝っとその場に突っ立っていた。カメラを構えて、右往左往する私には眼もくれず、凍りついたように凝然と立ちつくしている彼女の頬にフト軽蔑のかげりすら

泛かんでいるように私には思えたのである。

この冷たさはどこからくるのであろうか。喜怒哀楽を示してこそ、フォトに表情があつてハントする方にとっても愉しいのである。かくも私の存在を無視されては、もう何をかわいんやであった。フテくされではないが、緊縛に対して、全然、心の変化も動揺も昂揚もなかった。

奇妙な索漠とした空気が流れた。確かに彼女は私の意志通り、易々としてモデルを勤めてはいてくれる。しかし、ここには心の交流は何一つないのだ。それは何故だろう——。独り相撲の恰好で、私は数分後、彼女のいましめをのろのろと解いていた。彼女は黙々と腕をさすりながら、その場にしゃがんだ。気拙い空気を払振うように、私は煙草に火をつけて、紫煙を天井に吹き上げた。

「ただけですか？」

カオルは湯上りの肌の香を馥郁とさせて、裸身を私ににじりよせて来た。

「ああ、吸うんだね」

パチリとライターを鼻先へつけてやる。旨そうに深々と吸い込んで

「全然、吸わなかったんです。それが妊娠したら急に吸いたくなったの。妙ね、どうして



かしら」

「私の家内も、妊娠を次々続けるうち、煙草を吸うようになって、今じゃ、もう止められない。嗜好が変わるんだね」

「たべものの好き嫌いも、かなり変わりましたわ。妊娠の変化って、おそろしいのね」

「それが女体の宿命だよ——。ハダカで寒くない？」

「ええ、少し」

私は立ち上って、ソファから彼女のダスターコートをとってきて、そっときせかけてやった。急に喋り出した彼女が不思議だった。

「少しおききしても、いいかしら」

「ああ、何なりとね」

「先程から、数回いろいろ縛って写真おとりになったでしょう。そんな程度で愉しい？」

「愉しいという程でもないが、貴女の体に対する未知の興味ですよ。しかし縛ることに対して全然、反応がなかったね？」

「反応を示す程のことなさった？ 何もないじゃないの。着物きても、あの程度なら体に紐や帯締め、帯を巻きつけて締め上げるんじゃないかしら」

「恐れ入った。その通りかもしれない。でもいきなりひどく縛ると、驚くと思ってね」

「御免なさい、生意気いって。私、天の邪鬼なのね」

「おナカが気掛かりでね。余り乱暴に扱かって、もしものがあれば恨まれるからね」

「毎日、都営バスにぎゅうぎゅうつめこまれて通勤してますのよ。少々なら鍛えてありますわ」

「いったね。じゃあ、もう手加減しない。うんと虐めて差上げますからね」

「いやーん、怖い顔して……。虐められるのいやよ。ねえ、プレイ……プレイしましょうよ。わたしを愉しくさせて……」

囁くような言葉で上眼使いに私をみた。女のプレイとは何を指すのだろう。まさか妊娠七カ月の身重に対する肉の交渉では、あるまい。彼女の言葉のはしから察して、飯田カオルは緊縛自体よりも緊縛に伴う責めを交えたペッティングを希んでいるのではなからうか。私はうかつにも、彼女が食事のとき口走った言葉を忘れていた。現在のような境遇で、金銭の代償としては屈辱を感じるが、衣食足った時、プレイという言葉で表現する、SMの割切った遊戯には惹かれると、判っきり言い放っていたではなかったか。それが彼女の望む本心であったに違いなかったのだ。こうして土偶の棒のように突っ立って、唯、むやみに縛られるだけの行為に対して、彼女は内心反撥を感じ、それが先程のような能面の冷めたい無表情の女にしていたことを、私はこの時、判っきり知った。燃えるかも知れないといった言葉の中に、私との激しい肉体の燃焼を願ひ、ぬめつく粘液の中に沈溺し、耽溺したかったことを、私はさとした。

妊娠七カ月という異常事態の中で、それが

貸借対照表のバランスをとる為とはいえ、あえて身を投げ出して来た女の本心が、ここにあったのだ。私は何かの本で、妊娠中の女性が、異常に性愛つき、淫蕩きわまる振舞をする女性に変貌することがあるという記事を読んだことを思い出した。

煙草を急に吸い出し、好き嫌いが激しくなり、尚それにもなつて、性慾が一変することとも又、有り得る事実であった。

SMに心惹かれるといい、燃えたいと願望する彼女の言葉は、自己の激しい慾望に対する精一杯の形容ではなからうか。

私は急拠、激しい興味をそそられ、この妊婦に、緊縛のSMプレイを生々しく試みてみようと思い立った。恐らく社長も試みたに違いないプレイを、私は私の方法で試みようとするのである。久し振りにハントを逸脱した沸々たる意慾が湧き上ってくる。

「始めよう」

私は立ち上ると、玄関入口脇に立てかけてある、洋材の角棒を持ち込んで来た。恐らくは社長もプレイの目的で、ここへ持ち込んでおいた角材に違いあるまい。

角材を背になう様にさせて、ダンダラ縄で縛ると、両手が背に上って、黒々と腋毛が

覗く。カオルの切長の瞳は妖しく濡れて、キラキラ輝いていた。その眸には或る種の期待が秘められていた。

豊満という言葉で形容するには、余りにも盛り上りすぎた、さながら軟体動物に似た両の乳房を、より一層、突出するように、白い綿ロープで強く隆起の上下を締め上げて、腹部へ巻いてゆく。



体を抱くようにして、座布団を二枚並べて敷いた上へ、徐々に寝かしつけてゆく。

両脚を開くべきか、揃えて縛り上げるか、しばらく考えた末、羞恥を与えることに、より昂揚のパロメーターを感じて、力を入れて果敢なく抵抗する両脚を開くと、足首にそれぞれ足縄をつけて、一端は開いた押入れの中のロッカーの把手へ。もう一端は、片隅のソファ・ベッドの脚へと強く引張って結んだ。

既にカオルの呼吸は粗く乱れ始めていた。プレイを予知して、胸は弾み、やがて始まる私の手の動きを、未知のおそれと期待で待ち望んでいるようであった。女体は敏感に反応して、軽く汗ばんでいる。

私はカメラを社長の三脚に固定すると、セルフタイマーにする。

幾多の女性の、脂と体液を吸った縄束の中に、社長愛用の小型パイプが埋没していた。それをとり上げて回転させると、尖端が激しく律動を始めて、微かな電動音が響き始める。

私の右手に握られたパイプが、矢庭に彼女の隆起の尖端を力強く圧する。ピクンと電流の直撃を受けたように女体が硬直して、鼻息が激しくカオルの鼻孔から洩れる。半開きの唇から呻きがこぼれ、それは次第に大きくな

っていった。上体がワナワナと震え、膨れた腹部が波打ち始め、蠕動するようにリズムをつけて、なまめいて揺れ始めた。

パイプは腋をくすぐり脇腹を撫で、臍窩のほとりを、さ迷って徐々に下降してゆく。

下降の分岐点で、それは停滞し、私の手を離れて埋没していった。

呻きが絶叫に変わり絶叫に歓喜がミックスされて激しく仰向きの女体は揺れに揺れた。虚飾も能面の冷めたさも、かなぐり捨てた、ひたすらに惑溺し、愉悦にむせぶ赤裸々な女体がひとつ、立ち上った私の眼下に転がっていた。夜鳥の、あのつんざくような怪奇な叫びに似た絶叫が、するどく部屋の空気をふるわせたかと思うと、カオルののけぞっていた首がガクリと落ちた。

鈍い微かな電動音が、物愼くどこかで響いているのが、観察をつづける私の耳朵に、いつまでも刻みこまれていた。

× × ×
エクスタシーの境地から徐々にさめた女はじっとり汗ばんで、ひたいにへばりついた、ほつれ毛をそっと掻き上げ、うるんだ眸で私をみた。

「いけない方……でも」

何かいおうとして、思い直したのか口をつぐむ。臉の上が薄桃色に染まり、唇が赤く濡れていた。あられもなく乱れた自分が、今こうして正気に戻ると、はしたなく思われ、羞恥にさいなまれていたのではなからうか。

「疲れたでしょう」

「ええ、少し——」

「よかったら、ウイスキーありますよ」

「おのみになるようでしたら、私も少しいただきますわ」

チーズとウイスキーを持出して来て、グラスに注ぐ。サントリーオールドを、ストレートで、彼女はグーッと一息にのみほしてしまった。更につぐと、続けて煽るようにグラスをあけてしまう。酔いの力を借りて、羞恥の面をかなぐり捨てようとしていたのかも知れない。須臾にして頬が染まってくる。桜色に染まった、あからさまな裸形は、こよなく美しくも、なまめいていた。

私は戻って真田紐をとり上げると、崩れたポーズのカオルの側に立つ。

「縛るの？」

「ああ、いけないかい？」

「いいわよ、きつく縛って……」

私を見上げて女は手を背後に回す。座布団



の上に姿勢をととのえた彼女の体の上半身に豊かなオッパイに8の字をつくって、真田紐は肩から胸、二の腕へとくい込ませてゆく。見事としかいいようのない隆起は、ポックリと頂点をハチ切らせて、それだけがまるで別の生き物のようにブルンと蠢めいていた。熟れきった、この果実にしゃぶりついたなら



ば、甘酸っぱい乳液が、おそらく私の口の中をうるおすに違いないと思われた。女の表情からは冷たさが消えて、恍惚に似た甘美なるおいが流れていた。

寝かしつけようとして、体を抱きかかえろと、カオルはそっと眼を閉じ、こころも唇を差出すようにした。情事を待つポーズである。その期待を裏切ってはならない。軽く唇をつけた後、寝かしこんでゆく。横坐りの両脚がくずれて伸びる。伸びた両膝頭の下に角棒を差し込んで、思い切り開股にして角棒と膝を縛り合わせる。

女の息は荒くなり、再び悦楽の底に沈む心をつくっていた。そのポーズに日本手拭を当てて、私はハントのフォトを撮る。絶対の羞恥の構図を発表しようと思えば、こうするより外、手段がなかった。上向いた乳房は重く揺れて、ねっとり汗ばんだ光を反射させていた。手拭をはねのけて女の体臭を立ちのぼらせている、濃く影を落とした点を直視する私の、体中の血がいつしか熱くなってくる。彼女は私の次の行動を秘かに期待しているかのように、みじろぎもしない。赤裸々と対決して私の心は、あられもなく疼く。

それを断ちきるように、私は角棒を膝から外し始めていた。

「やめますの？」

眩きに似た言葉が洩れた。

「いいや、続けますよ。次の緊縛を——」

女はそれ以上、問わなかった。その尽行為に移れば、お互いがその尽の気持では済まなくなるかも知れない、ギリギリの一線であったからだ。膝頭から角棒を引抜くと、海老責めに移行してゆく。僅かなハントプレイの数時間に、あれもこれもやっておかないと、恐らく飯田カオルとは、これが最初の最後になるかも知れないと思ったからだ。若し私に怪

力があるならば、逆吊りをもやってみたくらいの心の燃えようであった。

よいしょと掛声をかけて上体を起こすと、両脚をあぐらに坐らせ、私は二つ折りにしたダンダラ縄を足首に通して締めつける。縄を首にかけて、ぐっと引きしぼった時、彼女はしめ殺されそうな呻きを挙げた。膨満した腹部が一杯に圧迫されて、それは如何ともしがたいポーズであった。

「く、くるしいわ。無理よ——。もう少し、体を起こさせて」

顔をのけぞらせて叫ぶ。あきらめて8の字



の真田紐の胸の縄につないで、腕から背後に廻してしめる。

圧迫された腹が、ベンベンと波打って、喘ぐ切ない吐息が激しく口をついて流れた。

カオルにしては、もう精一杯の、協力態勢の海老責めポーズであった。高手小手に縛り上げられた手首の縄が深々と喰い込み、宙にあがいて指先が虚空にのけぞっている。

嗜虐の血はいよいよいきり立ち、私はいきなり、藻と乱れた黒髪を引っ掴むと、ぐいと背後に引いた。あっとバランスを失って、カオルの体が、ドサリと地響き立てて背後に倒れる。交叉した足首がX字にしまつて空をつき、双丘が赤くなって、たたみ目の条痕がありありと白い肌を彩どっていた。片手で交叉した足首を、高々とかがけて握り、私のもう一方の手には縄の束があった。考えるいとまもなく、私はそれが彼女の要求の如く、当然のような気持で、撫でるようにパシリパシリと縄鞭を双丘の谷間に這わせていた。敏感な悦虐の位置に、身悶える女の息が、圧縮された腹部の苦しさとなつて、重くのしかかるような呻きをもらし始め、私の狂血をおおるかのようにその呻きに悦楽がまじった時、縄鞭の力は、いつしか激しさを増して、女の桃

色の臀部に炸裂していった。

× × ×

密室の痴戯は飽くこともなく続いている。ムンムンする熱気が部屋に籠り、暑くて私もパンツ一枚の裸――。

そしてもう先程から、フォトらしいフォトは、さして撮っていなかった。ハント用フォトを撮ることが、プレイに対して、如何に障害になるものであるかということを、私は今日も改めて痛感していた。

プレイに導入する手段としてカメラが使われ、一旦その世界に没入したとなると、もうカメラは不要の、むしろ邪魔になる小道具に過ぎない。これは最近とくに感じることであった。私のハントもいよいよ病こうもう。カメラによる緊縛のフォトプレイよりも、カメラのない真のSMプレイの方を愉しむようになっていた。しかし考えてみれば、それが男対女の密室での、真の姿であるのかも知れない。その証拠が、飯田カオルの、あの最初の冷めたい容貌であった。無表情イコール無味乾燥であったが、一旦プレイに移行した時、忽ち血の通った女人に変貌したのだから、煎じつめたら、こうしてハントされにくる女性

曝すより、二人っきりの快楽の方を遥かに望んでいるという結論に達するようであった。

そのくせ、私は尚も撮っている。

見よ！ここにいま絶叫し、悦楽に眉をしかめ、歓喜に唇を開き、のけぞり、悶え、震え、全身を火柱のように燃え立たせて、狂ったように、猥らな言葉を吐きつづける、女性の赤裸々な一連のポーズを――。

カオルは、肘掛椅子に、仰向けにひっくりかえったような、破廉恥の姿勢で、肘掛けに両脚をかけたポーズで動けぬように縛り合われ、屈曲した腹部を波打たせて突き上げる衝動に喚いていたのである。

あれから女は私の意の尽であった。

「その椅子に掛けるんだよ」

命令するようにいうと、よろよろと立ち上って、観念したように逆らわずに椅子に腰を落としていた。膝をピツタリと揃えて、浅くかけている。

「もっと深く掛けるのだよ」

カオルは私に命じられる俚に、腰をずらせて、膝うらがクッションに接するくらいまでうんと体を引いた。

かなりクッションがきいているので、上半身を前かがみにしないと、体全体がすっぽり

とはまり込んでしまいいそうであった。が、実は私のねらいは、そこにあったのである。

はまり込んだ上体を椅子の背当てもろともきつく縛り合わせた。肩の肉が盛り上がり、肩胛骨が、柔らかな脂肪の下で突出していた。

矢庭に両足首を掴んで引裂く。パタパタもがく両足を、別々にロープにかけて肘掛に固定してしまう。

こうして、ハレンチ極まるポーズが完成したのであった。

全身美容のマッサージが始まる。パイプが物懶くうなり始め、プリプリした隆起から、圧縮された腹部へ、臍窩の周辺へと、私の指先のパイプが、気長にマッサージをつづけてゆく。

激しいあえぎが、悦楽とうめきに変わり、刻々と様相をかえて、白いのどから、多様に变化する声が洩れる、カオルの意志を無視して、条件反射のように燃え上る、肉体のほむらを、彼女は押えようもなかった。

その燃え上るさまに、私はセルフタイマーをかけていた。激しく首を振りつづけ、錯乱する悦虐の様相が、一枚一枚、連続シーンとして永久に映像に残されているのを、カオルはもう気に止める余裕すらなかった。



妖しくうごめき迫ってくるパイプの律動に魂もしびれるような、長く尾を曳く絶叫を残して、カオルの体は、再び悦虐の奈落へと暗く落ちていったのであった。

もう一度見よ！ この一連の映像を――。

× × ×

雨上りの空気は、濁った大東京の空気とは

思えぬくらいに澄み切って、冷たい風が、ほてった頬に吹きつけていた。

昼下りのプレイは、余りにも生々しく強烈すぎたようであった。

雲の割れ目から覗くこぼれ陽に目を細めて私と飯田カオルは青山一丁目の交差点近くに立っていた。

細めた瞳は私の方を向いてはいるが、私の体を通り越した彼方に焦点を合わせているかのように、うつろなまなざしで、身じろぎもしなかった。頬の血の気はうすく、白い肌に風に吹かれたおくれ毛が、二筋三筋、絡んでいる。

「お別れですわね。もう恐らく一生、会えないでしょうね」

ポツリと淋しげにいう。

「多分ね――。今後の御多幸を祈りますよ。いい奥さんになって、いいママになって、これからの人生を大いに愉しく過ごして下さいよ」

「すぐく割り切ってらっしゃるのネ」

「でも、どうなるものでもないでしょ。私は明日、関西へ帰ります。逢うは別れの始めでしょうね。ひとときを思いっきり愉しんで、サラリとした思い出になる。それでいいじゃ

ありませんか」

「フフフ、そうね。——そうだね。私ってダメな女ね」

カオルは笑った。そしてケロリとしたように手を差し出した。

「お別れの握手」

「元気な赤ちゃんを、ね」

握りしめた指と指に力が籠り、哀歎が流れた。その手を解いて、折から走り来たったタクシーに手を振る。

社長に内緒で、私なりのほんのささやかな気持で、そっと握らせた紙幣を、掌で丸めて

飯田カオルは、ペコリと頭を下げると車中に消えた。

一巻の終り——。じっと見送っていた私は急に空腹を覚えて、交差点角のレストラン・サンドリアへ急ぎ足に足を向けた。

遂に最初から最後まで、彼女は夫のことに一言も触れなかったし、私も聞かなかった。妊娠という、隠しようのない事実をつきつけられても、密室での私達は一個の男と女。それでいいではないか。倫理も道徳も、すべてはプレイの一言で割り切った結末であった。

☆ 乱 倫 の 生 態 ☆

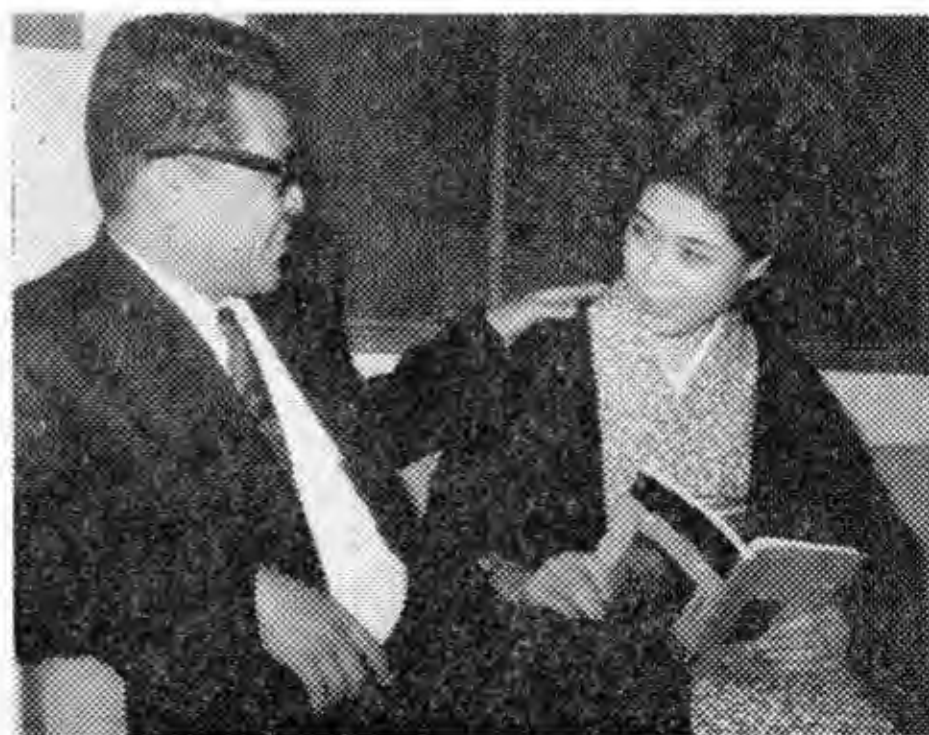
滑 川 幾 代 の 巻

飯田香と別れて、コーポの一室に戻って来たのは午後四時半頃であった。

疲れた体をソファに投げ出し、激しかった数時間のプレイの戦果を反芻する。唯一人でポツリと所在なくおるのは佗しいものであった。為すこともなく矢鱈に煙草をふかしてい

る。灰皿のなかに吸殻の山を築き、独りできくテレビのコマーシャルが、入れかわり立ちかわり、胸糞のわるくなるような作り笑顔を向けてくる。

一人だけということが、私の胸を悩ましくゆすぶり、動かし続けた。



電話のベル——。

ハッとして受話器を耳に当てる。聞き覚えのある社長の声飛び込んでくる。

「いま、一人きりなの？ それとも一緒？」

「ああ、一巻の終りですよ」

「うまくいった？」

「まあね。あとの時間を持て余してますよ。」

妙に佗しくて……どうしてだろう」

「もっと引留めておけばよかったのに」

「だって旦那持ちじゃネ。時間を気にしていませんよ」

「フェミニストだよ、辻村さんは。今ね、女房に内緒で電話してるんだけど、そろそろ妹達帰るのでね。車で送って行く口実で家を抜け出しますよ。二十分もすりゃ、そちらへ行きますからね。夜のお遊びと参りましょう」

「ああ、首を長くして待ってますよ」

電話をきった途端、フト家でやきもきしているであろう女房が恋しくなった。有難いことに直通でただちに掛かる御時世である。

ダイヤルを廻せば忽ちにして、女房の声が否応なく耳に飛び込んでくる。

「まあ、どうしたの。びっくりしたわ今頃」

「唯今一人だ。ぼんやりテレビ見ているよ」

「ハント、うまくゆかないの？」

「先程迄撮っていた。妊娠七カ月の人をね」

「一人で？」

「気になると見える。ウソも方便——」

「いや社長と一緒にだよ」

「そう、これからどうすんの？」

「分らない。一杯のみに行くか、別口でも撮るか」

「無理しないでね。何時、帰るの？」

「明日の夕方だろう。異常ないかね」

「まあネ。電話、勿体ないから、きるわ」

「風邪ひくなよ。子供等によろしく」

一分の電話をすませると、妙に心が落ち着いて来た。女房の声を鎮静剤にし乍ら、次々女性のハントなんて、やはり私の家庭もどこか、よそさまとくらべて変わっている。

窓の外は既にトップリと日が暮れて、黒い夜のとぼりに包まれていた。

社長がストアで買ってきて、冷蔵庫へ入れておいた、焼肉やフライをとり出して、独りでチ

ビリチビリ、ウイスキーをなめている。

聞き覚えのあるクラクションの音——。どうやら社長の到着らしい。私はドアを開いて表道路へと出た。夜の六本木あたりへお供するつもりで、背広も着込んで、身支度だけは整えていた。

社長を迎え入れて、早速、経過報告——。

嘘や見栄を喋っても仕方ないから、大体ありの尽のプレイの有様を語る。

「彼女、案外、感度良好でしょう」

「そうですよ。思ったより以上に燃えましたね」

「あの調子だと、プレイの味忘れかねて、子供が出来てからも、亭主に子守させてやってくるかも知れませんよ、彼女なら……」

緊縛の方法もあれこれと語り尽すと、社長かなり羨ましい顔になった。自分も大いにプレイしていたくせに、人のやったことは矢張り他人の花は赤いで、よく見えるらしい。ウズウズした顔付になってきた。

「よっしゃ、ハナシ、もうええわ。今夜やりましょう」

関西弁のチャンポンで、賀山社長は何と思っただか、ポケットのメモを繰り出した。

「ええッ、誰をやるんです」





「志摩桜子を呼び出しましょう。辻村さんが上京だときけば、きっと飛んでくる」

チリリンコ、チリリンコと、ダイヤルを廻す。思わぬ飛び入りのハプニングと相成ってきた。一杯のみ歩くより、その方が私も、嬉しい。どうやら繋がったらしい。

「もしもし、ああキー坊か。サクラ呼んでくんない？ アタシ？ でっかい賀山ちゃん。えっ、出てるの？ 何処へさ——分らないって……こん畜生、間に合わない奴だ。キー坊出てこないか、面白いことして遊ぼうよ。何怖いって、アタシが……フフ、こいつめ。じゃあ、ダメだ。帰ったら、よろしくいってお

いてよ」

ガチャンと叩きつけるようにきって、一瞬慾望に水をさされて、軽い失望の表情がよぎる。

「どうせ、ゴーゴー喫茶なんだろう、サクラ。残念でしたね」

「私なら、いいんですよ」

社長、その気になり出すと、段々思いつめた顔付になってくる。プチリ、プチリ、爪を噛んで考えていたが、

「そうだ、どうでしょう。明日の予定の、例の編集部より連絡のあった人、思い切って今夜やりませんか？ 善は急げですよ」

何が善なものか——。しかし言い出したらあとへ引かない社長のワンマン気質。早速、又そろメモ帳をひっくり返して、電話番号を探している。

「いいでしょう、今夜でも」

「そりゃ、退屈だから構わないけど、先方だって予定があるでしょう」

「ダメで、もともとですよ。明日なら明日でいいから、ダメ押ししとく程度でもいいんですよ。若しうまくゆけば、楽しい夜になりますよ」

「たしか小岩井のNとかいったですね」

「アパートらしいですが、フォトよりプレイを希んでいる口吻です。掛けてみましょう、どういうか」

ダイヤルを廻す手ももどかしげに、社長は受話器を耳に当てている。

「ああ、Nさんですね。先日お電話した暁出版の、東京出張所のもので。例の辻村氏が上京しておられましてね、体があいているから、お目にかかって食事でもしたいと仰有んですが、如何でしょうか」

すっかり私にかこつけて、食事に誘う辺り抜けめがない。

「えッ、お連れがあるんですか。構いませんとも、御一緒にどうぞ。それじゃ、ホテル・オークラの『桃花林』という中華料理店で午後六時——。少し無理……。じゃあ八時に待っています。受付で辻村と、お呼び下さい」

ペロリと舌を出し、受話器をおいて、うまくいったと、ヒタイをパチリと叩く。

「ああ、だから生きてることは嬉しいですよ。早速O・Kですよ。会えば会ったで、私なり辻村さんなり、腕に撚りをかけて口説きましようや。一日早いかなだけ、本人もうその気になっているんですからね」

「小岩井って、辺鄙なんでしょう」

「ああ、江戸川区ですからね。でもその気になりゃ、わけありませんよ。タクシー代ぐらい別に呉れてやりますよ」

箕田氏より東京行きに際して、紹介してもらった三人のうちの一人であった。逸早く社長に電話で連絡し、彼は早速、速達を出して事務所へ電話するように連絡をとったところ一人は帰郷しており、一人は連絡なく、この小岩井のN子だけが、嬉しい応諾の返事をしてきたのであった。顔も知らねば素性も分らない。彼女も、会うその刹那までは、今日の飯田香と同様に、何一つ分らない未知の女性であった。

ケセラセラでゆくより仕方がない。会えば何とかなるだろうとたかをくくって、すべてはハプニングな調子で、このC調野郎二人は早速、出掛けることにした。

「大分時間もありますから、例によってサウナバスでめかし込んで、腹をすかせてゆきましようや」

「私はいいけど、社長の家の方は、大丈夫なの？」

「ハハ、女房くそくらえですよ。こうなりや泊まりますか。ハントしてもしなくても、今夜は辻村さんとのみ明かすつもりだったんで

すよ。情ないこと仰有って下さいますな——いざゆかん、つわものどもよ」

うおーッと巨軀の胸を張って、一咆えすると、この勇敢なる社長、十二文半のコードバンの革靴ふみならして、私より先にコーポを飛び出していった。

× × ×

この日二度目のホテルオークラ「桃花林」の、奥まったテーブルの午後八時前。既に社長、二度ばかり腕時計をみている。

ボーイが近よってくると、私の名を呼ぶ。手招きすると、お連れ様がいらっしゃったと恭々しく頭を下げた。

ここへ通してもらおういうって、私達はさっと緊張する。覗き込むようにした一人の和服の女性——。そのうしろから腰をか

がめて遠慮し勝ちに入ってきたのは、

くだんの女性の連れの男性一人——。

連れはてっきり女性だと思い込んでいたのは、私達の独り合点であった。社長など先程から、ついでに連れの女性も、のませて口説いて、Wプレイをやりましょう。あわよくば、独り独り別々に分れて、別行動とりましようなどと、未だ見ぬ狸の皮算用の最中であっ

たのだった。

意表をつかれて、私も社長もしばし啞然。気をとり直して社長、職業用の笑顔に返って、如才なく二人に椅子をすすめる。

「あのう……」

女性は、いい難そうにチラリと連れの男に視線を送る。

「ああ、いいんですよ。御主人？」

私は気拙さを取り除こうと、さりげなく訊ねた。女は応えず、代りに男が低い声で、

「ハア、未だ正式じゃないんです。実は——」男はハンカチをとり出して、ひたいの脂汗を、しきりに拭っていた。

「私が辻村です。こちらは東京連絡の賀山さん。それで、あなたの方は——」



「実をいうと、あの大阪の雑誌社へのモデル志願の手紙、私が書いたのです。勿論、諒解の上で。私はもう六、七年前からの奇クのファンでして、これと知り合って三年になりましたが、今ではこれの方が私よりファンになりまして、実は、趣味と実益をかねまして、これでもよかったですら撮ってもらおうと思って、出してみたまでなんです。隠していて済みません」

ヒモとも見えぬ、一見気弱そうな三十前後の実直そうな男であった。それに引換え、女性はいくぶん、水商売くさい身のこなし、艶っぽさであった。髪を結び上げ、黒っぽい羽織を着ているから、少し老けて感じるが、じっと顔をみつめていると、未だ若い。推定二十四五才であろうか。私と社長は、思わず顔を見合わせていた。予想に反して、これは夫婦ブレイの範疇に入るカップルであった。夫婦としての正規の籍はいれていないが、同棲して夫婦同様に暮している仲かも知れなかった。若し女性がホステスめいた職業であれば、日曜日は搔き入れ日であって、家にいる筈の時間ではなかった。にもかかわらず、夕方五時過ぎ電話して在宅しておったのは、運がよかったとはいえ、一寸理解出来ない点であった。



私はズバリきいてやった。

「失礼ですが、奥さん。お勤めじゃないんですか？」

「ええ、お察しの通り夜の勤めなんです。私が船から降りて帰っている間は休んでいるのです。正月二日に帰航しまして、明後日の十四日に又、横浜から出航するんです。今申しました通り、船乗り稼業なので、これとの結婚も正式にしかねているような有様なんですよ」

「よく分りましたよ。それでNさんはSなん

ですか、Mですか」

彼の声は小さくなった。私が平然ときくものだから、ひやひやしているのだろうか。

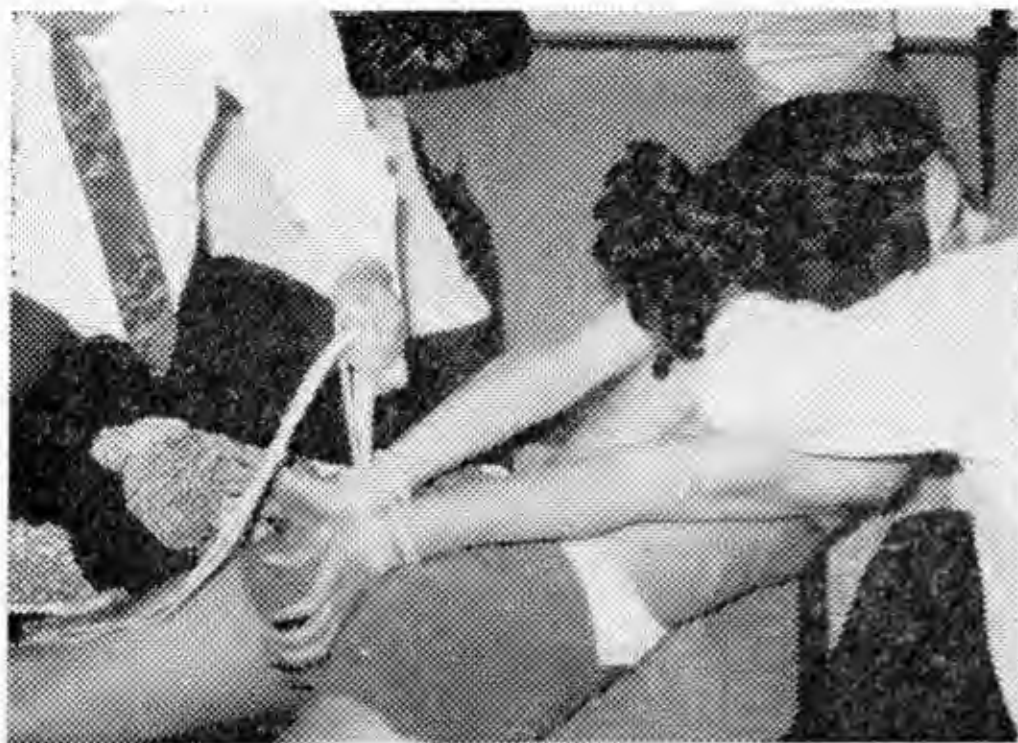
「ええ、まあSの方ですが、こんないい機会だから、辻村先生のブレイ振りを拝見願えたらと思います。厚かましいのですが——ええ、無論、報酬なんか考えちゃいません。正直いって、それを当てにする程困っちゃいないんです。唯、ブレイ拝見したくって、それで——」

彼の悲痛ともとれる訴えには、切実なSMブレイに対する執念にも似た響きが籠っていた。人生、これすべてハプニング。それも又面白いではないか。

「それで、奥さんは御承知なんですね」

「いずれ追々分りますが、かなり飼育しましたので、相当Mになります。私のいうことなら、どんなことでもそむかないですよ」

彼女は終始、うつむき加減で私達の対話をきいていた。社長が既にボーイに通じてあったので、前菜から次々と運ばれていた。老酒に氷砂糖が沈み、生あたたかい強烈な甘い酒が私達ののどを通っていった。彼女も私達男に遜色なく盃をあけていた。ポーツと眼元が桜色に染まり、船乗りだけにかなり強豪そう



な夫の口も軽くなった頃、同好のよしみで、既に私達は、以前からの知己の如く、かなり打解けていたのである。

「ハントにのせていいんですね」と私。

「ああ構いませんとも。お願いしたいくらいです。あれのプレイが、辻村さんの文になると思うと、愉しくて、今からその本が待遠しいくらいです」

「N川じゃ困りますね」

「ええ、その名前だけ、変名にして下さい。同じイニシャルで面白い名をつけてやって下さいよ。出来ればヌメヌメしたような名がいいですね」

「ナメリカワなんて、どう？」

彼女が自から口に出した。或いは予かじめ二人の間で打合わせがあったらしい口吻だ。

「面白い、なめかわとかいてナメリカワと読むからね。滑川か——。それで名前はイクヨと、どうだい。イクヨ、イクヨ」

男は笑った。滑川幾代と漢字で書けば何の変哲もないが、口にする時、これは卑猥な名前であった。

「いい名ですよ。じゃあ、幾代さん」

「ハイ」

女は笑みを湛えて、素直に返事した。和気藹々の雰囲気、いつしかそこはかたなく流れ、社長も夫婦プレイと割切って、それは又それなりの興味を抱いて、しきりに彼女にあれこれと小声できいていた。私も彼とのSM談義。口がほぐれてか、彼はしきりに私と過去のハント女性との間柄、噂のタネ、その後日譚など次々きき出しに来る。私も彼も彼女も、かなりの老酒をあけていたが、気がつく

と社長は車の運転を考えてか、最初のホンの一杯をあけたのみで巧みに盃を逃していた。「SMのプレイかなりやってるんでしょう、あなた達——」

声をひそめて男にきくと、

「ええ、何しろ航海中が長いので、戻って来た間は、まるで堰をきったように連日連夜です。夜も昼もありませんねえ。激しいですよ私達のやること——」

「少し、きかせて下さい、プレイの参考に」
「叩いて叩いて、叩き疲れる程やってやるんですが、まあアクメ十数回はザラですね。私は男だからそうもいきませんがね。辻村さんのフォトやら、分譲フォトの緊縛は全部一通りやってみました」

「そりゃ、スゴい。吊りなんかも？」

「アパートなので満足の行く高さになんまりませんが、組立式のT字型の柱をつくって天井すれすれから吊ると、かなり高く吊れます。今夜は前夜祭のつもりで、うんと調教しようと思っています。あれは可愛い女です」

「いっそ、前夜祭の調教を一緒にやろうじゃないですか。明日といわず、今夜これから——」

「えーッ、それは願ってもないことですが、

アパートが狭くて、四人で夜中じゅう騒ぐと近所が一寸——それにあれの絶叫がひどく大きくて、いつも箆口具を思い切りしめてやるんですが……狭いですからね」

「心配いりませんよ。青山辺りに、秘密のコーポの一室借りてありますから、存分にやれますよ」

「そうですか、そりゃいい。私、実は明日のプレイにつきましても、ホテルへ多人数入るのは少し気がひけて困ったなあと思っていたのですが、それなら遠慮いりませんね。真夜中の狂宴とゆきましよう」

「じゃあ、ここを出て早速やりませんか。彼女いいでしょうか」

「いいですとも。別れが近づいていますからかなり慾情していますよ。こんなことなら責具もってくるんだったなあ」

「変わったの、ありますか」

「ええ少しはね。外国からそっと持ち帰ったのがあります、鼻だけ呼吸出来るよう穴のあいている革覆面や鎖つきの箆口具、貞操帯革手錠、ファスナーのついた革パンティ、首輪鎖、それに外国製の性具など、かなりいろいろあるんです。電話で判っきり仰有っていただければ、よかったです」

「いずれ又、見せていただく機会もあるでしょう。多少の縄やマッサージ器など、コーポにありますから、今夜はそれでゆきましようや。ひとつ、あなたの飼育振りを拝見させて下さいよ」

「いやーあ、ベテランの辻村さんの前で、私など恥かしい限りですよ」

「そうでもないんです。カメラハントで、い



つも未知の女性を相手にしていますから、プレイの進展がなく、緊縛や責めもお座なりの場合、お互いにしんしゃくがないから、かえって強烈なものになっています。女は一旦好きな男に気を許すと、凡ゆる苦痛と忍耐を甘受するものなんです。直感ですが、奥さんにも、そんなような気がします。きつと激しいものが見られると思うんです。つくりものでない本物のプレイがね」

「それはいえませうね。あれには度を越した無茶をやりますが、旅先の浮気で、フト出来心に女を抱えて、プレイを始めても、ごく初歩の程度でも嫌悪されるか、逃げ出されます。よくよく相手がMの女性に当らぬ限りはね。その点、心と心のつながりは大きいですね」

「愛情の深さイコール、プレイの強烈さですかね。幸せですよ」

「長い航海中の、あれの孤闘が守れるかどうか。ひょっとして私の留守中、適当にやってやしないかと、水商売だけに尚更、気になるんです。恥かしい話ですが、男のゼラシーが嵩じて私をSに仕立てたようなものです。その気になれば貞操帯なんて気休めに過ぎませんからね。剃毛してみたり、体中あざだら

けになる程叩いたり噛んだりして別れるんです。私の留守中、ずっと縛った儘でおきたい気持ちなんです。何度も船乗りを廃業しようと思ったりしましてね。しかし陸へ上った河童で、私のような男は外に使い道もなし、未だに続けていますが、実の処、心配で堪らないんです」

真剣に語る彼の表情に、私は彼女への愛情の深さを知った。しかし半面、かくも愛情を注いで女を独占しようとする彼が、ハントに彼女を提供するところに、いつしか愛情だけでは割切れぬ、真性のSが頭を抬げているのを彼自身、気づいてはいないのであろうか。愛情の確認がSの行為で果たされ、その行為が、いつしか本筋になりつつある夫婦を、私は過去の体験から、かなり知っていた。夫がSに傾く度合と反比例して、妻も亦M性に大きく傾いてゆき、果ては二人切りのSMのプレイに物足りなくなつて、第三者の面前で、責めさいなみ、凌辱し、それによって異質の満足感を得ようとしているのであった。女の場合も夫によって散々屈辱の限りを受ける状態を、その浅ましい姿を、第三者に見られることによって、尚一層、悲愴な被虐感にひたろうとしているに外ならなかった。

第三者の眼前で、思い切り虐めてやるという想定が、夫をマンネリズムの嗜虐から更に刺激を得る手段として往々に使用し、それを拒否することによって、尚更に加虐の増す夫に、M性の妻はより強力な被虐感を覚えて満足しているのであった。いざそれが実現した場合、夫婦共に躊躇し、二の足を踏むのであるが、その中から実践派の何人かが、言葉の殻を破つて、プレイに飛び込んでくるのである。滑川夫妻の場合、船乗りとホステスという、世間ありきたりの男女の結び付きであったが、別れも亦愉しの言葉通り、一緒に暮す期間が限られていて短いだけに、すべてをその期間に燃焼しようとするから、いきおいプレイも、普通の夫婦にくらべて、おそらくは何層倍も激しいものに違いなかった。

夫は妻に、プレイが急にこれからになったことを、そっと耳打ちした。一瞬、妻の顔にハッとした羞恥が走ったが、それはすぐ消えて、妖しい秋波に似た視線がスーッと私に流れた。アルカイックな笑顔——それは彼女自身も亦、夜のプレイを発止と受けとめた、快心の謎めいた笑顔に思われた。中華のコーナーに満腹して、私達はホテル・オークラを出た。

滑川幾代は、かすかによるめいていた。口当りのよい老酒の甘さから、ついのみすぎて今頃、酔いが廻ってきたのであろうか。

PM10時の赤坂の顔は、既に暗く眠っていた。舗道に流れる五彩の眩ゆさが、私達の夜をこれから開かせるかのように、車窓越しに甘くまたたいていた。後部に彼と彼女、助手席に私——。車は今、青山の密室へと、ひたすらに直行していた。

× × ×

昨夜は渚マリ、昼下りに飯田カオルが坐つた、ソファベッドに今、滑川幾代と私が坐っている。社長と彼の二人は手前のホームゴタツに入つて、意気投合したのか、しきりにウイスキーを応酬し合っていた。お預けをくつていた賀山社長が私達の酔いのパロメーターにまで一気に追いつこうとするかのようにストリートでグイグイ煽るように飲んでいる。

夫、滑川慶次の酔いは、かなり深かった。ロレツも少し怪しく乱れ、先程とは打って変わって蒼く顔面は冴えつつあった。

「辻村さん、今夜は俺の女と思わず、思う存分、虐めて可愛がってやって下さい。そうだろう、幾代。お前は、かねがね辻村さんに、一度だけ会いたいていってただろう。それ

が、やっと果たされたんだぞ。喜べーよう」
船乗りの地金が出てきたのか、彼の言葉は
かなり粗雑になっていた。

「本当ですか？」と私は、近く坐る彼女にき
く。

「ええ、本当に、お会いしてみたかったの
です。でもお会いする迄はとても怖かったの。
意外ですわ。辻村さんがこんなに温厚な感じ
の人なんて……。私、もっともっと凄い感じ
のサジストを想像していたんですもの」

「買いかぶりですよ。そのうちボロを出しま
すよ。でも、近頃チョコチョコ、ハントにも
私の顔、のせているでしょう。ありの僣です
よ。これ最新号ですが、ここにもかなりのせ
ていますよ」

私は立上ってバッグから奇クの二月号をと
り出して来て、パラパラとめくり、元禄女
系図の悦虐と耽美の構成のハントを開いて
みせる。

「二月号、未だ買っていないんです。おや、
随分長いね、これ——」

とホームゴタツへ足を入れに来て、しばら
く拾い読みしている。

次々とめくって、かなりの長稿に驚いてい
た。シナリオの紹介とハントを書いたから、

百二十枚近くになっている。それにフォトが
のっているから、成程改めて見ると長い。

「私、毎月ハントを一番に読ませていただい
てるのですが、あれ皆、本当ですか？」

「どう思われます」

「さあ、本当のようにも思うのですが、毎月
毎月、余りうまく出来すぎているので、信
じられぬくらいですわ」

「白状しますと、昨夜この場所で、ピンクス
ターの渚マリという子を撮りました。今日の
午後、やはりこの密室で妊娠七カ月の、若い
人妻とプレイしました。そして夜、現にこう
してあなたと一緒にいます。毎月一人ずつ書
くと、あなたも含めて三カ月分を二日間でハ
ントしたわけです。まあ、そんな点で御想像
に任せましょう。唯、いやなこと、相手にと
って都合のわるいことは書かないし、或る程
度状況や対象を美化し、フィクションは、ま
じえます」

私達のお喋りの模様を、社長は時折カメ
ラに納めていた。私への奉仕のつもりであろ
う。ソファに坐る私に並んで腰をおろし、

「私のことも、お書きになりますか？」

「ああ、出来ればお願いしたいですね。先刻
彼からO・Kいただきましたが——」

「たのしみのように怖いですわ。でも私、本
当は体に自信ないんです。やせっぱちで、し
かもあの人に随分虐められますので、あちこ
ち傷だらけです。おっぱいだって小さいんで
すのよ。あの人、かなり酔ってるでしょう。
酔うとこわいの。何するか分らないから……
シラフの時はスゴく優しいのですが、深酔い
すると人が変わるのです。ハントにお撮りに
なるような、いい緊縛はきっと無理ですわ。
あの人、考え、判っているんです。辻村さん
や社長さんの眼前で、私を思いっきり虐めて
みたいのです。毎夜そのことを、どれ程きか
されたか知れませんか」

「多分そうなるでしょう。あなた一人なら私
のペースでプレイしますが、彼が一緒では、
恐らく無理でしょう。いいじゃありませんか
——。その気になって、あなたもハッスルし
て、被虐の洩にトッブリと身を沈めればいい
んですよ」

彼女はチラリと猥らな瞳を私に投げ、すぐ
に顔は正面を向いて、彼等の動静をうかがい
乍ら、声をひそめて、

「わたくし、辻村さんと二人っきりになりた
かったですわ」

「タイミングが悪かったのですね」

「ええ、彼は航海中に、若しモデル志望に対する連絡があっても、絶対ゆくなと申ししておりましたの。彼の上陸期間中に賭けていたのですわ。最初から一緒にゆくつもりで……。でも私、辻村さんと一対一なら、彼に内緒で出てくるつもりでした。フフ、悪い女でしょう、私って——」

彼女は相変らず正面をみつめて坐り乍ら、横坐りになった私の腰のあたりへ、そっと手を挿しこんできた。さりげなく左手をおろすと、私の指は力強いしなやかさで、ぐっと握りしめられた。

所詮、女は魔性——。夫は妻の赤裸々ないたぶる姿を、散々口説き落として、私達にみせつける段階まで、コトを運んだつもりでいるが、何ぞ知らん、女のM性は、夫の飼育下を脱して、自から被虐を求めているのであった。

こうした彼女の心の秘密を、私が文字にすることによって、或いは彼等夫妻の仲に悶着が起るかも知れない。しかし敢えて書いたのは、その妻の不貞の事実を知ることによって、夫は更に嗜虐の火をかき立てる結果となり、より強烈なSMのプレイへと進行してゆくに違いないと思ったからであった。



殆んど夫婦プレイの男女は、妻への肉体の凡ゆる狼藉は寛容し許諾しても、心の不貞は許していなかった。夫の眼前で、暴虐される妻の姿を平然と撮る男が、一旦、女

が相手に感情を移したと知ると、忽ち警戒し遠のいてゆく。それが所詮は夫婦プレイのルールである。夫婦プレイのSの男は、妻を奴隷の如く扱い、散々玩弄される姿に激しい惑溺を感じ、異様な興奮を覚えて、心の不貞は汗さなかった。それは、愛情の深さのバロメーターでもあろうか。

私は今、ここに夫婦プレイの典型的とも思える一組の男女に接し、思わず夫婦プレイの定義に走りすぎたようだ。

幾代は、じっと私の手を握りしめた後、いっかな放そうとしなかった。

その手が突然さっと引かれた。ホームゴタツの二人が矢庭にヨロヨロと立上ったからである。

「辻村さん、いい加減にそろそろ始めましょうや。こいつ、いつまで辻村さんにベトベトへばりついていやがるんだ」

乱暴な言葉で、彼はいきなり、パシリと激しい音を立てて、幾代の頬を平手で叩いた。

あっと頬を押える彼女の羽織の肩を掴んで引寄せようとする。或いは私と彼女のひそかなささやきに、異和感を感じてのゼラシーの現われであったのではなからうか。

「あっ、乱暴なさらないで、待ってエ。羽織

の紐が千切れますわ」

引曳られるようにして立上った彼女は、素早く羽織の紐をとく。スリと黒い羽織がタタミにすべり落ちて、女は男に胸倉をとられて、苦渋の眉をよせていた。

私との、たのしかるべきおしゃべりのひとときが、一瞬にして、嵐の前の静けさに変貌していった。

「社長——こいつに一杯のませてやって下さい」

「いいのかい——」

「ああ、さあ、のむんだぞ」

どんと突放すと、彼女はよろめいて、よろっと社長の胸に倒れかかった。抱くようにして坐らせると、賀山氏はホームゴタツの上のタンブラーをとり上げて、なみなみと注がれたウイスキーを、羽掻いじめのようにして、彼女の口へ持っていった。

ウイスキーが糸を引くようにこぼれて、女の着物の襟を濡らしてゆく。

「もう一杯、のませてやって下さい」

フーツと酒くさい吐息を吐いて、男は社長に命令するような口調でいう。主客は、いっしか完全に転倒していた。

タタミの上に転がるカメラをとり上げて、

無理矢理、流し込ませる女の苦渋の表情を、私はカメラに納めていた。

「あっ、苦、苦しいわ。お水、お水、頂戴」

「はい、水だ」

社長に抱きしめられた幾代に、彼はぐいぐい水をのませてゆく。顎を伝って水のしずくが胸許から肌へじかに流れ込んでゆく。

彼は、既に赤く濁った眼で社長に体を引くよう合図した。

社長が後ずさりすると同時に、彼は女の体へのしかかってゆく。

はだけた胸許に、男の手が中へ伸び、つまみ出した指先の乳頭に、男の顔が近づいた。片手が女の裾を乱して忍び込んでゆく。あられもない落花狼藉の開幕は、こうして前触れなしに、いきなり彼の意図によって始まったのである。

セツとしたての、結い上げたアップの髪は早くも無惨にくずれていた。ああと呻いて、悦虐に悶える女の唇は開き、突然襲った快楽に打ちひしがれて、表情に早くも恍惚が浮かんでいた。私や社長の眼前で犯されつつあるという想念が、瞬時にして女を燃え上らせ、のけぞらせていたのである。弱々しく、

「いやッ、あ——やめて——」

と叫ぶ声も、いつしかかばそく消えて、夢中で悶える頭の動きに、乱れ毛が一層野獣と化した三人の男共の嗜虐の血をかきたてていた。

「辻村さん、じっと見ていないで、早くこいつを思い切り縛り上げて下さい」

男は体を起こすと、着物の胸を引裂くよう





にはだけ、帯じめだけで辛うじて体に纏いついた衣類を邪慳に剥ぎとろうとした。社長が、あわててホームゴタツを片隅に押しやる。ハプニングプレイは、どこが場所になるか、予想もつかなかったからだ。せき立てられるような恰好で、私は彼女の

横に坐ると、素早く上着を脱いだ。服装を乱して打伏せになった俤の彼女の腕から、着物長襦袢、薄い下着と剥いでゆくと、裸身がむき出しになった。

腰巻一枚にすると、早縄で彼女の両手を背後で縛ってゆく。裸身をさらした幾代は彼女自身いった通り、確かに瘦せぎすであった。チラリこぼれる乳房の辺りの、肉の乗り具合も薄く扁平に近い。背中や腕に、薄墨色に色褪せた打擲の痕が斑々と肌を染めていた。これは判っきりとマゾ性の女体の相であった。彼女がMに飼育されたのではなく、或いはホステスをし乍ら、S性の強い男性を、自からの眼で探し求めた結果の結び付きではなかったであろうか——。自分のM性をカバーするため、飼育されたような経過を辿りながら、その実、彼女自身の本心は、飽くなきSを求めつづけて渉獵していたのかも知れなかった。

唯、こうして両手を縛っただけの行為で、彼女は既に激しく息を弾ませ、鼻をならしていた。のけぞるように一瞬、上半身を起こし切なげに喘いだ。その首を抱えこんで、彼は私の眼前で強烈に唇を吸っていた。何ということだろう。これじゃ、緊縛にも何もなりや

しない。いきなり第一歩からフオートそのけのSMプレイへと突入していったのである。「辻村さん、さあ早くやって下さい。早く」唇のぬめついた唾液を片手で拭いながら、彼は血走った眼で、私にSプレイを迫った。

「何をやるんです」

少し業腹になって、きき返してやると、「縛ってやって下さいよ。さあ早く——恰好なんか、どうでもいいんだ。思い切り強いやつ——さあ、辻村さんも脱いでハダカになって下さい。さあ早く」

何をそうお急ぎ召さる。夜道に日は暮れませんよ。第一、そうやれやれていわれたって出来るものじゃない。この男、ムードや気分というものを全然、度外視している。酔いがいわせているのだと思っても、些か不快が先に立ってきた。

少し寒かったがズボンを脱ぎ、上半身ハダカになって、後手の彼女を引っ立てるようにして、ソファベッドに押し倒す。そうされることによって女の顔に、ありありと被虐に身を委ねた恍惚が泛かんでいた。

両手の縄を一旦解くと、改めてしっかりと高手小手に縛り直す。二の腕をしめた縄が強烈に深く肉に喰いこむまでに強く締め上げ肩

から首にたすきに縄をかけて両手首でとめる男は直立不動で、喰い入るように私の縛りをみつめていたが、やおら社長から大型のパイプレーターを受取ると、女の足許に廻った。彼の両手が、ガバと女の両腿を裂くように開いた。

「辻村さん、これ……」

彼は私に、砲弾型のパイプを手渡す。彼の意図は十分にわかつている。かなり大きい電動音が、静かな部屋に響き渡り、それを打消すような絶叫の愉悅のたかまりが、いきなり処刑の部屋の静寂を破った。

鳴悦が一段と高まり、ガクリと顎が、おちる。ヒューッと笛に似た喜悅の音が尾を曳いて、彼女の体は沈んだ。

男はニヤリと笑った。アクメを確かめた眼の色であった。

男は縄をとつてくると、私を無視して、片脚ずつ、太腿の付根と足首をぐいと引寄せてかたく縛っていった。

彼女は、まるで失神したように、微かに息づいて、胸の鼓動のみ激しかった。上から、そつとのぞき込んでみて、それが恍惚の極致を彷彿する女の顔であることを私は知った。

二、三度パチパチ頬を平手で軽く叩くと、

彼女はスーッと細目を開き、まじまじと私をみつめた。フーと溜息のように吐いた息が、生ぐさく酒の匂いを、私の顔に吹きかけた。

「大丈夫かい？」

「ウン、とってもいい気持。気が遠くなっちゃった。もっと虐めて……思いきりマキ、噛んで欲しい……」

うわごとのように彼女は私に訴える。既に乱倫の淵に身を委ねた彼女は、それが本心の被虐を求めて、自から自分の本名（真規子）を口にしていた。つくりものの、幾代なんて今日始めてつけた名前は、とっくに忘却の彼方へ押しやられていた。

「お願い——マキをもっと虐めて……」

眼をつぶって、彼女は嬌々とすすり泣くようにいう。被虐にのたうつ女のそこはかとなに、あわれがそこにあった。

「これを使って、思い切りしばき上げて下さい。泣いても喚いても構わんです。とことんまでやって下さい。手加減しないで下さい」

彼は掛けてある背広の内ポケットからビニール袋をとり出してくると、私に手渡した。一条の革バンドが円く巻き込まれてある。くるくると解くと、一米ばかり半分にきって細い二本の革鞭になっている。その夜のため

に、せめてこの一本だけでも、懷ろにいれて来たらしい。

「今夜に限りません。気が向いてホテルへしけ込む時もありますので、この鞭だけは嵩張りませんから、いつも必携品にしているんです。大分こいつの血と脂を吸っていますよ」

成程、割れた革鞭の部分は、しなやかに黒ずみ、じつとりとしめていた。血と脂と汗が、この鞭を使い頃合にしていた。

「顔以外なら、どこを殴っても構いません。思う存分、叩きのめして下さい」

彼の眼はキラキラと輝き、しきりに舌なめずりして、のどをならしていた。極度の昂奮が彼の心を支配しているかのようにであった。

私の心にも沸々と嗜虐の血が噴き上ってきた。いきなり仰向けの体をこじ上げるようにすると、私の手はガバと、乱れきった女の髪を驚掴みにしていた。強烈な苦痛を与えてこそ尚更、女は歓喜するのだと、革鞭をとりあげるなり、彼女の臀部めがけて、激しい力任せの一閃が飛んだ。ヒューッと叫んで、のたうつのを、容赦もなく、連続に私は打ちのめしていった。打ちそこねて撥ね返った革鞭の先端が、私の手首にピシリと当たり、その痛さに飛び上って、彼女の臀部に与える直撃が



如何に熾烈なものであるかを、私はまざまざと手首に感じた。見る見る双丘のあちこちがみみず腫れに腫れ上ってくる。ウーン、ウーンと女のけたたましい絶叫は、部屋を圧して耳にはねかえる。

「猿轡しましょうや。表に聞こえるかもしれないですよ」

社長が近づいて、余りの絶叫に辟易したのか私の耳許でいう。

「いや、叫ばしてやって下さい。その声がアパートでは出せずに随分、苦勞してるんだから、思い切り泣き喚くのをききたいんです」

彼は猿轡しようとする私を押しとどめた。

社長も流石にその強引さに、一寸鼻白んで黙

ってしまった。余りの強烈さが、すべての理性を吹き飛ばしてしまいそうに思えた。叫喚に辟易して、鞭の手を休め、再び私は砲弾の台尻を廻す。片手で髪を掴んで、ぐいぐい押しつけるようにし乍ら、私の片手はもぞもぞと双丘の背後から作業をつづけた。

キリキリと齒ぎしりの音

が、歓喜の呻きと共に激しくなり、私の膝下で、女は転々反そくして喜悅にのたうち廻りそして二度目の失神がおとずれた。

いきなり彼はかけよる。力任せに女の顔を殴りつけた。フーツと幽界から蘇えったように彼女は息を吹き返した。

彼は社長の耳許で何か囁やいている。社長は、うなずいた。

「辻村さん、電気を消しますよ。彼氏の御命令だから」

「えッ、何をやるんです」

「ハハ、乱交パーティ。暗闇の方がいいそうです」

社長はさっと走って、三カ所のスイッチを

パチパチと押した。鼻をつままれても分らぬ真の闇に、やがて眼が馴れてくると、ホームゴタツの真紅の光が、掛け布団を通して、かすかに仄のりと浮かび上っていた。

男同志のハダカの肌と肌がぶつかり、男の臀下に押しひしがれた彼女の顔のあたりからとぎれとぎれの息のつまりそうな舌なめずりの気配がきこえ、脚下に蠢めく巨軀が纏れてうめきは一入高まっていった。

三匹の野獣は、今や一匹の牝豹に汗みどろになって挑んでいた。

「ああ、マキ……ぬ、もうやめて——」

そんなきれぎれの声も消されて、歓喜の絶頂の叫喚が果てしなく続いていった。

× × ×

彼女の失神が幾度くり返されたことか——社長がスイッチを押した時、汗みどろの男くさい臭気の中に、ぼろきれのように挟まって女はヘトヘトになって白眼をむき出して、声もなく喘いでいた。

「あッ、いけない。早く縄を解かなくちゃ。腕がダメになりますよ」

私はギョツとして叫んだ。

暗黒の格闘の間に間に、二の腕の縄はしまりにしまり、深く肉にえぐり込んで、見るも



無惨に薄血に染み、二の腕から手首にかけて既に蒼黒色に、紫斑を浮かべて変色していたのである。これは怖るべき緊縛の長さであった。全身くまなく蔽う、歯型の跡に、勿論、私の噛みついた何十パーセントかもあって、歯痕が赤くくっきりと型を残して、全身を模様のように染め上げていた。それは彼女の絶頂の要求であった。縄目をそっと触っても、陶酔からさめた幾代は飛び上るように痛がって、ポロポロ大粒の涙をこぼして泣いた。

顔も気をつけてはいたものの、度々の殴打で、左右が赤く腫れ上っている。

幾代は事実、半死半生であった。三人の男によって、寸分の休む間もなく責めつけられては、如何にMに徹した女性とはいえない。

たまったものではなかった。

痛みの個所を撫でさする気力もなく、その場にまくれ上った腰巻一枚つけてのびているのは、哀れな女のさがが、まざまざと覗かれて、痛々しかった。

「ああ痛いわ、痛いわ。トイレ行きたいけど起き上れない——」

打伏してぐもり声で、泣くように彼女は呟いた。

「よし、連れて行って貰ってやるよ」

貪婪なまでにSに徹した滑川慶次は、何と思ったか、女の両手を握じ上げて、無茶苦茶のぐるぐる巻きに縛り、胸にも縄をかけて縄尻を握った。

「社長さん、させてやって下さい」

「いやッ、恥かしい。許して……マキいや」

女は首を握って拒否する。

「黙れ、バカもん。いつもの通りやるんだ。」

いうことをきかぬと、これだぞ」

男は鞭をとり上げて、真赤に腫れ上った彼女の臀部を、発止、発止と叩きのめす。宙に

二、三度、飛び上って、女は、

「やめてえ。痛い、痛い、痛い。いうことききます」

と、うなだれる。快感を伴わない鞭打ちは

苦痛以外の何ものでもないのだ。社長は一寸白けた顔で、大きくくしゃみをする、下着と焦茶のスポーツシャツを上半身につける。

女の縄尻をとるようにして、入口近くのトイレに向かって、扉を開く。

激しく、ほとばしる音——。私の冷徹なカメラは、低いアングルから、それを捕えて光る。

しずくをしたたらせて、やっとの思いで女は立上る。

「お風呂へ入れてあげましょうや。一寸ひどすぎる——。鳥肌立ってますよ、彼女」

縄をとき乍ら、社長は誰にともなく声をかけた。

「辻村さん、一緒に入って洗ってやって下さいよ」

まるで命令するような男の口吻であった。

一人で危なかりうと、うなずいて私は狭いバスへ二人で入っていった。

「ああ、痛い。お湯がしみる……痛いわ、痛いわ」

彼女は泣いて、私に縋りついた。二人が這入ると浴槽一杯で、大量の湯が堰をきったように、あふれてこぼれた。

「ひどかったね、御免ね。こんなつもりじゃなかったのだよ。つい彼がいうものだから、調子を合わせて、ひどいプレイになっちゃったのさ」

「分ってるわ。辻村さん結局、私に何もしなかったわね」

「どうして?……分っていたの」

「分るわ、体臭と感触で——どうしてしなかったの? 私がいやなの?」

「いやじゃないよ。唯、余り刺激が強すぎてどうにもならなかったのさ。意馬心猿で、心は逸っているくせに、ハハ、だらしないね、私って男は——」

「御病気のせいもあるのでしょう」

「多分ね。それに、余りハタでやいやい云われると尚更、萎縮するんだね。一対一ならハッスルするかも知れない」

「きっと、そのチャンス待っていますわ」

女はいきなり私の首を両手で抱くと、激しく舌を挿し入れてきた。

長い時間、女の舌が私の口腔内をさ迷っていたが、やっと唇を離すと、さっと浴槽を出て水落口へしゃがんだ。ゲーゲーと嘔吐しようとしてエヅいている。

「どうしたの? 苦しい」

「吐きそうなの。無理にのまされたから、苦しいの」

尚もエヅいて、少量の黄色い粘液が吐き出されて水と共に流れた。

「何も考えずに、この保ぐっすりと眠りたい——」

それは切実な彼女の願いであった。私も激しい疲労を覚えていた。

再び浴槽内の抱擁の数分——。

「幸せだわ、こうしているのが——。辻村さん好きになっていい」

「彼が怒るよ」

「怒らせてやるわ。あの人はプレイじゃないわ。やり出すと執念深いよ。私がいくらやめてと頼んでも、自分の気の済むまでトコトンやるのね。デリケートな女心なんて、ちっとも考えてくれない」

「それが真のSなのだろうね」

「こん畜生と思っても、結局、別れられないの。航海が帰って帰る日が近づくと、狂おしいほど恋しくなるの」

「のろけかい」

「殺されそうに虐められて、今度こ

そはと思うくせに、又ぞろ私を罵りものにするあの人が忘れられないのね。こんな男女の結びつきってある?」

「激しいのさ、SもMも。私のような中途半端なS人間は、つき合っているうち、きっと物足りなく思ってくるよ」

「でも優しく女心をいたわってくれるわ」

「それが男のすべてじゃないさ。所詮あんたは、辻村隆という虚名に憧れているんだよ。大した人間じゃないよ、私なんて——」

「いやいや、そんな言い方。嘘でもいいから好きだといって——きつく抱いて」

狭い浴槽内で、女は瘦身の肌を力一杯、押しつけてきた。



二人並んでハダカ姿で、襖を開くと、二人の男は、前後からホームゴタツに足をさし込んで、大きい軒をかいて寝入っていた。

棚の腕時計を覗くと午前一時半。乱倫のあの疲労が、一様に皆に襲いかかっていた。

ソファを倒してベッドに早変わりさせ、押入れを開いて、毛布、敷布団、洋布団を出して忽ちにシングルベッドをつくる。

「しばらく、お入りよ」

いわれる俚に、彼女は腰巻を素肌につけ、長襦袢を着て、そっと横たわった。何かを訴えるように私を、じっとみつめている。

「ねえ、電気、消さない」

「ああ」

直感で、私は女の誘いをさとり。暗闇でじっとしていると、じれた女の声が流れた。

「ねえったら、待ってるのよ」

押し殺して囁くように呼びかけてくる。ハダカの私は、そっと布団をはねて、狭いベッドにもぐり込む。

轟音の軒を交叉にききながら、私の体は濡れていった。

激しい吐息、押し殺す陶酔の甘い呻き——私の男性を奮起させようと、滑川幾代は必死に挑んできた。

× × ×

魂切るような叫びに、熟睡の私の眠りはいきなり引裂かれた。ハッと飛び起きた時、私はそこに又しても行なわれている、忌むべき嗜虐の行為を、まざまざと見た。

激しい男の眼が私をにらみつけるようにしていた。両手脚を縛られた幾代が髪を掻き出されて、引きずり廻されていた。下半身がむき出しになり、上半身もハダカにむかれて、腰紐一本で長襦袢と腰巻が、腰のあたりにまとわりついている。

彼女を叩きつけるようにして手を放すと、ぐいぐい女の顔を足でふみつけ、容赦なく腰や腿を蹴り上げていた。

賀山社長の姿はいつしか消えていた。私達を残して、そっと家へ帰ったらしかった。

「一体こんな時間に、どうしたのです」

「分っているでしょう、辻村さん」

語気が激しかった。あれからその俚、二人抱き合って熟睡していた姿を酔いからさめた彼が見たに違いなかった。私は腹をきめた。ええい、なるようになれ。いわば亭主目前での姦通である。乱倫をみずから奨めながら、己れの非公認の行為に対しては腹が立つらしいのである。

「じゃあ、いいようにして下さい。私にも言いたいことはありますが黙っていきましょう」私は下着をつけてソファに坐り、煙草に火をつけて、じっと成行きを見守っていた。

男は狂暴になっていた。これみよがしに、彼女の髪の毛を引摺むと、襖を蹴立てて、つめたいフロアの洋間の方へ、ズルズルと引きずっていった。

ゴツン、ゴツンと激しい音が断続して聞こえ、チラリと視線をやると、女の頭を床に叩きつけているようであった。必死に押し殺した苦悶の呻きが洩れる。もうこれはプレイを逸脱した暴虐のきわみであった。

男は無理矢理に女をトイレへ引きずっていった。

「さあ垂れる。尻をまくってやるから、大きい奴を垂れるところを、好きな辻村さんにとくりと見て貰え」

「無理よ、出ない——」

「出ないことがあるものか、やれッ。辻村さん、カメラ撮るときなさいよ。フッフ、こんな面白い見世物は二度とありませんぜ」皮肉たっぷりの言葉であった。私はカッと顔を押し、冷静にカメラを構えた。

オヤッ、撮るのかといった表情で、男は少



し意外そうな顔付になった。ハントに徹した私を甘くみちゃ困る。いかなる時でも私は冷静に行動するのだ。

鳴悦が慟哭にかわり、そして特有の臭氣が私の鼻をついた。

泣く泣く彼女は、必死になって放出したに違いなかった。男は案外、優しい手付で、後始末の紙をあてがって拭いていた。

ずるずると引出してくると、フロアの上へ坐らせ、泣きべそを掻く女の顔を、男は両手で髪を掴んで左右に振りつづけた。

「お前は俺の奴隷だろう。ええそうだろう。返事をしろ」

「ハイ……」

「ハイだと——。いつもの通り言うのだ。いいカッコするな」

「私は貴方様の奴隷でございます。貴方様のおいつけなら、どんなことでも致します。喜んで虐められます。喜んで鞭打たれます。喜んで……」

「その先をいうんだ」

「喜んで、いつでも×××

×××いただきます」

一気に言い終って、女はクククと、しゃくり上げて泣いた。屈辱にまみれた、哀しい女心だった。どんなにしいたげられ、虐められても離れられない、SMの結合を私は眼の辺りにみた。

その俁、又ずるずると和室の方へ、髪を掴んで引きずってくる。低いベッドだが引きずった俁、押し上げようとする暴挙に、女は弓なりになって痛みをこらえて泣いた。やっと男は彼女の縄を解いた。

「ベッドへ上って横に寝ろ」

女は、のろのろと横たわる。傷にまみれた

肌、無惨に乱れた髪、化粧の剥げおちた涙の苦しみの表情——それは、あのホテルオークラで始めて出会った時の、憂愁の楚々たる美しさのカケラも見出せぬまでに変貌し果てていた。

「辻村さん、こいつの奴隷マークをみてやって下さい。おいッ、開くんだ」

荒々しく彼は女の片脚を高々とかかげた。まさぐる指先が……をかきわけたが、さだかでないのか、ドサリと脚を離すと、風呂場へ入ってカミソリを持って来た。石鹸もクリームも何もつけない。ゾリゾリと心覚えの個所をいきなり剃り出した。女の地肌が蒼黒く覗けて、そこに男のイニシャルの一字「K」というローマ字が刺青されてあるのを、私は判つきりと、この眼で確かめたのであった。

× × ×

ウトウトとして、何時間か眠ったらしい。ハッと或る想念に突き当って眼覚めると、女はずっとその俁の姿勢でいたのであろうか、はだけた長襦袢の上から後手に縛られた、あの数時間前と同じ姿勢で、洋布団の上に腰掛けた俁、かすかに眠っているようであった。

お仕置だといって、男は彼女を縛ると、朝までその俁おれと命じて、自分はホームゴタ

ツに足を伸ばして寝てしまった。今も私の傍らで、居汚なく、酒臭い息を吐いてぐっすり寝込んでいた。窓の外はうっすらと白みかかっている。早朝の街の微かな騒音がこもこもで伝わってくる。腕時計をみると午前六時過ぎであった。

あれから三時間半——。女はいわれた通り縛られたその儘の恰好で、坐った儘、浅い眠りをとっていたようであった。

ひしと可憐ないじらしさが、熱く私の胸を打った。起き上って、そっと縄を解こうとすると、薄目をあけて、

「解かないで下さい。又虐められますもの」
その眼は悲しげに微笑んでいた。抱きかかえるようにしてベッドに押し上げる。

眼を細めた儘、女は淋しい笑いを私に送ってきた。その眼に万感の想いが籠っていた。そっと唇を近づけると、イヤイヤをして顔をそむけた。匂いのする息に、女のたしなみがそむけさせたのかも知れない。

「起こしてやろうか、彼を？」

「そっとしておいて下さい」

「こんなSMのプレイは、長いハント経験でも始めてでしたよ」

「そうでしょうね。私、余り長く生きられそ



うにもないですわ。いつか、この人に殺されるかも知れませんわ」

「それでも別れない？」

「別れられないでしょうね」

「女の業（ごう）だね」

「かも知れませんか。私、辻村さんにとんだ御迷惑かけちゃって、何とお詫びしていいや

ら——」

「私こそだ」

その時、寝返りを打つ彼の気配に、私はあわててそっと打伏した。

もう眠れない。睡眠不足の生あくびを噛み殺し乍ら、脳裡は益々冴える許りであった。

小一時間も経った頃であろうか、傍らの男がムククリ起き上った。

「マキ——」

一言叫ぶと、私の狸寝入りをじっとうかがってから、彼女にガバと飛びつき、鼻と抱きしめていた。

「マキ——許してくれ。俺の気持、分ってくれるだろう。マキ、マキ……許すといっておくれ」

男は、さめざめとむせび泣くように掻き口説いていた。既に縄をといたらしい。

「思い切り俺を抱きしめてくれ。なあ、逃げないでくれよな、頼む」

暫くして女の声がボツリときこえた。

「分ってるわ。いいのよ。分ってるのよ、あなたの気持——」

私は起き上れなくなった。微かな寝息まで立てながら二人の様子を窺がっていた。

「ねえマキ。最後の夜を熱海で過ごそうか。」



「そうだ、そうしよう。ね、うんと可愛がるよ
ああ俺だけのマキだ。誰にもやらないぞ」
「フフ、セツトしなくちゃ。無茶苦茶だわ、
私の髪——」

「ウン、そうしろよ。さて、困ったな。辻村
さん、起きねえかな。俺達帰れやしないぜ、
彼、起きないことには」

声をひそめて、二人は喋々喃々ささやきあ
つては、くすくす笑っていた。

それでいいのだ。やはりこの二人も、夫婦
プレイの、唯少し強烈な人々だったのだ。微
笑ましい気持で、私は体をゆり動かす。

さも今、眼がさめた振りで、大きくのびを
すると、笑顔を二人に向けた。

「おや、夜が明けましたネ。ぐっすり眠っ
ちやうど。どうやら天気のようにですね」

屠所の羊の如く、彼はしおらしかった。女
は立上って身支度をととのえている。

「とんだ御迷惑かけちゃって。酔興と昨夜の
無礼の数々、忘れて下さい」

「いや、こちらこそ——でもすぐハプニ
ングで愉しかった。いい奥さんですね。あんた
にや、勿体ないよ」

「そうでしょうか」

男は嬉しそうに笑った。

「かなり疲れましたから、今日はおつき合
い出来ないでしょう。これで、どこか温泉にで
もいって、昨夜の狂宴のあかを落として下さ
いよ」

いよ」

聖徳太子を一枚握らせる

と男は恐縮して、彼女の処

へそわそわと走って行って

何か耳許で囁いている。男

の肩越しに、女の片眼がそ

っとつぶられ、感謝のしる

しが私の心に温かくはね返

ってきた。

もう滑川幾代は私の手の

届かないところにあった。

それでいいのだ、何もかも——。

夜もすがら続いた乱倫の果ての、あの刹那
刹那が、まるで幻影の如く、朝の光と共に私
の脳裡から薄れてゆく。

ついさっきまで、他の事を忘れてひきこま
れていた劇映画が終ったあのような、いわ
ばドラマが一変してコマージュになったT
Vを見ている感じである。

悦庵にむせび、もだえ抜いていた女体と、
今、眼前に笑顔を見せて男と何か囁き合っ
ている彼女が同一人であるとは——

たしかにこの手で触れた柔肌であるには違
いないが、その手触りが思い出せない。つい
数時間まえの現実のことなのに——。

やはり、男の存在が、私の意識に働きかけ
ていたのだろうか。

青山の表通りに二人を送り、タクシーの二
人に、いつ迄も手を振る。

会って、別れて、又出会って、この青山の

秘かなコーポの一室で、三人の女性が現われ

ては消えていった。それぞれの哀歓と愉悦と

悦庵を交錯させて——。

風は冷たい。一月十三日の太陽が、静かに
町並みを赤く染め始めていた。

(おわり)



今年のキネマ旬報（正月特別号）に、興味深い投稿がのせてあった。「徳川女刑罰史」を擁護する——といった、東京のK・M氏の一文である。要約すれば……

△——真に残酷な映画とは、いったいどんな映画か？ 牛の首がふつとぶようなヤコベツティの残酷。プニエルの残酷さ。またヒッチコックの「鳥」のように、ありふれたことをひっくり返して、日常性のすぐ裏側の残酷さを見せたものなど——この中で、視覚に直

（映画批評）

残酷映画ただいま絶賛上映中

絵 面 優 美 子

接訴える生理的残酷さは、残酷な度合いが、最も稀薄といえよう。いくらたくさんの首を斬って見せようと、行為自体の残酷は、目をおおえば済んでしまう。いわば表面的な残酷に止まるからである。

生理的残酷ものの映画が、真に残酷たり得るためには行為としての残酷を越える行為の内側への斬り込みが必要となってくる。

いささか時期を失した感があるが、最近、「徳川女刑罰史」を見ることが出来たので、残酷映画の極めつけみたいなこの映画について考えてみたい。

結論から先に言くと、この映画に、たんなるグロ趣味以上のものを感じた。

第一話は——表面だけ眺めたって、温情与力の思いやりが、権力者側にとって逆に拷問以上に有力な武器だったなどというところはいかにもうまいし。第二話——は、日本映画にしては珍しく、女同士のからみ合いを巧妙に見せていた。

だが——なんといっても圧巻は第三話である。サド的与力南原が、彫物師のために一世一代の拷問をやる——といった、ストーリーは、いかにもとってつけたような感じだが、行為としての残酷を女の肌にじかに彫るに留まっていた彫刻師が、加害者であった与力を逆に被害者にしてしまうことによって、責められる女たちの苦痛の中の喜悦とともに、加

害者のサディズムをも彫りこむというところは見事であった。

ここには極端な形としてではあるが、リズムを乗り越える手法をつきとめようとした芸術家の恐るべき残酷さがムキ出しになっていた。これからみればグロテスクな拷問の残酷さなど比べものにならない。

この映画には、不当な非難が多く寄せられた。これらの非難は、生理的残酷さのグロテスク加減に目を奪われて、残酷さの表面だけを見てしまったことによるだろう。

だが——批評までもがそこに止ってしまつてよいものだろうか？

こうした良識的倫理的な批評が日本映画を育てるのではないことは明かだ。

いわゆる良識的映画の物足りなさにくらべれば「徳川女刑罰史」の毒の方が、はるかに意義がある。「徳川女刑罰史」は久しく待望した——残酷映画が商業ベースに乗った、面白い映画という形をとって出現したものであったVと……。

○

これと対照的なのが、同誌掲載の商業評論家S氏の見解である。昔から「見解の相違」などということばがあるが……

「徳川女系図」「徳川女刑罰史」——石井輝男監督のこの二作については、すでに本誌にくわしく書いた。ピンク映画攻勢に対抗してつくられたと見られるこの両作品は、三百万円のピンク映画よりは、三千万円のピンク映画の方が、よりいっそうひどいものが出来るということを立証してみせた——というのであった。

○

私は、前者と比較して、後者のこの無味乾燥な、おざなりの批評におどろくと同時に、いったい批評家とは、なにを考え、なにを語ろうとしているのか？——と慨嘆せざるを得なかった。

世にいう商業批評家なるものは、変テコな理念とか倫理に固執する非人間的な抽象論者で、私は彼等の価値を認めない。

彼等は「悪いもの」「良いもの」の基準を前者がのべているように、表面的な観察のみにおいて判断し、その内面的な深さを追求しようとししないのだ——この傾向は、いまに始まったことではない。戦前おこなわれた「映画検閲」なるもののあった時代と少しも変わっていない——いわば進歩がないのだ。

私は、後者の商業批評家のプロフィールも、

経歴も知っている。また世論も、彼を取りまく映画界の、いわゆる商売仲間の彼の批評に対する一つの価値判断も……だが、私は、ここで彼の悪評をたたこうとは思わない。

商業評論家というもののあり方について、考えさせられ、これでよいのか？と寒々とした感慨にふけっているというものである。

○

現在、映画産業は危殆に瀕しており——毎年観客が減少しつつある。いわんや映画産業の復興が叫ばれている今日、こんな冷酷な、作者に対するネグライもない悪評で、復興に一役しプラスにでもなっていると思っているのであろうか？

私は、以前ある映画作家が「——君：批評家なんて酷い奴らはないよ。映画を作った経験もない癖に、おまけに脚本修業の敗残者の癖にして、いっちゃん前の批評をしやがるんだ。俺の作品をとっ掴まえて「愚作の愚」だと簡単に書きたてておる。口惜しかったら、一本作ってみろッてんだ！」

まことにむべなるかなである。

○

だからといって、私は「徳川女刑罰史」や一連の「残酷物」を擁護しようとかかつてい

要望

提案

「花と蛇」の新人について

美津夜静京

「花と蛇」に近く二名のニューフェイスが登場するようだ。その企画には大いに賛成

だが、現在待機中の千原美佐江と珠江夫人については、少し異論がある。というのもこの両者の人物像が、既出の各美女のイメージと重複するからである。

既存スター四名は各自、他とは違った特性を具備している。つまり、「豊麗な令夫人」、「深窓の令嬢」、「男まさりの女探偵」、「清純可憐な女高生」という風に、美女の観念が類型化されていて、その対比が興趣を相乗的に盛り上げる推進力となっているわけだ。その意味で前記兩名の人物像には幾分、難がある。新スターには従来なかった独特のタイプが望ましいと思う。

ほんの思いつきに過ぎないが、以下私の腹案の美女類型を二つ推挙したい。作者団氏は読者の希望を広く作中へ採り入れておられると聞く。御一考下されば望外の喜び

である。

◎ 映画女優

三月号の鬼六談義によると、山本富士子型の静子夫人に対し、新珠三千代型の珠江夫人を配するという着想らしい。それならば今一步踏みこんで、映画女優をズバリ登場させてはどうだろう。新珠三千代そっくりの美人などではなく、本人（無論名前は適当に変える）を直接持ってくるのだ。実在（と覚しき）人物の印象は強烈だし、その方が読者に強い感銘を与えるにちがいない。

「上品なセクシムード」を羞恥責の各態様から最大限に引き出す。また、女優としての「演技力」（カマトト性を少し混在させてもいい）を、フルに応用させるのである。つまり、羞恥感覚なり媚態技巧なりの立人的表現や演技を、充分に「鑑賞」できるわけだ。

るのではない。それはそれなりに、温かい批評の眼で筆をとり、作者に対する今後のアドバイスが出来ないものか？——と思うのである。

「愚作の愚」的な批評なら、むしろ活字にしない方がよいのである。原稿料かせぎで書くのだったらペンをとるな！と叫びたい。また一部の「悪書追放」的なコチコチ先生方の論理にこびるような批評だったら無難だと思っているのだったら——それは、決して映画産業復興へのプラスにはなるまい。

私は、ある専門家（いわゆる映画倫理の）から活字に出来ない腹の底からの述懐を耳にしたことがある。特に名を秘すが……

「ある強姦事件があった。犯人は前途ある未成年者だった。犯行の原因を調べたら、あるエログロ映画を見て刺激されたから」というのであった。すると世にいう教育家や頭のコチコチにかたまった役人、民間の青少年対策の先生方は、さっそく「映画の悪評」を叩き始める。まったくもって、お話にならない。何百万人……いや何千万人かも知れない……その映画の観賞者の中の、極くかぎられた、極くわずかな人間の変態行為が、マスコミにとりあげられるや、よってたかって騒ぎだすの

静子夫人の対抗馬に育成し、お座敷ジョーで競演させる。互いにライバル意識を燃やし、ストリップや開陳サービスでは濃艶なお色気合戦を展開する——こんな趣向も面白い。

◎ 白人女性

そのドミナ的存在がM派の専売特許のようになっていくが、Sの分野、とりわけ羞恥責めの対象としてなら絶好の素材になりそう。人物の設定としては、ある程度日本語を話せないと困るので国際秘密情報員（女スパイ）のような役柄はどうだろう。美貌と肉体美は勿論不可欠の要件だ。性格は嬌慢尊大な淑女タイプがいい。温順且善良な人物ぞろいの既出美女達に配し、対照の妙を発揮できると思う。

この白人女性を、日本式羞恥責めにかけて骨抜きにする。従前と同一の責めのパターンを使っても、一風変った斬新な趣向が生まれるのではあるまいか。

その他たとえば、①女優三千代との同性愛プレイ（国際親善美女大合戦と銘打つ）②静子夫人とのストリップ競演（衣裳や舞台装置を洋式和式に区別）。③鉄火娘京子

との女レスリング（両者赤白のふんどしを着用）。④文夫や捨太郎相手の夫婦プレイ（各体位に關しての実地研究）など、各種多彩な組合せ方式が考えられる。日本犬との愛の交歓も一興だろう。

事のついでに、今少し私の希望を簡単に述べてみたい。

第一、各美女の登場頻度——ひいきのスターが半年以上も休場すると待ちくたびれてしまうので各美女ともあまり間を置かず登場させてほしい。各美女への責めの場面を平行的に進行させた方がいいと思う。

第二、責めと緊縛の關係——夫婦プレイやレスピアンなどショー形式の場面では、当事者の自主性を尊重し積極性を期待して身体の拘束を解いてはどうだろう。演技に深みと新鮮さが出ると思う。

第三、これは編集部への要望であるが、「花と蛇」に是非さし絵をつけてほしい。F誌では大っぴらなのに本誌だけ「自粛」するというのは理解に苦しむ。せめて「花と蛇」くらいにはその配慮を望む。

だ。極くかぎられた少ない犯罪者のために、映画そのものを悪いと判断する単純さ。無神経さにはおよそ腹がたつ……」というのであった。

○

私は、映画は大衆の娯楽であり、大衆に喜ばれるものであって欲しい——と願うものであるが、性質上、誰にでも喜ばれる作品は不可能であると思う。だが私はS氏のいうような「大会社が作ったからエログロも大会社なみに倍増する」とは思わない。——お金をかければかけたなりに、見られる場面は正比例するものである——と訂正したい。さて、その「見られる場面」であるが、監修や考証にお金をかければ、かけたなりに芸術的な価値はますます増えると思うし、チャチな男女優より、やはりスターの方が見ばえがするものである。見ばえがする……表面だけに眼がくらんで、内面的な批評も出来ず、抽象文句を活字にするのだったら、本当の意味で立派な批評であると私は思えない。残酷物——それも結構……映画評論家は、内面の掘り下げに協力し、現時点で観客と作者の間の、真のかけ橋になることにあると思う。



告白

思い出の洋子

島崎 慎一

私が新宿のあるアパートに住んでいたときの体験を記そう。

私の部屋は、二階にある六室の真中であつた。東側の奥の部屋に洋子が住んでいたのである。彼女は妾であつて、ダンナは江東区でプラスチック成型の工場を経営していた。洋子は、その工場の事務員であつたが、このダンナに手をつけられて、二号専業になつたわけである。

四月のある日曜日であつた。午前中、私は洗濯をしてベランダに干したまま外出したところ、夕方になって雨が降ってきた。私は洗濯物のことはすっかり忘れてしまい、アパートに帰ってくると、洋子がドアをノックして入ってきたのである。

「島崎さん、洗濯物を忘れたでしょう。とり

こんでおいであげましたわ。はい」

「ああ、これはどうも……すっかり忘れてしまつて……お手数をかけました」

「私のをとりこもうとしたら、あなたの干したままだったので、お部屋に声をかけたのですけれど、お返事がないので、とりこんでおきましたの」

私は赤面した。私は前夜にアヌスプレーをしたときパンツを汚してしまい、念入りに洗つたのであるが、汚れがおちなかつたのである。彼女の手の中にそれがあるではないか。私は秘密を知られてしまい、逆に図々しく出て弱身を打消そうとした。

「ぼくのパンツをご覧になりましたか。痔が悪いので時々そそうしてしまうのです。恥かしいなあ」

洋子は真赤になつて下を向いてしまった。彼女は二十五才であつた。女性として若い年ではない。しかし口元には幼なさが残り、可愛らしい健康的な顔立ちをした、身長一六二センチのグラマーであつた。

「ぼくが一番恥かしいことがバレてしまったので、ついでに、思いきつて貴女にお願いします」

「なんでしょうか」

洋子は、やや身をかたくしながら答えた。「実は女性の生理帯を手に入れたのです。痔は、いつも出血するわけではなく、時々あるのですが、そのたびにパンツを汚してしまふのです。もしその時、生理帯を使えば、失敗しないで済むのです。前から欲しかったのですが、男のぼくが薬局に買いに行くこともできないし、困っていたのです。どうでしょう、ぼくにかわつて買つてきてもらえないでしょうか」

彼女は意外にも真剣な顔をして、私のいうことを聞いてくれた。

「ええ、いいわ。でも色々あるんだけど、どんなのがいいのかしら」

「貴女の使っているのはどんなものですか」「パンネットといって、ネットになっている

ものよ」

「ずれませんか」

「ええ、洗濯も楽だし、安いし……。女の人
は大勢、使っているわ」

私はパンネットが、どんなものか知らない
わけではなかったが、カマトトぶっていた。

「しかし、男は女の人とちがって前の方がピ
ツタリしないでしょう」

「あら、嫌な人」

洋子は再び赤面した。私はヌメヌメしたゴ
ムの感触のあるパンティ型の生理帯が欲しか
った。

「とにかく数種類、買ってきて下さい」

こんなきっかけから、私達は知り合った。

一度、浣腸プレイを覚えた彼女は、積極的に
それを求めてきた。自分から工夫して浣腸液
を調合するほどにまでなった。彼女の体は、
ふとり肉で白くヒップは実に見事であった。
むっちりとしたヒップが、薄もののピッタリ
と吸いつくようなパンティで包まれているの
を見ると、私は我を忘れて吸いついた。

洋子とつき合って私の望んだことは、浣腸
プレイよりフェチズムであったといえる。洋
子は、そんな私の傾向を納得しかねるようで

むしろ浣腸プレイを欲した。それでも私の欲
求を拒絶することはなかった。

「洋子、君の穿いているパンティが欲しい」

「やあよ。きたないわ、そんなこと」

「君は自分のものだから、きたないと思うん
だ。ぼくは、そんなこと何ともない。欲しい
欲しい、君の汚れたパンティを……。ねえ、
洋子」

彼女は最初は嫌がったけれど、ついに脱い
でくれた。私は今も、彼女のプレゼントを大
事に保管している。

「洋子、パンティを脱いで、ぼくの顔にかぶ
せてくれ」といったこともある。

「目をつぶっていてね」

私は目をつぶったふりをして薄目をあけて
見ていると、洋子はスカートをまくりガード
ルをはずして、私に背をむけてパンティを脱
いだ。パンティを膝までずらしたとき、白い
大きな両球が、むっちりとしたスカートの奥から
のぞいて見えるのだった。

「さあ、かぶせるわよ」

さすがに洋子は興奮を隠し切れなかった。

手がふるえて何度も失敗した。

「ああ、いい香りだ。洋子の匂いがする」

私は思わず洋子のパンティを噛みしめ、十

分、味わった。

私たちの秘密のプレイは、更に新しい刺激
を求めた。

「ねえ、洋子。ネクタールって何だか知って
いるかい」

「知らないわ、何のこと？ また、へんなこ
とでしょう」

「毎日、君がトイレで排出する液体……」

「オシッコ？」

「その通り。君のネクタールを飲みたい」

「変態ね、相当な……。ウフフフ、でも私は
もう驚なくなっちゃったわ」

「透明なのは臭いも味もなく、簡単に飲むこ
とができる。黄色いときは、だめだ。臭くて
臭くて……」

「あだし、今日はどっちかしら」

「君のだったら黄色くても、かまわない」

「バカ。ウフフ」

コップに彼女のネクタールを受けると、透
明だった。私は、ゆっくりと飲み干した。洋
子は目を大きく見開いて、私の飲むのをなが
めていた。

彼女は翌年の六月、タクシーにはねられて
死んだ。

男性虐待快樂術 (第四話)

半処女繁盛記

(前篇)

馬族 保



奴隷志願者

ケンはずもとと雑種犬である。

ケンには何代か前の土佐犬の血が混っている。——といひ添えたのは、ケンの里親である実相寺の住職の奥さんであった。なるほど軀は骨組みも逞しくなった。しかし貌には土佐犬の猛々しさはなく、毛並は白と焦茶の斑点の多い雑種犬特有のもので、土佐犬らしく見えなかったし、誰もが半信半疑であったが丁度二年前の夏の夜、朱子の家に泥棒が這入りかけたときのケンは、形相を一変し、猛然

と相手に襲いかかった。相手を押したおし、衣服を滅茶々に咬み破り、脚の脛に噛みついたのである。

泥棒は命からがら逃げ去ったが、そのときの光景を縁側からつぶさに眺めていた朱子の家族は、かねてのケンを知っているだけに吃驚し、改めてケンを見直したものであった。

望月朱子は、犬小舎のケンの首輪に鎖をつけて手にし散歩に出た。青い水玉模様のミニのワンピースに銀色のブーツを穿いている。東京から帰って三日目の午後であった。

望月家の裏通りを横切り、こども遊園地に出た。別に目的があるわけではなく、ケンの

牽引力の赴くまま遊園地をグルリと一周し、バス通りに出る。そこはQ百貨店の裏通りでもある。Q百貨店裏のバス停留所まで来たとき、望月朱子は、ふいにあることを想い出した。

「あ、そうだ」

彼女は物を試してみたい好奇心にかられたのだ。切符売場の小さなハウスの腰板の秘密をたしかめてみようと思いついたのである。

6/5~8/10. P.M7. 7カナルコ. H. T

ボールペンのインクの文字は、間違いなく塔の上肥後の筆跡だった。

望月朱子は、彼女の魅力を確認したことに

満足の微笑をうかべた。

「ようし。十五日振りだわ。たっぷりしごいてやろう。あの野郎、ヒイヒイ泣かせてみたくなったわ」

はて、どうしたものだろう。筆記具を持ち合わせていない。ああ、そうだ。朱子はバスを待ち合せているらしい学生の傍につかつかと歩み寄り

「鉛筆貸してよ」

彼はまぶしい表情をした。胸のポケットのかくしから、シャープペンシルをつまみ出し「これでいいですか？」

「結構よ」

朱子は、切符売場のハウスの裏側に廻り塔ノ上の筆跡の下に6、14と書き添えた。

「ありがとう」

学生にペンシルを戻し、こども遊園地まで引返して来たとき、急にケンがウーと警戒のうなり声を発した。朱子はふり返って見た。

四十がらみの男が立っていた。男は中折帽を取って丁寧にお辞儀した。

「どなた？」

「失礼しました。ぜひ、貴女にお願いしたいことがあります」

「何よ？」

「はい」といったきり、暫くいい濃んでいたが、顔を真赤にしながら、

「お嬢さん、お願いですから、僕を貴女の奴隷にして下さい」

思い余った激情がその声にもつていた。望月朱子は慌てなかった。奴隷志願者は、もう四人目である。最初の男のときは、さすがに戸惑ったが、今は少しも気持ちに動揺はなかった。むしろ、男の方は決死の覚悟が感じられるくらいだ。

「如何でしょうか。お嬢さん！」

「いいわ。ごく簡単なことだから。で、条件は——」

「ゆっくりお話し合いをしたいのですが。その喫茶店・ボンジュールまでご足労下さいませんか」

「いいわ。先に行つていて。犬を小舎に繋いで、出かけるわ。七分ぐらい」

「はい。承知しました。必ずおいで願えますね。必ず……」

「ええ。行くわ」

男——鮑楽庫太は、欣喜雀躍する感情を抑え、いそいそと踵を大通りの方へ移した。

ケンはなれを犬小舎に繋ぐと離室の客の朱子を呼ぶ声を聞き流し、家人に見咎められないよう

に、忍び足で裏のくぐり戸を脱けた。

朱子が喫茶店へ這入りかけたときである。

息せき切つて追いついて来た声が、

「朱子さん！」

朱子はふり向いた。塔ノ上肥後であった。

「あら」

「お帰りなさい。随分お待ちしました」

「そう。デパート裏のバスの切符売場でしよう。ちゃんと指定しておいたわ」

「たった今、見ました」

望月朱子は、もう返辞をしなかった。例の気位の高い、驕慢な表情に戻り、ボンジュールのドアを押した。朱子の姿は一瞬の間に店内に吸い込まれた。

鮑楽庫太は、二階の奥まったテーブルに坐っていたが、朱子の姿を認めると立上つて丁寧に辞儀をして迎えた。朱子はウェイトレスに飲物を命じて、搬ばれたお絞りを使いながら、

「これから、あなたの人物考査を始めるわ。

正直に答えなさい。いいわね」

「はい。正直に答えます」

鮑楽庫太は、坐ったままで不動の姿勢を取った。

「姓名は？」

「飽楽庫太」

「年令」

「本年四十五歳」

「職業は？」

「温泉旅館業」

「どこ？」

「二日市町です」

「ふうん。奴隷歴は？」

「ドレイレキ？」

「奴隷の経験はどのくらい？ 正直にいいなさい」

「奴隷の志願の感情は、ずうつと以前からありました。しかし仲々その機会に恵まれないのです。私には一つの理想があって、奴隷になるからには、そんじょそこらのありふれた女性の奴隷になるなんて真平です。何万人に一人しかいない、ハイ・レディの奴隷になりたい。それも、気位の高い、驕りたかぶった女性を女王さまとして崇めたいと夢見ていました。幾ら美貌でも、結婚を考える女性は、私には落第です」

ウェイトレスが、命じられた飲物を運んで来たので飽楽は言葉を切った。

「面白いわ。続けなさい」

朱子は話のつづきを促した。

朱子は現代の貴婦人

「ご存じと思いますが、男は性欲に非常に弱いのです。男が女の足許に跪ずくのは、性の衝動に耐え切れなくなるからです。美しい女性の美しい脚線美を見せつけられると体中がカーッと火照ってくるのです。先刻も申上げたように、私の女王さま理想は、最高級の貴婦人であることに間違いありませんが、性の脆さに堪えかねて、これまで何人かの女性の脚を借りたこともあります。夏の夜の街角のスタンド・バアのホステスがヒマで表に椅子を出して涼んでいるところを反対側から見てもうしんたり、あるときは、美貌のホステスに謝礼を渡してたのんだこともあります。二人だけの秘密協定というのが、妙に私を興奮させました。彼女は同僚が店にいる間に一人表に出て私のために椅子に掛けてくれました。自動車の行き交う合間を、地面にひれ伏して彼女の脚線美を拝みました。ズボンの汚れるのも厭いませんでした。私の激情を伝える表現のつもりだったのですが、彼女はコソコソ店の中に姿を消してしまいました。私は腹が立ちました。何という可哀想な愚かものだろう、と思いました。すると途端に幻滅です。同僚のホステスが店からゾロゾロ出て来ました。彼女は私の方を指さしながら脚を高々と組みました。通じたなと私は感激しました。現金なものです。ところがそうではなかったのです。女は立上ると店の中に這入ってしまいました。ほかのホステス達が私の方を、まるで見世物でも見るようにゲラゲラ笑いながら見物するのです。一人の女は私を見て手の指であたまの周囲をクルクル回し、指をペアとひろげてみせます。クルクルペアというわけで。すっかりユウウツになりました」

「ほ、ほ、ほ。女王の資格のない女を女王に仕立てようとする方が、ばかだと思うわ」

「そうなんです。私がばかなんです」

「わたしなら、近くまで呼びつけて、道端に坐らせ、拍手を打って拝ませるわ。皆の見ている前で、股をくぐらせたり、靴の裏を舐めさせたりするわ。面白いもの。いま、ここでさせてみようかな」

「エエッ」

「ふ、ふ、ふ。東京・大阪では、ハイ・レディが男の奴隷をもち、生活の道具に使っているのは事実よ。驚くに当たらないわ。ある雑誌の座談会に、奴隷を持っているハイ・レディ

ばかりが集って話してるの、読んだことあるわ。でも、だめね。肝腎なところは省略されているの。わたしの友達も二人、マンションに奴隷を飼って、豪華な生活を愉しんでいるわ。彼女達の話によると、奴隷志願者は増える一方だって」

飽楽庫太の胸が高鳴った。

「これから、あなたのこと呼び捨てにするわよ。いいわね」

「はい。勿論です」

「わたしは家を出て独立したいと思っていたの。丁度よかったわ。マンションに住むのにお金が必要なのよ。お出しなさい」

「高いでしょうね。幾ら？」

「月四万円。敷金三カ月分」

飽楽庫太は暫く考えていたが、

「何とかしましょう」

「わたしの生活費を別に十万出しなさい」

「実は、息子夫婦に旅館を譲りましたので、金の使途が喧ましいものですから、マンションだけで精いっぱいです」

「お前の貯金から支出するつもりかい」

「はい。そうでないと方法がありません」

「不動産は、まだお前の名儀だろう」

「勿論、私の名儀です」

「売るなり抵当に置くなりして、現金化し、わたしに捧げたら、どうなの」

「とても、そんな」

「馬鹿野郎。じじいの分際でわたしの奴隷にして頂くからには、それ相当の犠牲を払うべきだわ。わたしは、現代の最高級の貴婦人だからな。奴隷の資格のないやつは、ツバも吐きかけてやらないわよ」

「そんなムリをおっしゃらないで、どうぞ貴女の奴隷にして下さい。出来るだけのことはするつもりですから」

「じゃ、許可してあげよう。お前の担当は、バスとトイレの掃除、洗濯、犬の役目。わたしの名は望月朱子、朱子女王さまとお呼び。わたしは生きた美の女神——そのつもりで仕えるんだよ」

「はい。わかりました。必ず忠実な奴隷となってお仕えいたします」

「街で出会ったときは、わたしは知らぬ顔しているが、お前は必ず立停って、ていねいにお辞儀するんだよ。それから、わたしの歩いた靴あとに接吻おし」

「——」

「マンションの契約書は、今日貰っておくから、明日お金を揃えて持っておいで。夕方、

部屋の掃除をしに参上しな」

「明日の何時にどこでお会いしましょうか」

「ここ。午後二時。わかったわね。わたし、帰るわ。ちゃんと立ってお辞儀をするのよ」
望月朱子は颯爽と歩いてゆく。その姿は神々しいばかりだ。

飽楽庫太は、催眠術にかかったように朱子のうしろ姿に向かって、ていねいな最敬礼を送った。

「朱子さん」

朱子が表に出ると筋向いのレコード店で見張っていたらしく、塔ノ上肥後が幾分表情を硬くして現われた。

朱子はジロリと冷たい眼を流したただけである。

「タクシー」

朱子のご機嫌を何とかして取り結ぶために肥後は必死だった。タクシーが寄って来た。ドアを開いて朱子を乗せ、彼自身は運転台の助手席に坐った。

「春吉町」

朱子は男の積極的な奉仕を好む女である。肥後には十四日を指定したのだから、本来なら、約束を破る男を決して許さなはずである。矛盾するようだが、人並はずれに気位の

高い朱子の感情を、塔ノ上肥後の人目を憚からぬ勇氣ある行動が柔らげたのであろう。望月朱子は、そんなわがままな女だった。

喫茶店・ボンにて

七月も半ばになると、夏も本格的な猛暑の季節を迎える。

福岡市の中心街——中洲の中央を二つに区切って流れる那珂川の川畔には、深更まで涼をとる人達で賑わった。金魚掬いの店や屋台が川に沿って小さな店舗を張り、夏の風物詩を奏でた。

夏の夜は東中洲に善男善女が蟬集する。街路の石だたみは汚ないし、映画館、パチンコトルコ、飲食店が立ち並んでいる。奥まったところは近年大型のキャバレーやクラブが妍を競う繁盛ぶりであるが、いってみれば何の変哲もない名所である。

那珂川だけが福岡七十五万の市民の憩いの場所にふさわしく、事実、深更まで川端のベンチに倚って涼をとる若い男女の姿はよく見かける図である。

望月朱子は、その夜、円谷美香と一緒に来た。

春吉のトラヤ・マンションの隣室同士で、年令も同じ二十二歳。美香の経営するスナック喫茶に寄ったのが十一時だから、もう十二時を回った頃だ。

ふたりは那珂川の川べりに出た。彼女達の住むマンションまでは一キロ程度の距離である。ブラブラ歩いてくるとひとりの男が、二人の前になりうしろになり、蹤いてくるのに気付いた。別に珍しいことでもないのに、ふたりは気にもしなかった。

橋のたもとにかかったとき、男が思いあまったように美香の傍に近づいて慇懃な挨拶をした。

「お願いです。お嬢さん達の足に接吻させて下さい。お礼に二千円差上げます」

情熱をこめ、ささやくようにいった。

「何よ」

美香が聞きとがめ、もう一度念をおした。

男はおなじ言葉をくりかえした。プーッと噴き出して、美香が朱子に耳うちする。

「どこでするの？」

朱子も笑い出したが、「面白いからやろうよ」と相槌うった。

「そのベンチ」

ふたりは引返して川畔のベンチの一つに揃

って腰を降した。さすがに人通りは疎らだ。時たま、酔っぱらいがとおりすぎるくらいである。

木製のベンチの台の下は一段低く石垣が積まれている。

男は下段の土の上に跪ずいて、ふたりの足を彼の膝におき、ズボンのかくしからハンカチを取り出し、朱子の足から拭きはじめた。

朱子は、彼女の足の甲に男の唇が蛭のようにピタッと吸いついた時から、しびれた。しかも陰気ではない。舌の蠕動してゆく感覚は絶品であった。

「ああ、いいわ」

男の唇が美香の足に移動すると朱子は美香の肘をこづいて合図した。ふたりは顔を見合わせ、ニッコリ笑って、うなずく。

「あんたの商売、何？」

美香が訊いた。

「自動車修理工です」

「あんた、女の足がそんなに好きなの」

「好きです。しかし、貴婦人のでないと、いやです」

「わたしたち、貴婦人に見えて」

今度は朱子が訊く。

「はい。貴婦人も第一級の方とお見受けしま

した。それとその飛びきりの脚線美からは、優美な品位とグッとくる色気が発散しています。その足になら、踏まれて死んでも、男名利につきます。どうぞ、おふたりの奴隷にしてください。お願いです」

男——鴨下岩見は、二人のハイ・レディの足下に額を擦りつけて哀願するのであった。

その帰り途、朱子と美香の交した会話。

「朱子、あいつ、どうする」

「文なしじゃね。奴隷の免状も出せないわ」

「店の方で使う手もあるけどなあ」

「それもそうね。とにかく、あいつのキス技術は、最高じゃなか」

「ほんと。拾いもののね。わたしの方でバッチリ貰っちゃおうかな」

「ちよいお待ち。ふたり共用では、どう」

「うん。いいわ」

実は、この話には後日譚があるのだ。トラ

ヤ・マンションから二、三軒めに、女ばかりで経営している喫茶店がある。ボンというの

だが、モカがうまいので、朱子はひいきにしている。

十日ばかり経った某日、午後八時頃、望月

朱子はモデルの仕事の帰り、ボンに寄ってモ

カを啜っていた。

その時刻になるとその辺一帯は往来が杜絶

え、客も少ない。朱子が這入ったときは、も

う一組、若い男女の客がいたが、間もなく帰

ったので、今は朱子ひとりであった。

ボンのドアがあく気配がし、朱子がふりかえると例の男——鴨下岩見のペコペコお辞儀する姿が眼に映った。

朱子は一瞥をくれただけで、たばこをくゆらせていたが、表のガラス壁にピタリと身を張りつけカーテンの隙間から、朱子の高く組んだ脚線美に視線を灼きつけながら体を細かくふるわせている鴨下を認めた。

朱子は立上って窓際まで歩いてくるなり、カーテンをサーッと引いた。

透明の硝子だから内部の風景は手にとるように見える。朱子はウエイトレスに命じて、窓際まで小椅子を搬ばせた。椅子に腰をかけた、朱子はどっかと脚を組んだ。ミニのスカートが太腿の上部まで露出した。

鴨下岩見の直立不動の姿勢がうす暗がりの中でハッキリ見えた。つづいて最敬礼する動作が見えた。

「ノンちゃんもトコちゃんも、来てごらん

さい」

朱子は誇らかな声音でウエイトレスを呼ん

だ。二人のウエイトレスは好奇心で眼を輝や

かせ、朱子の背後の遠くから外を透し見た。

いつの間にかバーテンの珠実も首をのぼして

見ている。

望月朱子は得意であった。

彼女の魅力の副産物である男を、他人の目

の前で翻弄する刺激は強烈であった。

鴨下岩見も受難者の感激で陶醉していた。

他人の面前で朱子の美貌のとりこである証

拠を披露する羞かしさは、まったく顔から火の出る思いである。

道化役演技に、自らを没入してゆく感情の炎が鴨下岩見の官能を焼き尽すのだった。

朱子は両手を腰にあてがい、胸を張って、視線を真っすぐにし、彼女の道化役の踊りを見つめている。瞬き一つしない。スエードの靴を壁ガラスにつけて、下れ、というサインを送った。

サインの意味を解しない岩見は、ひたすら

朱子の脚線美に視線を凝らし、身をふるわせ

ている。

朱子の自尊心は爆発した。すうーっと立上

るなり、右足の靴を床にトンとふみつけ、指

でハッキリ地面を差し示した。

土下座しろ、といっているのである。

鴨下岩見の姿勢が、うちひしがれたように膝を折り、両掌をついて地上にひれ伏した。

「ノンちゃん、たばこ頂戴。マツチもね」

朱子はたばこをくわえ、燃してくれたマツチの火を点けて吸い、さもおいしそうに紫煙を吐き出した。

鴨下は顔を上げて朱子を見た。ズボンのバンドの下に右の手首がスルスルと没した。

鋭い、睨みつけるような眼の光りが、しだいに仏陀の法悦の眼差しにも似た恍惚へと変わってゆく。

目玉を丸くしながら、かたずをのみ、朱子のうしろから男の動作を見守っていた女三人が、とたんに、堰を切ったようにゲラゲラ笑い出した。

望月朱子は、そのとき始めて唇のあたりに満足気な微笑をうかべた。

鴨下岩見は、多数の異性の前で羞かしめられる屈辱感で興奮していた。この朱子という人間放れた女性の素晴らしさはどうだ。朱子になら殺されてもいい、と思うのだった。

岩見は、二メートルも隔たない透明のガラス壁の中の朱子の神々しい姿に向かって呼吸を鎮めるために身を顫わせていた。

絶品泥棒

望月朱子は、U字型の舞台の突端に陣取っている男の視線が先刻から妙に気になり出していた。

三十台そこそこの年配である。おそらく、越えてはいないだろう。悲壮に近い深刻な表情をして朱子の脚を窺賞しているのである。

気位の高い朱子は思わずムツとし、舞台の幕の蔭から、その男の挙動をもう一度見直した。朱子以外のモデルには見向きもしない。ひたすら、朱子の出を待っている様子が歴然とわかった。

たしか昨日も来ていた記憶がある。

わたしの脚線美を、ショーにかこつけて無料で観賞にくるとは、無礼千万な、と朱子は内心プリプリしていた。

舞台の端に出たとき、よろけるふりをして横面を蹴とばしてやろうかしら。

北九州市小倉区のSデパートの秋着ファッション・ショーの舞台である。

朱子を除く、五人のモデルは身長はあったが、身体の造りがすべて華奢である。いわゆるファッション・モデルの規格品だが、望月

朱子だけは、身長一六五センチ、体重五七キロという規格外のグラマーであった。

日本の女性の体格も、ようやく欧米なみに発育し、しかもウェストのくびれなど実に見事な造形の時代を迎えてみると、これからの服飾には大きな改革が要求されるようになるだろう。そういう見方をする、と、朱子のモデル姿は華麗であるし、その優美さは、目も綾に今日的であった。

二日間のファッション・ショーはその日で終了した。

発車時刻ギリギリ、タクシーを駆って、駅までかけつけると、朱子は同僚の所沢まり子と一等車に乗った。

列車が動き出して間もなく、一等車の出入口のガラス戸をあけて、ひとりの男が這入って来た。

朱子の座席の前まで来て、いんぎんにお辞儀をされたとき始めて、

「あっ、あいつだ」

気付くと同時に、朱子はソッポを向いた。服装の月刊誌を出して、まり子とおしゃれ談義に花を咲かせていた彼女の、掌をかえすような豹変ぶりには前のクッションにいる、まり子さえ、びっくりしたくらいだった。

「あはア、何かあるな」

所沢まり子は、女性特有のするどいカンでそれを察知した。

とりつくしまもなく、男——枚方日置は突っ立ったままである。

しばらく時間が経った。枚方は、所在なさに追いつめられた気持であった。

洋服のズボンのかくしから、買ったばかりのストッキングをつかみ出し、「あのう」と口ごもった。

「何かご用？」

所沢まり子が気を利かした。

「朱子。この人、あなたに何か贈りたいらしいわよ」

朱子は、月刊誌から顔をあげて、じろりと日置を見たが、視線は必然的に枚方の持っている品ものに移動する。

「フン」

朱子は鼻さきで、せせら笑った。

「ねえ、それ、靴下？」

まり子が訊いた。

「はい。婦人靴下です」

一等車はガラ空きだった。朱子たちは、入口に近いクッションに座を占めていたから、日置が勇気さえ出せば、周囲に乗客はいない

し気兼ねすることは何もなかった。

「あなたは、この女に靴下を贈りものしたいの」

「いいえ」

「あら。じゃ、その靴下、どうするのよ」

「これを、その方に穿いて頂きたいのです」

「じゃ、やっぱり……」

枚方日置はチャンスをつかむ勢いを得た。

「いま、穿いていらっしゃる靴下を、僕に三千円で譲って頂きたいのです。そのかわり、これを穿いて下さい」

朱子は日置の顔を覗めた。その眼には、困惑した色は微塵もなかった。むしろ、朱子の靴下を欲しがっている男にその資格があるかどうかをたしかめる表情の方が強かった。

「いいわ。譲ってあげるから、手伝ってよ。」

一緒にいらっしゃい」

例によってキビキビした動作にうつると朱子は手洗所へ立った。枚方も従った。

それっきり、二人は席へ戻らなかった。

間もなく、急行列車は、どの駅にも停車することなく博多駅に滑りこんだ。

所沢まり子が、朱子の持ちものをぶら提げて、出入口まで歩いてくると戸をあけて朱子が首をのばすようにし、笑顔で合図した。

ホームに降りたち、出札口にあるきかけて

肩を並べたとき、まり子が訊いた。

「あの男は、どうしたの」

「小倉に引返すといってたから、きっと帰ったでしょう」

「靴下、三千円でゆずってあげたの」

「モチよ。わたしの目の前で靴下を噛み、足の脂汗を飲むように命令してやったわ」

「あきれたわ」

「まり子が旧いのよ。わたしたちは魅力を売るのでしょ。わたしの靴下が欲しいというのは、わたしの魅力が、それを欲しがらせる証拠だわ。靴下に顔を埋めて恍惚となっているのを見て、わたしもうれしくなったわ。いい施しものをしたと思ったわ」

「それも理窟ね。だけど、まり子には出来ない芸当だわ」

「それより駅の地下街で、一ぱいつき合ってよ。わたしが奢るわ」

ふたりは連れ立って地下街の『洋酒天国』に這入り、カクテルを注文した。

甘い洋酒が咽喉の奥へ流れこみ、ジーンと腹に泌みわたる。

「電話かりるわよ」

朱子は円谷美香に電話した。

え、別所山城守の室が、白装束の胸を押し広げ胸の下をぐっと刺し貫き朱に染みながら、その刀を咽喉に突き立て、二十六才の生命をたつて伏せられた最期の姿を目のあたりに見られ、次はわが身が自害をと思うと、妊娠した腹の子のことや、夫友元への別れ、女としての花の薔を、自らの手で散らす哀しさ等が胸にこみあげて来て、思わず知らずに身を震わせ、刀も捨てて泣き崩れる。

その想いを察して、長治の奥方は「共に出でたつ死出の旅、歎きたまうな」と、なぐさめられる。

その声にやっと覚悟を決め、念仏を唱えながら胸元を押し広げられ、妊娠のために豊かさを増した乳房もろとも守り刀を胸に突き立て、その朱に染まった刀を取り直すと、それを口にくわえてうつ伏せ、立派な最期をとげられたという。

私は三木城天主閣跡に立ち、別所一族の辞世の碑の前にたたずみ、歎き悲しまれながら丸々と膨れた臨月腹（史実には妊娠何月であったか記録がないが、私は臨月であったと考えたい）を、着物の上から涙で曇る眼で愛撫するように見凝め、大きく肩で苦しそうに息をしておられる奥方の若々しい妊婦姿を想像していた。

その傍らには、朱に染まって血の海の中で

別所山城守の室が、さきほどまでは掻き立てるように身悶えておられたが、今は静かに物云わぬ亡骸となって女盛りの豊かな身体を横臥っておられ、室内には血生臭い匂いが漂っている。長治の奥方と長治ら一族が、この痛々しい臨月腹の若い奥方の自害を見守って、その多くの視線を一身にうけているのが痛いほど感じられる。

その中で自害して行かねばならないと、追いつめられたような気持ちになっている奥方の、自害を前にした心中は察するに余りあるものがある。

もう腹の中の子供の誕生の姿も見ることができず、ただ男児誕生を祈って、その身を愛して来た身体も、手にした刃を胸に突き立てた瞬間、この世から消えて行くのである。女の最大の幸福であるお産も味わえぬまま、腹の中の子も道連れにして冷たい亡骸となって倒れ伏すのかと思うと胸を締めつけられる哀感があつただろう。

恐らく前夜は、腹帯もとって、固く丸々と膨れ上った自らの臨月腹を、複雑な気持ちで何時までも愛撫し続けられ、一睡もされなかったのではないかと思う。

もし独り心静かに自害することを許されるならば、双肌脱ぎになって、妊娠のために豊かに充実し、青い静脈が網目をなして走り、丸々と膨れて臍がその頂点でむきだしの姿を

見せている臨月腹を充分に露出し、その緊張して弾力を失った腹に刀を突き立て、腹を断ち裂いて、腹中のわが薄幸の胎児を抱きしめながら、死んで行きたかったに違いなかったろうと思われる。私は、死を前にして歎かれた心中には、その思いがかなわぬ身の悲しさがこめられていたのだと思いたい。

奥方は、この誰れにも云えぬ胸の中を秘めたまま、白い胸に刀を突き立て、死の苦痛に臨月腹を波打たせ、身悶えながら死んで行かれたのであろう。

今は冷たい亡骸となられた奥方の、動物的な女の生理を秘めて、大きく盛り上った臨月腹を眼にした長治ら一族の武将たちの気持は落城につきまとう悲壮美の極致を、心ゆくまで味わいつくして、それぞれが腹を切って行ったことであつたろうと思う。

私は、城跡から秀吉の本陣になった平井山や三木市街を見下ろしながら、この奥方の最期の悲壮美を味わい、城跡を去った。

戦国女性の悲劇的一幕であつた。

その帰途、車中で双子を思わせるような、大きいお腹をした妊婦と会い、車中の徒然に失礼とは思いつつも、その丸い西瓜を膝上に置いて坐しているような感じの妊娠腹を羨しみながら、妊婦の描く異常美から再び落城の悲劇を再現していた。

定だったんだがよ」

川田はポイと煙草を土間に捨て、

「あいにく急に美津子の奴が生理になっちゃまってよ。一旦、中止という事になったんだ。

生理日だけは無理をさせねえという社長の云いつけだからな。若い連中はカッカと頭にきてたぜ。だから、今朝は、お前さんの調教を見学させてやる事にした」

何しろ、うちにとっちゃ大事な客人の弟だから、気嫌を損じないようにしろ、と川田は夫人にそれを云うため、わざわざここへ顔を出したようである。

夫人はわざと無関心を装うかのように終始冷やかな表情を見せ、無心なほどに落着いて化粧をすませると、毛布を丁寧に折りたたんで牢舎の隅へ置き、川田の方へ、何かものを尋ねるような潤んだ瞳を気弱に注ぎかけるのだった。

「さ、行こうか」

川田は顎を動かして、夫人に牢舎から出るよう合図した。

片手で両乳房、片手で前を隠し、体をくの字に曲げるようにして夫人が牢舎から出て来ると、川田は用意していた麻縄をマリから受取り、夫人の背後に廻る。

「そら、ちゃんと胸をはるんだ」

川田に背中を押された夫人は、ゆっくりと両手を背後に廻し、胸をはった。

キリキリと夫人の柔肌に麻縄をからませ、きびしく夫人を後手に縛り上げてゆく川田は「どうだい。遠山家の若奥様でいた頃を、たまには夢で見る事があるかね」

と、せせら笑って聞くのだった。

「——もうそんな事はおっしゃらないで。川田さん」

静子夫人は、悲しげに睫毛を慄かせて、ふと象牙色の頬を横にそらせるのだった。

「さ、歩きな」

夫人をがっちりした後手に縛り上げた川田は縄尻をたぐって、夫人の量感のある見事な双臀に軽く平手打を喰わせる。

夫人は深く首を前に垂れながら、静かに歩き出した。

「へへへ、今日は一日、ここをこってりいじめ抜かれるってわけだな」

地下の階段を見事な双臀を悩ましく左右にくねらせて登り始めた夫人の背後から、川田がその部分へ……くりこませようとすると、夫人は、ブルツと腰のあたりを痙攣させ、いやっ、とすねるように身をよじらせて、羞恥

で溶けたような眼差しを、川田に向けるのだった。

「——こんな所で、何もいたずらなさらなかったって——」

と柔らかい睫毛を動かして、恨めしげに云う静子夫人を、川田はニヤニヤした顔で見返しながら、

「二階の部屋で、ゆっくりといじめてもらいたいってわけか。よし、わかった」

川田は、再び、夫人の縄尻をしごき、なめらかな夫人の乳白色の背を押して、階段を歩ませて行った。

「入ってもいいですかい」

千代の部屋の前に立った川田は、ドアを軽くノックして中に声をかけた。

どうぞ、と千代の高い声。ドアを開けると、千代は葉子や和枝達と朝の食事をすませた所らしく、互いに揚子で歯をせせりながらぼんやりとテレビに眼を向けていた。

「静子夫人の御入城ですぜ」

川田がいうと、千代は葉子や和枝と顔を見合わせて、狡猾な微笑を口元に浮かべ合い、「こちらへ、さっきからお待ち兼ねなのよ」と、揃って立上るのだった。

「ホホホ、さ、どうぞ、奥様」

千代と葉子は、川田に縄尻をとられ、優美な裸身を前屈みにして立っている静子夫人の肩や背に手をかけて部屋の中へ連れこむと、食卓の前へ坐らせる。

静子夫人は、冷たく冴えた象牙色の横顔を見せ、ぴったりと肉づきのいい太腿を密着させ、そこへ正座していたが、そんな夫人を悪女三人は、ほくほくした気分で見つめながら取囲むように坐りこむのだった。

「昨夜は、奥様、男二人を相手に大熱演だったわね。よくもああいう器用な事が出来るものだと、今まで私達話し合っていたのよ」

葉子はそんな事を云って、クスクス笑い、煙草を口にして、火をつけるのだった。

「それに昨夜はこっちも色々取りこんでいたので、奥様のお相手をゆっくりする事は出来なかったけれど、今日は、ずっとお付き合いさせて頂くわ」

と、和枝はハンドバッグから香水を取出し夫人の耳たぶから雪白の首筋、そして、麻縄に上下をきびしく締め上げられている乳房に至るまで、すりこみ始める。

「ま、今日から二三日、奥様にはこの部屋に御滞在願って、いろいろ、楽しみ合いましうよ。いいでしょ、奥様」

千代は、そう云って立上ると、
「そら、もうちゃんと、支度は出来ていますのよ」

と、次の間へ通じる襖を開くのだった。

次の間は、八畳の日本間になっていて、その中央には、ピンク色のシーツをかぶったマットレスが敷かれ、その中程には、夫人の双臀を高々と支えるための大きな枕が一つ乗っかっている。丁度、その枕の上あたりに、天井から、かなりの間隔をおいた二本の鎖が無気味に垂れ下がっているのだった。

覚悟していた事だが、やはり、ここにいる三人の魔女は、これから自分の肉体に、魂も凍るばかりのおぞましい調教を本気でほどこす気だとなかった静子夫人は、もう狼狽ともならず、ふと、切長の瞳を悲しげに閉じ合わせて、初々しいばかりの羞恥の色を頬へ滲ませた。

静子夫人が身をすくませて美しい羞みの色はにかを全身に浮かべると、悪女達は妖しく胸を高ぶらせるのだ。

「今日の流腸は、岩崎親分も一緒に御覧になるんだ。だからな、こいつもショーだと思っ
て、お客入方を満足させるよう、うんと色気を振りまくんだぜ。いいな」

川田は、眼を伏せ、首をうなだれている夫人の柔軟な肩先を指ではじきながら云うのである。岩崎は、いよいよ今日、関西へ引揚げ
る事になり、いわば、これが、岩崎に対する森田組の最後のサービス、つまり、さよなら公演だと川田は笑うのだった。

「こ、こんな醜いものを、見世物にするなんて——」

静子夫人は、岩崎を始め、津村、それに清次達までが、このグロテスクな見世物を見物にやって来るのだと川田に聞かされると、ピンクの口紅を薄く塗られた柔らかい唇を慄かせて、あるかなきかの声を出したが、

「相手がお前さんみてえな絶世の美人だからこそ、こうした見世物も結構、通用するんだよ。これが、おかちめんこときちゃ、見ている者は反吐を吐いちゃうぜ」

川田がそういうと、千代達もキャツキャツと笑いこけた。

そこへ、「どうも、おそくなりまして」と春太郎と夏次郎が、未だ眠りが足りないといったカサカサした顔つきで入って来る。

「何時まで寝てやがるんだ。早く支度にかからねえか」

と、川田は、苦々しい顔つきになって、二

人のシスターボーイにどなったが、俺はもう森田組の軍師なんだぞ、といった横柄さが、ありありと川田の語氣に含まれている。

春太郎と夏次郎は、用意して来た浣腸器、脱脂綿、コールドクリーム、様々なガラス棒などの小道具を、マットレスの傍らへ並べ、早速、洗面器の中へ石ケン水を溶かせ始めるのだった。

川田は、これから一種の見世物として万座の中で浣腸をほどこされる事になった静子夫人に、一通り要領を教え始める。

「そ、そんな——」

静子夫人は、川田の着想の常軌を逸した恐ろしさに思わず身を慄わせ、消え入るように深く首を垂れてしまう。

「お前さんの亭主の捨太郎に浣腸させ、ねっ」とりと夫婦仲のいい所を演じてもらおうと思っただが、相憎、捨太郎は昨夜から風邪をこじらせちゃったんだ。だから、今日は、あのシスターボーイ二人とびったりと呼吸を合わせてよ」

川田は、赤味を帯びてきた夫人の繊細な美しい頬を楽しげに見つめながら、後始末は、かつての夫人の日本舞踊の愛弟子であった小夜子にさせる、と云い出すのだった。

「私はね、奥様」

千代が、次に夫人の、さも悲しげな美しい横顔をのぞきこむようにして云った。

「奥様をこの世で一番美しく、優しい人だと長い間、尊敬し師事して来た小夜子嬢が、醜悪な姿をさらけ出した奥様を見て、それをどのように感じ取るか、フッフ、そいつを傍で観察しようと思うのよ」

つづいて川田が、また口を出す。

「何も今更、羞しがる事はねえと思うな。お前さんと小夜子嬢は、もう普通の間柄じゃないんだ。そんなものの始末をさせるのに、もう遠慮し合う仲じゃねえじゃねえか」

静子夫人は、その美しい切れ長の瞳に、今にもハラハラと大粒の涙をこぼしそうになりながら、恨めしげに、ちらと川田の顔を見るのだ。

「後生です、川田さん。静子はどのような賜りものになったってかまわない。でも、そんな姿を小夜子さんの眼にさらさないで。ね、川田さん」

「うるせえな。千原美沙江の誘拐計画をすすめてもいいというのかい」

川田は、手きびしい調子になって夫人にどなった。

ハッと口を噤む静子夫人は、深々と頭を垂れ、優美な裸身を慄かせて、シクシクと泣き沈む。

「こっちのやろうとしている事に、一々嘴をさしはさむと承知しねえからな」

そう追い討ちをかけるように夫人に浴びせた川田は、ふと、次の間で黙々と石ケン水を溶かしているシスターボーイの方を見て、

「そろそろ支度も出来たようだ。立ちな」

と、夫人の柔軟な艶めかしい肩先をうしろから抱きしめる。

夫人は、暗く陰影を沈ませた横顔を見せながら、川田に抱き起こされるのだ。

「ホホホ、じゃ、私達も手伝いましょうか」

千代は和枝と葉子を眼でうながし、静子夫人の背や肩に手をかけて、その優美な裸身を次の間へ歩ませて行く。

「ここで一寸、お待ちになってね」

悪女三人は、洗面器の石ケン水をゆっくりとかき混ぜている二人のシスターボーイの前に一旦、夫人を坐らせると、マットのシートにオーデコロンを吹きかけ始めた。

「くさいものが流れ出すんですから、出来るだけ匂い止めをふりかけておくわ」

たっぷりとオーデコロンをシートにふりま

いた千代達は、頬の色をバラ色に染め、小さく立膝して処刑の時間を待つ静子夫人に笑いかけるのである。

石ケン水をかきまぜる春太郎と夏次郎も、ふと意地悪そうな眼をして、溶液の一杯入った洗面器を、わざとらしく夫人の前に置くのだった。

「今日は一日がかりで、これだけの石ケン水を奥様のお腹に注ぎこむのよ。何度も浣腸して、お腹の中がすっかり空っぽになってから私達が腕によりかけて、面白い芸当を教えてあげるってわけ。わかったわね」

静子夫人は、涙も枯れ果てたような哀愁を湛えた瞳をぼんやりと見開き、何か別の事でも考えているような虚しさで、石ケン水をかき混ぜている春太郎の手を見つめている。

夏次郎は、陰影を滲ませた夫人の横顔の美しさにしばらく見とれていたが、この美貌に同情してはこっちの負けだとばかり、残酷なものを自分にけしかけて、川田の方を見るのだった。

「今、お春が云ったように、この奥様の胃をすっかり洗滌しちまうんだから、三日間は水以外、何も食べさせないで頂戴」

と、冷やかな顔つきになって云うのだった。

た。

よし、わかった、と川田はうなずくと、腕時計に眼をやって、

「さあ、そろそろお客人達がやって来る時間だぜ。奥さんをマットへ乗せよう」

再び、夫人の柔軟な肩や背に暴力行使者の手がからみつく。

無理やりに立上らされた静子夫人の眼に、マットの両側の花壺に生けられた鮮明な色彩を持つ赤と白のバラの花が、まばゆいばかりに映じた。

それは、この見世物を見物する客のため、千代が舞台効果として、用意し、配置したものであった。

「遠山家の温室に咲いたバラよ。奥様のために今朝、使いを走らせて取寄せておいたの」

夫人は、ふと生気を取戻したように柔らかく眼をしばたかせ、その場に立ちすくんで美しいバラの花に見とれるのである。荒廃しきった自分の肉と心を、この色鮮かなバラの花が悲哀のこもった一篇の詩として奏で出しているというような切なさ、キリキリ夫人の胸をしめつけてきたのである。

「何をぼんやり突っ立ってるんだ。そのバラの花に負けねえよう、奥さんも大きく菊の花

を咲かせるんだよ」

川田は邪険にそう言って、夫人をマットの上に乗せ上げる。

「さ、仰向きにお寝んねして——それから、これをお尻の下に——」

三人の悪女達は、楽しそうにクスクス笑い合いながら、マットの上に小さく身をすくませてしまった静子夫人を仰臥させようとするのだ。すでに何度か、そのおぞましい洗礼を身に受けた静子夫人であったが、身に加えられる責めの中では最も辛く、羞ずかしく、血も噴き出さんばかりの屈辱感を味わされる浣腸責め。それは、千代達の方でも充分わかっているだけに、加虐の悦びに気もそぞろとなり、一層の残忍さを発揮する事になる。

やがて、静子夫人は、すっかり観念したように切れ長の美しい瞳をゆっくりと閉じ合わせると、石のように硬くなっていた全身の力を抜き、周囲にまといつく悪女達の手身に身をゆだねてしまった。

骨の髄まで柔らかそうな乳白色で優美な夫人の緊縛された裸身が、千代達の手でゆっくりと仰向けに倒されてゆく。

春太郎と夏次郎が、天井のパイプを通して垂直に垂れ下がっている二本の鎖をたぐりつ

つ、ぴったりと閉じ合わせている夫人の陶器のように白い足首に手をかけるのだった。

「今日は、お客人方が最初、花の観賞会をする事になってるんだ。かまわねえから力一杯引っぱりな」

春太郎と夏次郎が川田に命じられた通り、夫人の心をそり立てるばかりに優美な線を持つ両肢を、左右に引こうとすると、

「ねえ、川田さん」

夫人は、繊細な頬の線にますます上気の色を浮かべて、薄く眼を閉ざしたまま哀切な声を出すのだった。

「もう一度、もう一度だけ、静子の願いを聞いて。後生です、川田さん」

「一々、うるさい奥さんだな。一体、何だっでんだよ」

「静子のこんな姿を、小夜子さんには見せないで。ああ、小夜子さんには、見られたくない。ね、川田さん」

静子夫人は、堪え切れなくなったようにむせび泣きながら、かすかに身悶えするのだ。

「まだ、そんな事を云ってるのか」

川田は舌打ちし、千代の方を見て、ニヤリと口を歪める。

「かつての踊りの弟子に、みっともない姿を

見られるのは余程辛いようね」

千代は、何か魂胆ありげに夫人の傍へ近づいて、

「それじゃ、こうしましょう。二度目の浣腸の時に小夜子嬢にも出場させて、二人の面白いショーを予定していたんだけど——」

シスターボーイ二人と演ずる浣腸ショーを上手に演じて、客達をモリモリ悦ばせる事が出来たなら、小夜子をこのショーに出演させる事は見合わせる、と千代は楽しそうにいうのだった。勿論、それは千代が口から出まかせにその場しのぎを云ったに過ぎず、それは静子夫人にもわかっていて。しかし、それ以上、哀願をくり返したとて受けつける連中ではないのだ。

「俺がさっき、教えてやった方法さ。この二人のシスターボーイを自分の亭主だと思ひこむんだ。いいな」

川田につづいてそう浴びせられた静子夫人は、すっかり諦めたように小さくうなずくのである。そして、口を噤み、眼を閉ざし、冷やかな静かさを取戻した静子夫人の優雅な美しい容貌を、心地良げに見つめていた川田はもう一度、春太郎の方へ眼くばせを送る。

二人のシスターボーイの手が左右から夫人

の足にかかる。夫人は、自分の意志で奈落の底へ身を投げ出したよう力を抜くのだった。

ねっとりとした白い脂肪を溶かしたような妖しい官能味を湛えた夫人の太腿が左右に引かれてゆく。蠟細工のような美しい夫人の足首にたぐり寄せられた鎖の先端が、シスターボーイの手でキリキリと巻きつけられた。

「よし、吊り上げるぜ」

川田は、次第に血走った眼つきになり、部屋の壁に添って垂れている別の鎖を引っぱり出す。ガラガラとパイプに巻かれた鎖が金属音をたて始めて、夫人の足首を縛った二本の鎖は天井へ巻き上げられてゆくのだ。

「あっ、ああ——」

唇を噛みしめ、必死になって冷淡さを装っていた静子夫人であったが、極端なまでに二肢がキリキリ上へ引上げられていく自分を意識した時、思わず、絹を裂くような悲鳴を唇から洩らしたのである。

窓から射し込んで来る朝の光線を艶々とはね返すような乳白色の豊かな肉づきをもつ太腿。それがほとんど垂直に近く宙に向かってそそり立った所で、川田は引き絞った鎖を柱につなぎ止めるのである。

薄紙を震わせるような夫人のかぼそいす

り泣きを、むしろ心地よく聞きながら、春太郎と夏次郎は、再び左右から、夫人のそそり立った両腿に手をかけて、夫人の身体を一旦宙へ浮かせようとするのだ。

「ああ、そ、そんな。ひ、ひどいわっ」

川田が、夫人の双臀の下へ枕を差し入れると、夫人は上ずった声を出し、なよなよと甘ったるい身悶えを始めるのである。

「まあ、すさまじい恰好ね。一寸、まともに眼を向けられないわ」

千代は、着物の袂で口元を押さえながら、葉子達の肩をたたき、クスクス笑いこける。

高い枕の上にでんと据えられた双臀、そして、夫人の絶え入らんばかりの内心とはうらはらに、見た眼には何のためらいも羞しさもかなぐり捨てたように、堂々とばかりに映るポーズ。それは、もう逃げも隠れもならず、間もなく現われるであろう見物人を待っている見えるのだった。

「フフフ。これが、天下の美女と騒がれた遠山家の若奥様だって、どうしても信じられないわ」

千代は、そんな事を川田に向かっていい、「ね、お酒でも飲みましょ。う。そうでなきや、こっちが羞しくて、眼の持って行き場が

ないじゃないの」

と、今度は葉子達に話しかける。

「それもいいが、そろそろ岩崎親分達をここへ集めなきゃあな」

と、川田は、見物人達をかき集めるべく襖を開けて、廊下へ出て行くのだ。

「一寸、待ってよ」と、後から千代が追って来た。

「千原美沙江の誘拐計画はどうなったの」

「ああ、今朝早く、田代社長、森田親分、それに吉沢兄貴の三人が、彼女をお迎えするため車で出発したよ」

川田は、片頬を歪めてニタリと笑うのだった。

——二三日前から、この誘拐計画の主謀者である大塚順子は、買収した千原美沙江のお付きの女中、友子と直江に連絡をとっていたが、今朝、その女中二人から連絡があり、千原美沙江は昨夜から、後援者の一人である医学博士、折原源一郎の家に宿泊しているという事がわかったという。折原教授の夫人、折原珠江が千原流生花の熱心なファンだというのだ。当たってくだけるとばかり、今朝方、田代が折原医博の所へ電話をかけ、美沙江を呼び出して、静子夫人の居所がわかった事を告

げ、目下、悪性の病気で夫人は倒れ、地方の病院で静養中だと出鱈目を並べると、美沙江はおろおろした声で、今すぐ夫人のいる所へかけつけたい、といったそう。

「成程、そこを狙って、病院から来たのだまし、娘を車に乗せてここへ直行するってわけね」

と、千代が金齒をのぞかせて、ニーと笑うと川田もうなずいて、

「その通り、小夜子と文夫を誘拐した時の手口をそのまま使って勝負に出てみるってわけさ。うまくいきや、大塚女史よりたんまり礼金は出るし、家元の娘は煮て食おうが焼いて食おうが、こっちの自由って事になる」

へへへ、と川田は、鼻をこすって卑屈に笑うのである。

「ね、もうその事を、静子に聞かせてやろうか。あの大きなお尻を枕の上で振って、口惜し泣きするのを私は見てやりたいのよ」

「ま、ここまで隠して来たんだ。何もあわてる事はないさ。ずっと隠し続けて熱演させ、万座の中で排泄をすまさせてから、はっきりと真相を知らせてやる。その方が面白いと思うな。ハハハ」

それが悪魔的な笑いというのだろう。川田

は、千代にそう告げると、「じゃ、親分達を連れて来るぜ」と、スタスタ廊下を足早に歩き出した。

甘い拷問

大胆な、あられもない静子夫人の姿態。女として、これ以上に羞しいポーズはないだろう。そんな自分の姿態を岩崎を始め、津村、清次、五郎、三郎、そして、千代や川田達の好奇心な眼に曝しながら、夫人は、白い頬を充血させ、固く眼を閉ざして、この屈辱を必死に耐えているようだった。この汚辱と屈辱の一日が早く終ってほしい。静子夫人は、ただそれだけを一途に祈っている。

そんな夫人の周囲をぎっしりと埋め尽した男女は、用意された酒をゆっくりと飲みながら、眼前に開花している色鮮かなバラと、ミルク色に輝くような巨大な花の観賞に浸り切っている。

「よう、待っていました」

と、襖の開く音に、ふと首を上げた男達は一せいに拍手し始めた。

竹田と堀川が、後手にきびしく縛り上げた全裸の小夜子を引き立てて来たのである。

昨夜、チンピラ二人の飽く事を知らぬ長時間の調教に身も心も打ちひしがれてしまったのか、ぐったり首を前に垂れ下げている小夜子であったが、客人達の前へ引出すためのおめかしというわけだろう、絹のような感觸の柔らかい黒髪は綺麗にカールされ、ブルーのヘアバンドをしめさせられている。

大勢の男女の前へ引出された小夜子は、さすがに狼狽して、そのふっくらとした、線の柔らかい白い頬をさっと朱に染め、思わず顔を伏せようとしたが、ふと正面のめじめな曝しものになっているのが、静子夫人であるのに気がつく、あっと小さい声をあげるのだった。

静子夫人も、ふと小夜子に気づくと、忽ち狼狽の色を示し、いいようのない美しい羞^{はにか}みの色を顔面に浮かべて、さっと顔をよじってしまうのだった。

川田が舌なめずりするような顔つきで腰を上げ、堀川の手から小夜子の縄尻をとると、「一寸、おめえの先生に挨拶させてやるぜ。こっちへ来な」

小夜子の陶器のようにスベスベした背を押して立て、静子夫人の仰臥させられているマットの傍へ連れて行く。

川田に肩を突かれて夫人のそむけている顔の近くへ、フラフラと腰を落とした小夜子は「先生っ」

と、一声叫ぶと、夫人の麻縄にきびしく緊め上げられている豊かな乳房の上へ顔を押し当てて、わっと号泣するのだった。

「小、小夜子さん」

静子夫人も、横に眼を伏せたまま、紅唇を慄わせて小夜子の名を呼び、次にもう押さえがきかず慄哭が胸について溢れ出てしまったのだ。

「小夜子さん、笑わないでね。これから、静子は死ぬより辛い羞しめを受けるのよ。貴女にだけは、ああ、貴女にだけは見られたくなかったわ」

静子夫人は、激しく泣きじゃくりながら、肩を慄かせて小夜子に声をかけるのだ。

「小夜子も、舌を噛み切りたい程の羞しめを受けたのよ。でも、でも、小夜子、我慢したわ。先生はもっと辛い責めに耐えておられるんだと死にたくなる自分を叱りつけて——」

小夜子はそういうと、一きわ激しく夫人の胸の上で号泣する。滑らかな夫人の雪白の肌を伝わって小夜子の熱い涙がしたたり落ちるのだった。

「おいおい、こんな所で愁嘆場を演じてもらっちゃ困るな」

川田は苦笑して、小夜子の縄尻をグイッと引くのだ。夫人の胸許から顔を上げた小夜子は、川田にせかされるまま、一旦、立上りかけたが、突然、激しい声で

「先生、愛しているわっ」

と叫ぶや、衝動的に夫人の顔へ唇を押しつけていった。

「小、小夜子さん」

静子夫人は、濡れた美しい黒眼をはっきりと開いて小夜子を見る。

「どんな仕打ちを受けてもがまんして。ね、先生、負けちゃ嫌」

「わかったわ、決して負けない。小夜子のために」

静子夫人は、泣き濡れた頬を小夜子の頬にすり合わせ、薄く眼を閉ざして、小夜子に求められるまま、ぴったりと唇を小夜子の唇に合わせる。

「これじゃ、無理やり強制して、小夜子をおのショールに引きこむ事はねえようだったな。この分じゃあ苦勞せずとも二人で楽しみ合っで下さるぜ」

川田は、千代達の方を振り向いてニヤリと

する。

ようやく、夫人から唇を離れた小夜子は、上気した顔を伏せるようにして立上るのだった。

「一寸、待ちな。そんなにこの静子夫人が忘れられねえ人になったのなら、ここにだって接吻出来る筈だな。さ、一つ、今の調子で濃厚にやってみろ」

川田は、ニタリニタリと笑い、見物の者に片眼をつむってみせてから、意地悪くいい出したのであった。

ふと、それに気づいた夫人は、ハツとして「い、いけないわ。そ、そんな。お願い、川田さん」

と、再び、狼狽を示す。

「お前は黙ってろ」と川田は夫人を叱りつけ更に小夜子に、

「どうだ。お前が本当に静子を愛してるなら出来る筈だ」

「わかったわ」

小夜子は、いらいらと妖しく燃えるような瞳を挑みかかるように川田に向け、その場にゆっくりと膝を曲げて坐るのだ。

「許して、先生。もうこうなったら、小夜子がどんなに先生を愛してるか、この人達にも

はつきりと示しておきたいの。こんな事をする小夜子を、どうか許して」

そう云った小夜子は、緊縛された艶々しい裸身をねじ曲げるようにして、そっと唇を寄せてゆく。

「あっ、そ、そんな。駄目、駄目よ、小夜子さんっ」

夫人は上ずった声をはり上げて、高々と鎖で吊り上げられている二肢を揺さぶり、腰部や太腿をもじつかせるのだった。

これはとんだ余興がふえたとばかり、見物人達は身を乗り出すようにして、その異様な愛欲図を凝視し始めた。

乳色に煙った優美な夫人の裸身がみるみるうちバラ色に染まり出した。春太郎と夏次郎が面白がって、仰臥している夫人の左右に腰をかがめ、上下に縄を巻きつかせている豊満な二つの乳房を両手を使って淫靡に……し始めたのだ。

悲哀をこめた夫人の切れ切れの叫びは押し殺したような低いうめきに変わり、やがてこつを呑みこんだシスターボーイの巧みな乳房責めに煽り立てられ、さももどかしげに身をよじり出す。あきらかに夫人は錯乱の情に染まり出し、それは飽かず見つめている見物人

達もはっきりと感知する事が出来た。

「もっと熱烈にやるんだ。そうしねえと、おめえの愛しい静子夫人をこたえられねえ程の辛い目に合わすぜ」

川田は、羞恥の火照りを全身に溢らせ、半ば狂気じみたようになっていた小夜子に、鋭い声を投げかける。数々のいたぶりとおぞましい調教を日夜受けて、小夜子はまるで人間が作り変えられたようにそうしたすさまじい異常な行為を、悲しみを含んだ荒々しさで演じるのであった。

「まるで犬か猫みたい。これが村瀬商会のお嬢さんとはねえ」

千代は、含み笑いしながらゆっくりと盃を口に運んでいる津村義雄の方をチラと見て云うのである。村瀬小夜子を、とうとうこんな事まで満座の中で演じられる女に仕上げたという勝利感に、津村は一人酔い痺れているようだ。

「そろそろ、もっと頑張らにゃ駄目じゃねえかよ」

火のように熱い吐息と一緒にポロポロ涙を流している小夜子を、ニヤニヤして見つめていた竹田と堀川が、今度は乗り出して来た。「よ、俺達はおめえの調教師なんだぜ。云わ

れた通りにしろ」

岩崎親分達が見物している手前、少しは自分達の存在を示そうとするつもりなのか、如何にも頭の悪そうな二人のチンピラは小鼻をピクつかせて、小夜子の背中を指でつついて促すのであった。

小夜子は、そっと首を上げ、幾筋もの涙をしたたらせている象牙色の頬を朱に染めながら、しばらく横へそらせている夫人の顔に眼を注いでいたが、そっと眼を閉じ合わせ、やがて思い切ったよう顔をずらせていった。

「——あっ、駄目、駄目よ。やめてっ、小夜子さんっ」

夫人は、美しい顔をひきつらせ、戦慄したように高々と吊り上げられている優美な二肢を激しく震わせた。

ぎっしり周囲を埋め尽した見物人達は、小夜子の演じ出した行為に度肝を抜かれ、まるで夢でも見ているように呆然とした顔つきになってしまった。

「やめて。ああ、やめて、小夜子さん」

静子夫人は、全身を突き上げてくる嫌悪とも羞恥ともつかぬ狂おしい痺れにキリキリ歯を噛み鳴らし、艶やかなうなじを大きく見せてのたうつのだった。

「愛しているのよ、どうしようもないくらいに。ああ、許して、許して、先生」

小夜子はほざくようにそう云うと、唾液でしっとり濡れた唇をわなわなと慄わせるのだった。

シスターボーイ二人の巧妙な乳房責めは執拗に続けられ、静子夫人が優雅な涕泣と一緒に、おびただしい錯乱反応を示し始めた事を見てとった川田は、ようやく小夜子の脂汗を滲ませた肩を背後より抱きしめるようにし、「御苦労だったな。これだけおめえにサビスしてもらえば、奥さんも悦んで浣腸を受ける気になったと思うぜ」

川田は、真っ赤になった顔をねじ曲げるようにして黒髪を憐れらせている小夜子にそう云うと、竹田と堀川に眼くばせして、小夜子の縄尻を渡した。

川田や竹田達に強制されたとはいえ、半分は自分の体内に突発的にまき起こった悪魔的な官能の嵐で静子夫人を無残なばかりに傷つけてしまった底知れぬ恐ろしさと苦しさ、それを小夜子は狂おしく感じて激しく泣きじゃくっている。

「それじゃ、そろそろ始めようか、お夏」
夫人の乳房に熱い口吻をして首を挙げた春

太郎は、傍のタオルの上に並べられてある数々の責具の中からガラス製の太い浣腸器を取上げた。

「でもねえ。一寸、見てごらんよ、お春。これじゃいくらなんでも気の毒だと思わない。中途半端な気分のまま浣腸されるのって、さぞ辛いと思うんだけど」

夏次郎は、頬杖をつくようにして、片眼をつぶって春太郎の顔を見る。

「一度、すっきりした気分にならせてあげようか、奥様。これじゃ、頭に血がのぼってしまふでしょう」

夏次郎は、責められたためか、未だに切ない息をはずませ柔らかい優媚な頬を横に伏せている静子夫人の高貴な鼻を指でつつく。

静子夫人は、薄く眼を閉ざしたまま、むずかるように首を左右に振った。

「嫌っ。もう覚悟はしています。は、早く浣腸を——」

静子夫人は、そう小さく口に出していうと再び、深々と悲しげに眉をひそめた顔を横に伏せるのだった。

どうせ逃れられないのなら、彼等の望む醜惡な責めを早く受け、この屈辱の時間を少しでも縮めたい。今はただ、そればかりを願う

静子夫人であったが、

「それも酒の余興になるさ。すっきりさせてやんな」

千代の酌を受けて盃の酒を一息に飲み乾した川田が、面白そうに声をかけた。

「それ、ごらんなさい」

と夏次郎は小気味良さそうに笑って

「他では一寸味あう事の出来ないすばらしい方法で、奥様の気分を変えてあげるわ。ま、私達に任せておいて」

そう云うと、夏次郎は意味ありげに夫人の頬をつついて、大仰に肩をすくませるポーズをとって、ふざけるのだった。

「さっきとはまた違う方法で、ちょっといじめてあげるわ。そうするとね、自分でもおかしくなる位、早く効果があらわれてくるものなのよ。ねえ、お春」

そういいながら夏次郎は夫人の肌をさっとくすぐった。くすぐられた静子夫人は、激しい身悶えと一緒に頬をシートに擦りつけ、美しい曲線を持つ腰部をくねらせるのである。

「御見物の皆様に御参考までに申上げておきますが——」

と、急に春太郎が坐り直して、周囲の男女に向かつて一席、口上をのべ始めた。

「かなり色の道に精通しておられる方でも、女性の——に対する知識をあまりお持ちになつておられない方が多いようであります。しかし、女性のそれは——と同様と見なしてもよろしいもので、薄い粘膜一枚でセックスに結ばれているものであります。それに刺激を受ける事によって女性はいいような不快楽を味あう事が出来るものでして、その点が、女性の肉体が男性の肉体と異なる所でありましょう。私共が、男勝りの気性の激しい京子に真の悦びを教えましたのも、この——に対する訓練刺戟からであります。男性より女性の方に浣腸を悦ぶ者が多いというのも、今申し上げましたように——もまた重要なところからであります」

つまり、女性のデリケートさに対する講釈を、春太郎は調子に乗ってやり始めたわけだが、ニヤニヤしていた岩崎は、ほほう、と首を上げ、「こりゃ、ええ事を聞かせてもらた」と喜ぶのだった。

静子夫人が浣腸責めを極度に恐れるというのは、その強烈な羞恥感と当然そのあとについて起こる排泄行為という自分を醜惡化する屈辱感であると春太郎は周囲の見物人達が熱心に聞き耳をたてているのに気を良くしてし

やべりつづけ、

「私達も静子夫人の調教を任せられたからには長年の技術を大いに生かして、夫人が浣腸を悦びとして受取る事の出来る女に飼育したいと思っております。いや、排泄行為にすら悦びを感じ取れるような女に仕上げるつもりでございます」

見物人達の間から笑いと拍手が同時に起こった。

雪白の滑らかで優美な二肢を高く吊られ、むっちりとした肉の乗った量感のある双臀をでんと枕の上に据えつけられてしまっている静子

☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

夫人は、優雅な横顔をマットのシートにすり

つけながら、シクシクとすすり上げている。

今の春太郎のスピーチは夫人の心に嫌悪に満ちた忌まわしさを与えると同時に何か自分の肉体に麻酔をふりかけられたような、しびれた感じが並列的に起こり始めたのである。

妖しい白昼夢でも見ているようにぼんやり見開いた濡れた夫人の瞳には、ふと情感的なものが滲み出している。

「じゃ、これから、実験しておめにかけますわ。どのようにして、夫人を可愛がってやればいいかを。さ、皆さん、もっと近くにお寄

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対してはとも応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

りになって」

春太郎が声をかけると、見物人達は何か照れたような微笑を浮かべながら、ぞろぞろと前へ進み出して来た。

静子夫人は、濡れた瞳を物悲しげにしばたたきながら、耳もとに口を寄せて何かさやきかける川田に、人形のように幾度もうなずいて見せている。

「さっき云ったようにお客に愛嬌をふりまくんだ。何時までもメソメソしてると、へへへわかってるだろうな。千原美沙江の事をよく考えるんだ」

川田がようやく体を引くと、夫人は、しばらく、何か心に念じるように薄く眼を閉ざして、どうにもならない屈辱のポーズを見物人達の食るような視線に任せていたが、やがてうっすらと瞼を開くと、黒眼勝ちのキラキラした美しい瞳を溶けるように潤ませて、ぎっしりと取囲んだ見物人達を見廻し、次に、吊り上げられている両太腿に手をからませ、何かひそひそと相談し合っている春太郎と夏次郎に向かい、カスれた声を出した。

「ね、あなた、お客様がお待ち兼ねですわ。早く実験を——」

「フフフ。じゃ、始めましょうね」

ニヤニヤする見物人の中に小夜子が堀川と竹田にがっしり肩をつかまれて混っている。

「よ、小夜子。顔をそむけず、よく見ているんだぜ。おめえの恋人がどんな実験をされるのかをな」

いわれて尚更に、必死に夫人から眼をそらせようとしている小夜子の耳を、堀川は邪慳にひっぱるのだ。

ふと、それを眼にした静子夫人は、もはや悲しみの色は見せず、何もそこには見えなかったように、無表情さを装ってもとに眼を戻すのだ。

——小夜子さん、こんな見世物を演じなければならぬ静子を笑わないで。お願い——
夫人は、泣き濡れた心の中でそう叫ぶと、火の塊のようなものをぐっと呑みこみ、心を決したように、ミルクを溶かしたような白い内腿から、ゆるやかな曲線を描く双臀に至るまでを手のひらでさすり始めた春太郎と夏次郎の陰湿な呼吸に合わせるように悲しい身悶えをくり返し出した。

「ね、今日は、静子にうんと羞しい思いをさせて頂戴。どんな事をなさっても、かまわないわ」

川田に強要された客を悦ばせる一種の技巧

を、夫人は死ぬ気になって発揮しようとするのだったが、その煽られて悶える身動きや、すすり泣きはもうテクニクではなく、二人のシスターボーイに揺さぶられるまま身内からふき上げて来たものであった。

やがて、春太郎と夏次郎は最初からの狙いに、そっと的をしぼってゆく。

「じっくり構えるのよ、奥様。最高の感激を味わうつもりになって頂戴」

春太郎のささやきも、見物者を意識しての演出かも知れない。

二人の攻撃が進むにしたがい、静子夫人は身をのけ反らし、大きく鎖で引き上げられている優美な二肢を思わず反射的に閉じ合わせるうとする。だが、それは男達の笑いをかうだけで、無駄なあがきに過ぎず、夫人のムッチリ緊まった太腿の筋肉が耐苦にブルブルと痙攣し始めるのだ。

変わった方法で責めるという意味がそれではっきりわかった静子夫人は、熱い戦慄に身悶えしながら、上の空になって、

「ねえっ。静子、大声で泣いてもいいっ」

と、うめくように云うのだ。

「ああ、いいわよ。その方がお客方も大喜びだわ。フッフ、でもね、奥様。これ位で泣く

のは、まだ早いわよ」

夏次郎は、ポケットから小型のバイブレーターを取り出すと息を殺して見つめている周囲の男女に得意げに見せるのだった。

「これをどう使ってやるかわかり、皆様。そら、こういう風に、皆さんがお考えにならない地点」

一旦、攻撃を中止したシスターボーイは、その奇妙な武器を皆にみせびらかしてから、中間にぴたりと当てがってスイッチを押した。微妙な電動音と共に夫人の高々と支えられた双臀が微動し始める。

「あっ、嫌っ。ねえっ、お願い」

夫人は額にねっとり脂汗を浮かべ、キリキリ歯を噛み鳴らし、狂ったように首を振るのだった。

二人のシスターボーイは笠にかかって、見物人達をうならせるため、秘術を尽して静子夫人を責めさいなむのだ。

バイブレーターで夫人をキリキリ舞いさせたあと、次は大小二つの責め具が再び、夫人の肉をえぐり始める。

見物人達が眼を見はったのは、小さな……の方、夏次郎の巧みな責め方に先程の春太郎の講釈を裏付け始めた事であった。

激しい涕泣を口から発して、夫人は、麻縄を巻きつかせた上半身をのたうち廻わせている。

「ねえっ、もう、もう許して！」

春太郎の方が、得意げに責めぶりを見物人達に示し出すと、魂も消え入るようなうめきを夫人は発して、断末魔の近づいた事を上ずったハスキーな声で、はっきりと告知するのだった。

「まだ駄目よ、奥様。もっとじっくり構えてくれなきゃ」

「だって、だって。ねえ、いいでしょ。いいと云ってっ」

「駄目々々、お客様方は、もっと奥様のその

美しい顔をごらんになりたいのよ。我慢しなきゃ駄目」

春太郎と夏次郎は、そう云って微妙な笑いを口元に浮かべると、次のいたぶりに切りかえるため、合図して二つの責具を引いた。

責めを中断されてホッとした筈の静子夫人は、黒髪をゆさぶりながら、さも口惜しげに上気した顔を横に伏せ、奥歯をカチカチ噛み合わせながら、絹糸のようなすすり泣きを始めるのだ。

「まあ。バラに負けずに見事に咲いたわね。ホホホ」

千代がおかしくてたまらぬといった風にわざとらしく身をよじって笑い出したが、もう

全身痺れ切った静子夫人の耳にはそれは雑音に等しかった。

一服煙草をすった春太郎は、

「さて、奥様。これからお望み通り、今度は別の方法でうんと羞しい目に合わせてあげるわ」

と、ほのかに小百合の芳香を匂わせて、大きく息づいている胸元に楽しそうに眼を近づけて云うのである。

「ああ、あの責めをする気なのね、お春。フフそりゃ愉快だわ。お客様もきっと大喜びするわよ」

夏次郎は舌なめずりでもするような顔になっている。

「ね、一体、これ以上、何をなさろうというの」

身も心もすでにくたくたにされてしまった静子夫人は、ねっとり恨みを含ませた瞳にふと、初々しい羞しさを滲ませて、春太郎の方を見るのだった。

「だから、さっきから云ってるでしょう。とても、とても羞しい事——フフフ、さあ我慢出来るかしら」

春太郎はそう云って、上気した美しい夫人の頬に甘い接吻を注いだ。

〔伝言板〕

○分譲品録目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚 フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛願います。○御送金は、現金書留、小為替、定額小為替、切手代用、振替にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切にて在庫がありません。○旧号に広告してありましたが最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社へ願います。

— 体験小説 —



続・お灸いじめ

玉田 静江

あれから半月ばかり経ちました。

あの日以来、賢ちゃんは店へ来てくれなくなつたのです。真赤な顔をして熱さをこらえていた可愛い顔。あの若々しい輝くような肌についた灸点。肩を押えた時のしなやかな感触。それらを想い出すと、私の胸の高鳴りが痛い程感じられるのですが、待てど暮せど、現われてくれません。私はジリジリする気持ち、最初から一度に、あんなにたくさん据えて貰ったことに後悔のような気掛りで、あれ

やこれやと氣を廻して、しまいにはあんな高価なスキー用品をあげたのよ、一度ぐらい顔を見せてもいいのに……と腹立ちさえ覚えてくるのでした。

賢ちゃんと一緒に時々来たことのあるお友達は、二、三度ガールフレンドをつれて来たのですが、何か、胸の内を知られるように思えて、賢ちゃんのことを訊くのがためらわれて、ついわざと平気な顔をしてしまうのですが、内心はイライラしていました。

今日も来なかった……と思うと、余計に、生まれてはじめてのお灸の熱さに、スナナリと伸びた賢ちゃんの体がもだえ抜いたさまが臉に浮かび、体中がカッカとして来て、ひとり、てれくさい想いをするのでした。

その賢ちゃんが、まだお店の準備をしている時間に、ひょっこりと顔を見せたのは、あれから二十日以上も経っていました。

「どうしたのッ。待ってたのに少しも顔をのぞかせないじゃないの！」

私は、嬉しかったのに、とたんと言ってしまったトゲトゲしい口調にハッとしました。しかし、賢ちゃんは平気な顔です。

「待ってくれてたの？ ぼくは、まだ早いだろうと思って我慢してたんだよ」

「我慢？」

「そうだよ、明日から行こうって誘われているんだけど……」

「誘われてる？ だれに……」

「友達だよ」

「どこへ？」

「蔵王だよ。あいつらは先週も行ったんだ。ぼくは行けなかったけど、今度はじっとしてられないんだ」

「行きゃあいいじゃないの」

「行きたいよ。だから……どうだろうかと思
って、今日来たんだけどな」

「蔵王ってスキーでしょ。私にも行けっ
ていの？」

「ちがわい。わかってねえんだナ。……あの
ね、……スキー買ってくれただろ」

「ああ、あれね。いよいよ役に立つのネ」

「うん。だけど、あの時、言っただろう、
後はまた今度って……さ」

「ハッキリいったらどうなの。じれったい」

「ク、クツ。靴が要るんだよ」

賢ちゃんは、あの時に買い残してしまっ
たスキー靴をねだりに来たのでした。私の一番
気にしているお灸のことなど、ぜんぜん言
い出そうともしません。私は内心、じだん
だを踏む思いでした。胸の内がカッカとし
ています。気をしずめるためにカンターに
入り、洋酒の置場を、必要でもないのに置
き替え始めたのでした。

「ねえ、マダム。……だめかなあ」

賢ちゃんの気がねそうな声が、私の耳を
気持よくクスグります。

「買ってあげるわよ、約束なんだから」

「ホ、ホント」

「だけどね賢ちゃん。雪の中は冷えるわよ。」

胃の方は大丈夫なの？」

「ハイキだよ。この前のお灸で一ペンに
治っちゃった。よく利いたよ、熱かった
けど」

私の胸がドキンとしました。

「買っていらっしやい。但し、買った
ら、私のマンションで待ってて。電話く
れたらすぐ帰るようにするから。いいわ
ね、ハイ、お金と鍵」

賢ちゃんは、眼をパチクリしてしま
したが私の渡したお金を、鍵と一緒にポ
ケットに入れると嬉しそうにとび出
して行きました。

○

「女一人の部屋って、色っぽいね」

賢ちゃんは、私の顔を見るなり生意
気なことをいいます。

「あんたのガールフレンドの部屋は
どうなのさ。あるんでしょ、行ったこ
と」

賢ちゃんはニヤリとしました。私は
ムラムラと急に妬ましい気持ちが起こ
ります。

「あの、これ、これを買ったんだ
けど」

と差し出すスキー靴に視線を向け
ましたけれど、私には見えていません。
お灸にもだえる賢ちゃんの姿を
みたい。私の手で据えてあげ
たいと思っていただけでした。何
もあわてるつもりはないのですが、
じっとしていら

ない胸の高鳴りが、急に湧き上
ってどうしようもないのでした。

「ハダカになって……」

という口調が、どんなであ
ったか覚えていませんが、びく
りした顔付きの賢ちゃんの表
情は思い出すことが出来ます。

「スキー場は雪があるんでしょ。雪
のあるところなんか駄目よ。冷
えこんだら、また胃が痛むかも
よ。いいえきつと痛むわ。だから、
もう一度据えて置くのよ。灸
点はあるから、私がしてもいい
の。予防のお灸よ。でないと
その靴はあげない」

私の言うことはムチャクチャ
ですが、そうでも言わないと、お灸
の口実がないのです。

「そ、そんな……」

賢ちゃんは、口をとがらせ
ましたが、構わずに私が、買
って置いた、もぐさや線香を取
り出してやると、しぶしぶセ
ーターを脱ぎ始めました。

私は座布団を三ツ並べ、傍に
ストーブを持って行き、ドキ
ドキするのを強いて平気な顔
を装っていましたが、ズボン
は穿いたまま上半身はハダカ
になって、オズオズ腹ばいにな
った賢ちゃんを見ると、カー
ッと頬が火照る感じでした。

「余り、大きいのはイヤだよ」

「まかしときなさい」

私はそういつて、わざと手荒く肩を押えつけました。しなやかな、そのクセどこか力強い感触が、ジーンと、掌から頭のしんまで突き抜けます。

「可愛いお灸のあとじゃない」

片手の指先で、残っている灸あとを軽く押してみしました。背骨の両側に行儀よく並んだお灸のあとは、既にとれたのでしょうかカサブタもなく、やや薄赤い色を残しているだけでした。

「この間、風呂で友達に会ってね、いろいろ聞かれて恥ずかしかったよ」

「そう。でも恥ずかしがることはないわ」

私は、その灸あとを眺めながら、お風呂で質問されている賢ちゃんの姿を想像して、ゾクゾクしました。

「さ、据えるわよ。いいこと」

私は、もぐさをひねり、灸点にのせましたが、灸院で見ていたようにはうまくひつつきません。少し大きいからかなと思ひながらもソツと置いてみたり、押しつけてみたりしてどうにか火をつけました。

観念したのか賢ちゃんは、もう文句もいわ

ずにじっとしていましたが、もぐさが次々と燃えつき始めると、俄然、その伸びやかな背中が波を打ち始めました。

「あ、あつい。熱いよう……ムム……」

呻きと一緒に、大きく反り返ります。

「やめて、やめてくれよう」

「なに言ってるのよ！ これぐらいがなんです。あんたも男でしょッ！」

私は知らず知らずのうちに叱りつける口調になっていました。今、逃げられては、折角のチャンスが台無しになってしまふという気が強かったのでしょうか、両手をつっぱって上体を起こそうとする賢ちゃんを、線香をオッポリ出して押えつけるのに一生懸命になってしまいました。

「まだやるの？ まるでこれじゃ拷問だ」

ようやく背中中の十二灸点が済んで、「今度はお尻ね」と私が言ったときに、賢ちゃんが情けなそうな顔をしました。

「拷問」と聞いた時、私はビクツとなるほどのたかぶりを覚えました。

「なにが拷問なのよ。拷問というのはね、手も足も縛って責めることなのよ」

私はウロタエ気味にそういいました。

「だって、押えつけてるじゃない。縛ってる

のと余り変わらないよ」

賢ちゃんは負けていません。

「いったわね。じゃ、拷問」にしてあげる」

私は、サツと立っていつて、押入れから腰ヒモを掴み出しました。

「変わりが無いなら縛っても同じでしょ」

その見幕が激しかったのか、賢ちゃんはびっくりした顔をしましたが、そのおかげかどうか、私が、腰の後へ賢ちゃんの両手を組み合わせて腰紐で括ってしまったても抵抗する様子もありません。調子にのって、両足首も、ズボンの上から括り合わせてやりました。

ベルトをゆるめて、お尻の灸あとを出してから、賢ちゃんの顔をみますと、横顔を畳につけたままで、眼を閉じています。むしろぶりつきたい気持を押えて、お尻の灸点にモグサを載せました。

「いいこと、拷問の開始よ」

私はわざと言いつてやりましたが、自分でもその声がウワズツているのがわかりました。

煙が次々と四条立ち始めます。

形のいいお尻がピクリとし始めます。

「ウーン、あ、つ、い」

という呻きと同時に、縛り合わされた両手の指が、閉じたり開いたりし始め、背中が大

きくウネリ出すのでした。

私は何もかも忘れていました。ただもう、その賢ちゃんの、お灸の熱さにもだえ、必死に耐えている姿に魅せられて、突き上げるような感情のたかぶりに、ゾクゾクする気持のまま、慄える手で、次々とモグサを据え火を点けている、としかいえない状態でした。

「も、もう、止めてよう」

賢ちゃんは、呻きながら哀願します。

「もうチョット、辛抱するのッ！」

私は叱責口調でいって、あお向けにしようとして、賢ちゃんの胸の所に手を差し入れて力を入れましたが、とても重く手に負えません。すると賢ちゃんは、不自由な動作で、ひっくり返ろうとしました。

何回かあお向けになりましたが、

「痛い！」

と顔をしかめます。後手の手がどうにかなったのでしょうか。私は大急ぎで、ずれた座布団を敷いて上げました。

「やはり、全部やらなきゃ駄目？」

賢ちゃんのうらめしそうな眼が、私を見あげます。その片頬に畳の目の跡がついていました。私は思わず、その頬に唇を寄せましたが、賢ちゃんは、真赤になって首を振りまし

た。

そのハズミで、両方の唇がふれ、頬がスリ合ってしまった。私は、その時にはキスするつもりはなかったのですが、そうってしまったのです。接吻したい気持はないことはなかったのですが……。

考えていたよりずっと初々しいはにかみかたをした賢ちゃんは、閉じた眼を開こうとせず、胸やお腹が大きく波打っています。

私の体中にも、電流のようなショックが走り抜けました。そして、それと同時に、もっともっと、いじめてやりたい衝動が突き上がってきました。

胃の上にも、お腹の上にも、行儀よく並んだ灸あとが、波うちながら私のモグサを待っています。私は、思いきって大きなモグサの粒をこしらえました。

グーッと体を弓なりにして、呻きを噛みこるすように歯をくいしばり、赤くなったひたいに汗を浮かべて堪える賢ちゃん。

「ママ。ひ、ひどいよ」

ようやくモグサが燃えつきて、ホッと肩の力を抜いた賢ちゃんが、ポツリといって眼を見開きましたが、その眼尻には涙が溜っていました。私はむしろようにいとおしくなっていました。

その胸の上に抱きついてしまったのでした。

衝動的でしたが、唇が欲しい気持が、今度はハッキリと私をそうさせたのでした。そして賢ちゃんも、さっきのように避けはしませんでした。ツーツと流れ出した眼尻の涙を私はすべらせた唇で、吸いとってあげたのでした。

○

賢ちゃんは、はにかみ通しで、何度も礼を言ってスキー靴を抱えて帰りました。お小遣いだと言って差し出したお金はどうしても受取らず、「また、胃が痛くなったらくるから据えてよな」と言い残して行ったのでした。

私は独りになると急に疲れを覚えてベッドに入りましたが、眼を閉じると、賢ちゃんのもだえる姿が余計に浮かび上がってきて体中がカッカと燃えるようでもななりません。唇に頬に掌に乳房に、賢ちゃんのしなやかで芯の固い肌の感触がありありとよみがえってくるのでした。

——終——

(これは私の体験記ですが、前回の分はさほども空想は混っていませんが、この分には少しオーバーに書いたところが混っています。体験を元にした創作として、よろしく願います)



懸賞創作入選作品

彫 征 口 伝

いれずみ地獄

小 谷 和 勝

私が、禄高一万石の大名、石河伊勢守正容様にお目通り致しましたのは、忘れも致しません天保八年の春、王子、名主の滝に満開の桜がハラハラと、その花びらを煌めかせる頃でございました。

勿論、お目通り申上げたと申ししましても、しがない彫物師風情の私に、お大名直々お言葉をかけて頂くわけではございません。ただ遠くの方から、そのお姿をソツと、かいま見たというだけの事でございます。

「ああ、あのお方が、文身大名と江戸で評判

の伊勢守正容様か」

山岡頭巾にお顔をお隠しになられた俣の、そのお姿は定かではございませなんだが、肩巾の広い、がっちりとしたご体格が、さすがと思わさせられました。

この日、王子、名主の滝では恒例の『江戸文身競艶会』が盛大に催されておりまして。全身にほりものを彫ったいなせな男女、およそ四十人余りが、男は禪、女は腰のもの一枚になりまして、文身の美しさ、奇抜さを競いあうものでございまして、文身の好きな江戸

っ子は勿論のこと、伊勢守正容様のような身分の高いお方まで、この催しものを楽しんでおいでになってでございました。

轟々と飛沫をあげる滝を背に、にわか仕立の舞台の上では、一人ずつの何れ劣らぬ文身自慢の男女が、その華美な綿絵図巻を、審査員や大勢の見物衆の方々の前に披露している様は、一種の異様な光景でありました。

両腕の柔肌に真紅の牡丹の花を散らし、背には青黒い鱗を不無気に煌めかせてのたうち回る竜を彫った女人。

姐妃のお百の妖艶なあで姿を背に配し、右肩あたりに、おどろおどろと人魂のうかぶ薄気味の悪い図柄を彫った男。

背に妖術の印を結び、キッと空を睨む滝夜叉姫、腕には鬻體をまいた蛇を彫った女。

背には魯智深を、右腕に張順、左腕に公孫勝、胸に文寛と、水滸伝づくしのいきな男。

桜吹雪の下に、どっかとあぐらをかき、見えをきる弁天小僧を背に、両腕には各々、昇り竜、降り竜を彫った年増女。

次から次へと、いきな千両の彫物姿の、魔可不思議な美しさを見物衆の前に晒し続けた。それでも中には、奇抜な趣向の文身もごさいます。

例えば、大きな熊蜂が、男の急所をプツリと針で刺した図。

背中に手長猿を彫り、その猿の手が肩から胸部、そして腹部に回り、さらに下って何かをつかまんとしている図柄の女人。

雷神が、肩の処におぶさったように彫られており、この雷神の首は前から見え、その手は女の乳房のあたりまでのび、その手からは鎖が垂れ下り、鎖の先の錨が隠しどころを引かけようとしている図柄を彫った女。

肩から背にかけて蜘蛛の巣を彫り、紅葉し

た楓の葉が二枚その巣にかかっている。その巣から一本の糸がスーッと下っていて、右足の踝の処で止まり、そこに一匹の蜘蛛がいる図柄の男。

等々、先に見ました見事な図柄の文身に比べてみますと、これらの彫物は何かしら下品で、邪道的な臭いもいたします。

でも、それはそれ、これはこれで、見物衆の眼は結構楽しそうでした。

正統派の文身の、その整った図柄、艶かな色あいと優美さに対して、この奇抜な趣好を狙った文身は、ある意味では意気な江戸っ子の気でも引いたのでしょうか、大変な歓声を浴びておりました。

もともと、文身の習慣というものは、私どもの遠い祖先が「何とかして、自分たちの身体を、もっと美しく飾りたい」という素朴な願望から生まれたものであると聞きおよんでおります。

その昔、太田道灌様が江戸城普請の折、土中から発掘されました土偶の顔には、鼻から目のあたりにかけて、相当広い面積に、渦巻や線条の紋様が描かれあったそうでございます。この事が、遠い昔にも、文身の習慣があった何よりの証でございしますが、それもつか

の間で、私共の祖先が、互いに血で血を洗う戦さに明け暮れた時代には、その習慣も途絶えてしまったという事でございます。

それから数百年を過ぎて徳川様のご天下となり、戦さもなくなった今、再び新しい型の文身が、伊達者たちの肌を飾るようになったのでございます。

それは「いれぼくろ」と呼ばれ、寛永の頃（一六二四―四四）大阪、京都の色街の間で栄えましたそうにございます。

さて、その「いれぼくろ」でございますが好きあった男と女が手を取りあって、親指をやや上の方にあげ、その親指の爪先が達する位置にはくろを彫りあうやりかたでございまして、丁度、人差指と親指のつけ根が手首のあたりで交っているところへ、一個のほくろをお互いに彫りきざむのでございます。

そして、そのほくろを見ては相手の事を偲び、永久に忘れまい、離れまいと誓いあったということでございます。

勿論、それも男と女の間約束事の為ばかりに彫られたわけではございませんで、この外に神仏とか自己の心に対する約束事のために彫る者もございました。

その「いれぼくろ」も、元禄（一六八八―

一七〇四)の頃には腕から肩、そして背へと
 拡ってまいて、遊女のなかにも肩や腰
 に、惚れた男の名などを彫るものもございま
 した。しかし、まだまだ腕に相手の名を彫る
 位が一般の『いれぼくろ』でございました。

大阪、京都の遊女たちの間に流行った『い
 れぼくろ』は、ほどなく江戸の遊里にも伝え
 られまして、文化、文政(一八〇四—一八三
 〇)の頃には、この『いれぼくろ』の句を扱
 った川柳が数多く作られまして、これを遊女
 たちが商売の常套手段にしていた事がしのば
 れ、女たちの心の内を覗き知る事ができ、面
 白いものでございます。

縫物は出来ぬが 意気な針仕事
 袖をまき 雪の肌にみすや針
 真青な嘘を 傾城針でつき

彫物も 遊女の作は金になり

『いれぼくろ』の習慣が、どのような階層に
 多く、如何なる個所に彫られていて、どのよ
 うな文句が多いかと申しますと、一番に多い
 のは遊女で、次が芸者であり、稀には、生娘
 の腕にも彫られていることがあったと聞いて
 おります。

男の方では何といっても、浮気男に多く、
 若衆や僧にもあったという事でございます。

彫った個所は、手とか肩先に近いあたりへ
 などもございましたが、主に、二の腕が多く
 ございました。それも、外側よりやや内側、
 肉の柔らかい処に彫る場合が多いとか。

文句はと申しますと「七さま命」「助さま
 命」「お園命」などの型が最も多くございま
 して、次に多いのが「左吉妻」などござい
 ました。

また、この『いれぼくろ』とは全く系統を
 異にした文身に、刑罰の「入墨」がございま
 した。この刑罰の入墨の起りも相当古く、
 文献ではすでに「日本書紀」の中にその端を
 発しております。

その頃の入墨は目のあたりに墨を刺したら
 しいとのこと、その後、大化の御改新の折
 公刑としての入墨刑はなくなりました。

但し、享保五年(一七二〇)に徳川吉宗公
 御制定により、入墨刑は再び刑罰の一種とし
 て復活いたし、寛保二年(一七四二)に御制
 定になりました『御定書百ヶ条』に依り、江
 戸の刑罰体勢の中に入墨刑は決定的な役割り
 を果たすことになりました。

刑罰の種類は大きく分けまして、次の六項
 目に分類する事ができます。

(1)生命刑(鋸挽、磔、獄門、火罪、死罪、

下手人、斬罪、切腹)

(2)身体刑(剃髪、敲、入墨)

(3)自由刑(遠島、追放、閉門、逼塞、遠慮

戸締、押込、預、手鎖、追院、

退院、晒)

(4)財産刑(欠所、過料)

(5)身分刑(奴、非人手下、一宗構、一派構)

(6)栄誉刑(役儀取上、叱)

この中で、斬罪、切腹、閉門、逼塞、遠慮
 追院、退院、一宗構、一派構、それに栄誉刑
 は、何れも武士、僧侶、そして尼僧に科せら
 れる刑罰でございます。

刑罰の中で、最も重い刑は何と申ししまし
 て、生命刑でございますが、それも罪状によ
 りまして、先に述べました鋸挽が極罪で、主
 殺し。磔が古主殺し、親殺し、師匠殺し、主
 人傷害。獄門、これは斬首した首を獄門台に
 晒す事でございまして、追はぎ、密通、毒薬
 売、関所破り。火罪は放火。死罪及び下手人
 と申しますのは何れも斬首でございまして、
 死罪が利慾に関わりのある殺人、下手人は利
 慾には関わりはないが、喧嘩、口論などによ
 る殺人に科せられます。

さて、入墨の刑でございますが、これは一
 度敲の罪に科せられた上で、再び軽い盗みな

どを行なった罪人に科せられるものでございます。これは、牢屋敷で、腕まわり幅三分ずつ二筋に入墨を彫り、その跡が癒えてから出牢させられます。

幕府の遠国奉行の入墨は、みんな腕まわりに彫りますが、他の外様藩では額に彫るのも多く、入墨のある個所、その形によって、どこの藩、奉行で入墨をされたか判るのでございます。

女人につきましては入墨の刑を行なう事はありませんでしたが、例外もございまして、寛政元年（一七八九）風呂屋で、他人の衣類を盗んだ、つたと申す女が入墨刑に処せられたと申します。

余談になりますが、戦国時代の刑罰は「御定書」に比べてみますと、もっと残酷であったと聞いております。

御参考までに、戦国時代に於ける刑罰の種類を申し述べますと、磔、逆磔、串刺、鋸挽これは罪人を土の中に生埋めにしまして、頭首を地の上に出し、その首を竹鋸で挽き殺すものでございます。それに牛裂、罪人の両足を二頭の牛に結び、牛の角の間に松明（たいまつ）を入れ牛をおどして左右に走らせ、罪人の股を引裂くという残酷な刑でございます。次の車裂き

の刑も、二輻の車に罪人の片足ずつを結びつけ、車を両方に引かせて罪人の股を裂く。それに火あぶり、釜ゆで、肉刑、この肉刑と申しますのは、指を切ったり、手を切ったり、鼻をそいだり、耳をそいだりする刑でございました。

如様に述べてまいりますと、その酷い刑罰のやり方に背筋の凍る思いが致します。ついつい話が横にそれて申訳けございません。

ともあれ、この刑罰の入墨が、市井の人々に与えた影響は大きく、これによりまして、入墨者つまり犯罪者を恐れる慣習が、文身を敬遠する風潮に変化してまいりました。

但し「いれぼくろ」と「刑罰の入墨」とは全然その性格を異にするものでございます。その意味で、大阪、京都で「いれぼくろ」と呼んでいたものを、江戸では「ほりもの」と呼ぶようになり「刑罰の入墨」と判然とした区別をつけたようでございます。

さて、文身に絢爛豪華な絵柄が増えてまいりましたのは、宝暦（一七五一）以降でございまして、その以前は絵柄と申しまして、紋を彫るとか、色女の生首を彫るとか、ごく小さなもので、たまに広い面積に彫るに致しまして、統一のない粗雑な図柄にすぎませ

なんだ。

話をもとに戻しまして、文身を広い部分に大規模な纏りのある図柄で彫るようになりしたのは、宋の国から伝えられてまいりました「水滸伝」と申す絵草紙の影響でございす。その影響は、ただ単に水滸伝中の登場人物が文身をしていたからというだけではございませんで、その水滸伝に描かれています豪傑に対する江戸っ子のあこがれと、こうありたいという、無邪気な願望が肌を飾る文身になったのでございましょう。

◇ ◇ ◇

さて「江戸文身競艶会」も盛況のうちに幕となりまして、見物衆はお互いに、文身の妖艶さと美しさに酔いしれながら、各々の家路を辿りましたが、私ども彫物師はその後、別の座敷に一席を設けまして、御開きの宴をはることにしております。

その頃のお江戸では、唐草の権太、ちゃり文、達磨金、彫つん、彫政などの名人と呼ばれる彫物師の親方衆が、睨みを利かせていらつしましたから、私のような新参者は、末席で小さくなって親方衆の自慢話を聞いておりました。

その席には、石河伊勢守正容様も御同席な

されておいででございました。御大名が、このような集まりに御同席なさる事は、前例のない事だけに、親方衆の感激もひとしおだったのを憶えております。

先にも申しましたように、私のような新参者が、口を開ける場所ではございませんだけに、ただ、ただ、畏っている内に時は過ぎ、気がついてみると、いつの間にか伊勢守正容様の御姿はなく、その代り酔いの回った親方衆の唄や踊りが、賑やかでございましたが、突然、思いもかけず達磨金親方に呼ばれ、私は慌てて姿勢を正しました。

達磨金親方のボカシは、江戸一番という評判で、今日の競艶会にも、親方の文身を背負った男衆が三人ばかり舞台の上で、千両姿を見せたのでございますが、そのボカシの色あい、濃淡、何とも云えぬ仕上りに、ただただ呆然と見とれていたものでございます。

「彫征。伊勢守様が、お前に会いたいとよ」
私は親方が酒気のせいで、冗談を云っているのだと思い、困ってしまいました。

「親方、冗談でございましょう」

私の苦笑に、親方はキッと私を睨むのでございます。

「彫征、冗談じゃあねえんだ。伊勢守様は、

お前のほりものが大層お気に入りにすって、明朝、四つどき（午前九時）迄に、伊勢守様の下屋敷まで来るようにって、ついさっき、御用人の梅木紋太夫様から、お言伝があったんだ。お前にも運が向いてきたようだな。まあ、そそのねえようにしっかりやんな」
達磨金親方は、しっかりやんなと私の肩を叩きながら再び、賑やかな渦の中に戻って行ってしまったのです。

私は夢でも見ているのではないかと、思わず自分の頬をつねってみました。

徐々に、私の体内から熱いものがこみあげてきて、何か「ワッ」と一思いに叫びたい衝動にかりたてられるようでございました。私の文身が認められた。しかも御大名に……

だが、思えば、私の彫った文身が伊勢守正容様のお目に止まった事が、今からお話する悲惨な物語の幕明けでございました。

その文身と申しますのは、今日の競艶会にただ一つの私の作品として出させて戴いたものでございました。

その文身の主は、労咳病みの男でした。

「俺の命もそう長くはねえ。最後の死に花を名主の滝の晴れ舞台で飾って死にてえ。お願

えだから、アッと江戸っ子の度肝を抜くようなほりものを彫ってくんねえ」

と、その男に頼まれた時、私の脳裡には、一つの案が浮かびました。

「白粉彫り」それは普通の人には、とてもお勧め出来ないものでございます。と申しますのは、白粉彫りは文字通り、白粉を溶かして肌に刺しこむのでございます。白粉のなかの鉛が、人体を害することは云うまでもございません。しかし、白粉彫りの面白さは普通の文身では、味わう事のできないものがあるのでございます。

白粉彫りは彫った跡には何も残りません。ただ普通の肌のままでございます。ところが風呂に入ったり、酒気を帯びたり致しましてその肌が暖まりますと、そこにはほんのりと白い絵模様が浮かび出るのでございます。

私は、この白粉彫りを労咳病みの男に彫ってみる事に決めました。酷いようですがどうせ、この男の命はそう長くはない。私は心を鬼にして、私の夢をこの男の肌に託して彫り上げたものでございました。

「なーんだ。ただの滝ばかりの文身じゃねえかよ」

あの時、見物衆の中から、期待外れの弥次

が飛び、場内は騒然となりました。

親方衆は私の方へ視線を向け、こんな、つまらねえほりものを出しやがって、彫物師仲間のつら汚しだ、と云わんばかりでございました。だが、私には自信がございました。

舞台の上で、禪一本の労咳病みの男の背には、なるほど、肩のあたりから臀部にかけて轟々と飛沫をあげて、流れ落ちる滝の文身だけが青黒く描かれてあるだけ。が、男はやがて、手に持った一升徳利を口にあてがうと、喉仏をゴクゴク鳴らしながら、またたく間にその半分を空にしてしまいました。みるみる男の肌が上気し、薄赤く紅潮します。

次の瞬間、場内は水をうった様にシーンと静まり返りました。幾百ともしれぬ瞳が、その男の背に釘づけにされたまま離れません。肌色が、紅潮の度合いを増すとともに、その男の背に彫られた滝の飛沫の中に、うっすらと一匹の白い鯉が、徐々にその姿を現わしたのでございます。

「日本一！」

静寂を破って、誰かの声がとびました。

それが、合図でもあるかのように、場内は再び騒然となりました。但し、今度の騒めきは驚嘆のそれでございます。

轟々と流れ落ちる飛沫の中に、うっすらと映える白鯉の流昇り。私の会心の作でございました。

だが、私の会心の作は選にはもれました。私は、その作品そのものには絶対の自信がございました。しかし、白粉彫りは、彫物師仲間では暗黙のうちに禁じられていたのでございます。

人体を害するような素材を使ってまで、文身を彫る事は許されない。これが理由でございます。勿論、私にも、それは充分判っておりました。しかしながら、新参者の私が、晴れの舞台で認められる為には、平凡な手段では駄目なのも判りきっております。

私の作品は、選にはもれましたが、それ以上の収穫を得る事ができました。

江戸っ子は、最早、私の名「彫征」を忘れはしないでしょう。そして今、御大名、伊勢守正容様のお声までかかったのでございますから……。

◇ ◇ ◇

もともと、旗本四千五百石、石河甲斐守貞通様の御三男であられる伊勢守正容様は、御世継ぎのございませなんだ下総香取郡小見川一万石、内田近江守正肥様の御息女、お留以

様のもともと婿養子で参られたのだそうでございます。

それだけに、お留以様の権勢お強く、伊勢守様は築地、鉄砲洲の上屋敷においでになる事は少なく、もっぱら赤坂、南部坂の下屋敷で起居なさるのが習わしなのだそうで、私がお訪ね致しましたその下屋敷は周辺の浅野様毛利様の豪荘なお構えに比べてみますと、如何にも一万石の御大名の下屋敷らしい、小じんまりとした佇まいでございました。

春の陽が、開け放されたお座敷にサンサンとふりそそぎ、ひっそりと静まりかえった庭には、手入のゆき届いた樹々の葉陰から洩れる陽の光に、池の水面が眩ゆいばかりでございました。

小半時も、その美しいお庭に見とれておりましたでしょうか「待たせたな」というお声と共に、御用人の梅木紋太夫様が、お姿をお見せになられました。

「彫征。そなたの腕を、正容様が大層買われてな。殿は、そなたに仕事を頼みたいとおおせじゃ」

梅木様のお言葉に、私の身体はこまかく震えておりました。御大名に自分の力量を認められる。それは、この上もない名誉でございます。

ます。

「こちらだ」

梅木様は、次の間に通ずる襖障子を、お開きになりました。

そのお座敷は十畳程もございましょうか。お座敷の中央あたりには、通障子が立てかけられてあり、その陰に人の気配が致します。「おうたさま。彫征をお連れ致しました。御用意は、よろしゅうございますな」

梅木様のお声に、通障子の陰から「はい」という美しい女性にょしょうの声が返ってまいりました。

「彫征とやら、こちらへ」

通し障子の陰から、再び聞えたお声は、先の鈴のような美しい女性とは似ても似つかぬしわがれた老女のお声でございました。

「へい……」

私は期待と不安が、相半ばする心持で、障子の陰に歩を進めてみますと

「たのみますぞ」

と私に微笑をお浮かべなされる女性の、その、お姿のあまりの麗わしさに、思わず息をのむ思いが致しました。

それは、綿絵に描かれた弁財天もかくやと思わんばかりのお美しさでございます。この世に生をうけて二十五年余、私は、このよう

な佳人におめにかかったのは初めてのようない気が致しました。

お年の頃二十八、九でございましょうか。片外しにお結いあそばされたお髪、青々とお剃りになられた眉、あくまで黒く澄みきったつぶらな瞳、玉虫色のほどよい唇。そこに漂う色香に、私の心は今にもとろけんばかりでございました。

このおうたさまと呼ばれる女性の側には、これは又、おうたさまの引き立て役ともおぼしき老女が、金壺眼を光らせて私を見据えておいででございました。

「彫征とやら、そなた、思うていたよりもお若い。う。殿も罪な大方じゃ」

「……」

「ホホホ。そなた、震えていやるのか。彫物師ともあろう者が、女性の前で意気地になるとは。これから先が思いやられますぞえ」

おうたさまの笑声は、私をおいたぶりになられるような響きでございました。

その時、私は私の心に云いきかせました。
(例え、相手が御大名のお側室であろうと、衣を脱いでしまつて、仕事をするうえから見りゃあ同じこと。身分の上下もねえ。そこいらにゴロゴロしている女達とちつとも変わり

はねえじゃあねえか)

「どうじゃ、わらわの肌は、ほりものに合いますかえ」

おうたさまのお口元には、うつすらと微笑さえ浮かんでおりました。

その白魚のようなしなやかな指先が、私の眼の前にさしのべられます。

「じゃあ、ごめんなさいまし」

私は心を決めると憶面もなく、文身だこのできましたごつい手で、おうたさまのお手を握みました。

思いもかけぬ私の行動に、おうたさまは、一瞬呆氣にとられたご様子でございました。手の中の白い指が、軽い恥らいを示します。

「無礼でしょうぞ」

金壺眼の老女の気色ばんだお声が、私の耳を通りすぎます。

「かまわぬ。彫征のなすがままにしや」

さすがにおうたさまは、私の軽挙をお咎めにはなりません。

「お恐れながら、お人ばらいを……」

私はおうたさまに小声でお願い申しあげました。金壺眼の老女の監視つきでは、私の仕事も思うにまかせません。おうたさまは、その私をしばらく凝視なされておいででござい

ました。その瞳は、私の心底をおしはかるかのように冷めたい光を放っておりました。

やがて、おうたさまは、小さくお頷きになられますと、金壺眼の老女にお命じになられました。

「席をはずしや」

その時の、金壺眼の老女の狼狽ぶり。まるで口から泡でも吹きださんばかりでございました。おそらく、老女はこのままおうたさまをお一人残しておいては、この厚顔無礼な彫物師が、おうたさまに如何なる無礼なふるまいを行なうか……とでも想像なされたのでありましょう。

「かまわぬ。はずしや」

おうたさまの再度のお言葉に、老女はそのくぼんだ眼で私に鋭い一瞥を与え、不安気に席を外されました。

とうとう、このお部屋には、おうたさまと私だけになってしまいました。しかし、襖障子の一枚向こうには、このお部屋の様子を息を殺して伺う幾つかの耳が、私には手にとるように判るのでございます。

おうたさまの、不安と期待で微妙な影を宿した表情が（さあ、邪魔者は去った。これから、わらわをどうするのじゃ）と問われてお

られるかのようにございます。

「お方さま。お身体を拝見致しとうございませう」

すでに、私にはおうたさまに対する、畏敬や遠慮などございませなんだ。今のおうたさまは、私にとりましては、一介の文身の方にすぎません。

「……」

おうたさまは黙したまま、帯にお手をかけられます。私の視線は、その指先の動きまでを逃がすまいと、おうたさまの一挙一動に注がれておりました。

薄衣一枚におなりになったおうたさまの姿は、さすがに、見も知らぬ男に凝視される羞恥に消え入らんばかりでございます。

「お方さまに、お尋ね致しまする」

「なんじゃ？」

「お方さまは何故、ご自分のお肌に彫物などお望みになるのでございましょうか」

薄衣一枚のおうたさまと、若い彫物師の奇妙な対話でございました。

「殿の、お望みなのだじゃ」

「それでは、私が、お方さまのお肌にどのような彫物を施してもかまわないのでございませうね」

「かまわぬ。それで、殿のお望みが叶えられるのなら」

心なしか、おうたさまのお声は震えておいででございました……。殿のお望みが叶えられるのなら）おうたさまの最後のお言葉は強く私の心をうちました。

愛しい主の為に、自から自分の肌を汚す。

おうたさまの美しい心に、私は一生一代の彫物でお応えしようと思ったのでございます。

「恐れながら、その薄衣をもお取り願いまする」

私は、あえて冷たくいい放ちました。その時、私は「無礼者」という罵声と共に襖障子が開かれ白刃の林が私を取り囲むのを予想致しました。如何なる理由があろうとも、一介の素町人にすぎない私が、一万石の大名のお側室を、素裸にさせる事を黙認なさるはずはないのです。

私は命を賭けておりました。

武士の意地と、町人の意地。そして女のはかない操の意地が、みつどもえになってこのお部屋に渦を巻きました。

しかし、その渦はもろくもくだけ散り、周囲は、何事もなく平静を保っております。

おうたさまも、その表情を心持硬くなされ

ただけで、最後の薄衣を自からの足もとにおすべらしになられるのでございました。

そこには、豪華な暮しに磨かれた艶やかな色盛りの女性の裸像が、紙障子越しの春の陽を満身に浴びて晒されております。さすがに紅潮したおもと。微かに息づく乳房。しなやかな腹部から腰の辺り。そして豊かな太腿。

しかし、そこで私の視線は動きをとめたのでございます。おうたさまの下腹部に、当然あるべきものを発見できなかった不審からでござりました。陶器のように冷めたいなめらかさのどこまでも続く柔らかい線を見直しているうちに私の心は決まって参りました。

実を申しますと、その時まで私には、おうたさまの肌を飾るにふさわしい彫物の絵柄を決めかねていたのでございます。それが、その秘密を眼にしているうちに素晴らしい絵柄が鮮かに浮かびあがってきたのでございます。「お方さま。そのままお褥しとねの上に、おやすみくださいまし」

◇ ◇ ◇

幼ない頃の私は、絵をかく事が好きで、歌麿、国貞のような浮世絵師の大家を志しておりまして、十八の年、矢も楯もたまらず国貞の門を叩いたのでございます。

ところが、弟子入りとは名ばかり。ひと月たち、ふた月すぎましても、筆を握る事はおろか、絵の具を溶かす事さえも叶いませなんだ。

そうこうする内に、半年がまたたく間にすぎてしまいました。それでも私は、あい変わらず絵を描く手ほどき一つして貰えず、毎日が本当に憂うつでございました。

思い余って或る日、師匠に願い出ました。

「お師匠様。私に絵をお教えください」

すると師匠は、私の言葉が終るか終わらない内に突然、傍らの筆洗の水を私の顔にハッシと浴せかけられたのでございます。

私には、何が何だか判らず、まるで狐にでもつつまれたような心持で、膝にしたたりおちる水滴を、拭う事も忘れておりました。

「絵というものはな、人から教えてもらって憶えるものではない。自分の眼と根性で憶えるものなのだ。お前はここへ来て、今まで何をしていた。私の筆運び、絵の具の溶かし方そのひとつとしてじっくり腰を据えて見ていた事があるか」

その夜、私は始めて酒の味を知りました。

それは、苦にがい、苦い、屈辱と、後悔の味でございました。

「自棄酒は、身体に毒でござんすよ」

側に、そっと近づいてきた厚化粧の女の声に「うるせい」と毒づく私に、その女は白い歯をみせて笑いかけております。

「今夜は私の暖ったかい身体の中で、お前さんのうっ憤をたんとおはらしな」

私の耳もとで、酒臭い息をはきかけながら、ささやく夜鷹の声を、耳の奥に聞きながら、私はそこへ、だらしなく坐り込んでしまったのでございました。

私が、国貞師匠のもとを飛び出しましたのは、それから間もなくの事でございました。小宿の薄汚ない褥とろの上の夜鷹の肌に見た、妖艶な文身が、私を虜とりこにしてしまったのでございます。

その女の裸身には、薄気味悪い青黒い竜が下腹をぐるりとひとまわりして、その頭を左の臀部あたりに、もたげておりました。

女が身をくねらせると、その青黒い竜も、くねくねと鋭い眼光を放ちながら、うごめくのでございました。

その人肌に刻みこまれた極彩色の絵模様の妖しい美しさは、浮世絵の比ではありませなんだ。

文身は、それを彫られた人と運命を共に致

します。その人の生命が終焉を告げるとき、文身も又同時にこの世から消え去ってしまうのでございます。

私は、文身に人生の佗しさを見る思いが致しました。(文身こそ、私の人生だ)私は心の中で、叫びました。最早、浮世絵を捨てる事に執着などございませんでした。そしてその足で、私は、彫物師、彫金のもとへ弟子入りしたのでございます。

但し、文身の修業も、浮世絵のそれに劣らず苦しいものでございました。文身針の研ぎ方、墨のすり方、そのどちらかひとつを疎かに致しましても、文身の技を磨く事は叶いません。

それに、文身は人肌に墨を刺し込むのでございすから、やり直しがききません。ですから、稽古をいたしますにしても、私たちのような新入りは大根を使いました。よく見てみますと、大根の肌ざわりは、人肌のそれに可成りよく似ているものでございます。

かれこれ一年余も、針を砥ぎ、墨をすり、朱を溶かし、そして、せっせ、せっせと大根を相手の文身修業に精を出しました。

その最初の仕事に、師匠は或る博徒の二の腕に花札の青丹を彫らせてくださいました。

始めて、人の肌に針を刺す感激と、不安。それは今想い出しましても、微妙な心持でございました。

無事、その初仕事を終え「まあ、初めてにしてはいい方だな」と師匠の彫金親方に云われた時の嬉しさ。思わず臉の熱くなった事を今でも判然と想い出しますが、それからの私には、文字通り、文身が人生の総てでございました。

◇ ◇ ◇

高かった春の陽もすでに地の果てに沈み、私の手もとを照らしていますのは、燭台の蝋燭の灯のみでございました。

乱れたお髪、項にかかるほつれ毛、そして額から流れでる脂汗、激痛に歪む頬、激しく波うつ乳房。

長さ五寸、巾二分程の、紫檀の柄に絹針三本を結びつけた文身針は、おうたさまの柔らかな肌を刺し続けておりました。

「痛いございせんか」私の言葉に、おうたさまは堅く喰いしぼられたお口もとを、微かに動かされ「かまわぬ……」と一言。

それは恐ろしい程の忍耐でございました。幾千針とも知れぬ文身針を、休む事もなく己れの肌に刻みこまれておいでなされていま

すのに、じっと歯を喰いしぼられて我慢なされておられます、おうたさまの表情は神々しいばかりでございました。

私の額からも、汗の玉がポタリ、ポタリと雫になって滴り落ち、その雫は柔肌をスーッと糸をひいて褥を濡らすのでございました。「お方さま……出来上りましたぞ」

最後の針を刺し終った途端、私は思わず口走ってしまいました。

激痛の苦しみから逃がれられた解放感からでございましょうか、おうたさまは、その裸身を屍の如くぐったりと、お晒しになったままでございます。

「お方さま。ごらんなされませ」おうたさまの肌に彩られた文身は、実に耽美な図柄でございました。

先程までの、おうたさまの白肌には、青々とした草の小群が現出したのでございます。

それも、幾百本とも知れぬ、極めて細かな草々が一本、一本判然と、あるものは下へ、あるものは上へ、縦横無尽になびいているのでございました。

そしてその青草のやや右よりには、五分程の大ききの蟻が、今まさに自からの巣に戻らんとしているのでございます。

己れの肌に彫られた文身に、じっと視線を注がれていられたおうたさまは、呟くように「これで殿は、ご満足なされるのですね」と私に言葉をかけられました。

「お方さま、ご安心くださいませ。お殿さまのご寵愛は、最早、お方さまおひとりだけに注がれる事でございましょう」

私の自讃を伴った言葉に、おうたさまの瞳から、ひと雫の涙が頬を濡らしたのでございました。

◇ ◇ ◇

赤坂、南部坂の下屋敷。簀垣ごしに見る庭の、池の畔の菖蒲が、色鮮かに前栽に映える頃、伊勢守正容様の文身に対する執着は、いよいよ止まる処を知らぬげで、おうたさまを始め、その腰元衆のおくめ、おさよ、おふねおふでさまの肌が、種々の妖しい絵模様で染めわけられてございました。

例えば、おくめさまの場合、その胸部から下腹にかけては、大きな墓碑が彫られ、その臍をお線立てに見たてられた図柄。

おさよさまには、そのまだ熟れきらぬ乙女の乳首を花芯になぞらえ、乳房全体を一輪の美しい緋牡丹にみたて、各々、双方の乳房には緋の色も鮮かな牡丹が咲き乱れておりまし

た。

そして、おふねさまの文身は、一匹の大蛇が、右の脇腹あたりから無気味に鎌首をもたげ、青黒い鱗、朱色の蛇腹を、ギラギラ光らせて背中をぐるりと一回りし、その尻尾を左肩から乳房のあたりまでのぞかせている図柄でございました。

又、おふでさまには、臍を中心^{へそ}に胸部から下腹にかけて、大きな蜘蛛の巣を彫り、右の乳房には蜘蛛の巣にかかり、腕き苦しむ蝶を一匹、左の乳房には、その獲物に飛びかからんとする女郎蜘蛛が彫られているのです。

かの女性^{にょしやう}達は、何れも、文身の何であるかもご存知ありません。本当に無垢なお人達でございました。それだけに、無残といえ

ば、これ程無残なことはございませなんだ。伊勢守様のお声ひとつで、あたら玉の肌を最早、消すことの叶わぬ絵模様で飾りたててしまふのでございました。

でも、それは、私にとりましては異常な興味を抱かせてくれました。

褥の上に横たわる女性の裸身が、私の文身針の動きに次第に頬を紅潮させ、額に汗し、顔は苦痛にゆがみ悶えるさまに、異様な恍惚感さえ漂ってまいるのでございました。

◇ ◇ ◇

連日の霖雨が、本当にうっとうしゅうございました。霖雨を喜ぶのは、庭の苔石の陰で鳴声を聞かせる雨蛙だけでございましょう。

「彫征。これまでのそなたの文身の腕前、見事なものじゃ。殿も、ことの他お喜びでな」御用人の梅木様は、にこやかな微笑をうかべておいででございました。

まだ、七つを少しすぎたばかりなのに、お部屋の中は大層暗く、梅木様と、そのお側に居られます、恰幅のおよろしい旦那風のお人のお顔も定かではございませなんだ。

「彫征。この御仁はな、丹羽屋善兵衛殿と申される」

梅木様のお言葉に、そのお人は満面に微笑をたたえられながら、さも楽しげに口を開かれました。

「親方の御高名は、伊勢守様はじめ、梅木様からも、とくと承わっております。そして本日、しかと親方の腕の程をあちらのお座敷で拝見致しました。その図柄の奇抜さ、妖艶さに、ほとほと感服致しました」

お二人の大層な誉詞に、私は腋の下から汗が滲む思いでございました。

「めっそうもございません。私の腕など、ま

だ、まだ未熟でございます。それに、あのような図柄は文身本来の姿ではございません。私の彫物を御覧なされたお方が、おひとりでも私の図柄に、眉をおひそめになれるようでございますなら、私の彫物師としての腕は失格だと存じます」

「まあ、難かしい話はそれまでじゃ。ともあれ、先刻も云ったように、殿が喜びになったことで、彫征も、もって銘すべきじゃ。さて、彫征。本日、お前を招いたのは、他でもない。この長雨続きに、殿もほとほと御退屈気味でう……」

「梅木様。そのあとは私がお話申し上げましょう……実は、お殿様も私も将棋に目がございませんでな……そこで、この長雨の退屈しのぎに、将棋でも指してみましようかという事になりましたのです。それも、普通の指し方では面白くない……」

丹羽屋様の（普通の指し方ではない）指し方と申しますのは、実に奇想天外な着想でございました。と申しますのは、女性を将棋の駒に見たてるのでございます。

御承知の通り、将棋の駒には、王将を筆頭に、金将、銀将、桂馬、香車、飛車、角行、歩兵と各々の陣に各二十駒、合わせて四十駒

がでございます。

そこで、丹羽屋の着想とは、文身で各々の駒の名称を一文字およそ一尺程の大きさで女性の背中に彫り刻むというのでございます。

つまり、四十人の女性駒が、五十畳敷の大座敷にしつらえた、大きな棋盤の上で、勝敗を挑む趣向という訳でございました。

その頃、お屋敷内の倉の二階の一室を、私の仕事場に使用して頂いておりましたが、お屋敷の腰元衆二十人、丹羽屋様の御女中二十人、一度に四十人もの女性の肌を墨を入れる事もさりながら、入れ代り、立ち代り仕事場に入出入りなさる女性の脂粉の香りは、まさにむせかえらんばかりでございました。

それにいたしましても、よくもこれだけの人数を、お集めになったものでございます。殊に、お屋敷の腰元衆ともないますと、すでに肌の汚されてない女性の方が数少ないのではないかとさえ思われるのでございました。

さすがに、丹羽屋様では、無垢な御女中だけを集めるといふ訳にもまいらなかったののでございましょう。中には幾人かの蓮葉女らしき女性も混ってございました。

ともあれ、女性衆も、それ相当の因果を梅木様や丹羽屋様から含められ、又、自からも

覚悟をなされて、その柔肌を私の前に晒されたのでございましょうが、いざ針を刺す段になりますと、やはり生娘でございます。怖がって泣き叫ぶ者、金切声をはりあげる者と、まるで戦場のようでございました。

それでも、一度、肌に墨を刺されますと、先程の喧噪が嘘だったかのように、おとなしくなってしまうのでございました。

やがて、背中に青黒い面積が増えてまいりますと、激痛に男枕を両手に強く抱きしめ、額からは汗を流し、瞳には涙さえうかべられて悶える姿は、それが生娘であるだけに哀れでございました。

最後の女性の肌に、墨を刺し終わりましたのは、約束の期限、三日目の早朝でございました。格子窓から、シト、シトと降る霧雨が朝靄に煙り、床上に俯伏した女性の白い肌を、朝の弱い光が、ぼんやりと照らし出しておりました。その背中一面に、鮮かに彫りこまれた「玉将」の文字。

それは丹羽屋の御女中、おゆき殿の姿でございました。



襖障子を総て取り外し、御座敷二間をぶつ通しの合戦場では、床の間を背に上手に伊勢

守正容様、下手に丹羽屋善兵衛様が床几にどっかと腰を据えられ、観戦者は、ご用人の梅木様と私の二人だけ。

そして、それぞれの位置に立ち並ぶ女性駒四十騎。

先手は、伊勢守様の「八六歩」に始まり、歩兵の文身を背にした女性が、身には紅腰巻だけの恥ずかしい姿体で、その位置まで足を進めるのでございます。

それに応じて丹羽屋様も「二六歩」とご応戦。これ又、身に白腰巻のみの女性が、なよなよと足を運びます。

雨雲が低くたれこめ、昼間と申しますのに薄暗い御部屋には、早くも百奴蠟燭が灯されておりました。庭園の草木には、霧雨が降りそそぎ、池の鯉が時折、水面にピシャと波音たてて飛びあがります。

小半刻もすぎました頃には、伊勢守様側には、歩兵二騎、桂馬一騎。丹羽屋様側には、歩兵一騎の女性駒が、かしこまってでございます。

勝敗は全くの互角で余断を許さず、拝見致しております私の手にも、思わず力がはいります。敵陣に切り込んだ成駒は、朱色で「成金」と彫られた腹部を相手に向けて陣取って

でございます。

逆に一一七手目。伊勢守様の「七九金」打で、丹羽屋様の「玉将」は陥落。

「いやあ、お見事でございました」血色のいいお顔を綻ばせながら、一礼なされます丹羽屋様。

「ハハハ……」と破顔一笑の伊勢守様。

「ゆき……残念だが、お前はお殿様のものになりましたぞ」

丹羽屋様のうって変った冷たいお声に、思わず私は背筋が冷たくなるのを覚えました。

何という事でございましょうか、この勝敗には勝った方に自分の持駒である「玉将」を賭ける約束がなされていたのでございます。それも、生身の麗わしい女性駒を……。

「丹羽屋、しかと貰い受けたぞ」

伊勢守様は嬉しそうに微笑をお浮かべでございます。

「どうぞ、お殿様の御意のままに」

と、まるで人畜の如き、丹羽屋の無情な言葉。ゆき殿はと見れば、そのいたいけな面は蒼白この可弱い身体は今にも崩れ落ちんばかりになよなよしい風情でございます。

「いい御勝負でございました」

梅木様の瘤高いお声が、緊張した雰囲気の中

に響きわたり、燭台の灯は、折からの微風に微かにゆれ動いておりました。

◇ ◇ ◇

うっとうしい霖雨もやっとあがり、樹々の若葉の緑が眼にしみます頃、気の早い江戸っ子の中には、神田明神様の祭礼の準備にとりかかる者もちろはら見る事ができます。

そんな穏やかな或る日、例の如く私に、伊勢守様御下屋敷よりのお呼び出しがございました。とるものもとりのあえず参上致してみますと、

「彫征。お主も今では、江戸で押しも押されもせぬ彫物師になったのう」

と梅木様のお言葉。

「有難とう存じます。これも伊勢守様、並びに梅木様の厚いお引立てのお蔭で……」

これは、私の本心でございました。

例の文身競艶会での、白粉彫りの奇抜さが認められ、名もない私風情の彫物師が、またたく間に江戸市中に名を売する事が出来ましたのも、文身大名の御異名を持たれる伊勢守正容様のお抱え彫物師にさせて頂いた事が何よりの力でございました。

「彫征。先日の殿と丹羽屋との一番で殿が見事お勝ちなされ、ゆきと申す娘を丹羽屋から

貰い受けた事を忘れはしまいな」

梅木様のお言葉を待つまでもなく、ゆき殿の事は忘れませなんだ。

四十人に及ぶ女性の中でも、とび抜けたきめこまかな柔肌、愁いを含んだ瞳、花びらのように可愛い唇。恐らく歌麿に一枚絵でも描かせたら、ゆき殿はたちまち江戸中の若者達の胸をときめかせる事でございましょう。

「さて、そのゆきの事じゃが、将棋が終った今となつては、ゆきの背中の『玉将』の文身も色あせてしもうた。そこで殿は、今一度、ゆきの肌を文身で飾れとの御所望なのじゃ」
実を申しますと、私の心持も伊勢守様と同じく、ゆき殿の美しい肌にもう一度、針を刺してみたい衝動にかられておりました。今の梅木様のお言葉は、私にとりまして、渡りに舟でございました。

「彫征。そこでじゃ、殿は、今迄の墨や朱だけの彫り方では満足なされておらぬ。この春の競艶会で、お前が披露した白粉彫の奇抜な趣好を御所望なのじゃ」

私はそう聞いたとたんに、ハタと困惑致しました。

白粉彫りに使用する絵の具には、白鉛と申す、人の身体を蝕む毒物が混入致しております。

す。春の競艶会での男は、たまたま、余命短

い労咳病みでございましたし、本人の、たつての希望でもございましたので、私も思ひきった仕事が出来たのでございましたが、ゆき殿は今が盛りの娘御でございます。その肌にむざむざ白鉛を流し込む事など、如何に私が文身一筋に生きる男と申しましてでも考えさせられます仕事でございました。

「梅木様。お言葉を返すようで恐れいたしますが、白粉彫りだけは如何かと……」

私の言葉が終らぬ内に、梅木様は俄かに陰わしい御表情になられますと

「それは、お前に云われるまでもない。無理は充分、承知のうえじゃ」
と仰せなのでございます。

「彫征。先程も云ったように、殿あつての彫征である事を忘れまいぞ。殿のお怒りをかえは、お前の彫物師としての寿命が尽きる事位判っておろうが……」

梅木様のお言葉通りでございました。今ここで、伊勢守様から見放されでもいたしましたなら、江戸は勿論、伊勢守様のお目の届く処では、私の腕は振えませなんだ。

思いもかけぬ名声を、今ここで、むざむざ捨て去る事は、まだ若輩の私には口惜しゅう

ございます。

それに、ゆき殿とて、すでに一度は墨で汚された肌でございます。私が、私の仕事まで賭けて、ゆき殿と心中立て致す理由も、義理もございませなんだ。

「よくわかりましてでございます。お引受けさせて頂きましょう」

呟くような私の声に、梅木様は、我が意を得たりとばかりに、大きく頷かれるのでございました。

◇ ◇ ◇

御湯殿の洗い場に床几が据えられ、それには、伊勢守様がどっかと腰をお据えになり、その両側には梅木様と私。そして、湯船の縁には、身に一糸も纏わぬゆき殿が、消えいらんばかりの風情で、その美しい女体をもてあましておられます。それは奇妙な光景でございました。

そのゆき殿の裸身はと見れば、背中はいうに及ばず、臀部、腕、脚、そして胸、腹部と殆んど余す処なく全身に及んで、異様な図柄の文身に染められているのでございました。

背中の中あたりには、巨大な桜の樹が臀部の附近から聳え立ち、その下にあったあの「玉将」の文字はもはや跡かたもとどめては

おりませなんだ。

その桜の幹からは、大小さまざまな枝々が緑の若葉をたわわに実らせ、その枝先を肩や腕、そして脇腹へとはばたかせております。

その枝々には、まだ花開かぬ、幾百とも知れぬ薄赤い荳が、乳房、腹部一面に可愛らしく散っているのをごさいました。

「おゆき殿。湯浴みをなさいますせ」

私の声に、ゆき殿は覚悟をきめられたかのように、その裸身を音もなく湯船の中に、沈められるのをごさいました。

もともと、白粉彫りは、その人が、酒気を帯びたり、湯浴みをしたりして、身体を暖めることで、その効果が現われるのをごさいます。まだ無垢な娘御のゆき殿には、御酒を強いる事は無理かと思ひ、御湯殿での御披露を想いたったのをごさいました。

湯気のたちのぼる湯船で、ゆき殿の頬が次第に紅をひいたように紅潮してまいります。

その額には、うっすらと汗さえも……。

「おゆき殿。お立ちくださいませ」

ころあいを見はからいまして、再び私は声をかけました。

「オオッ……」

その時、伊勢守様のお口から、声にならぬ

お声が洩れました。続いて思わず、私の頬もほころぶのをごさいました。

湯船の中に、立ち上られたままのゆき殿の濡れた裸身には、白の色も鮮かに、桜の花が咲き乱れているのをごさいます。

背中のもとより腕、肩、胸、そして腹部。千枝からこぼれ散った花びらは、臀部から脚にもかけて、ヒラヒラと、まるで湯船の中に吸い込まれんばかりのをごさいました。

そして、右肩辺りから左腰にかけての枝に吊るされた短冊には、万葉集の「吾が身一つに七重花咲く 八重花咲く」の一句が青々と彫り刻まれているのをごさいます。

ゆき殿の裸身は、まさに、見事に咲き誇る桜の花びらに、包まれてしまったのをごさいました。

「美しい……見事じゃ……」

あとは絶句なされて、お声を出されぬ伊勢守様。

ただ呆然と、ゆき殿の妖艶な文身に、見とれたままの梅木様。

その注視の中で、衰れを止めたのはゆき殿のございました。その円らかな瞳に、キラリと光る露の宿るのを見ましたのは、私だけでございます。うか……。

◇ ◇ ◇

「ごめんくださいまし」と案内を乞う女性の声に、文身針を研いでおりました私は、その手を止めました。

気楽な一人暮らしの私の長屋に女性が、それもこの夜更けに訪れることなぞ、今までにはなかった事でございました。

「どなたさまで……」と薄汚れた戸口を覗いて見ますと、そこには意外にも、ゆき殿が悄然と立っているのではございせんか。

「おゆき殿……」私の驚声に、その女性は軽く首を横にふり

「ゆきは、私の妹でございました……私は、ゆきの姉、そよと申します」

そう云われてよくよく見ますと、成程、ゆき殿と見まちがう程よく似てはおられますが粹な、しのぶ鬚にべっ甲の簪、黄八丈の抜き衣紋と、どこことなく仇な感じが致します。

年の頃なら二十四、五程でございましょうか、その唇元あたりに漂う色香。きめこまかな髪際に、どこことなく寂々たる色盛り。

「とにかく、そこでは何でございますから、どうぞお上りくださいまし」

と申しまして、二間だけのしがたない小部屋でございますから、ひと目で中の様子が判

ってしまいます。不相应な収入も、女と酒に消え失せ、目だつ調度品と申しまして、形ばかりの床の間に置かれた商売道具の彫物箱のみ。勿論、すすめるべき座布団なぞあろうはずもございませんだ。

さて、面と向かって相対した、そよ殿の顔は、薄暗い蝋燭の灯のせいでございまして、うか、どこことなく蒼ざめ、その瞳にも何かを一途に思いつめたような輝きを感じられるのでございました。

「彫征親方で、いらっしゃいますね」

そよ殿のやや切口上のお声に、私は不吉な影を見る思いが致しました。

「へい、私が彫征でございますが……」

「親方は、この六月頃、伊勢守正容様の御下屋敷で、妹ゆきの身体に彫物をなさいましたね」

「……」

「ゆきは、半月程前に死にました」

この言葉に、私は思わず息をのみました。

「おゆき殿が……亡くなられましたか？」

「はい……それも、さんざんに弄ばれ、虐げられたあげくの悶え死にございました。」

……ところで、白粉彫りが、どんなものであるか、今、江戸で彫物名人と評判の彫征親方で

ございますもの、ご存知ないはずはございませんわね。ゆきの屍は、まるで屑でも運ぶように、粗末な辻駕籠で御下屋敷から送られて帰ってまいりました。そのゆきの哀れな姿をひとめ見て、思わず私は気が遠くなりそうでございました。ゆきの肌には、背中といわず肩、手、胸、腹、足と、全身くまなく、まるで気狂い犬にでも噛みつかれたような陰惨な彫物……それも、こともあろうに白粉彫りまでも……ゆきのきめこまかな美しい肌は見るかげもなく爛れ、これが人肌かと我が目を疑いたくなるような有様……」

そよ殿の話を聞いてまいります内に、私の顔は次第に蒼ざめ、膝は小刻みに震え、魂は宙にでも浮いているような空虚感に襲われるのでございました。

「親分。御覧になって頂きたいものがございます」

瞳に涙を浮かべられたそよ殿は、くろりと私に背を向けられると、呆然と見つめる私をしりめに、双肌脱ぎになってしまわれたのでございます。

「……」

そよ殿の、その露わになった背中を見て、思わず私は度肝を抜かれました。

その背中一面には、怒濤の荒波に猛り狂う竜。その竜をハッシと見据え、右手に懐剣、左手に宝珠を持った、緋色の腰巻一枚の玉取姫の図が、青、朱、緑の色どりもきらびやかに彫りこめられているではございませんか。その右腰あたりには、「達磨金」の銘が刻みこまれてあります。

「親方。この彫物を何と御覧になります」

と、そよ殿の厳しい口調。

「さすがは達磨金親方、見事なできばえでございます。朱の色の鮮かなこと、ボカシの確かなこと、まさに非のうちどころのない彫物でございます」

「親方。これが本当の彫物だ……と、お思いにありませんか」

そよ殿の言葉には、どことはなしに、含みがあるようでございます。

「……と、申されますと」

「彫征親方の彫物と、達磨金親方のこの彫物とを比べてみた場合のことでございますよ」素肌の腕を袖に通しながら、そよ殿は、その厳しい眼差しを私に向けられるのでございました。

「おそよ殿。貴女は、私に何を申されたいのですか」

そよ殿の、奥歯にもののはさまった言葉つきに、私は我慢できませなんだ。

「おや親方。まだお判りになりませんの。ゆきは……ゆきは、殺されたんでございますよ……伊勢守、丹羽屋、そして彫征と申す彫物師に……」

◇ ◇ ◇

そよ殿は、妹御ゆき殿の悲業の死に対して文字通り己れの肌を汚す事によって、抗議なされたのでございます。

それは庶民を一介の生きものとしてしか扱う事の出来ぬ武家と言う権力への、そして又文身の真実の美しささえ弁えず、ただ淫猥な手段でしか表現する事の出来ない私への激しいいましめでもございました。

己れの未熟な腕をおおい隠すがために、いたずらに奇抜さを売って来た私。……

正統な図柄を写し得ない不勉強を、人の意表をつくことで欺瞞してきた私。……

文身の何たるかには眼をそらし、己れに自信なき故に、ただ権力者の好色に迎合するためにだけ汲々としていた私。……

下品なる着想を承知で針をおろし、淫らな意味での賞讃に、得々として納りかえって、たまさかに疼く良心を、酒の力を借りて追

払っていた私。……

そよ殿の、背中一面を彩った見事な玉取姫に、文身の本来の姿を見る思いでございました。私の文身が、如何に愚劣なものであったか、今つくづく悟る事ができました。

ただ単に、奇抜さだけが取り得の、人間の性本能のみを刺激させる、その効果を狙った文身、それが、私の文身道でございました。それまでに耳を覆って聞かぬ振りをしてきた噂が、一度に喚声をあげて飛びついてくる想いが致しました。

私は、そよ殿の前にぬかずきました。私の道外れた非道な彫物が、如何に多くの女性の身をほろぼし、苦しめました事か……

最早、彫征の名声も今の私には何の魅力もございません。それよりも、私の彫った図柄のために、身をほろぼされた幾多の女性の前には、如何様な罵りにも甘んじ、屈辱にも耐えねばならないのを感じとったのでございます。

できますことなら、その文身の故に吉原に身を沈めたと申す女性。夜毎に浮気男の袖をひく辻姫にまで落ちぶれた女性。その一人、一人の前に許しを乞いたい心持で一杯でございました。

但し、それも今となりましたは、取りかえしのつくことではございません。

思いあまって私は、江戸を去る事に致しました。このままでは、私自身、気が狂いそうのでございました。

行先も定まらぬ、あてのない旅でございますが、私は、この旅で今一度、歩いて来た人生を振り返ってみるつもりでございします。

◇ ◇ ◇

下総香取郡小泉川一万石、石河伊勢守正容公が、その不行跡の科で、隠居を命ぜられたとの噂を耳に致したのは、それから間もない天保八年八月の事でございました。

(完)

参考資料

「文身百姿」 玉林晴朗著

文川堂書房刊

「江戸の刑罰」 石井良助著

中央公論社刊

〔註〕「いれずみ」を「刺青」と書くようになったのは昭和にはいつてからで、それまでは、「文身」「入墨」「ほりもの」などが、一般に使われていた

マニアのノート

この醜と

美の味



かず・
とやま

増量された牛乳

高原夫人は、ことし三十四才。スターの新珠三千代ばりの美しい女性で、適当なS趣味をもつ、親しみやすいひとである。

ご主人は、五十一才。としがちがうのは再婚のため、そのご主人は、目下、M銀行の九州の支店長で、月に四日しか東京にいない。

二ひきのペルシャネコと、セントラルヒーティングまで施した、デラックスな住宅に住み、外出はマイカーという、めぐまれた生活をたのしんでいる。

いまでこそ高原夫人なんて納まってるが、十年前、私が知り合った頃は、浅草の二流キヤバレー「G」のホステスで、あまり売れるほうではなかった。

そのころからのつき合いに、実は、二、三回だが温泉マークへさそったこともある親密な間柄。こちらがうまく誘導すると、思いきったことを平気でやる女性だった。

永いつきあいのあいだには、酔った介抱から、ついでにトイレのお供、お風呂のせな流れし、と、思えば、マリちゃん（ホステス当時のネーム）とのつきあいも永いし、色々なことがあった。

「ご主人とも、ある会で親しくしていたので

盛大な結婚式にも招かれたし、

『ボクが出張中は、物騒だから時々見廻ってやってほしい』

人のよいご主人は、妙に私を信用して、そんなことばを残して出かけることが多い。

人の女房なんかおかしくて、と、めったにいったことはなかったが、ふと気がむいて、自由ガ丘の高台に、高原邸をたずねたのは、あたたかい快晴の午後だった。

『アラ、いらっしゃい。ちようどよかったわたいくつしてたとこよ』

あいそよく迎えてくれる。このあいそそのよいのがクセモノで、マリちゃんのほうが、何か退屈しのぎの相手を求めているときは、いっそう、あいそがよくなるんだから、期待にゾクゾクさせられる。

マリちゃんは、とても牛乳が好きだった。女ひとりと、ネコ二ひきのくらしに、一日の牛乳が、十本。およそ一升のミルクを日々消化するのだから、多いほうだろう。

彼女が、朝、ひる、晩に一本ずつ。ネコに一日二本だから、七本は飲用。

あとの三本はどうなるかというと、彼女、これで、からだを洗い、磨くのだという。

『フランスの女性は、まいにちビデのときに

牛乳をあたたためて使うんだって。だから、すみずみまできれいなわけね』

ほんとかうそか、そんなこといいながら、セッセと、からだの細部までを洗うのだからゼイタクなはなし。

『ねえ、ミルク呑まない？』

客間にあがり込んでまだオーバーもとらないのに、大型の、洗面器みたいな容器に、なみなみと牛乳をいれてもってきた。

彼女の目がイタズラっぽく笑ってみえる。

『特製のミルクよ。栄養たっぷり。たくさん呑んでちょうだい』

どうも思わせぶりなのが、ピンと来た。

無言で容器をうけとり、グツと一口、含む。いやに水っぽく、気のせい妙に塩味がきき、その色は、*“ミルク紅茶”* みたいに、やや茶いろを帯びて、くろずんでおり、せっけんのにおいもする。

『フッフ。呑んだ？ うまいでしょう』

彼女、ゴキゲン。

『タネあかしをしようか』

いつものように、三合のミルクを容器にとり、人肌にあたため、洗っているとちゅうで、トイレへゆきたくなったそうだが、どうせ、ネコにやるのだから、かまやしないと彼女、

そのままミルクの上へ。

ところがせっかくのホルモン配合ながら、『チイコも、ベスもいやがるの』

いつもなら、容器にのこったミルクに、砂糖を入れてやると、二ひきのネコは、あらそって、それを舐めるのに、

『あのお味が、いやみたいね。まるで、とやまさんとアベコベ』

ネコでさえ呑まないという、それを、言われてみれば、のどを鳴らして、呑みたがる私という男は、彼女からみれば、ネコ以下、どころか、汚れた水を流し捨てる排水口くらいにしか、みえないのかもしれない。

しかし、タネあかしされたあとのそのミルクは、ますますうまく、高貴水の配合で三合が四合に増量されたそれを、私はチビリチビリと、ぜんぶたいらげてしまった。

うまい、というより、その気分はすばらしかった。かすかに刺戟が残った。予め知ってて呑むそれより、こんな方法で、いきなり、欺かれたつづき呑まれるほうが、味もムードも数段上に感ぜられるのは、なぜだろう。

とうとうオレは、ネコより下におかれたかと思う反面、大きな喜びを感じてしまった。

こんどは、こんな方法で、うまくかつがれ

ながら、食べさせてもらったり、うまくいったら、レッドワインいりのカクテルにありつきたいな、なんて、私の空想は、美しくほえむ彼女そっちのけで、とめどなく拡がるのだった。

ジョーゴ

マホー瓶のジャージャーを倒して、中ピンを割ってしまった。

仕事机のそばに、常時置く品だけに、ないのは、まことに不便。メーカーは象印。

デパートへいけば、中ピンはある筈だからとりあえず、割れた破片だけでも除いておう、と、裏ブタをあける。

そして、そこに、おもしろいものをみつけた。ショックから、弱い中ピンを保護するための、厚手のビニールの、ジョーゴ状の物。直径は十二センチばかり。底部には、吸い口がある。

金属製のジョーゴとちがって、肌あたりのやわらかなビニールなのが、好都合だ。

これを口にくわえて、放射をうけたら、顔面にシブキがかかったり、ネライが狂って、耳の穴に侵入したりのアキシデントがなくてなんとも都合がよさそう。

これを使えば、与えるほうも、直接の放水

とちがって、しやすく、テレくささもなくなるのじゃないかしら。

かりに、これに、長いホースを接続し、ベッドの上で悠々と用を足してもらう。こちらは、床に寝て、ゆっくり受けるアイデアは、どうだろう。

これなら、シーツをぬらしたり、出すで口の中から溢れ、勿体ない思いにあわてることもなくなるであらう。

文字どおりの『完全、全分量拝受』も可能だし、一と晩中くわえっぱなしで、いつなんどきのご用命にも即座に間に合わせられ、奉仕は完全だろう。かけ値なしの奉仕。そして相手も、こちらにも、失敗がなく、きゅうくつさも、テレくささも残らない。理想的ではないか。

割れた中ビンなど、放りだして、白昼のユメにひたれるのだから、われながら私は幸福な男である。

タイル模様

シーズンオフの伊香保のホテルはシーンと静かだった。

改装中とはいいいながら、全館一二〇名の定員に泊まり客が十八人では、静かすぎて、うす気味がわるい。

このホテルのパンフレットを製作する依頼をうけて、女性カメラマンの松本千代さんを連れ、泊りこんで三日になる。

費用いっさいホテルもちで宿泊という、けっこうな身分だった。

松本さんは、三十二才の未亡人。再婚の意志はなく、全国のホテルをおとくいにもち、一年の大半を、温泉地で生活する女性。からだの色のくろいのが玉にキズだが、彫りのふかい、美人のほうに入るひとだ。

私とは、性別を越えた、ながいあいだのつきあいで、実は、ざくばらんに、興のおもむくまま吞ませてもらったことは一度や二度ではない。

その松本さんもさすがに、カンヅメも三日となれば、いささかタイクツらしいようすに見受けられたのだった。

風呂でのサツエイが多いので、水中カメラ『ニコノス』をいつもはなさない彼女が、私を風呂にさそう。

『カラーフィルムが入ってるの。浴室風景をとっとうと思っ』

十五、六カットは、またたく間に、カメラにおさめられた。

そのうち、お千代さん、

『ちょっとシツレイ』

とかいいながら、むこう向きにしゃがみ、腰をおとした。とたんに、チョロチョロと川がながれだす。

この時ならぬ川は、伊香保の温泉そっくり、かなり茶いろで、白いタイルにクツキリと、あとをのこす。

『おもしろいでしょ、この模様。ねえ、なにかの表紙に使えないかしら。いいと思うんだけどナ』

思いきったことをやるもんだ。おのれの流水のあとを、しきりにカメラに納めながら、『いちど、撮ったときだったのよ。Aカメラのコンテストに出そうと思うの』

これは、変わったフォトとして評判をよぶかもしれないが、私としてはじっとしていられるわけがない。

『アラアラ』

お千代さんは、声だけおどろいてみせながら私の動作をパチパチとねらう。

とても人さまにはみせられない図だが、彼女だから、どんな痴態を撮られても心配はない。私はごろりとその流れに、身を投げた。顔から、あたままで。



未完の

告白

村山百合子

一体どなたなのでしょう、外來待合室の新聞雑誌にまぎらわせてKK誌を置いてらしたのは。罪な方ですわ。私は「エネマ」という活字が眼に飛び込んで来て思わず手がふるえ、顔が紅くなるのをどうすることも出来ませんでした。医学看護関係の御本ならともかく、普通の雑誌に、このような活字とひそかな告白を読んだ私は、一晩中まんじりともしないで過去の想い出にふけた程、驚ろかされたのです。

ありのままを言いますと、「責め」とか、「切腹」とか「ペット」などという言葉は、ただびっくりするだけで、私とは関係のない別世界の出来ごとのように思いましたけど、ずっと読んで行くうちに「エネマ」という儀式も今迄は、治療の一つ、気分や身体の調子美容とも結びついた生理現象を調節する、本当はありふれた行為である位にしか思っていりませんでした。が、「罰」とか「責め」にも用いられるのだと知った時の驚きは、たとえば

うもない程でした。そしてそれが良く分かるのです。ナースという職をもっている私でも今迄このようなことを思ってもみたことがなかったのです。

ですけど、自分にも思い当たることがつぎつぎと思ひ出されますので、一思いに書いてみようという気になったのです。

始めての体験、高校時代

私の生まれは東京の杉並なのですが父の仕事の都合でS県で育ち、R女学院に入学して東京の叔母の家に預けられるようになりました。幸い私は生まれつきずっと健康でした。ですからお医者さんに診ていただくのも、せいぜい健康診断の時くらいでした。それですから、家でも病院でも、物心ついてからはエネマをされるような機会はめぐって来なかったのです。しかしその機会は、高校三年の時突然やって来たのでした。五月下旬頃と記憶しています。

ある日のお夕飯の後でした。急にお腹が張って苦しくなってきたのです。叔母に相談しましたら、

「お医者さんをお呼びする程でもないのね。わたしがいつも血圧のお薬をもらっている診療所、知っている？　じゃわたしは今一寸手

を離せないから、とにかく一人で行って診てもらいなさい。あとで行ってあげるけど」

ということで、叔母の家から近いところにあるO診療所に出かけました。陽はすでに沈み薄暗くなっていて、診療所の玄関には赤いランプがついていました。中に入ると受付には誰も人がいません。困りましたが、とにかく声を掛けてみると診察室のドアがあいて、先生が「こちらへ入ってらっしゃい」と招いて下さいました。

診察室で、それからいろいろ症状のことをたずねられましたが、「とにかく五日もお通じがないのですからそれが原因でしょうね」とやさしくおっしゃり、ピンセットで注射器をつまんで注射液をすい上げながら、「注射は嫌いかね、ちょっと我慢なさい」と右腕をまくり上げて皮下注射を一本打って下さいました。

それだけでいいのだろうと思った私が、起き上ろうとしますと「そのまましばらくじっとしてなさい」とおっしゃり、なおも向こうで何か用意をなさっているようでした。始めのうちは何かさがし物をしてらっしゃるようでしたが又「どう？ 痛みは」と、又お腹を触ってから「やはりやっておくかなあ」とひ

とり言をつぶやいて「今、看護婦がいなくて洗腸（確かそうおっしゃったように思いますが）は出来ないけど、浣腸しておこうね。すぐ済むからお口をあいてお腹の力を抜いてごらんなさい」と命令するようにおっしゃいますのでその通りにしますと、あっという間もなく、直腸に薬液が注入されました。あわてて下着をあげようと思すと、「もう二本ありますから一寸待って」と、確か一〇〇CC程注入されたように思いますが、何しろ始めての経験で恥ずかしさで夢中でしたからよく覚えていません。でもおかげでお腹はすっきりし「明日お小水をとってらっしゃい」といわれたのにそれきりになってしまいました。帰る途中、叔母に出合い「もう済んだの、早かったわね」それから小声で耳もとで「浣腸したの？」とたずねられたのにはびっくりしました。多分無意識で手がお尻の方に行っていたから分ったのでしょうか。幸か不幸か私の高校時代の浣腸の経験は病院でこの一回きりです。浣腸のことは高校の保健の時間で習いましたので知ってはいましたが本当はかなりショックでした。しかしあまり夢中だったせいか、二度と機会がなかったせいか、このまま忘れてしまったようで、これ以上詳しく

いことはどうしても思い出せません。

しかし軽便浣腸にもずい分幾種類もあり、お薬屋さんの棚に並んでいるところを見ますと女の子で中学位迄に浣腸の経験がない人は殆んどいないのではないのでしょうか。そしてきつと何回も、いやいやながら。又特別な感情を秘めて行なわれているのではないのでしょうか。私は職業柄、女性の方がどの位実際に経験しているのか、又どんな感想だったか、ぜひ伺ってみたい気がします。

一生懸命思い出しますと、確かに高校の保健室の戸棚にはグリセリン浣腸器がありましたし、後で修学旅行の時、お通じがなくて苦しんだお友達が付き添いの校医さんに、下剤では却ってまずいからといわれ浣腸されそうになり、お部屋の人皆んなで浣腸でなくお薬をと泣いて頼みに行った記憶があります。

しかし私には、浣腸は病院でするものだと思え、特別に関心はなかったようです。修学旅行という私達の一年先輩が旅行先で赤痢が出たため（生徒には患者は出なかったとのことですが）検便を二回もされたそうです。その話を聞いていたので、高校を卒業して就職試験を受ける時、私はある食品会社の管理検査の方の仕事を希望したのですが、職業柄

健康診断がやかましく、入社試験にもあらかじめ保健所で検便を受けるよう指示されていきましたので敬遠して、第二志望のM物産を選ぶことになったのです。

短いOL時代の体験

希望に胸をふくらませて始めて出勤した時まさか一年で会社をよすとは夢にも考えていませんでした。

お仕事は大層厳しいともいえるものでしたが、女子にも、単なる雑用ではなく一人前の仕事をどしどし与えられたのはむしろ満足でした。コピー、計算器、タイプなど覚えなければならぬお仕事は山程ありましたが別に苦にもなりませんでした。

就職と同じ頃、叔母がS県に家を建て引越しましたが、私は、お勤めに通うには二時間以上かかるので、同郷の中学時代のクラスメイトで短大の家政科に進学した、R子と一緒にアパートを借りることにしました。さすがに大学の方は少し分時間的にも余裕があるらしくうらやましく感じましたが残業して帰る時、ちゃんとお食事の用意として待っていてくれるので、私としてはR子がいってくれるのは便利でした。

しかし、「大学は女子学生ばかりなのにオ

フィスは素敵な男性もいていいわね」というようなことを時々口にするようになり私の帰りがおそいと「やきもち」をやいたり、おいたをするようになって来ました。はじめのうちは他愛ないことでしたが、だんだん体に加えるいたずらが多くなって行っただけです。いくら同性同士といっても口に出して言えないような種類のものだったのですが、私がわざと黙っているのいいことにいろんなことを試みたようです。ある時、「百合ちゃんって面白いところにホクロがあるのね」と話しかけて来たことがありましたが、後で考えてみると臀部のそれで、一緒に入浴しても決して見える筈のないような所にあるものでした。

その他、ちょっと書くのとはばかられるようなことが幾度もありました。彼女とは中学時代、大の仲良しでしたし、私も若かったので、別に本気になって腹も立てませんでした。が、生理日の前後など、私の帰りがおそいと「身体検査」をするのには閉口しました。

これもきっと彼女一流の悪戯に違いないのですが、こんなことがありました。秋になって会社での緊張が続くせいか、お通じがだんだん不規則になり、ある日会社で気分が悪くなりました。やっと家まで帰ったのですが、

お腹が張ってどうにもならなくなってしまったのです。体がだるっぽく熱も少しあるようでした。彼女はいろいろ先生みたいに聞きただした上で、「待ってて、お医者様を呼んで来てあげるから」といって、近所の先生を連れて戻って来ました。

診察が終って、私が「こんなことは始めてですから、お薬をいただければよくなると思います」といいましたのに、彼女は、「あら、あなたは患者さんよ、先生のいうことを聞かなければ駄目。ねえ先生、こういう時はお流腸したら良いんじゃないかしら」というのです。お医者様はまだ三十七、八位のとてもやさしい方でしたが、「君の云う通りだが、その用意がないので注射でも……」とおっしゃるのに、「それなら私、これから流腸器とって来てあげる」というなり、先生の返事も待たずに出て行ったのです。先生は苦笑して、「活発なお嬢さんですな。ところであなたは流腸したことありますか。近頃は内科ではめったにやらなくなったので用意してなくて」などおっしゃいましたが私はただもう恥しくて頭をふるだけでした。しばらくして彼女は息を切らせて戻って来ました。「先生、貰ってきました。百合、もう大丈夫よ。早くして

貰ってさっぱりした方がいいわよ。先生、私
お手伝いします」と、ひとりはりきっている
のでした。

そして手足を硬くして寝ている私のフロン
を横から遠慮なくはいで、横臥させ、寝巻を
はだけて、パンティをずり降すのです。その
うえ「それでいい」と先生がおっしゃるのに
「先生がし易いように膝をもっと曲げるの
よ」とか「お尻をもっと上に向けて」とか、
「先生、暗くてよく見えないでしょ」とか私
の羞恥心を刺激するようなことばかりいうの
でした。そればかりでなく、先生が準備なさ
っているのに、「先生、処女かどうか診察で
わかるものですか」などというのです。

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影
するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は
問いません。分譲品用ですから誌上に発表
いたしません。又、誌上発表可能でしたら尚
結構です。又、助手介添え或はプレイのみ
出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

お流腸は恥かしかったのですが、お蔭で気分
はグッと良くなりました。

でも、それから後、何かというと、往診を
勝手に頼んで来ることもあり、二三度流腸さ
れたことがあります。そして二言目には
「私の家は病院だから」とか「病院ではこう
するのよ。まかしておきなさい」とかいって
本当の流腸こそしませんでしたが、先生の真
似をするようになりました。意地の悪いもの
で、私の便秘はあれ以後チョコチョコ起り
出しましたのです。

ある時、いつも往診ばかりでは申し訳けな
いと思って会社の帰りに寄ったのですが、先
生は「あ、R子さんですね、向うの処置室へ

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬そ
の他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固
く厳守いたしますから御安心下さい。尚お
好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献
研究資料作成のため、奮て御応募御参加
下さるよう、お待ちいたします。余暇を利
用しての御参加も大いに歓迎いたします。
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人
を求めています。撮影可能の方は、遠近
に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

／＼奇々編集部／＼

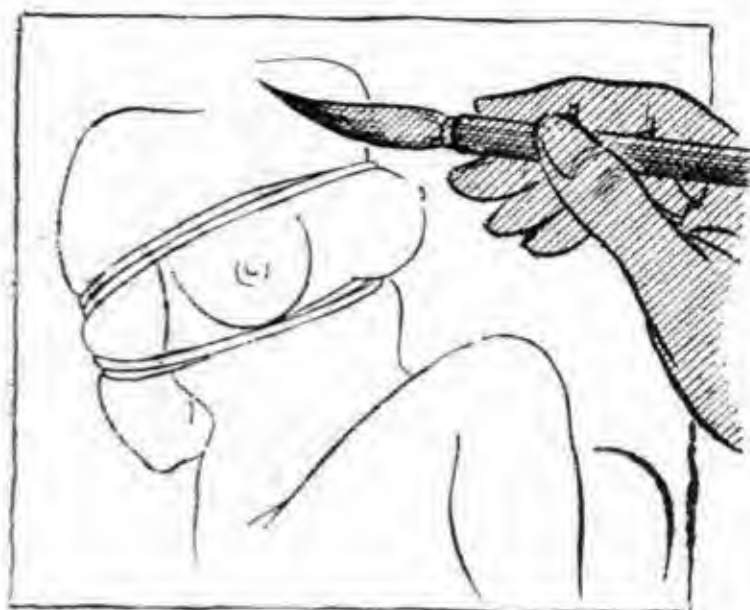
どうぞ」と診察もしないで、看護婦さんに流
腸されたことがありました。私は便秘だから
それでもいいのでしたが、きつとカルテに書
いてあったからに違いありません。

しかし何度目かの時、看護婦さん同士が、
「あの子又来たわよ。エネマしにわざわざね
え」と小声で話しているのが聞えてしまい、
それっきり行くのを止めました。でもよくな
ったのではなかったもので、会社の診察室で相
談し、軟下剤を教えて貰ったのですが、小児
科ならともかく、エネマを外来でして下さる
ところはあまりないようでした。

お勤めを始めて一年目、きつとこんなこと
が重なったので会社がいやになったのか、或
いは女子といえども万一の場合を考えて、技
術を身につけておきたいと考えるようになって
たためか、叔母には無断で、S県の国立病院
の看護学院に入学して、ナースの勉強を始め
ることになりました。

読者の皆様は或いは、このような経験を重
ねた私を、もはやエネママニアになっていた
とお思いになるかも知れませんが、正直いっ
て、エネマに関心をもつようになったのを自
覚したのは、もっと後のことです。

／＼未完／＼



1 越後屋増右衛門別宅・地下倉

地下倉といっても豪華な調度。泣き柱を背に、お静。

増右衛門「これが、今、江戸で噂の高い銭形平次の女房のお静さん。亭主思いで貞淑なお静さんだと云っても、信用なさるお方は居りますまいの」

芳年「全くでございます、私も職業柄沢山の女子衆を見ましたが、こんなに柔順で美しい女子衆には、まだ、であったことが」

直次郎「ねえのも当然。第一、この匂いは、いってえ、何だい。どこから、でてくる匂いなんだ」

直次郎、盃から手をはなすと、たち上り

読むためのシナリオ

お 静 受 縛 譜

風 流 極 道 軒

二歩すすむ。うす桃色の湯文字ひとつのお静の裸身は、行燈の光をななめにうけて、輝くばかりに美しい。しかもその裸身には縄一筋かかっていない。直次郎が、女ざかりのほどよく脂肪の乗った首筋に吸いついたが、お静は、避けようとしない。避けることが出来ないのだ。

お静をいましてゐるのは、縄ではなかった。自らの黒髪なのだ。たけなす黒髪で両手首を縛り上げられ、今、羞恥のどん底で喘いでいた。白いうなじにうき出た静脈が、女の業（ごころ）を見せてもの悲しくうごめく。

お静「あ、あっ……やめて、やめて下さい直次郎さん」

直次郎「やめねえよ。おらあ、お前と一度寝てえと先々から思っていたんだ。今夜がその日だってこと。ただ、どうやら、おいらひとりの花嫁じゃあなくて、越後屋さん、正木の旦那、それに、この裏切り者の岡っ引き野郎まで、おいらよりさきに、お前さんを抱くことになるうてもんだ。くそ面白くもねえ」

直次郎が、お静の乳房を思いきり、にぎりしめる。

善七「裏切り者とはひどいでしょうぜ、直さん。あっしのおかげで、この絶品の玉が手に入ったんですからねえ」

善七、たち上り、お静の、湯文字の紐に

手をかける。

お静が、ピクンとふるえる。

善七「へっへっへっへ……お静姐さん。そんなにふるえねえってこと。月に二度三度ずうっと、お目にかかっていた仲じゃあござんせんか」

増右衛門は勿論、南町奉行所与力正木文之進、それに、お豊までが、ゴクンと、唾をのみ込む。

2……………46 省略。(概要、次の通り)

越後屋増右衛門、島津藩御用商人、十字屋嘉兵衛と一味同心し、琉球国より南蛮物のビードロ、白糸、水晶などの密輸を行っている。十字屋に買収された正木と、同心の白田剛六は、陰に陽に、これを援助し、そのおこぼれにあずかっていた。これをかぎつけたのが今川直次郎。れっきとした御家人ながら、身を賭博に持ち崩しての御家人株売り。増右衛門の息子甚四郎に、家系家禄を売りとばしての放蕩三昧。お静にぞっこん惚れ込んでしまう。

十字屋と越後屋の不正に、着目した銭形平次。ガラッ八と探索を開始する。北町奉行所配下の尾車の善七も、同時にこれを捜査。ところがこの善七、越後屋をホシと睨んだときに、正木文之進の顔が入り、「与力の旦那のお言葉じゃあ」と、まるめこまれてしまう。

一方平次は、十字屋嘉兵衛の抜荷買いを挙げたものの、外様大名の雄藩である島津藩の御用商人とあって、かえって老中安藤対島守以下の不興を買ひ、十手取縄を召し上げられてしまう。

喜んだのは越後屋増右衛門。ここ半年、平次のために心労させられた腹いせに、今は岡っ引きでなくなった平次の女房を拉致して、正木文之進達の協力を慰労しようとする。

尾車の善七が、顔見知りを幸いに、お静を連れ出し、地下倉へ。

喜多川芳年は無惨絵の達人として、当時の江戸の一部好事家の間で評判となり、正木文之進のきもいりで、南町奉行所差配下の牢獄に自由に出入りして、囚人、就中、女囚の拷問される姿態を、迫真力ある筆にのせて有名になりつつあった浮世絵師……

47 越後屋増右衛門別宅・地下倉

お静のうす桃色の湯文字に、白い、しなやかな手をかけている尾車の善七。

その律義者の、急変した興奮の顔色。

正木「まちなよ、善七。相手は岡っ引きの女房だ。なまじのことでは音はあげまい。いいな、越後屋」

増右衛門「ハッハッハハ……さすがは正木の旦那。女を責める術は心得えていなさる。よござんすとも。いま、江戸で噂の高

けえ銭形平次の女房のお静。こんな部屋じゃあ、場所不足」

芳年が、淫らに笑う。

お静の湯文字に手をかけている善七。

善七「じゃあ、越後屋さん。この阿魔を拷問に？」

芳年「もちろんですよ、尾車の。こんな女子衆の責められる所を、私は何度、夢みたことか。ねえ、お静姐さん」

芳年、お静の乳房に、唇を寄せる。

お豊「お静姐さん。もうこうなつては、意地もはりもないでしょう。親分衆の命令どおり、さあ」

たち上ったお豊は、お静のうしろに廻ると、二筋三筋からまっている黒髪をときほぐしながら、われと自らを縛っている黒髪の縄をとく。

瞬間――。

お静が右足膝で、サッとお豊の脾腹を蹴り上げる。

ウ……ムと、倒れるお豊。

増右衛門「さすがだな」

正木「みごと、みごと……」

二人とも、盃を口から手離さない。

善七の手もとから、捕縄が飛ぶ。

払うお静。

直次郎が、ふところに手をやる。

善七「ここは、あっしに、まかしときなよ」

善七の手から、再び、捕縄がとぶ。
お静の足にからまる。

倒れるお静。むき出しになる太腿。

わらわらとちかよって行く直次郎と尾車の善七。

増右衛門「ゆっくりとな、善七親分。とっく

りと、女縄のかけ方、見せて戴きてえ」

反抗するも女の身。善七の手でひしひし

と、女縄をかけられてゆくお静。

その口惜しそうな顔。

48 越後屋増左衛門別宅・階段

地下倉から廊下への階段を、半裸で、前

後を正木と直次郎にかこまれ、縄尻を善七

に持たれ、腰をかがめながら、一段一段と

上ってゆくお静。

49 同・廊下

二十間はある渡廊下を、ひかれてゆく

お静。

見つめる越後屋の若い衆達。

植え込みのなかから、ガラッ八の顔が見

えて、すぐひっこむ。

芳年「ここらあたりに、はりつけ柱をたてて

お静姐さんを曝しものにすれば、面白い画

が書けそうだな」

正木「芳年さん。男ものかい、女ものかい」

善七「勿論、男ものでしょう。このお静姐御

のこと、おしとやかに、両足揃えた磔柱な

んか、お気には召しますまい」

直次郎「するってと、このおみ足を、大の字

にお開きになって……」

50 江戸の町

屈辱に歪むお静の顔。

走るガラッ八。

まぶたにうかぶ、お静の姿。

平次の家の前でタタラを踏む。

かけ込むガラッ八。平次、いない。

じだんだ踏んだガラッ八は、ひとり思い

定めたように、もとの道を走る。そのまぶ

たに、お静の半裸の姿。

51 越後屋増右衛門別宅・拷問部屋

燃えている百奴蠟燭。

威丈高に鞭を手にする正文之進。

土間の床几に腰をかけ、同じ床几に腰を

おろしたお豊の手の徳利から、酒をつがせ

ている越後屋。

直次郎「いい女ですねえ、旦那。まったく、

ふるいつきてえほどの女……」

善七「女じゃあねえ、人妻だ。男を知って、

いま丁度ふくらみ始めた……花は、あやめ

か、かきつばた……」

善七の手が、捕縄を、といてゆく。

ぐったりと、解かれるままになっている

お静。

芳年「捕縄のナワでは色気がねえんでして、

やはり、この絹のしごきを、ひしひしと……

……つまり錦絵にするには、いろが問題でや

して」

正木「いろよりも、色香……どうでい、この

匂いを芳年、錦絵に刷り込むことあ、でき

ねえかな」

善七「そいつは、無理って云うものでしょう

ぜ、旦那」

身にまつわりついた最後の縄が、善七の

手によって、片隅に抛りなげられた瞬間、

お静は左膝を立て、自由になった両手で、

触れれば甘い蜜のふきでそんな乳房を覆う

と、うずくまる。

むき出しにされた左足。右膝をおおう薄

桃色の湯文字……。

直次郎「見えるぜ、お静姐さん」

左前方にいた直次郎が、声をかける。

まっかになったお静の顔……耳朶。

両膝を急にくつつけるお静。

善七「前よりも、よく見えまさあね、姐御」

お静「イヤッ！」

トタンに、両乳房を覆っていた手が、湯

文字の裾にかかり正座する。

増右衛門「ハッハッハハ……何が、（イヤ

ッ！）だい、お静さん。そんなに御開帳が

はずかしいのかい」

正木「御開帳はおろか、スッ裸に、される身

だぜ、お静」

正木、白田に、目くばせをする。

白田、お静の背後による。

さきほど抵抗し、結局は、善七の捕縄で縛りあげられ、抵抗する空しさを知ったのか、お静。両手で乳房を、両膝を正しく揃えうなじを垂れて何ごとかを待つ。

52 江戸の町

走るガラッ八。

まぶたに浮かぶのは全裸にひきまかれたお静が、そろばん責めにあい、悶え苦しんでいる姿。

53 越後屋増右衛門別宅・拷問部屋

正木「お静。いくら待っても、平次はこねえぜ。十手捕縄をとり上げられた身だ、何ができる」

嗜虐的な眼で、増右衛門から返された盃に、酒をそそいでいるお豊。

善七「いいか。正木の旦那も、ああ仰言っているんだ。ええ、お静姐御。神妙にするのが身のためと云うもの」

紫色のしごきをしごく善七。部屋の周囲に、立てめぐらされているさす又・そでがらみ・突棒以下の道具。すみに、三角の尖どい背を見せる木馬。

百奴蠟燭が、ひときわ、またたく。

お静の裸身。

キイツとした顔をあげるお静。

何も云わない。が、その動作が、合図であつたかのように、白田剛六の遅い両手が、お静の左手首をとらえて背後に。

直次郎が、右手首をとらえて重ねる。

54 江戸の町

走るガラッ八。

55 江戸の町

ひとり、腕を組んで歩いている平次

56 越後屋増右衛門別宅・拷問部屋

直次郎と白田、お静の背後で、脂肪のほどよくのったその両手首を、しごきで縛っている。

前面——善七が片膝をつくと、芳年から渡された紫の紐で、首に縄をかけて輪にする。もうひとつ、結び目を。同時に、白木と直次郎から渡された紐を左手でとると、器用にしごきに絡ませ、さっと両脇へ。

三人の男たちの肩ごしに、見えかくれするお静の美しい、悶えを押えた顔。

富士額にうかび出た汗が数滴、よくとおった鼻すじをとおって唇に。うなじにうかんだ汗は、肩から乳房へ。

豊満な乳房を縛った紫の紐に吸い込まれる汗。その紐の下から湧き出た汗が、左乳房を伝わってぐみのような乳首に流れる。

直次郎「オットトットトオ……こいつは、あっしが、戴きやっしょう」

それに吸いつく直次郎。

負けじと、もう一方の乳房を狙う善七。

お静「アッ……アッ……」

あとは、言葉にならぬお静。

白田、背後から、遅い両手でお静の肌をまさぐる。

身悶えるお静。きつちりと合わせていた両膝が割れ、白い太腿が躍る。

筆をさかんに走らせる芳年。

お豊「いいさまねえ、お静さん。もっともつと勵るといいわよ、直次郎さん」

必死で屈辱と戦うお静。遂に、叫ぶ。

お静「あなた！ たすけて……はやく！」

三人、なおもネチネチとお静を弄びつづける。

芳年「いい画になる……外題は、^{げだい}「罵られる人妻」かな……それとも「拷問への道」

「素っ裸姐御受縛」……いやいや、罵られるお静姐御……これがいいや」

悶えるお静の顔。唇を吸う白田。両乳房を責めつづける直次郎と善七。

57 江戸の町

走っているガラッ八。

越後屋の門前。扉の周囲をうろうろするガラッ八。

ガラッ八「姐御、我慢して下せえ。親分がいなくたって、おいらひとりで、助け出してあげますぜ」

まぶたには、スッ裸で、磔柱に縛りつけられたお静の姿。

扉をこえるガラッ八。

見つける越後屋の若い衆。

58 拷問部屋

お静、そろばん責めをうけている。
その両肩に手をかけ、さかんに、ゆさぶる善七。声高に笑う越後屋。

59 越後屋・庭先

追われて逃げまどうガラッハ。

60 拷問部屋

お静、そろばん台から抱きおこされ、部屋の中に、天井から垂れている鎖に後手のまま吊るされようとしている。

一挙一動を見逃すまいと、目を皿のようにして眺めている芳年。

扉が、あいて、

若い衆A「旦那」

若い衆B・Cに、縛られ連れ込まれてくるガラッハ。

大きくうなづく越後屋増右衛門。

増右衛門「ハッハッハ……これで、待ってた甲斐がありましたぜ、正木の旦那。私の云ったとおりでがしう」

正木「恐れいったな、越後屋。善七や、直次郎が素っ裸にしたがるのを、まだまだと待たせたお主の眼力、大したものだ」

増右衛門「女にとって腰のものは最後の砦。無理にはいじまうよりも、自分からとって下さいと云わせる方が、男にとっちゃあ、みものの中のみもの……」

正木「それと云うのも、江戸随一の親分銭形

平次の女房のお静。役者は揃ってるぜ。芳年、いい画をかくこった」

芳年「正木の旦那。女を裸にするのは、ただひんむいただけじゃ面白くねえし、色気もねえんで。こう云うのも何ですが、あかの他人の前で裸にされるよりも、見知った男たちのまん中で素っ裸にされるほうが、女は恥ずかしいものなんで。このお静姐さん、今まで、直さんや善七親分という顔見知り、に、さんざん罵られなすったが、一言も音をあげねえ。どうしたもんかと思ってやしたが、今度はガラッハと云やあ、姐御にとつて自分。その自分のまえで一糸まともぬ素っ裸。なんかこう、あっしはむずむずしてきましたぜ」

しばらく、ボンヤリと、ものも云えなかったガラッハ。

ガラッハ「姐——御！ 姐……さん……」
善七と直次郎に縄尻を持たれて、蹲まっているお静。

その前を、天井から垂れた鎖がブランブランと揺れる。

お静「ハ……八さん……」

ガラッハ「すまねえ、姐御。親分はどこへ行っちゃったか判らねえ。おいらひとりで救って見せると……すまねえ……」

お静の顔に、絶望の色が走る。

正木「お静、聞いてのとおりで。このガラッ

八をこれからどうするか、お前さんの心次第」

増右衛門「……殺す。われわれの悪事を知られた以上、このまま生かしておくわけにはいかねえ。直次郎、かまうことたあねえ、ひと思いにやっちないな」

直次郎「へえ」

お静の縄尻を、善七に渡して、懷中から匕首を取り出した直次郎。何人も人を殺したことのある凶太さを見せて、ガラッハのそばに、小走りに近寄ると、スウーと匕首を抜き、そのまま体あたり。

お静「ヒィ！……や、やめて！」

思わずたち上り、ガラッハのそばに駆けよろうとするのを、善七が縄尻をひいたので、惨めな姿で横転する。

お静「やめて。八さんを殺すのは、やめて」

直次郎、ガラッハから離れる。匕首に血が三、四滴。

きものが裂けて、脇腹から血がながれ出すガラッハ。

お静「やめてください、親分さん。妾が、妾が、代りに……」

ガラッハ「姐御！ それはいけねえ！ おいらは、死んだって大恩ある姐さんは守らねば、親分に、合わせる顔がねえ。……くそっ！ 殺せ。殺しやがれ！」

縄をふりほどこうと、悶えるガラッハ。

そのたびに、脇腹から血がながれる。

正木「お静姐御、どうなさるんで。あと一突き喰らやあ、この男はあの世ゆき」

お静、キツとなって正木を見上げる。

お静「正……木さま。妾が、妾が身代りになります。八さんを許して……」

正木、それには答えず、

正木「越後屋、どうする」

増右衛門「はてさて、いかがいたしまするか
な……江戸随一の美人の願いごと。お静さ

ん、あんたほんとに、この男の生命とひきかえに、われわれの前でその腰のものもと

り、一糸まとわぬ素裸になって、どんな拷問でも受けなさるっていうんですかい」

越後屋、手を振って若い衆に、（いけねえ、いけねえ、姐御）と呼びつづけている

ガラッ八に、猿ぐつわをかまさせる。

お静「……」

増右衛門「……どうなんですかい。ええお静

さん……」

お静「……ハイ」

正木「じゃあそれを、ここにいる白田や、直次郎、それに、尾車の善七にもお願えして

みるんだな」

お静「ええ！ この人たちにも……」

白木「勿論でさあ、姐御」

直次郎「あっしらは、あいかたですぜ」

善七「お静さん。こんなことになろうとは、

四、五年前はちっとも考えちゃありませんでしたぜ。銭形には、いかい世話になりっぱなし。その上、今夜はこれまた大変な馳走にあずかるようでして。さあ、約束してくだせえ。あっしらの前で、存分に責められると……」

芳年、隅から床几を持ち出す。

芳年「ほうれ、ほうれ、坐って坐って」

芳年と善七に、抱えられるように床几に腰をおろすお静。

乱れる湯文字をかき合わせてやる芳年。

正木「いやかい、お静！」

なされるままになっていたお静、顔を上げる。猿ぐつわの下で呻っているガラッ八をみる。脇腹からながれ出た血が、拷問部

屋の床をそめている。

お静「白田さま、妾が、身代りに……」

ニヤツとする白木剛六。

お静「直次郎さん、妾を身代りにして」

直次郎「身代りってのは、どんなにするんですかい、お静姐さん」

たち上った直次郎、熟れたての桃のよう

にいろずいたお静の乳房をはじく。

直次郎「あっしらは、もう、姐さんのからだ

を、八分、九分かつたりやしたぜ。この上

の身代りというと、一体、どんなことが……」

お静「……」

芳年、何かお静の耳もとに口を寄せてささやく。

あかくそまるお静の耳朵。

善七「あかくなりやっしたね、姐御。湯文字ひとつの素っ裸で、今までいたためつけられていた姐さんが、なぜにいまさら」

直次郎「……あかくなる……」

芳年「いま、云ったとおり、云うのですよ」

芳年、お静の唇に、自分の唇を触れさせるとたち上る。

増右衛門「お静、言うのだ。さもないと」

お静、顔をうつむける。

わずかに、膝をおおう湯文字に手をかけて、開こうとする芳年。

芳年「さ、早く、早くしないと、ガラッ八さんの生命が」

お静「……直次郎さん、このお静、あなた

の前で……ス……スッ裸になり、ご、ごう

拷問をうけます」

静寂。

直次郎「さすがは、画かきの芳年さん、女の

つばを心得てるってことよ。あっしは、このお静姐御とは、もう四年來のおつき合い

でやすが、今ほど、ジーンとしたことはねえ」

お静「尾車の善七親分さん。親分さんには、

長い間、て、てい……亭主の平次が、お世

話になりました。そのお礼に、心ばかり……」

「では、ありますが、女房であるこの静が親分さんに、抱かれ……抱かれたあとは……」

言葉につまるお静。

筆をさかんに走らせている芳年。

芳年「あとを、つづけて お静！」

ハッとするとお静。

お静「……ここにおられる皆さま方のまえで親分の、女縄四十八手で、縛られ……」

お豊「スッ裸で……だろう、お静さん。そうならそうと、はっきり云うんだよ」

お静「……ハイ……スッ裸で」

お豊「スッ裸じゃあない。スッパダカ！」

お静「……スッパダカで……」

床几から、ころげそうなお静を、抱きとめる直次郎。

唾をのみ込む善七。

お静「スッパダカで、善七親分のお縄をうけます。そして……女に加えられるあらゆる拷問を、お受けします」

61 越後屋別宅・階段

お静、階段を上って行く。前後左右を善七たちがかこんでいる。若い衆ABCにかえられてガラッ八が、つづく。

62 越後屋別宅・廊下

渡廊下を、女囚のように歩くお静。

見つめる若い衆。

若い衆D「今度はまた地下倉か。地下倉から

拷問部屋へ。いままた、地下倉へ」

若い衆E「いよいよ、抱こうってわけよ。いくらなんでもあの拷問部屋じゃあ、抱こうにも、こう何か……」

若い衆F「それにしても、いい女だなあ。はようあすが来ねえかな。この柱によう、カッチリ縛られての曝しもの。罵れるのが楽しみよ」

若い衆D「まだ、どうやら湯文字は、一度もとられていねえようだぜ。よっぽど旦那、気に入ったと見えるな」

若い衆E「あああ、まったく旦那の好みも変わってるぜ。いい女とみると湯文字いちまいつけさせたままでのいたぶり。ぬがせるのに手間ひまかける……どうせ、素裸にしてしまうのに」

63 越後屋別宅・地下倉

地下倉と云っても豪華な調度。泣き柱を背にガラッ八が縛られている。猿ぐつわから呻きが洩れる。

真新しい備後豊十二畳の真中に、黒檀の卓子。とりかこむ増右衛門以下。縄尻をお豊にとられてお静、うなだれている。みなが着ものをきいているなかで、ひとり輝くお静の裸身。

越後屋増右衛門が、善七に合図する。

善七「お静姐御。じゃあ、ぼつぼつ……」

直次郎、お豊から縄尻をとる。よろよろ

とたち上るお静。膝頭が、桃色の湯文字からはみでる。

白田「立ちませい」

お静の両肩を背後から抱くように二歩、三歩、押しすすめる。

円い卓子。

善七「この上に、横になって貰いましょう」
お静の美しい眉がひそむが、諦めたよう^{あきら}に左足を卓の上へ。

湯文字からこぼれる内股。

直次郎「おっ……とっと……」

お静の腰のあたりを抱えた直次郎。善七が大きく縄尻をたぐる。

お静「アレッ！」

鈍い音がして、円卓の上に横転するお静の右手を越後屋、左手を正木、右足を白田左足首を若い衆Aが捕える。

お静がもたえる。

白田「よい……匂いですなあ。これが、文之進殿、まことの女のかおりというもの。江戸随一と云われる美女の肌の内から、にじみ出る香り……」

鼻をうごめかせながら、お静の肌によせて行く。

善七「あとにしてください。それより早く手足を！」

善七、真新しい捕縄を、次々と四人にくばって行く。

左右の手足を円卓の脚に、緊しく縛りつける四人。

のけぞるお静。悶えるお静。

いち早く、縛り終えた白田剛六、お静の肌を手を伸そうとする。

正木「これ、白田！」

白田「いやあ、すみませぬ」

越後屋。正木。白田。それに、顔見知りの直次郎。夫である平次の同僚であった尾車の善七。若い衆三人。お豊。……それに絵筆を振いつづける喜多川芳年。合わせて二十の眼をうけて、お静の喰いしばった歯がカチカチと鳴る。

増右衛門「いよいよ最後のときだぜ、お静」

越後屋の手が、右脇からおおいかがぶさるようにお静の湯文字の紐にかかる。

しい——んとなる地下倉。

越後屋が、湯文字を解こうとして、震える手と、お静の高鳴る動悸。

白田「よい……実によい匂いじゃ」

お静の、あどけないと云ってもよい大きな右の瞳から、涙が、一筋……。

お静「イヤ！」

激しく全身をくねらせて、手足のいましめを解こうとする努力。

水泡のように、無駄なあがき。

芳年、懸命に、筆をはこばせる。

お豊が、脇息を持ち出す。

無言で、それを、お静の、ふくよかな腰の下にあてる。

お静「や……やめ……て。イヤ、イヤ、イヤよ……」

脇息をあてがわれ、手足が、ピーンとはりつけられたお静。

正木「酒だ、お豊さん」

お豊「あいよ、旦那。こんな、よい肴をまえにして、飲まずにいるのは、男とは云えませんが、せんものねえ……ホッホッ……」

善七「あっしにも、お豊さん」

次々と……盃を手にして、酒をのみ始める一同。

百奴蠟燭が、六本。

その真中にフワリと舞う桃色の湯文字。

64 江戸の町

ひとり歩く平次。

ふと立止まり、ハタと手をうつ。

65 越後屋別宅・地下倉

泣き柱に縛りつけられ身悶えているガラッ八。血走る眼。

増右衛門「善七、そちらの兄さんにも、見せてあげな」

善七「へえ！」

善七、ガラッ八を泣き柱に縛りつけている縄をとくと、ズルズルと、腰を畳につけさせて、縛り直す。

善七「今度は姐さん、一寸、御免なすって」

直次郎と二人で、円卓を、「よっこらしよ」と、持ち上げる。お静の頭が上になり脇息が腰の下からずれて太腿のあたりで固定される。

善七「御免なすって……」

直次郎と善七、円卓を、若い衆A、Bと一しよにそのまま畳をずらせるようにしてガラッ八の前へ。

ガラッ八「……」

猿ぐつわの下で声にならない憤怒の声。

お静「八ちゃん……見、見ないで！」

善七「見るんだ、八！」

直次郎が、ガラッ八の閉ざそうとする眼蓋を、手で、おしひろげる。

お静「アッ……ア……八さん……み……みないで……」

66 江戸の町

がっかりした足取りで歩いている平次。夜空にお静の顔が浮かぶ。微笑んでいる。思わずニコツとする平次。

次の瞬間、こぶしを握って大声で叫ぶ。

平次「お静う。どこにいるんだあ……」

野犬が、平次に、吠えかかる。

67 越後屋別宅・地下倉

正面、畳五段くらい高くした上に、和蘭渡りの緋毛氈がひろげられ、一糸まとわぬお静が正座している。

白田「お静、さあ、云ってみなよ」

捕縄を、しごく。

お静、ものがなしそうな瞳をあげる。

お静「白田さま。お縄を、お受けします」

白田「誰のだ、誰に縛られてえのだ」

お静「尾車の善七……親分さん」

喘ぐまっ白いのど、乾いたくちびる。

ガラッ八は、部屋の間、天井から下りた鎖に吊られている。

ニヤニヤと、盃を口に運びながら、楽しそうに見つめている越後屋。

善七「じゃあ、手を廻しな。その可愛いおててをよ。後に、きっちり」と

お静、うらめしげに、善七を見つめていたが、双の乳房を抱いていた左手をはずかに、後に廻す。

芳年「うーむ……画に、画にならあ」

つづいて、顔をうつむかせると同時に、右手が肉おきゆたかな腰をまわって背後に。

右手の人さし指を、われと自らの左手でにぎりしめるお静。

善七「お静姐さん、もっと手首を深く交叉させて、上へやって下せえ」

深くうなづくように顎を胸にうずめたお静、両手首をしみひとつない白絹のような背中を組み合せる。

直次郎が、右膝を強く押す。

お静の腰が大きくゆれる。

正木「……酒だ、お豊」

お豊、酒をそそぐ。そのお豊の眼が嫉ましそうにお静を見たまま。盃からこぼれる酒。

正木「女囚お静。さきほど、お豊から云われたとおりのこと、申し立てて見い」

百匁蠟燭が、ゆらりとゆれる。

お静「岡っ引き銭形平次女房お静、当年二十六才。……この、この身を、どうとも御存分に賜って、くださいませ。代りに八ちゃん、八の生命は、おたすけを」

白田「嫌だ！」

正木「それみい、お静。同心の白田でさえ、それでは、いやじゃと申しておる」

お豊「もっと、さきほどの通り、云うのよ」

唇をかむ、お静……

お静「どうか、妾を縛って、男のかた五人なり六人なりで、きままになさって下さいませ。お静は……女ざかり……とてもひとりの亭主では……がまんできませぬ。

(あとは、^{はと}進るように) 妾は、ひとりの男のかたではダメ、三人四人の男のかたがたに、も……もてあそんでもらいとう……」

お静の左眼から、一筋の涙……

お静「妾は、所詮、ひとりではなく、複数のつまり、六人七人の男のかたたちを相手に……」

お豊「何を言ってるのよ、お静姐さん。もっとも……ズバリと……」

お静、背後に廻した両手首を、自ら上へ上へあげ、顔をきつと、させる。

お静「越後屋の旦那さま。正木さま……どうか、このお静を、賜って。尾車の親分さん。このお静に、お縄を、おかけになって下さいまし」

善七「お静姐さん。では、いきますぜ。直さん、手伝いな」

善七の手から流れ出た麻縄が、お静の白い両手首を、ひとつに揃えて縛る。

神妙に、お縄を受けているお静。

両手首を縛った縄が、お静の左腕からんでキュッと絞られる。

芳年「それ……それが女を縛ること。女って奴は、二度のおぼこ……」

直次郎「二度のおぼこってのは何ですけえ、先生」

芳年「おぼこは^{おぼこ}処女……女ってものには、二度も、三度も、処女っていう時期があらあ。ひよっとすると、四度、五度、いや、女って奴は、八十の婆になっても、処女だと、云うかも……」

善七の手が、お静の、和蘭わたりの薔薇の花のような匂いをはなつ左乳房の下を通り、幾十人かの汗を吸い取ったであろう捕縄が、そのあとを追う。

グイッグイッと喰いこんでゆく縄がピタリと決まる。善七、得意の女縄第五番手。右の上膊部をとった縄は、一旦、両手首でとまる。

つづいて、左へ、ゆたかに色づき、はちきれそうな両乳房の、今度は上をとってきりきりと、腕へ二巻き。

善七「お静姐さん。御気分は、どうでい……縄をかけるってことは、女を、喜ばせるひとつの方法」

直次郎、お静の前面に寄ると、ながく垂らした黒髪をわけるようにして、首縄をかけてゆく。

白田剛六が、背後から、それを手伝う。終始、神妙に、されるがままになつてい

るお静。
善七「越後屋の旦那さま。これが、女縄第五番、高手小手首縄、女の恥をふせぐことのできねえ縛りのひとつで」

善七が、お静の脇腹を蹴る。

お静「ウ……ッ……」

緋毛氈に、よこ倒れになるお静。

正木「ウーム、あっぱれじゃ」

白田「与力殿……何が、あっぱれでございまする」

正木「この、この姿をみい。あの左足の爪先を見い。この不自由さで、やはり、身を守りおるわ」

白田、直次郎、越後屋たちの目が、お静の左足にそそがれる。

善七「なるほど。あつしも女は沢山見やしたがこのどたん場になつても、なお捨てばちにならねえこんな女には、まだであつたことがありやせん。よほど、この阿魔、平次のやつに惚れてるんでございましょう」

お豊「なに、ほざいてるんだよ、善七親分。女つてもものはね、最後はどれもこれも同じものさね」

ふらふらとたち上ったお豊。お静の左足首を、邪慳ににぎる。

お豊「お静さん、観念おしなよ」

お静「アッ……ア、ア……お、お豊さん……」

お豊「何が、アッア……よ。あんたが強情を張るから手間がかかるんじゃないか。ほれほれ。直さん、手伝つてよ」

直次郎「待ってましたの、こんこんちき」

手に唾した直次郎がにじり寄る。耐えきれぬようにたち上ったのが越後屋である。

お静の肩に手をかけると、左右に激しく振られる頭をかいこみ、その唇を、分厚い油ぎった初老の唇をつき出して追い廻る。

正木「拙者も、御免こうむつて」

にじり寄った正木が、いやし気に手を差し伸べてくる。

白田「では拙者も」

白田が、おくれてならじと乗り出す。

芳年が、絵筆を捨てて。

芳年「もう、こうなりやあ、あつしも男……絵筆のなかに、いや、絵具のなかに、この匂いをしみ込ませるために……」

芳年が、お豊と、直次郎の間に割り込みはじめる。

お静「アッ。や、やめ……て……」

五人の男と、一人の女のかげで、悶えつづけるお静の姿が、早春、瀬戸の海でとらえられて処女にのせられたさくら鯛のように、見える。

百奴蠟燭の焰が、大きくゆれる。

68 江戸の町

朝が近い。平次、歩いている。いらいらした表情。

69 越後屋別宅・地下倉

お静、つぎつぎと、善七の縄を、神妙にうけている。その、あきらめきつた表情には、反抗のひとかけらも見られない。

70 すっかり明けた江戸の町

平次、とある居酒屋で、めしに酒をぶっかけて、口からながし込んでいる。

平次「……お静……」

赤く、にごった目。

71 越後屋別宅・中庭

ギイッ——と、金具の軋む音がして、地下倉へ通じる隠扉が押し上げられる。増右衛門、眩しそうに太陽を仰ぐ。満足しきつ

た表情。つづいて正木、白田が、同じように顔を出す。

そして……、お静の上半身が、善七に縄尻をとられた腰が、太ももが、ほっそりと、伸びた足が押し出される。

押し出している直次郎。

芳年……お豊。

お豊「ここが、いいわよ。この柱に曝し者にして、一日中、若いものの颯るにまかせましようよ。こんなヤツ……もう、女でも何でもなくて、けだものよ。めすよ！」

お豊、お静の尻を、蹴る。よろよろとするのを善七が縄尻をひく。

善七「越後屋の旦那、お豊さんは、ああ云っていなさるんだが……よござんすか」

増右衛門「よかろう」

善七「直さん……手伝っておくんないせえ」

二人がかりで、廊下のなかほど、中庭に面した柱のそばに、お静を坐らせる。

善七「青竹を持ってきておくんなせえ」

合点と、直次郎、中庭のすみから、まだ笹のついた長い青竹をかついでくる。

「イヤ、イヤッ」と、頭をふる、お静の右足を白田が、左足を芳年が持つて、それぞれかたく縛りつける。

物音に、気づいたのか、若い衆D、とび出してきて、やがて、ニヤニヤとする。つづいて、若い衆E、F現われる。

若い衆D「これはこれは、旦那様。では、このお静姐御を、わたしどもにくだりますので……」

若い衆E「これほどの、おこぼれは、またとありませんや。江戸八百八町、泣く子もだまる銭形平次が、目のなかに入れてもいたくねえっていうほどの可愛がりようだったという女房のお静を」

若い衆F「そのお静さんの裸弁天を、これ、こうして、拝めるなんて、人間、ながいきは、するもんですねえ」

三人四人五人……と、集まってきた若い衆。その前で縛られた身をすくめるお静。

お静「あ……あんまりですわ。旦那……越後屋さん……」

増右衛門「何が、あんまりだい。お静さん。

おめえさんのような美しい女を、ひとり占めにしちゃあいけねえと思つてよ。若いもんに目の保養をさせてやるんだぜ」

わらわらと、より集っていく若い衆達。

廊下の上で、それを見おろし、増右衛門たち、大きく笑う。

お豊「さかりのついたおす犬共に、たんと、たんと、颯られるがいいわ。じゃあ、旦那いきましよう」

お豊、増右衛門とともに部屋に消える。あとを追う正木と、白田。善七も、直次郎も消え、ひとり残った芳年、緊縛され、男

たちのなぶりものになって、悶えているお静を眺め、絵筆をうごかしつづけている。

男達の数本の手に翻弄されながら、お静の臉に、きれぎにれ、昨夜の光景がうかんでくる。

72 お静の回想シーン

足だけを解かれて逃げまどうお静。追いつがる増右衛門。ヤンヤと囃したてる正木文之進以下。

縄尻をつかまれ仰向けに倒されるお静。増右衛門の唇が、お静の薇薔の蕾のような唇をおおう。

つづいて、正木が、白田が。そして、直次郎までが、お静を追いつては掴まえて引倒す。最後に善七。

善七「可愛がつてもらったお礼を、今こそさせて頂きますぜ、姐御」

お静「……あ……あ……あ……」

善七「いけませんけん……姐御。ふだんから惚れぬいていた姐御が、正木の旦那たちにおもちゃにされるのを、男として、黙って見ておられますかい」

お静、がっくりとうなだれる。

73 越後屋別宅・中庭

なぶられつづけているお静。

74 ……76 省略（概要、次の通り）

平次が、彼に好意を寄せてくれる町奉行所与力岡八右衛門の口から、越後屋の別宅

の所在をきき出す。

お静は、ずうーっと中庭で、さらしものとして繋がれつづけている。

77 越後屋別宅・中庭

中庭に、さらされていのお静。ぐったりとなり、もう、精も魂もつき果てた表情である。直次郎が、揚子ようじを口にあらわれる。

直次郎「お静……さん。いやさ、お静姐御、御気分は、いかがですかい」

ほろよい機嫌で、お静の頬に臭い息を吹きかけ、唇をよせる。

(ハッ……)と、目を開くお静。

お静「……直……次郎……さん」

直次郎「直次郎さんも、直さんもないものでい。え？ もうこうなつては、いまさら平次親分の所にも帰れねえ……かくなる上はこの直さんと、手と手をとって、たとえ、地の果、海の底……てなぐあいには考えねえかよ」

直次郎、お静の頬からうなじへ唇をつけてゆく。

直次郎「ても、また、よい匂い……お静姐御の肌つてのは、いってえ、どんな具合にできてるんですけえ。そこいらの女とは、まるで……」

そこへお豊が、現われる。

お豊「直さん、みっともないじゃあないの。

お静も、お静よ。さあさあ、新しい責め折

檻が始まるんですよ。さあ、さあ……」

お豊が、手をポンポンと、うつと、

甚四郎「何でえ何でえ……ひとが、折角いい気持で、眠っているのによ……」

越後屋の道楽息子甚四郎が現われる。色白、女あそびにあき果てた顔である。

甚四郎「お豊か……」

お豊「お豊と、よび捨ては、ひどいでしょう若旦那。これでも、妾は」

甚四郎「旦那のれっきとした女房、といいてえんだらうが、そうはいかねえ。おめえはおれにとっちゃあ、やっぱりお豊さ。深川の転び芸者のお豊さ」

お豊「ひどいことを」

甚四郎「ひどいのはその女さ。……まるでこれじゃあ」

甚四郎、お静にちかより、大きく目を見開くお静の唇に、さつとばかりに接吻すると、ベエッ！ベエッ！と、唾を吐き捨てる

甚四郎「ひとり育てる花なれど、かくも数多の野郎どもの餌となっちゃあ意味もねえ。

……よおし、おい直次郎。この女、責めて、責めて、責めまくれ！ 責めるだけに

応わしい美形の女よ」

直次郎「若旦那、合点でい！ 丁度、正木の旦那たちもお待ちかね」

直次郎が縄尻を柱からとき、お豊が左右の両足首に喰い込んだ縄をとく。

お豊「まる一日、この女ったらこうしてたんだから、なんだか、こっちまでが、恥かしくなってきたじゃあないか……」

青竹から、解き放たれたお静。急には立ち上ることが出来ない。

甚四郎「よおし。おれが、風呂に入れてやろう」

お豊「駄目ですわ、若旦那。この女は」

甚四郎「今から、拷問だと云うんだらう。だから、風呂に入れてやると云っているんだ。女心ってやつは奇妙なものでよ。責められるって判っていても、やっぱり身体は美しくしてえものよ。な、お静さん」

(知りませんよ)という、お豊の言葉をとに、甚四郎、お静をまるで、犬か牛でも追いつけるように、おいたてる。

78 越後屋別宅・湯殿

まる一日ぶりに縄をとかれたものの、反抗する気力もなくなっているお静。

そのお静を、洗い清めていゝ甚四郎。時々、ため息ともつかぬ呻きを洩らす。

甚四郎「よい女……またと得がたきよい女。この匂いは……いいたい」

甚四郎、お静を抱きしめようとする。

お静「や、やめて……くださりませ」

甚四郎、すり抜けようとするお静を、いらだって追う。

「若旦那……」と、お豊が顔を出す。

お豊「若旦那、どうやら、お気に召した様子ですね。でも、この阿魔は、いまから」

顔をつき出したのは、正文之進、つづいて白田剛六、善七、直次郎。

甚四郎「これは、正木の殿さま」

正木「甚四郎、どうじゃな、この女」

直次郎「天下の絶品ってところでしよう。そこで、今からこの女を」

甚四郎「合点。拷問にかけろ、絶世の美女の若しむさまを、浮世絵師芳年が、描くって寸法だろう」

善七「その通りでさあ、若旦那。こっちへどうぞ」

湯殿のすみで、蹲っているお静を、眺める甚四郎。

善七「どうなんで、若旦那」

甚四郎「……わたしでしょう、善七親分。親分の縄目、存分に味わわせて、この女、泣き叫ばせようじゃありませんか」

善七「よかった。それでこそ若旦那。あつしやあ、また……」

甚四郎「善七親分、これでも甚四郎は越後屋増右衛門の息子。どういためつけるのが、女に喜ばれる方法かくらいは、ちゃあんと知っておりますぜ」

甚四郎、お静を、つき出す。

お静、神妙に、湯殿を出て、あがり場で膝をつく。

正座。

まだ、湯気のあたっているお静の肌に、善七の縄がかかって行く。

79 同じ頃・江戸の町

走る平次。

平次「お静、まってるんだぜ。必ず、必ず、たすけ出してやるからな……お静、もう少しだ……頭張るんだ、お静。すぐに、たすけにいったるぜ！」

80 越後屋別宅・拷問部屋

ほのぐらい部屋のなかに、そこだけ明るく映える、お静の裸身。

天井のすみからのびた鎖に、左右の手を大きくひろげて縛られ、両足も、それぞれ木杭に結びつけられている。

周囲に百匁蠟燭が六本。

その一本をとったお豊が、前に立つ。

お豊「お静さん、御気分いかが……」

蠟燭を、お静のゆたかに色づいた乳房に近づけて行く。

お静は無言。

お豊「何か仰言ひよ……強情だわね」

焰のさきを押しあてる。

お静「クツ……くっくっ……」

熱さに身をよじるたびに、鎖が、きしきしと鳴る。

直次郎が、手燭をもつと背後に廻り、豊満な、凝脂のよくのった尻に近づけ、サッ

——と押しあてる。

お静の呻き。

お豊「三所責めでいきましようよ。旦那、腋の下を、あぶっておやりよ」

増右衛門、たち上ると、新しい蠟燭に火をつけ、右の腋に焰をちかづけてゆく。

お静「……」

声にならない呻きをあげつづけるお静。

鎖が鳴りつづけ、お静の肌から、水滴のように汗が、ながれていく。

甚四郎「せっかく、お湯に入れて洗ってあげても、すぐこのさまじゃあ、やくにたたなかつたかな、静さん」

甚四郎が、お静のあごに手をかけ、ぐいっと仰向かせると、形のよい鼻のさきを柔らかに噛む。

壁にかかっていたさすまたを持ち出してきた善七と、大きな筆を手にした白田剛六が、そろって責め立て始める。

芳年「この匂いだ……この匂い。責めれば責めるほどしみでるこの香りは、この女だけのもの……」

鼻をうごめかせながら、ひとり絵筆を振っている芳年。

お静の苦悶の声が、部屋中にみちる。

81 越後屋別宅・中庭

海風堀からのぞく平次の顔。あたりを見廻し、飛びおりる。

到底、きれよう縄ではない。

お静「……………あ、な……………た……………」

双眸をとじて、ぐったりと台上に、全身をゆだねる、その羞恥にみちた姿態。

直次郎、ちかよる。

直次郎「お静姐御、そう恥ずかしがることはないでしょうよ。昨夜のことを思い出してごらんなせえ。第一、この姿で恥ずかしがったって、何の役にもたちませんぜ」

直次郎、太股のあたりを撫で廻す。

平次「やめろ！ やめろ！」

怒号する平次の縄尻を、しっかりと柱にしばりつける若い衆たち。

平次「て、てめたちゃ、それでも人間かッ。

はじを知れ、はじを」

善七「知らねえのさ」

増右衛門「どっかに、そういうのもあったようだな、お豊」

お豊「さあて、ありましたかねえ」

にらみつける平次の目の前で、増右衛門に寄りそったお豊。ゆっくりと部屋中を見廻してゆき、拷問台のお静をみる。

お豊「ああ、あったあった。ありましたよ、旦那」

旦那

増右衛門「……………」

お豊「それ、そこになにやら白い大きなものが……。平次親分のいう、はじとやらは、多分あんなのじゃあござんせんかねえ、旦那」

那

男達の哄笑。

一層悶える台上のお静。

増右衛門「これで、役者は揃った。そうだ、ガラッ八もおこしてやんな」

片隅で、気を失ったままのガラッ八に、

活を入れる白田。

ガラッ八「あ、姐御！ あっ！ 親分、親分

もですかい！」

泣きだすガラッ八。

齒を喰いしぼる平次。

増右衛門たちの高笑い。

その真中、拷問台の上で、ひとり、屈辱

の身をさらすお静。

小柄で、ぷりーんと弾き返すような肉お

きゆたかな胸から腰へかけての曲線。平次

が、掌中の珠と、可愛がった女体が、いま

十数人の男たちのいたぶりをまつかのよう

に、横たわる。

正木「では、越後屋。お静の料理、とっくり

と、楽しもうではないか」

増右衛門「いかに、始めましょう」

善七「旦那。平次とガラッ八に、猿ぐつわは

どうしやしょう。ぎゃあぎゃあ、騒ぎやが

ると煩そうござえやすぜ」

正木「ガラッ八だけにしとけ。平次の奴には

あの口から、わめくだけ、わめかせてえの

よ。何と云ってわめくか、楽しみさ」

直次郎「芳年さん、しっかり頼みますぜ。一

世一代の大芝居、迫真の画って奴を書いて

くだせえ。和蘭人が、高く買ってくれます

ぜ」

芳年「画の方はまかせとけ。それより、責め

るほうは、いいんですけえ。この姐御、な

まなかの事では」

甚四郎「まかしとき。この甚四郎、腕により

をかけて、このお静姐御を、のたうちまわ

らせてみせるから」

お豊「いい気味だわねえ、お静姐さん。これ

も、美人に生まれついた冥加ってものかし

ら。存分に、お泣きなさいましよ」

両袖をまくりあげ、手に唾した甚四郎、

お静に近寄ってゆく。

わらわらと、周囲をかこむ一同。

お静の肌から、にじみでる和蘭わたりの

薔薇のような匂いが、拷問部屋中に、たち

込める。

83……………85 省略（概要、次の通り）

お静、平次の前で、女として最も羞恥に

満ちた拷問の数々を受ける。

さらに、平次ともども、責められる。

二日の後、

平次のただひとりの味方、与力岡八衛門

が、平次夫婦の行方不明を探索、発見、救

出されると共に、越後屋以下の不正が、白

日のもとにさらされて、大団円。



奇クファンの二十五才になる独身の男性です。私は緊縛フォトによって常にあり余ったエネルギーを放出しています。毎夜独り寝の淋しさを慰めてくれる緊縛フォトこそ私の座右の友なのです。いかな左手に持って眺める唯一無二の宝物といってもよいのです。

私の好みとしては、少し痩せ気味の女性のほうが好きです。従って43年の一月号のカメラハントに登場した安井喜久子夫人は私にとっては理想的な女性です。同じく43年三月号に載った同夫人の告白「私達夫婦の甘い秘密」を見ますと夫人の素顔（だと思ふ）をあらわに晒した素晴らしい緊縛フォトが出ていました。

多少フェチの気味もある私の趣味にもびったり合った変型パンティをはいた誌上のフォトを見るとたまらなくなつて早速安井夫人の緊縛フォトを注文してしまいまし

た。待ちに待ったフォトが四日目に到着しますと早速トイレへ入って開封しました。わななく指で、一枚また一枚と眺めていますと何もしないのに思わず興奮の極に達してしまいました。

その後もトイレの中か蒲団の中で何時も左手に剃毛された夫人のフォトを手にながら若い青春の童貞を守ってくれるお守り札のように崇めまつています。私にとって決して軽くない出費ですが、トルコ風呂で一時の処理の人間的な煩わしさと無駄な支払いのことを思うと、フォトの方に充分満足しております。

よくよく考えますと私はSだと思ひます。打ち下ろす鞭のもとに泣き叫ぶ夫人を見て自分も自分の一番好きなタイプの夫人を思いき

り縛りあげ鞭打ち責めたいと思うのですから当然でしょう。次にフォトの内容と感想を述べます。

「エビ縛りの鞭打ち」一枚目は両足首を縛られエビ縛りで首に縄尻を固定してある。お尻を上にあけて今までにない妖美なポーズで穴あきパンティを着用して此方に向けている。告白記事には「少女のような可愛いお尻」とあるが、なかなか大きく写っている。どんな型のパンティかフォトでは、はっきり分らないが、ポーズの関係で穴のあいた部分が明らかに見えるのがうれしい。私の一番気に入ったフォト。鮮明に美しい夫人の顔が写っているので尚楽しい。

二枚目は、横になったエビ縛りのポーズ。お尻の方からライトが当たっているの、顔面は少し暗いが乱れた長い髪の毛が魅力的である。股のつけ根ぎりぎりの余程小さい変型パンティではあるが、白い部分に穴あきがあるのがよく分る。私にとっては最高の作品で拡大鏡を購入して鑑賞している。三枚目は、横から狙いをつけたポーズでお尻にハイライトが強くパ

ンティの穴の部分は白くとんでしまっている。しかしウエストのゴム紐と太股のゴム紐がはっきり写っているの、凡そのパンティの型が想像できる。コントラストの明暗が良好で夫人の横顔が魅惑的に写っている。四枚目はいわゆるエビ縛り。小手高に挙げて縛り長い髪が前方に垂れている。痩せ気味の夫人にしては乳房が割に豊満に写っているのが嬉しい。

以上エビ縛りの四枚ともポーズが異っており、しかも穴あき変型パンティの着用。猿轡をしていないので夫人の顔がはっきり写っているなど縛りファンの独身者にとっては最高の贈物といつてよい。さて、人は好き好きといつて太ったタイプの好きなファンも沢山あると思いますが、私のように痩せた女性の縛りファンも決して少なくはないと思います。

今まで、どちらかと言えば、ポリウムのある若い女性の縛りフォトが多かったようですが、私達ファンのいることも考えて、もっと安井夫人の新作を発表して下さるようお願いします。今回は安井夫人の作品の中で一組だけの感想にとどめましたが、引続いて書いてお送りいたします。

瘦身女性緊縛礼讃 佐藤敬三



(第五十九回)

辻村 隆

娘たちが読んでいる女性週刊誌や十代の週刊誌を、見るともなく茶の間で拡げて眺めていると、ドキッとするような内容にお目にかかる。かつては、茶の間社会では禁句に近かった、ホモ、レズ、飼育、S、M、緊縛、ソドム、サドマゾ、アブ、セックス、オナニーetc……といった言葉が、平然と書かれている。親馬鹿で、自分の娘達だけは健全だと思っただけ、案外知らぬは親ばかりで、勤め先や友達同志となら、そんな話題に興味を抱いているかも知れない。今流行のピンキーとキラーズの「涙の季節」という歌も、長女と二女が、しきりにヒソヒソ声を潜めて、秘密めいた笑いをもらしている。「どうしたの？」ときくと、長女が「でも会社の男性が、うちみてヒヤカスんだもの」といって顔を赤らめる。ちなみに長女は恋人が出来て恋愛進行中で、結

婚が近いのである。

うかうかとテレビなどで聞き流していたが、そんなドギツイ文句なのかと、改めて耳に入れるつもりで、可愛いピンキーの歌をきくと、成程かなりキワドイ。「あなたが耳許で囁いた夜明けはふたりが結ばれた美しい夜明けよ」とすじこぼれるこの頬の涙にあなたは濡れていたなつかしい夜明けよ
 忘れないわあのひととき、私は今貴方のもの
 あなたが耳許で囁いた夜明けは昨日の私が消えてゆく夜明けよ
 優しいその胸に生命もあずけてあなたに愛されみたされた夜明けよ」
 なにが涙の季節なものか、処女喪失の、セックスにみたされた夜明けの歌である。しかもあのひとときを忘れないわと繰返し繰返しいつてるのだから、ああ何をかい

わんやである。長女や二女は、このうたの真意をどうとっているのだろうかと思うと、妙な気持ちになった。

先日佐々木耳環生がひょっこり訪問された。かなりの御高齢で、全然両耳がきこえない。私が筆談して、彼は返事する。彼の質問には私が書く。応接間に彼と二人いるのに、きこえてくるのは彼の声ばかりという奇妙な現象である。両の耳たぶに無慮数十個所の穿孔があり、大きいのは爪楊子の半分に分折ったようなもので栓がしてある。鼻も勿論穴があけられてあって、過去の鼻孔を穿った方三人(M七〇生、増田喜代司、美柳輪生)にくらべても、この佐々木耳環生の穿孔が一番大きかった。幼児の頃、中耳炎を患ってきこえなくなつて以来、数十年間、隔絶された孤独の生活をしてきた彼にとつて、独り愉しむ、耳責、鼻責めが唯一の慰さめではなかったであろうか。耳がきこえぬというコンプレックスが、耳に対して人知れぬ憎悪を感じ、それが耳責めに変わって、いつしか、きこえぬ耳を責めることにより、人知れず憂憤をはらしていたのではないだろう

か。それがいつしか耳に憑かれ、自から傷つけることによって、穿孔時の苦痛の快楽を覚え、次々と数限りなく穿孔していった様に私には思えた。彼の耳の穿孔は、一眼みてすぐ分るほどの異常さであつた。にもかかわらず、平然と電車にのり、バスにのって私宅を訪れてくる彼の心の中には、人眼も噂も何のその、唯、その一事のみに邁進しようとする人間の激しい気魄があつた。彼の耳たぶに近々と顔を寄せて洞察すると、ブーンと化膿した異臭が鼻をついた。鼻梁の無数の穿孔の穴に、次々と留針を挿し込み、重い鉛玉をぶら下げて、しかも尚、両耳に耳朶も干切れん許りの錘鉛をはめ込んで、その重みに顎をのけぞらせ乍ら必死に耐える彼の顔には、まさまだと悦虐の極致の、快心の笑みが流れていた。流石に慄然としながら私は、この耳、鼻責めの老人の顔を、数枚カメラに納めた。

同好のS氏より一冊の本が送られてきた。「残酷の日本史——民族の心に眠る魔性の正体」——カッパブックスで定価三三〇円である。一読して、真先に感じたのは「徳川女刑罰史」等一連の刑罰ものが



梨花悠紀子の面影

氾濫する時流におもねった内容であつたことである。拷問編・刑罰編・私刑編・因襲編と四部に分れているが、これといった新味は何もない。過去に私が、渉獵して読んだ、そうした刑罰の、駆足の集大成である。残酷を売物にするため、古文獻や現代文獻から、残酷な面だけをよせ集めたようなもので、面白半分に伝承された刑罰の種々相を実際に行なわれたように

書かれてある点もある。古文献こそ読破しないが刑罰や残酷ものに關しては、三十年来読みあさつて来た私にとっては、目新しいものは、余りなかった。こうした読物を今の時代に刊行するところに筆者の曲学阿世がフツ覗かれるようにいやであつた。

× × ×

極道軒氏が、誌上で梨花悠紀子の最近のフォトを熱望しておられたので、よせばよかったのに彼の讚美の熱意にいい氣持になつて、彼女のフォトの中で特に秀逸と思われるもの数枚、編集部で住所をきいて直送したのに、ウンともスンともいってこない。別段彼が私に直接に、送ってくれと頼んだわけでもないのに、返事がないからといって怒る筋合いでもないが、同好者なら、一言くらい無事受けとつたとか、何とか簡単でよいから返事ぐらひは欲しいところである。頼まれもしないのに、奇ク誌上で熱望しているからといって、貴重なフォトを易々送つたら、結果は腹の立つタネを蒔くぞとの自戒の氣持で、むしろ私の軽卒さを楽しませてゐる。最近も、かなり古い交友のあつたJ氏から簡単な文面の葉書で、辻村隆が近頃余り

有名になり過ぎて、もう私如き素人の手の届かぬところへいつてしまわれた。以前の様に心易く喋り合えた昔が懐かしい。といつてよこされた。半年以上も音沙汰がなかったので取る手もおそしとよんでみたら斯様な文面である。私自身決して昔とは変わつていないつもりでも、映画テレビにチョイと顔を出すようになると、もう昔のような秘密めいた交際は出来難くなるのであろうか——。これは私のせいではない。私のような人間が浮世の表道を歩けるようになった昭和元禄時代のせいである。いつの間にか、いっばしのベテラン振つて納まつてはいないかと、私自身、深く反省している。

× × ×

納税の季節である。所得税の申告で税務署へ行ったが、東映の仕事や原稿料はカッチリ一割の源泉徴収税をとられていたので、収入の雑の部へ書込んで申告にいったら、散々聞きただたされた。東映の源泉徴収票の職種欄が「緊縛指導」となつてゐるからである。税務署員にとっては、初めて耳にする職種なので、きくのも当然だろうが、説明する私は眼をシロクロさせる。くわしく説明したところ

で、SM氣のない人間なら分りつこない。まして、こんなイカメシイ騒然たる役所で、SM談義する氣も更々おこらず、こんなことなら、東映分のみ握りつぶしてしまつた方がよかつたと悔んだが、あとの祭り。こんな場所で精しく説明も出来ないから、よかつたら我が家へいらっしゃいといつたら、三十前後の税務署員、眼を輝かせて、是非共、くわしく聞きにゆきますという。招かれざる客の熱意に苦笑いして退出した一幕。

× × ×

もうそろそろ妊娠七カ月に入つてゐる筈の金原奈加子より、今もつて連絡がない。若し留守中連絡あつたらと、家内にも言い含めて待機してゐるのだが、妊娠のチャンスを見すみす逃してしまふのは何としても惜しい。何分にも一方通話なので、切齒扼腕してもどうにもならない。それとも日を追つて膨れゆくわが腹に、少々怖氣づいたのか。箕田氏にきくと彼の方へも全然連絡ないらしい。あのちっぽけなベビーガールの腹が、今頃はもうかなり膨れてゐるだろうにと思つと、氣もそぞろの昨今である。



洋画に現われた人間馬

佐野 寿



ここに紹介するスチール写真は、仏伊合作の映画『ラ・マトリアルカ』からの物ですが、ミミー（カテリーナ・スパーク）が演ずる、恋人の医師とのクライマックスシーンです。

ガラス張りの豪華な家具に飾られた部屋や廊下を、美女は人間馬に跨ってねり歩くのですが画面は、あらゆる角度からこの



騎上の態を映し出してくれます。グラマーなミミーに乗りこなされる人間馬……馬化願望者にとって夢の具現ともいえる、正に一刻千金のシーンなのです。

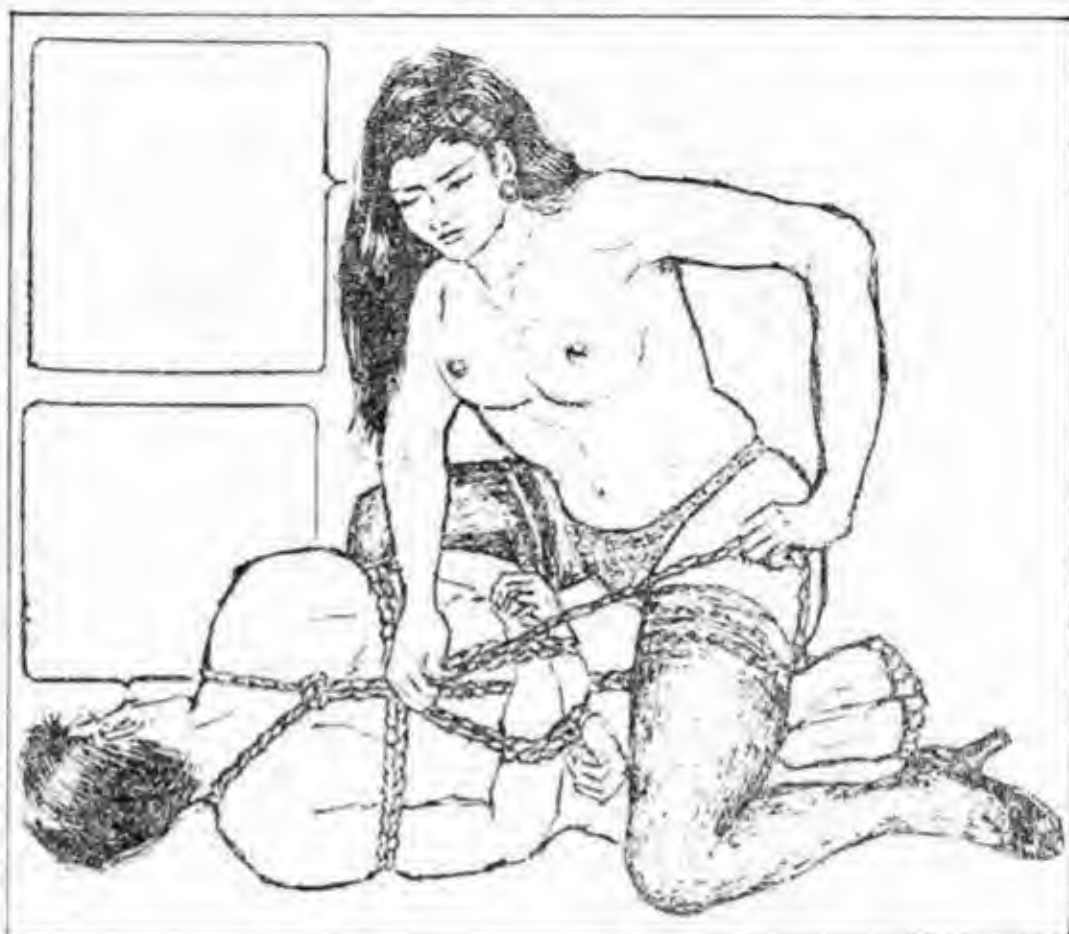
しかも、このミミーの乗りこなし方は、上品さといい、セクシィな感じといい誠に申し分ないもので、私はかつてこれ程、クリテリオンの高い人間馬シーンを見たことはなく、只、驚嘆するばかりでしたが、実に素晴らしい乗馬ぶりという他はありません。

グラマーな美女にずっしりと乗り跨られたまま、人間馬は階段を昇らされたりして歩き廻るのですが、その額に汗してのこの馬化ぶりは、まことに奉仕の悦びに浸りきっているように見え、うらやましいことです。

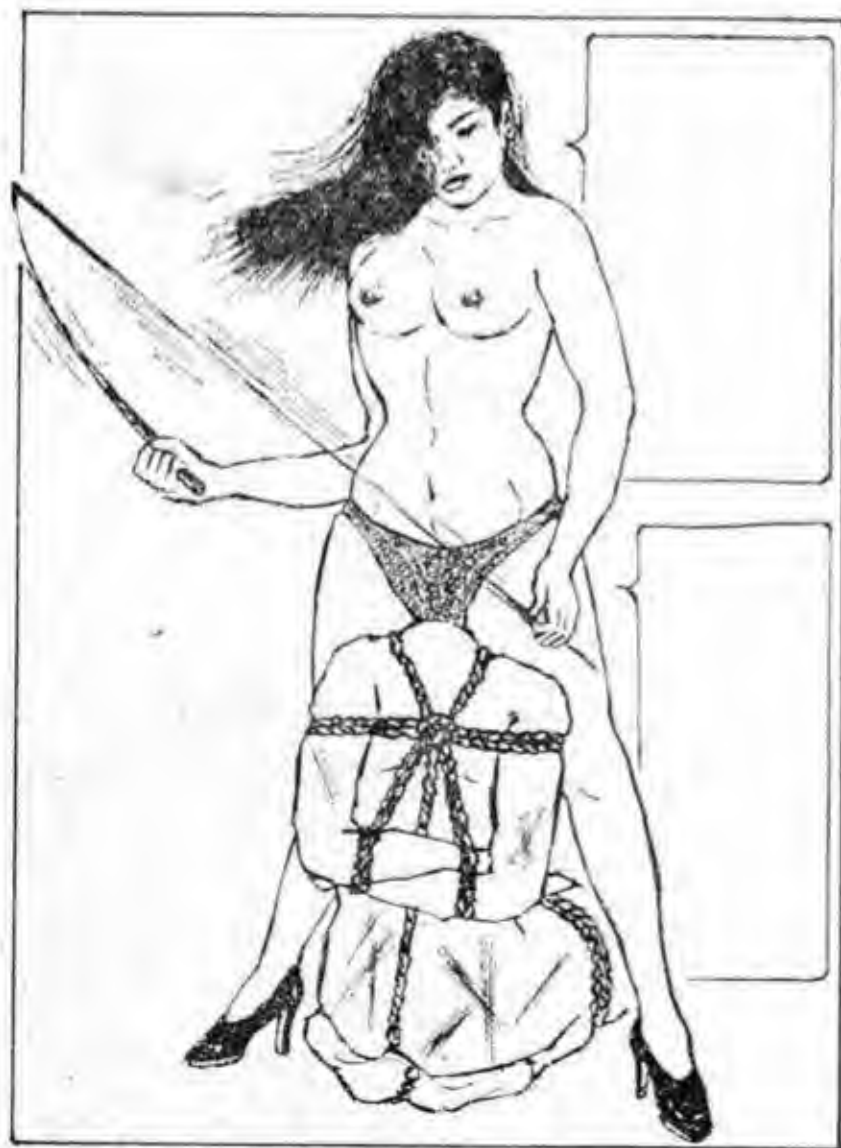
奇ク愛読の マゾ男君に贈る

鳥取・
奇クファン

秋山夫妻のスケッチを投稿してから、早くも一年になろうとしている。元々下手の横好きとやらで絵は好きな人だが、一旦写真撮影の味を覚えたら、絵はどうしても二の次となってしまう。フォトはたとえそれが演出であっても事実を語る。それにひきかえ絵の大半



は作りものと云えよう。奇クで一番好きなのは、愛読者の大半がファンである「カメラ・ハント」だ。そして体験、告白文に強く惹かれる。勿論奇クサロンのも大好きだ。矢張り現実にあったことの方に親しみを感じ、身近な出来事として刺激を受ける。だが



しかし、確かに小説に、そして絵には、現実への道のりとしての夢がある。そしてそれらの主要人物に自分を置き替え、空想の中に我と我が身を沈め、その一時を過ごす人達も多かろうと思うと僕のアイデアを贈りたくなった。

何よりの喜びでもある。最近、米子・鳥取・と愛読者の投稿があり、何よりの心強さを覚える。勿論、増田夫妻とて鳥取の出身だが、スケールの点からまだまだ近付き難い。前年の一月号の米子マゾ男さん。今年の一月号の鳥取県の泉健吉さん。県内同好者としてお会いしたい気持ち。同じ妻帯者同志に加えて、S・Mレベルも同じように思う。去年、本年と、年は違えど同じ一月号の投稿とは何かの縁か。

「SMカメラ・ハント」に望む

西野正一

最近号のカメラ・ハントは辻村氏が緊縛指導をなされた東映映画のスティールや楽屋話が續いてばかりいるが、これも余り連続すると面白くない。

カメラ・ハントの面白さは、何と言っても登場人物の意外性、つまり女性モデルの素人っぽさにあると思う。その意味では、女優の緊縛写真は職業臭を拭い去れないのではないか。

次の面白さは毎回毛色が変わった女性が登場し、その女性の緊縛麗姿を縦から横から十分に鑑賞しうる点にある。関西ヌードの特出しも、一人ずつやってくれるから面白いのであって、五人も六人も一度に御開帳に及んでくれるは見方は目が廻ってしまう。最近号のカメラ・ハントには、この弊が無いとは言いきれないと思う。

そして残る面白さは、女性モデルが、総べて美人ぞろいであるという点である。この点では、東映の女優は申し分なし。

号は、この連載物の面白さを全て完備していたからである。

第一に、モデルの木戸悦子夫人が、妊婦であること。これは、カメラ・ハントの面白さの焦点である意外性を、百二〇%満足させてくれる重大な要素である。しかも文面および写真から、悦子夫人は相当の良家の夫人であられるように拝察される。

第二に、妊娠九カ月という悦子夫人のメロンの如く充実した腹部を中心として、左右から十分に鑑賞させて頂けたこと。惜しむらくは、背後からの一枚がなかったことぐらいであるか。

第三に、悦子夫人は、文句なしの美人であるということ。しかも近代的な美人であられる。

そして、そのハントの写真を、木戸悦子妊婦写真として汎く天下に公開され、興味ある読者は、この分譲写真を手に入して、より鮮明なフォトに接する機会を与えられハント・マン辻村との自同性に酔うことが出来る。

カメラ・ハントの作品の分譲は

今後折にふれてなされるべきだと思ふ。折角の辻村氏の力作を秘蔵しておくのは勿体ないハナシであり、前に誰かが提案しておられたが、秘蔵版のプレイフォトも、発表に差支えるプライベートの部分を修整削除するか、小道具でうまく隠す等の工夫を加えて、出来るだけ多数発表して頂き度いと念じている。

最後にカメラ・ハントに登場した女性モデルの再登場も一考をお願いしたい。左近麻里子さんの再登場も楽しみである。そして、強力に推せんしたいのが、やはり、木戸悦子夫人である。昨秋無事にお嬢さんを出産なされた木戸夫人も、既に育児に慣れておられると思うので、誰か子守を備ってあげて、木戸夫人に悦虐の楽しみを再び味わせてあげると共に、私達マニアにとつては、出産前後の比較も出来て、一層の幸せを感じる。殊に、木戸夫人の豊満な、形の良いい乳房の線が崩れない裡に、木戸悦子夫人麗艶緊縛ヌード写真の分譲、あるいは誌上発表がなされる、まさに、錦上花を添えると思うのだが如何。

木戸悦子夫人の勇氣と理解ある再登場を希いつつ……。

編集部だより

○待望されていたながら着手が遅れていた「花と蛇」特集号は四馬孝画集を巻頭に昭和四十二年一月号以降現在まで本誌に連載した本文を一挙登載し目下着々進行中である。四月上旬には発売できることと思う。乞ご期待。

○臨月を月余に控えた金原奈加子さんの写真撮影が出来た。カメラハントには妊婦逆さ吊りの模様が詳細記事される筈。妊婦ファンは勿論のこと、緊縛マニアの方々にとつて垂涎の作品となることと思う。カメラハントには引続いて新人が次々と登場する予定なので、お楽しみに待っていたきたい。

○使用済の月経帯がある程度まとまって入手出来た。それにモデル使用済の下着類も若干溜ったのでご希望の読者の方々にお譲りしてもよいと考える。返信料同封の上編集部宛て照会願いたい。

○嘗て本誌上に連載した斎藤夜居氏の「稿談性風俗資料入門」は芳賀書店から『大正昭和艶本資料の探究』と題して発刊された。興味をお持ちの方のご一読をおすすめ

—A女に捧ぐ五十吟—

「春の責め」

麒麟 欧二



イメージ画 『発散』 春川ナミオ

○春の責め 遂に一糸もなく転ぶ
○後ろ手の指環哀しき春灯下
○菱縄の乳房に光る春の汗
○春の夜の柱冷たき立縛り
○朧夜の雨戸を閉して高手小手
○春の責め 口に押込まれしは何
○快き鎖の音よ春の責め
○縛らるるために生れし雪の肌
○肌褻れし縄の恋しき春の雨

○高手小手から春夜のプログラム
○美しき芋虫となる春灯下
○股縄の哀しく濡れる責めの果て
○短夜の責めの終りは海老縛り
○春の夜を開股縛りのまま眠る
○千金の宵をあられもなく吊られ
○短夜や雁字搦めで鶏を聞く
○逆海老の尽まどろめば夜の短か
○乳房囁む柱を抱きて春の冷え
○雛の部屋胡坐縛りのこれも雛

○首縄のいよよ食い込む春の汗
○春灯の壁に片足吊りの影
○本縄の女囚よ泣くはよろこびか
○春寒く後ろ手錠の胸の汗
○体臭を分かち春夜の皮手錠
○足枷にいろ奪われし春の爪
○後ろ手のままの厠に春の月
○吊り上げし腋に艶めく春の草
○梅の香のそこはかとなき猿轡
○春無残 朱唇を割りし縄一重
○下穿に声奪わるる春の責め
○春灯の真下に鼻をいたぶらる
○逆吊りの耳春雷を聞く虚ろ
○髪把りて曳かるる春の廊の冷え
○完膚なきまでに搏たれん春の宵
○早春の肌に仮借のなき答
○春冷えや答の下のめくるめき
○春浅く血も新しき鞭の痕
○大の字の双球に鳴る柳答
○たちまちに花芯を濡らす鞭一撃
○早春の汗玉となる木馬責め
○春の部屋算盤責めの骨が哭く
○嘴管いま深々春の夜も更けぬ
○ステレオに消えし春の夜の呻き
○春暁をまだ恥かしきアヌ責め
○春の部屋愛しきサドもまた裸身
○春光に映えて猛りし処刑者が肉
○春暁を震わす断末魔の呻き
○春の責め ああ恍惚の刻いたる
○放心の唇から唇へ水温む
○春の責め火の接吻でいま終る

する次第である。
○春三月を迎えて愈々緊縛フォトの撮影シーズンに入った。モデルとして誌上に活躍してみようと志される方は勇気を出してお申出願したい。カメラマンがいつでも出動できるよう待機している。それから、女性の手になる偽らざる告白や体験も、どしどしご遠慮なくお寄せいただきたいものである。
○昨年十月号のカメラハント「胎児の喘ぐとき」で登場し、その豊かな妊娠腹を晒した木戸悦子さんから最近便りがあった。嬰兒の手も少しは省けるようになったので緊縛モデルに使って貰ってもいいし又告白の文章も書いてみたいという。彼女は結婚前からの本誌の愛読者とかで、SMに大変理解があるので本誌ファンが取材されても面白いのではないか。
○43年3月号に河本光三氏が「願末記その後」として書いている生活に何不自由のない社長夫人が縄によるめいて縛ってくれる紳士を求めているとか。どなたか一度縛りとスタミナに自信のおありの方は、ゆっくりお相手をしてみては如何。夫人は自分で車を運転できるので京都を中心に二〇〇キロの行動半径がある由。為念。

映画に見られる Fモードの世界 菅原敏夫



今日、もう過去のものとして遠く忘れ去られたゴム引きレインコート。昨今、ブームを呼んだ表革皮、エナメルコート姿の女性も年々減り、町かどから消え、その姿を見掛けることが少なくなっている。現象は、自称Fレマニアの私としては大変淋しい限りである。私の大好きなフランソワーズ・

アルヌール主演のスパイ映画「女猫」が最近テレビで再放映されたが、なかでもベタバタと黒光りするビニールレザーとおぼしきトレンチコートに、あり合わせの代用ベルトでウエストをびっちり締め上げたスタイルは抜群であった。特にドイツ軍の機密書類を盗みに行く途中、駅頭で検問に引っか

二十二才の泣きごと

井 上 洋 一

奇クとの出会いからもう四年近くの年月が経つ。その間幾度かこのアブな世界から足を洗おうとしてはみたものの結局は無駄なあがきにすぎなかった。

しかし何がこんなに自分をひきつけるのだろうと、ふと考えてみる。ショセン持って生まれた性癖なのだろうが、それにしても、と思うのである。

り、変質狂的なゲシュタポの少佐に、レザーコートの上から乳房をつねり上げられ、訊問されるシーン。一見、なんでもないように見えるが、少佐によってポケットを切り取られたレザーコートを着せられ、手首と太ももをクサリで連結した手錠と足カセをはめられた不自由な足をひきずり、夜露に濡れそびれて散歩するシーン。そして、裏切者として射殺され、寒々としたアスファルトの上に倒れるラストシーン等、現在でも私の頭の中に強烈な印象として焼き付いている。

また「ヘッドライト」でも安物のビニールレインコート姿が、薄幸な女を演じた彼女にマッチしてなかなか良かった。

「墓場なき野郎ども」で黒革皮のトレンチコートを看護婦の白衣の上に肩から引掛けたサンドラ・ミロ。

「トリプル・クロス」で国防色の総ゴム雨合羽に身をかためたロミ・シュナイダー。「昼顔」のカトリヌ・ドヌーブ等も、なかなかイカしていた。

また、中でも圧巻だったのは、「目をさまして殺せ」で、女優のネームは忘れて思い出せないのだ

が、赤色のキラキラ光るエナメルレインコートにブーツスタイルの彼女が情夫的存在の男に殴る、けるのリンチを受け、のたうち廻るシーンは最高であった。

テレビ映画では「おしゃれ(秘)探偵」で女探偵を演じているダイアナ・リッグが、オートバイレーサーが着る黒革皮服にブーツスタイルで毎回登場し、楽しませてくれた。

その他、テレビ番組では、NHK「新日本紀行」「現代の映像」TBS「日本列島の旅」等で、ゴム作業衣に身をつつんだ漁村の働く女性が見られる。

邦画では、美空ひばり主演「娘舟頭さん」で、霞ガ浦をバックに帆引きアミのワカサギ漁で腰までとどくゴム長、肩までのゴム手袋をはめ、胸当ゴム前掛け、重労働に打ちのめされているシーンや、「五十円横丁」でのゴム合羽ゴム前掛けスタイルで魚屋の女主人を好演していた望月優子等、印象的であった。

また、最近観劇した文学座公演の「海鳴」では、杉村春子をはじめ、ゴム合羽、ゴム前掛け、ゴム胴長等のゴム衣装を着用した座員が登場し大いに楽しませてくれた。

人は、男とは本質的に加虐趣味を持つものだという。そうかも知れぬ。しかし奇クの世界は現在の社会通念としては、やはり異常な世界に違いない。尋常でない新奇な刺激を求める心はだれしも持っているもので、たえず同じことをくり返してきた夫婦が、SMプレイというものにそのケンタイをいやすことはうなずけるが、独身でしかもその体験すらないこの青二才が、小説「花と蛇」に身体うち慄わせ、歓喜して耽読している様は正に異常だ。どこかが狂っている、何かまちがったという感慨が寒々とした自意識の中に去来するのであるが、それにしてもかくまでも己れをひきつけるものの正体は一体、何であろうか――。

わからぬ。わからぬままに奇クに溺れて青春の大半を費やしてきた今日、一抹の悔恨と、(しかたねえや、こういう人間なんだ、俺は)という淋しい諦念。

人生とは、そんなものかも知れないが……。

誌上で活躍されている方達は、その社会的地位も着実に保っておられるにちがいないが、しかしその社会的な自分と、その奥深く沈められた反社会性との相克の中にSMプレイというカタルシスを自ら統御されておられるように思える。りっぱだと思ふのだ。それが自分にはできぬだけに――。

この世界に人生の全てを没入させれば、そうする事が可能であれば、それはとりもなおさず我々にあつては桃源境であろう。しかし現実のその道は、いきつく所は自らの破滅以外にない。

このことは何も男性にのみ限られない。

被虐趣味を押し進めれば、それは死であらう。Mを自認する女性だって、どこかで守るべき一線は保たねば身がもたないはず。それを現実に実践して、この世界のための快楽をほしいままにしている数々の女性。やはりうらやましいと思ふのである。

ところで、一体今の自分に何が出来る。

唯、空想の世界のみで自らを慰める他に方法はない。悲しいではないか。哀しいんですよ、え、先輩諸君。

ああ、肥満女性

赤畑修造



肥満女性番付の関脇にランクした松井康子女史。われらファンの要望に応じてサッソウとピンクより五社に出世? 日活の今昌監督(この人も最近作の出演女優をみると、肥満女性愛好家では?)の『神々の深き欲望』に出演(キネ旬第一位)早速路線に乗り『女番長・仁義破り』に、しかも刺青姿で登場!、お陰様で、これからは肩身広く堂々と、五社系映画館で観賞出来ます。

待てば海路の……。拙文も「読者通信」より「奇クサロン」に昇格?

尼崎の高浜様、豚妻のことでもうも済みません。胸102、腹86、下腹105、腰104、大腿61、体重83K、44才。これではどう見ても、お世辞にも……という訳。恥を書きましたが、これがわが豚妻のサイズです。(昨夏の写真を見てやって下さい)京都の美恵子様、水野香代様のお二方様、どんなものでしょうか。

例によって通信IIプレイボーイ3・11号「女の世界」特集に妊婦の写真。同じ号の「全ブス連水着に挑戦」に川村都女史の堂々たる勇姿。別冊アサヒ芸能NO4にホステス嬢「玉川お芳の水門破り」の刺青がありました。

貴誌に再会しての感想

暗 愚 楽 無 道

貴誌を初めて見たのは、今から十五年位前のことであった。その頃は、今と違い性の解放といってもそう凄いものではなかった。いわば、戦後の混乱もやや治まり、世の中が落ち着きつつある時期で、その時期での貴誌は、まことに珍しい存在であった。書名通り、奇譚といえる内容であった。それから何年かたって書店に貴誌を見た時には、内容は、かなり珍しさを失っていた。然しグラビア写真が内容を補っていた。そしてまた何年かたって、つい最近貴誌を見た時、その内容は昔日の面影を失っていた。初め同じ書名の本とは信じられなかったくらいだ。

大誌にまでセックス記事満載である。しかも大胆な挿絵つきで微に入り細をうかつ描写している。昔は「平凡」や「明星」は少女の好む甘い内容の、まあまあ健全な雑誌であった。それが今や「平凡パンチ」「プレイボーイ」果ては「週刊明星」までも性記事はあふれている。それも読者は、中・高校生が多いといわれる。そしてほとんどの週刊誌がカラーのヌード写真を入れ、小説も凄惨内容のものが多い。

特に「週刊明星」連載の梶山季之「男を飼う」は、貴誌の一步上をゆくサド・マゾ小説である。それも貴誌では描写していない箇所まで、露骨に描写している。それもさし絵入りである。また「婦人生活」連載中の「美男奴隸」も似たような内容である。なんのてらもなく全ての人の眼にふれる茶の間用の読み物に堂々と載せられているのだ。(貴誌が大びらに読めないというのではないが少なくとも貴誌は誰の目にも触れる雑誌

店に並べてはいない。市内には見ることができないくらいだ)今はストリップも凄い内容になっていると聞く。映画も同じ。アングラ劇場では、芸術、性の解放の名の下に凄惨内容のものを演じている。いわばそれがあたりまえになってきているのだ。それなのに、貴誌は昔日の面影を一変し、ごく普通の、いや大衆雑誌よりも穏やかになろうとしている。特異な存在であったものが……。遠慮することはない。もっと大胆に、積極的になってもいい。せめてさし絵くらいは載せてもいいのではないか。もし面倒なら、面にびったりの写真を使うのも、一つの方法だろう。(写真だけは独断場であらうと思う)最後に見るべきもの、本来の面目を失わないと思われるものに「カメラ・ハント」「花と蛇」(やや内容がマンネリ化している)がある。艶な、ねちねちとまつわりつくような筆まわしは珍重に価する。ただもう少し飛躍がほしいところ。願わくばもっと見るべきものを載せて発展させてほしい。



イメージ画 『ポーズ』 野江 三郎

＜短歌＞

「新妻讃歌」

菊池 淳子

蜜月の甘きくちづけ手首背に命
絶ゆかと縄耐えていぬ

乱れ散るしごき羞ずゆえ拒まね
ば我が白肌は結かれてゆく

今日よりは我に従うしるしとて
乳房に固き縄目をぞ受く

四つ這いになりてむきだす臀羞
を平手打ちする手は冷たかり

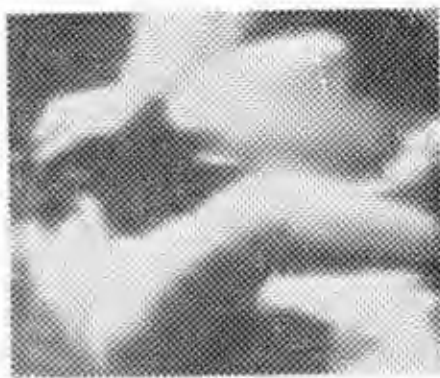
浣腸器見せびらかして縄を打つ
意地悪き手は休む間もなし

日本髪結いたるままで四つ這い
に全裸の肌を晒すかなしさ

後手に括られしまま夜具の上に
ころがされたる足のむごさよ

許し乞う瞳となりて跪く背に縄
尻が冷たく当る。

夜着薄く悶えるたびにむきだし
の素足に白き電光映える



思い出される映画

極秘女拷問

大西 光 蔵

私の数多く見てきたピンク映画の中で、眼をつむってみて思い出される映画という、どうしても谷ナオミ主演の「極秘女拷問」が浮かんできます。やはり、強烈な責め方にショックを受けたからだったのでしょうか。

上半身をむき出され、後手にされ、乳房をしばり出すように縛りあげられ、両足首で逆吊りに引き上げられてグルグル廻っていた姿。それに、頭の下に水を張った桶を置かれ、吊り綱をゆるめて顔を潰けられるという拷問に、もだえ抜く姿に、とても迫力を感じたからだと思います。



私も、他の人達がやっていられるのと同様に、あまり自信はありませんが、これと思う映画をわざわざ見に行く時には、カメラを下げて行きます。会社の帰りなどに、思いつきでとびこんで、カメラのないのを残念に思ったこともあります。この「極秘女拷問」の場合は、幸い不鮮明ながら撮影出来ました。時々、ひっぱり出して眺めるのも楽しみの一つですが、あの映画はすばらしかったナア。



と思い出した時に、その印象をすぐ見られるということは、今までは考えられなかった楽しみで

す。貴誌の読者なら、既に殆んどの人が見られたことでしょうが、もしよかったら、不出来な写真で、印刷出来るかどうか分かりませんが掲載願います。





地震と

夫婦プレイ

早木 夢二

拷問プレイの最中、ちょっと一休みとなつて、私がくんでやったコップの水を、ガボツと一気に飲みほしてから、慶子がポツリといったのだ。

「もし、もしよ。こんな時に大地震があつて、グラグラツときたらあなた、どうする？」

何が原因かしらないが、去年驚かされた大きなのを急に思い出したらしい。

そういわれて、私はある女のことを、ふと思ひ出した。その女も自分の胸元へかかった紐を覗めながら「縛りもいいけど、地震があったら困っちゃうな」と、いったことがあつたのだ。

「きつとあなたは私の縄もとかずに、ひとりできつと逃げ出してしまふんでしょね。薄情なんだから」

慶子はそういうが、薄情であるかどうかは知らんけれど、地震の

殆ど起こらない地方で育つた私は極端に地震に弱い。

ギツチリと海老縛りにした彼女を放つたらかして、自分ひとり、さっさと飛び出すこともあるかも知れない。

それにしても、縄がけされた素裸の女が、家から飛び出して右往左往すると、地震に動てんしている人たちも、あつと眼をむくに違ひない。

或は、どっかの家からも、そんな恰好の女の人が飛び出てきて「あら、奥さんも」てなことで、お互に縄のかけようを観賞し合うというようなことにも、なりかねない。

「地震の時は、あわてて外に飛び出したりしないことだ。内じつとしていゝのが一番ということだよ」

私がいうと、

「じゃ、あんたも一緒にいてくれ

僕のイメージ画 『想い出』 室井亜砂路



る訳ね」

と、さも安心したような顔付になつて、一休みして大分元氣を取り戻したらしい彼女は、キツチリとした菱縄がけの体を、何か催促するようにゆすつた。

「あなたが一緒にいてくれるんだつたら、どんな拷問中でも、いいわね」

そうだ、何も心配することはないのだ。例え、家の中に残つていて、家諸共に潰されてしまつても、私たちの半生をかけた、縄と

縛りの思い出は、私たちと一緒にある訳だから。

そんな時は、彼女だけでなく、私自身も縄がけして、私たち縛りマニアの夫婦にふさわしい姿になつていたいものだ、ふつと思つたことだつた。

「さあ、はやく次のお拷問にかかつてよ」

彼女の声がはずんで聞えた。私は六尺棒を彼女のかけ縄にかませた。

静子夫人に忠告する

青井松造

静子夫人。ボクはあなたにお目にかかったことはないけれど、あなたの日常の一部を、あるルートを通じて知っているものです。いえいえ、決してナントカ組などに関係があるわけではありません。もし、だれかあの一家の息の

かかった人間に繋りでもあれば、もうとっくの昔にチンピラにでもして貰って、せめてあなたの肌を噛む縄尻の一端にでも触れるチャンスを狙うのですが。残念ながらおそらく果し得ぬ望みでしょう。なにしろ、あなたの現在を維持

しているナントカ組は、あなたをはじめ何人もの良家の子女を誘拐しながら、おそらく必死の捜査をしているであろうと思う警察や探偵社の眼すら巧みに外らして、疑惑の一つも抱かせないほどの隠匿力を有しているらしいのです。とてもボクら如きがコネをつけ得るわけはありません。

配もないあなたのスーパーマダムぶりに感じ入ると共に、その健康管理に当るナントカ組の手腕には敬服の他ないのです。

ルポに依れば、あなたは「血を吐くような」とか「死にたいほどの思い」に耐えているとか？　とんでもないことです。そんな思いをするのは、稀有な美女に接しながら、いじらしくも「調教」という名目の「奉仕」をする男達のほうなのです。あなたは「屈辱と羞恥にまみれさせられた」と思っているに違いないですが、そんなあなたの「悶え」を見せつけられ放しの「調教師」側の身になってみるべきです。感謝しこそすれ、夢々恨むべきではないでしょう。



りのルポに接しているのですが現在の境遇になられてから一体どのくらいの日時が経っているのでしょうか？　ボクはあなたが布切れ一枚着けずに過しているらしいことを知っていますが肌荒れもせず、風邪一つひいたこともなさそうなあなた。更にその大半を縛られ通しでいて、その美肌にウツ血すら起した気

絶大な忍耐力を要するこの仕事を「悪業」の名に甘んじて敢行しひたすらにあなたの女体美に磨きを掛けてくれている彼等の苦勞を曲解して、あまりいい気になっていると、見捨てられるかも知れません。現に彼等はニューフェイスに氣を移しかけています。

あなたを「熱愛」してくれている彼等に飽きられて、もし「サデイスト」の手にも渡されたら大変です。氣をつけて下さい。急用が出来ました、ではまた。

合成フォトを楽しむ

桐 葉 巧 生

同封の写真は、姿体、背景を組合せ、三回の合成で造った『創作フォト』です。大変に面倒くさいものですが、大体、次のようなストーリーを頭に描きながらつくりました。ごらん下さい。

ある写真好きの男が、被写体を求めて山の中を歩いているうちに道に迷ってしまった。陽も落ちかかり、大急ぎで下山の道を求めて



ている古びた茶屋に行き当り、やれ嬉しやと、とび込んだが、「アッ!」とばかり立ちすくんだ。店先の縁台に、猿ぐつわをかまされ、ぎゅちりと縛られた娘が坐っているではないか。しかも、ほとんど全裸のままである。

呆然としてみると、奥から出てきた男が、ニヤリとしてその女を抱き上げた。女は、横ざまに抱かれてもビクリともしない。

「驚かしてスマン。どうかな、ワ

リ合ひ、よう出来とるじゃろ」男はそういつて笑った。

こわごわ近寄ってよく見ると巧みに造られたロウ人形だったのである。茶店の主人は人形師であつたのだ。そうとわかるとホッとした写真好きの男は、



強引に頼みこんでカメラに納めさせて貰うのだった。

みればみる程よく出来ている名人芸に、すっかり魅了されていると、人形師は次の間の戸をパツと開けた。長襦袢をしどけなくはだ

けられて、厳しい縄目に、猿ぐつわの奥に呻きをこもらせているような仇な姿体

が、そこにもここにもあつたのである。

続いて指差された棚には、六つの花顔が並んでいた。皆、猿ぐつわで半顔が隠れていたが、それだけに尚、その瞳が哀美に潤んで、ドキッ



とするほどに美しかったのだ。生首という不気味さがなかったのも、その瞳の美しさによるものであつただろう。

「すばらしいものですね」と、シャッターを切り終って男は人形師に声をかけた。だが人形師の姿はなかった。不審に思つて見廻した眼にポツカリと、そこだけが明るくなつてゐる裏庭が映つた。男がこわごわ近寄つて見ると、石仏の陰にも又、すぐ傍の石灯籠の横にも全裸の美女の緊縛体があつたのだ。



「あの男、素晴らしい腕前だが、なぜ、縛られた女ばかりをつくるんだろうか」

男は、はじめてそんな疑問を持ったが、そう思うと急に、なんだか、人形ではないような無気味な気持ちになり家の中を振り返った。すると、棚の上の六ツの首が一斉に彼に向かってウインクしたように思えた。驚いて眼をこらしたが異常はない。

「気の迷いか」

と思ったとたん、長襦袢の女がユラリと立ち上った。ハツとした

時、「タ、ス、ケ、テ」というか細い声が庭の女の猿ぐつわから洩れたようだった。ギクツとして見直したが、立ち上ったと思えた人形も、元のままだ。

勇をこして庭の女に近寄り、しぼり上げられた乳房に触れてみたが、冷く固い。やはり人形なのだった。

「ハヤク、コノ縄ヲ」

突然、背後に声があった。ギョツとして振り返った眼の前に、店先にあつた人形がグツと、縄に締めつけられた肌を寄せてきたように思えた。同時に、棚の生首が、揃ってフワ

ーッと宙に浮いて飛んできた。

男は、無我夢中で走り出した。

眼が醒めた時、陽は高く昇っていた。男はさんさんたる陽光に勇氣を得て、逃げて来た方向へ引返した。しかし、どうしても昨夜の茶店は見つからず、たしかにこの辺りと思える所で坐りこみ、やはり夢だったのかと考えるこんでしまった。



「第一、こんな道もない山の中に茶店なんかあるわけがない。内心で、女の縛られた姿がみたくて、下山の道を探し始めた。」

男はそう思っようやく、あるかなきかの問道らしきものを見付け、歩き出したとたんにギョツとした。たしかに夢？ の中で見た覚えのある石像が、雑草からのぞいているのだ。とびつくように、その蔭を探し



たが、人形の姿はなかった。もちろんすぐ傍らにあつたはずの茶店など、影も形もなかった。

ようやく人里へ出ることが出来たが、村の人にその茶店のことを尋ねることも、何か自分が嘲われそうが出来なかった。

だが、自宅に帰ってから、暗室の中で男はギョツとなって思わず叫んでしまったから、そんなバカなと打消したが、眼をこらして、再び叫び声を挙げた。現像したフィルムには明らかにその人形が映っていたのだった。

妊婦ハントに寄せて

羽 鳥 水 江

四月号を見ますと、辻村隆さんが一月十二日の日曜に、東京で、妊娠六カ月の女性、飯田カオルさんをカメラ・ハントされたことがのっています。この間、五月号にと思って短文を書いたばかりですが、一言何か述べたい気になります。

その「へ妊娠六カ月」との東京での出会いは五月号のカメラ・ハントで発表されることになっているようですが、旅先での解放されたムードで、しかも賀山社長抜きの二人っ切りのプレイであってまれ



イメージ画 『揺らぐ声』 小妻 容子

ば、どういうことになったか、神のみぞ知るといふ想像を抑えることが出来ません。へ妊娠六カ月の方は、初産で、旦那に内緒の出産費稼ぎ、ということですから、辻村さんさえその気になれば、というところでしょう。辻村さんの奥様にはわるいけれど、私としては、辻村さんにその種の物好きない趣味があつてはしなかったと思います。こういう妄想はいけないでしょう。ただどちらにしても東京と大阪では一回ボツキリになりそうなのが残念です。

五月号の「へ妊娠六カ月」とのカメラ・ハント、大いに期待しています。辻村さんの妊婦趣味もいよいよ本格的になりそうです。

同時にうれしいことは、金原奈加子さんも妊娠されて、こちらは出来れば臨月太鼓腹まで、妊婦プレイが実現しそうなことです。やはり、「妊婦を追い求める辻村さん」として、まったく新しい分野を切り開いていただきたいものです。他誌では真似の出来ないタイプのアブを探求して下さい。新しい存在価値がここにはあります。十年余り前、私が妊婦ヌードをおそれるおそれる提案してから、どんなにこうなることを待ったことでした。

よう。普通のヌードモデルと同じように、ジャンジャン妊婦のヌードが撮られるようにと。

奇クなどでは追放されたグラビア・ヌードが、近頃の週刊誌などには、美しいカラーで、これでもか、これでもか、というほど氾濫しています。そういう中に一度でも、折りこみの大型カラー・グラビアで、妊婦のヌードがのらないものだろうかといつも思います。そういうものがジャンジャンのるようになればよい、というのは、無理な夢でしょうか。奇クなればこそ、なのかも知れません。それならそれで、せめて奇クでは大いにのせて下さい。グラビアがなくとも、私など、辻村さんの文章を読むだけでも楽しいのですから。妊娠している女をハダカにして、子が入っている腹をすっかり見せるといふ考えは、女である私をぞくぞくさせます。ぶっくり膨れた妊婦の腹に興味をもつ男の人達の好色なまなざしを思うからです。潜在的には、そういう人たちが多いのかも知れません。しかしあえて実行してみることは、辻村さんのように勇気がいります。大いになんばって下さいと言いたくてこれを書いたわけです。

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(むら)

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(あけ)

猪 吊り三態

大手札三枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(いの)

責め衣縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(せめ)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
玉田美佐子 略号(ねむ)

後手首の高縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
玉田美佐子 略号(ねへ)

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 四〇〇円
玉田美佐子 略号(ぬと)

全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
長野 良子 略号(てい)

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
長野 良子 略号(てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
長野 良子 略号(てほ)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
松本アサ子 略号(まと)

吊り打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(やり)

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文子 略号(ぬこ)

踊り子緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文子 略号(りこ)

月経帯のまま縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆす)

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(ほく)

髪を引き回される夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(ほむ)

膨満正面縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
長野 良子 略号(へな)

マニヤ全裸緊縛フット

大手札三枚一組 四〇〇円
栗本ミチ子 略号(いな)

強烈エビ縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(もい)

乳房責めの苦悶

大手札二枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(もろ)

全裸ムチ打ち

大手札四枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号(もた)

強打に泣く裸身

大手札四枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号(むち)

裸身の晒し

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(わあ)

全裸股間縛

大手札四枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号(せら)

双胸の強調縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
長野 良子 略号(そう)

動感海老責地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(とう)

色禪の開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
長野 良子 略号(いふ)

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(はす)

乳房しばり

大手札三枚一組 四〇〇円
長野 良子 略号(うは)

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(うい)

木馬責三態

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(もく)

椅子責めの果て

大手札二枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(いす)

檻に入れられた女

大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子 略号(もの)

浴室の全裸刺青

大手札三枚一組 六〇〇円
山原 清子 略号(よな)

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(はね)

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原・鈴木 略号(はた)

碧玉裸身緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円
刑部 典子 略号(のん)

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚・東浦 略号(きす)

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号(きせ)

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号(きそ)

女奴隷を飼育する

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚・東浦 略号(きて)

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚・東浦 略号(きと)

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚・東浦 略号(きな)

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(なの)

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(なむ)

全裸の緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 五〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆり)

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

- 遅ましき股に挟まる
大手札四枚一組 略号(あと) 一〇〇〇円
- 素足の脂がべっとり
大手札五枚一組 略号(あて) 一二〇〇円
- 縛った男をムチで料理
大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円
- 女王様の人間便器になる
大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円
- 蠟涙の雨を全身に浴びる
大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円
- 尻の下につぶされた男
大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円
- エビ責めに弄ぶ女
大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円
- 神酒を与える女神
大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円
- 咽喉輪を股責極楽
大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円
- 素足の足舐と嗅香
大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円
- M男性を尻に敷く

- 大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円
- 人間犬の芸仕込み
大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円
- 女の尻に顔がつぶれる
大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円
- 足指に挟んだ菓子
大手札二枚一組 略号(あひ) 六〇〇円
- 男を縛って弄ぶ女
大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円
- 尻責めと股責め
大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円
- 大男の訓練風景
大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円
- 男を刺し殺す美女
大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円
- 男を尻の下に敷く
大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円
- 女の足下にうごめく顔
大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円
- 汚物を戴く男
大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円
- 男を馬にする美女
大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

- 人間椅子の御褒美
大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円
- 飼犬に餌を与える
大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円
- 浣腸器で男を弄ぶ女
大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円
- 股で絞められる首
大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円
- 芳香を嗅がす尻
大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円
- 人間馬の調教プレイ
大手札三枚一組 略号(まの) 八〇〇円
- 足舐めの奉仕と強制
大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇円
- 股責めにあう男の顔
大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇円
- 女に縛られて弄られる
大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇円
- 踏みにじられる顔面
大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇円
- 肩車に奉仕する青年
大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇円

- 男を縛って玩具にする
大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇円
- 首を太股で絞めあげる
大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇円
- 灰皿にされた男
大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円
- 裸女の長靴に悶ゆ
大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円
- 美女に飼われる犬の生態
大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇円
- 美女の手で縛られる過程
大手札四枚一組 略号(そと) 一〇〇〇円
- 女御主人に使役される男
大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円
- 美女のおいしい足を戴く
大手札四枚一組 略号(そめ) 一〇〇〇円
- むしゃぶりつく素足の味
大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇円
- 凌辱と美女のなぶり者
大手札五枚一組 略号(そり) 一〇〇〇円
- 素足を舐める構図
大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かみ)

強制 空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かな)

浣腸 責の極致

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 (一五〇〇円)
梨花悠紀子 略号 (れち)

強制 女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
絹川 文代 略号 (きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 (一五〇〇円)
梨花悠紀子 略号 (いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

浣腸 器と女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
絹川 文代 略号 (ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るは)

女体浣腸ブレイ

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ほい)

浣腸 後の排便

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (へか)

浣腸 される清子

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
山原 清子 略号 (かる)

浣腸 に興ずる女

大手札八枚一組 略号 (一三〇〇円)
山原 清子 略号 (かへ)

浣腸 に悶える女

大手札七枚一組 略号 (一二〇〇円)
山原 清子 略号 (かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けか)

いちじく浣腸の実施

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けき)

百CCのポンプ浣腸

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けく)

オマルに排便の姿態

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けし)

浣腸 後オシメ着用

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けこ)

浣腸 と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (のけ)

高圧 空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むい)

浣腸 場面大写真

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むは)

施 される浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むろ)

浣腸 をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

自ら 施す浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちぬ)

浣腸 器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちり)

浣腸 を施される女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちら)

浣腸 後介添排便

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かて)

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かち)

アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号 (七〇〇円)
山原・東浦 略号 (かの)

浣腸 に興ずる清子

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
山原・東浦 略号 (うも)

浣腸 される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (うわ)

浣腸 悦楽独りブレイ

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬる)

施 される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬか)

挿入 された嘴管

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るて)

襲い くる浣腸器

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るち)

女体浣腸 独り遊び

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ると)



丁度一年前御誌を行きつけの書店で見つけてから、なんとなく気に入った、一度結婚の経験のある三十才になる女性です。幸い子供がないので手切金にもったお金ではじめた洋裁店が順調に大きくなってマンションの一人暮らしを続けています。誰にもわざわざいさえず、それでいてお互いにも何の制約もされないSMの交際を空想しています。別れた夫との夫婦生活

からの経験から考えてみても、私には多分にSMの血が流れているように思えるのです。結婚生活の破綻も、味気なかった夫婦関係にもとずいてるのだと今になって気がつきました。今一人身ですし経済的には余裕がありますので、平常私の空想している激しいSMの生活を送ってみたいと思っております。お店の方は五日間ぐらいでしたら、使用人まかせでも差支えありませんので、小旅行のプレイをしてみても面白いと思います。年齢も年齢ですゆえモデルとしての自信はありませんが写真をとって下さることは構いませんし、ナルシズムの傾向が強いのので被虐のポーズをカメラにおさめてほしいという気持ちが強いです。誌上に載せるに値するようでしたら、箕田さんや辻村さんに縛られて写真をとってもらえたら、最高だと思っております。それは無理でしょうね。読者の方では四十才台の社会的地位のある男性とプレイしたいと思えます。全身の剃毛なんか、私のとっても望んでいるところなんですけれど、このようなプレイを好まれる方のおつきあいをしたいと思えます。

(横浜市・寺岡美美子)

小生は奇クを十年以上愛読しております。あの頃はグラビアの写真も豊富で大変楽しませて頂きました。最近になって、あの頃活躍していた梨花悠紀子嬢の消息が誌面にのっており、ファンの一人として大いに懐かしく存じました。出来れば再び彼女の被虐のポーズで誌面や分譲写真を飾る日の近いことを祈ります。小生としては昭和38年11月発行の文献特集号にのった「柱縛り首縄」のポーズには未だに参っております。こういった写真の再出現を心から待っております。

(静岡市・村瀬一夫)

宮城みち子さん、貴女の片脚を椅子にしばって他の片脚をあげその脚をそのまま首のところではりつけてみたい。椅子の上に逆さに首と背をつけ両脚を大きく右左に開き、そのまま肘掛にしばってみたい。貴女が最も喜ぶ浣腸は両手を後縛りにして片足首を天井からのロープにくくりつけて思いきり上げさせビールを飲ませる。足首をほどくと貴女は自分のスリッパか私の汚れた下着を口にくわえて床をふくのです。こう書いてい

るだけでゾクゾクとしびれる感じがします。可愛いみち子さん、たのしみにその日を待っている。

(岐阜県・完長好生)

皆様、如何お過しでしょうか。去年、有閑紳士に金の鎖で拘束された生活を夢見てお便りしましたが、女の側から望んだほどだからイメージに若くて明るい小麦色に輝き弾力性に富んだ容姿を想像されたのではと、返信する気持ちになれませんでした。悪しからず……陰の女として他人に縛られ虐められたいと願いながらも、本誌に堂々と出演しておられる方を拝見しますと、マスクも身体も全く魅力のない私は、心の高ぶりも決意も次第に鈍り、返らぬ若さが残念でなりません。でも世間は広うござりまするので、人の好みも色々あることでしょう、と自問自答してあらためてお便りしました。私はSMについて詳しいことは知りません。ただ心の中で求めていることは、自由を束縛され、女体の隅から隅まで責められ羞恥と苦痛の中から、痺れるような恍惚の世界へと導かれ、心身ともに捧げつくす奴隷女に飼育していただけたらどんなに幸いでしょう。たとえば

貴方に借金の証文をたてに、お邸へ引き立てられ無理矢理はだかにされ、立派に償いができるか検診を念入りにされ、首輪をはめ素肌を縄が縦横にかけられ、自由の一切を許されず、縄目の痛さになげきながら、あぐら縛り、股間縛りまた牝犬のように四つ這いを強制され、女の羞恥の意的意地悪く責められ観察され、消え入りたいたいの恥辱を否応なく与えられ、許されそうで許されず、常に女性特有の羞恥心を加味した奴隷教育をして欲しいと願っております。私は日常は台所相手の堅い家業を手伝っております。ハイ・ミスで背は低く、七十キロからの肥満体をしており、少々柔軟性を欠いた身体ですが、こんな女でよろしければ、吊りやムチ打ちなど極度の激しい責め以外のものでは、お受けいたします。故情け容赦なく縛って、ご観賞下さい。経済的に豊かで優雅な方、大胆に奴隷教育して下さい。遠近にかかわらずお伺い致します。お呼びつけ下さい。

(福岡・緒方則子)

梅川様はじめゴムマニア諸氏の方々のアピールで、編集部「オクラ」に片足突っ込んでいたと思

われる原稿が日の目を浴び、活字化されたことと共に、ゴムを素材にした特異さだけとしか思われないう愚作をとり上げ誌上に掲載して下さった編集部の決断と努力にはただただ感謝、感激、頭が下る思いです。この作品「女の城」は、創作としては処女作であり、学生時代、シナリオライターを志した関係上、多分にプロット及びセリフが映画的になったのは否めないのですが、皆様の読後感を拝見し少しは安心しました。ゴムが死ぬほど好きだという希少価値的存在の我々ゴムマニアの積極的な発言と創作活動で、このムードを盛り上げて行くには独創力に富んだ真実性の裏付けが必要であり、ゴムマニア諸氏、諸嬢のアイディア、アドバース、コレクション等の誌上発表交換で、より独創的な創作意欲が生まれてくることと確信しています。そして近い将来、奇巧誌を通じて知り合ったゴムマニアが一堂に集まり、ゴムを素材に心ゆくまで語り合い、ゴムプレイを楽しむチャンスがくることと思う。なぜなら、我々一握りのゴムマニアは孤独で非常に弱い存在であり、過去に何人かの勇気あるゴムマニア

が颯爽と登場しては、一人、二人と淋しく消えて行く現状に、自分一人ゴムの世界に取り残されて行くような気持を皆様も感じたことがあると思います。この際、一致団結してバラエティに富んだ独創的、かつ健全な存在として行く必要にせまられていると思う。私も孤独で絶望的な現状を打破せんと日夜、努力を重ね、誌上発表を前提として執筆中です。やがて第二、第三弾が誌上を賑わすことも近いと思います。ゴムマニア諸氏

諸嬢の活発な御意見をお聞かせねがえれば幸甚の次第です。

(東京・菅原敏夫)

藤原笑子様へ。ぼくは二十四才ですが、貴女の記事を読み私と同じような思いになるときが毎回あります。私は当誌を五年前から愛読しております。又、貴女に色々とお教えできるだけのことも知っております。私は貴女のような方のためなら、できるだけの努力は惜しまないつもりです。又は車を

木戸悦子妊婦写真

本誌十月号のSMカメラハント「胎児の喘ぐとき」へ妊娠九カ月の妊婦を縛るVでその便々たる太鼓腹をカメラの前に晒した木戸悦子夫人のフोटオを特に同好者の方に左記の通り分譲します。

九カ月妊婦全裸立像正面 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のま」

木戸悦子 略号「のめ」

九カ月の妊婦腹を晒す 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のや」

木戸悦子 略号「のこ」

九カ月の妊婦腹を縛る 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のこ」

木戸悦子 略号「のこ」

便々たる太鼓腹に縄掛け 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のし」

木戸悦子 略号「のし」

膨満腹も露わな両手挙げ縛り 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のろ」

木戸悦子 略号「のろ」

竹棒責めに喘ぐ九カ月妊婦 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のは」

木戸悦子 略号「のは」

十文字縛りの妊婦腹 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のに」

木戸悦子 略号「のに」

柱縛りに苦しむ九カ月の妊婦 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のは」

木戸悦子 略号「のは」

開股責めと椅子縛りの妊婦 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のへ」

木戸悦子 略号「のへ」

使って縛りなんかも研究したいと思ひます。

(神戸・竹林 英)

滋賀の赤畑修造様。お呼びかけを受けながら、ご無沙汰申しわけありません。小生は「京都・美恵子」の主人ですが、数カ月前（もう一年ほど前になるかもしれないが）当方、家内が小生の代筆にて貴兄に呼びかけましてから、他の同好者より数通、連絡文やお手紙、お電話等いただきましたが、帯に短かし、たすきに長し、にてなかなか同好の士といつても色々好みが違い、実現可能なものは、その中で一組ぐらいでした。今月号の貴兄の文章を拝見いたしました。多用のためとは言ひながらもご返信の遅れましたことを、お詫び申し上げます。拝見しますと、貴兄とは好み合いそうに思ひますので、ぜひお目にかかりたいと存じます。貴方は中年夫婦ですが、プレイの方は、まあベテランの部に入る方かと愚考いたしますし、家内は貴兄のランクにては大関クラスかもしれません。小生自身も大きい方です。貴兄が作られた番付の横綱水野香代様とは、すでに当方親交あり。お目にかかれるチャ

ンスがあれば、家内のフォトは勿論、プレーOKです。ただし当方社会教育的な職業ですので、プライバシーをお守り下されば、両方良き日に両夫婦にて会見いたしましう。その他、同好のSMプレイご希望の方は、誌上にてお呼びかけ下さい。

(京都・美恵子夫妻)

三月号に鬼山絢策氏の作品を見て、なつかしく思ひました。「へぼきゅうり」「らぶすれいぶ」等の名作は、いまだに私の脳裡に、はつきり灼きついています。円熟した筆と無理のない構想に、言ひしれぬ魅力を感じます。かつての「変態讃美論」のような、氏のエッセイも是非お願ひします。

(東京・石井好一)

新居美和子様、私もあなたと同じ大阪に住む三十六才の会社員です。あなたのメッセージを拝見して、早速にも名乗りをあげさせていただきます。SMについては私も古くからのファンです。青く澄みきった空、白い雲が浮かぶその下でそれを想うとき、いささか恥かしい気も致しますが、今では私にとってかかすことの出来ない重

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト

開股羞恥責めの姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八しう

髪吊りで強烈ムチ打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八した

片足首引きつけ縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八しち

尻立て鞭打ち艶姿

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八しつ

柔肌に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八して

エビ縛りの鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八しと

貞操帯着用鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八しや

痛打にもかく美女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八しゆ

あくら縛りの羞恥責

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 八しよ

片脚挙げて晒す裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とは

強烈エビ縛りで苦悶

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とに

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とほ

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とへ

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とち

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とり

乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とぬ

菱縄縛りで床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とる

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とか

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とま

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とみ

浣腸責め的美態開陳

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とめ

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八とも

要な一部分です。いかがですかお互いに誠実と良識を基にして、快くご交際をしませんか。

(大阪・岡田)

にお伺いいたします。

(新潟県・長岡正)

○

貴誌を十月の末に買い求めてよ
り、すっかり奇クファンとなり、
毎月愛読しています。花と蛇は、
すばらしいですね。近々特集号を
計画中とのこと、大感激。早く出
版されるのを願っています。その
ときは伏字なしで静子夫人、美津
子、桂子等の恥かしい責め場、肉
体の調教場面を、挿画か写真で、
ぜひ見たいものです。小生の近所
に住むK子は、一度結婚に破れた
二十六才の店員ですが、数回映画
を付合いました。近日中午に調教す
るつもりです。顔は十人並ですが
姿体がいいため、ポラロイドカメ
ラで、すばらしい女体の緊縛写真
をござらんに入れたと思います。
魔子さまⅡ約束、征服劇、聖牡丹
餅Ⅱは、面白く読みました。小生
は三十三才ですが、好色中年男と
して、これらの読物のように女性
の愛玩物として尻に組み敷かれ、
股間に首をしめられ、また神酒を
口に直接受けさせられたら、と願
望します。小生の近所に女王様が
おられましたら、いつでも御奉仕

Mの女性に告ぐ……と言っても

ぼくは始めて便りを出す二十四才
の男です。すでに前から考えてい
たことですが、縛る、ということ
に対して異常なほどの関心を持っ
ています。そしてぼくは、今まで
責め、ということを考えてきまし
た。マゾヒズム……この言葉は人
間の心の底にある。現実の性欲と
いって間違いないでしょう。どの
ようにしてエクスタシーに持って
いくか、それには単なる縛る、責
める、では到底そのような状態ま
では、程遠いのではないでしょう
か。浣腸、ローソク、三角木馬、
など色々責める方法があります。
しかし単一な責めであってはなら
ないのです。重複した責め、それ
に羞恥心をプラスしなければなら
ないと思います。それによって始
めてマゾヒズムを完成させること
ができるのです。その道具として
ぼくはいろいろと考え、実験して
きました。それは私たちの回りに
あり余るほどあります。台所の水
も用い方によつては、非常に強い
責具となります。そしてコカコー
ラのホームサイズ、ビール、塩、

可憐表情の全裸縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆめ

立縛り正面裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆえ

両手吊り全裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆひ

雁字搦目後手縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆあ

股間縛り柔肌責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆも

猿ぐつわ開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆに

豊満な臀部強烈責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆほ

強制全裸開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆみ

股間縛りで悶える

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆる

全裸縛りに羞らう

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆへ

私の妊娠腹を見てね

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆわ

縛られた妊婦横臥す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆよ

被虐に燃える全裸妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆぬ

尚も見せたい妊婦腹

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆる

股間縛り首縄正面

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれ

両手吊り正面晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よそ

全裸高小手の麗身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よの

全裸股間縛りの媚態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よや

強烈な変型エビ縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よい

正座猿ぐつわの仕置

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よふ

凄絶海老責め地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よえ

女体二つ折り縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よぬ

あぐら縛り全裸晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よあ

イルリの浣腸責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よた

まだまだ沢山あります。このような物でも恐いほどの責め具となります。ほんとうのマゾとは、そんなに生やさしいものではないのです。サディズムとは、そんなに簡単なことでは消化できないはずです。Mの人々にぼくが言いたいのは、体中がバラバラになったように感じるとき、責められて身動き一つできなくなったとき、始めてエクスタシーに達するのであって責める方も少なくとも、三つの責めを同時に行なうことが必要だと言いたいのです。あなた達は、もっともっと責められなければならぬのです。私自身としては、浣腸にベースを置き、それに平行して、いろいろな責めを行なっています。しかし不満なことは、一人しか責められないことです。それを複数で実験してみたいのですがどなたか協力して下さい方はないでしょうか。マゾの方、サゾの方。私が言ったことを実験してみして下さい。必ず、よい結果が得られることと思います。できればその結果をお聞かせ下されれば幸いかと存じます。

(大阪・土井義行)

東京地方に住んでおられる女王

様。私は貴女のドレイを志願する男性です。今日より女王様の忠実な犬となり、全裸で土下座し、手錠、首輪、足錠をはめて、いじめてくれる女王様。一日も早く買いたって下さい。女王様の命令なら汚物でも喜んで食べます。永遠に女王様の足下での生活を祈ってペンを置きます。

(東京・ドレイ松五郎)

新居美和子様、貴女と同じように長い年月、よき理解者に恵まれぬまま人知れず思い悩み、満たされぬ心の痛みを、十数年奇クを通じて一人淋しく慰めてきました。最近ある機会から、夫婦プレイを楽しんでおられる同好の方と、手紙で色々勉強になるアドバイスをしてもらっておりすが、全然、反応がなく、むしろ嫌悪さえ示す始末で、やはり異質のものは、あくまでも同化し得ないことを知りあきらめておりました。美和子様私は貴女より五年先輩ですが、お互いの立場を理解し、同じ心の悩みをプレイを通じて、いやし慰め合えたらと思います。どちらかと言えばS的性向の方が強いのですが、多少はM的な性向についても体験で理解しているつもりです。

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もろ▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剣玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

中河 恵子 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円

中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円

中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円

中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円

中河 恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円

中河 恵子 略号△はひ▽

うまく表現できませんが、今日まで二、三のパートナーとのSM体験もあり、全然無知の世界ではありませんが、やはり貴女のような心からの理解者でなかったようです。貴女の呼びかけに応えてペンをとりましたが、拙文のため、どれだけ貴女の心をとらえることができたか気がかりですが……。貴女のお便りを期待しております。

(大阪・森田義夫)

岩手県の守山実先生の通信、まことに興味深く拝見しました。小生、一医学研究員として、先生の浣腸への御関心には特に興味を感じ、何とか通信の道の開かれることを祈ります。先生の御体験、御思想をお洩らし下さい。小生は男女を問わず浣腸に関連した行為、浣腸そのものに関する文献記述、医史的にみた浣腸、それらのすべてに興味を持ち、資料を集めております。女性が浣腸の宣告を受けるときは態度についても、小生の経験では幾つかの型に分類できます。浣腸に対し強い拒否を示し羞恥の感情の強い女性は、肛門性感の強い女性に多いようです。このような女性の自瀆空想には、時に羞恥を犯されて浣腸を強制される

自分の姿が現われるようです。一昨年、米国の医師のもとで実見しましたが、米国の若い女性は、日本の女性に比較して浣腸に比較的従順に従いますが、特に驚くほど激しい羞恥で抵抗する人がいます。このような一人の若い人妻が治療の前に直腸指診を行われましたが指診の間中、激しい羞恥にふるえながら、明らかに性的興奮状態を示すのを実験し、このような羞恥嫌悪、拒否は、その人の肛門性感と関係があることを知りました。個人的に先生と文通できることを切に祈ります。

(東京・江沼生)

門真市の藤原笑子様。貴女のお便り、とても嬉しく拝読させて頂きました。貴女は一度結婚に失敗なさったそうで、お気の毒なことですね。孤独な性格で友人もいないとか。とても淋しいでしょう。貴女は奇巧との付き合いは二年のことですが、私は十五年大先輩になるわけですね。ずばり一言。私が貴女を縛り上げ可愛がって上げましょう。私は本年三十四才の会社員で二児の父でもあります。以前からSに興味を持ち、本誌や分譲写真等を沢山集めて、それを

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 略号△はわV 五〇〇円

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号△はふV 四〇〇円

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号△はほV 四〇〇円

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号△はあV 五〇〇円

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号△はうV 四〇〇円

柱に立縛りてさらす

大手札四枚一組 略号△はさV 五〇〇円

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号△はめV 五〇〇円

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号△はしV 五〇〇円

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号△はもV 五〇〇円

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号△はむV 四〇〇円

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号△はめV 四〇〇円

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号△はもV 四〇〇円

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号△はさV 四〇〇円

両手吊りて痛める女身

大手札四枚一組 略号△はしV 五〇〇円

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号△はすV 五〇〇円

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号△はせV 四〇〇円

両手吊りてあえぐ女体

大手札四枚一組 略号△はゆV 五〇〇円

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号△はたV 四〇〇円

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号△はちV 五〇〇円

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号△はつV 五〇〇円

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号△はてV 五〇〇円

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号△はとV 五〇〇円

観ながら楽しんでおりますが、かんじんのSMプレイの方は相手に恵まれず、一度も行っておりません。たまに妻を縛ったりはしますが、幼ない子供がおりまして、満足するには程遠い状態でございます。どうでしょうか、一度逢って頂けませんか。私は秘蔵の写真集や奇クの旧号等を持参しますから一緒にそれを見ながらお話するのでも大変楽しいと思います。そのあとで貴女とのプレイを楽しみたいと思います。無論、貴女は丸裸になつて頂きます。股間縛りにした上に、あぐら縛りにし、思いきり可愛がって上げます。

(尼崎市・松岡生)

この頃は女性の方の読者も多くなつて、大変うれしく思います。毎号、照会される夫婦プレイでも皆さんが大変美しく羨ましいかぎりです。心やさしく美しい女性。そんな人に着せてみたい黒っぽい着物。私は女の人の着物姿にあこがれる。黒っぽい着物の中から白い脹脛がのぞいている図。また、その下着姿に私はあこがれる。本誌二月号の二百四十七頁のような写真は、私のあこがれるポーズの一つで、大変気に入りました。下

着フェチの私にとって、着物の後姿に、またタイトスカートの後姿に見られるパンティの線を見ると「ああ、あの人はどんなパンティをつけているのだろうか。一週間も穿いているのだろうか」など色々想像して魅惑の世界をさまよっております。やわらかな太股に両頬を押しつけて、顔や唇で、パンティの肌ざわりを楽しみたいと思う。いつも女性と話しているとついそんなことを考えて、目をそらしてしまふ。もし「あなたのパンティを下さい」と言ったら、どうだろうとも思う。女性にとって汚れている下着を異性の目の前に晒す、というのは、どれだけの苦痛なのでしょう。あなたの下着を手にし顔にあて、少しの香りも逃がすまいとして、口の中で噛みしめている。こんな想像は、あなたにとって苦痛でしょうか。あなたのパンティに顔を埋めて、そのまま眠りたい。やわらかな絹の手ざわり。掌にすっぽり入ってしまったような宝物。あなたの使ったパンティを、好きな女性のハンカチをいつまでも大切に持っているように、いつまでも大切にします。どうか、あなたのパンティをお授け下さい。

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女 大手札三枚一組 略号△てきV 大塚 啓子	後手裸身柱縛り 大手札四枚一組 略号△てかV 大塚 啓子	縄目にあえぐ裸女 大手札四枚一組 略号△てくV 大塚 啓子	豊麗な裸身をくびる縄目 大手札四枚一組 略号△てこV 大塚 啓子	後手高小手縛り 大手札三枚一組 略号△てまV 大塚 啓子	長襦袢の緊縛色模様 大手札三枚一組 略号△てみV 東浦ひかる	緋の腰巻緊縛色模様 大手札三枚一組 略号△てむV 東浦ひかる	猿ぐつわに呻く女 大手札三枚一組 略号△てめV 東浦ひかる	柱由吊り強烈縛り 大手札三枚一組 略号△てんV 東浦ひかる	ポリウムを縛りあげる 大手札三枚一組 略号△てんV 東浦ひかる	縄に苦悶する裸女を狙う 大手札三枚一組 略号△てんV 東浦ひかる	真紅の腰巻着用姿態 大手札二枚一組 略号△うおV 大塚 啓子	縄に悶える緊縛色模様 大手札二枚一組 略号△うてV 東浦・大塚	真紅の腰巻着用縛り 大手札四枚一組 略号△うこV 大塚 啓子	華麗なる緊縛裸身 大手札三枚一組 略号△るむV 一宮百合子	みだらな開股縛り 大手札三枚一組 略号△るのV 一宮百合子	責めに疲れた諦観 大手札三枚一組 略号△るおV 一宮百合子	真紅の腰巻姿で緊縛 大手札三枚一組 略号△るけV 一宮百合子	羞らいの真正面縛り 大手札三枚一組 略号△るふV 一宮百合子	若肌に喰い込む縄目 大手札三枚一組 略号△るやV 一宮百合子	股間縛りの開股姿態 大手札三枚一組 略号△るよV 中河 恵子	羞らいの股間縛り 大手札三枚一組 略号△るにV 中河 恵子
--------------------------------------	------------------------------------	-------------------------------------	--	------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	-------------------------------------	-------------------------------------	---------------------------------------	--	--------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------	-------------------------------------	-------------------------------------	-------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	-------------------------------------

(奈良・和服下着愛好生)

ぼくは二十五才の会社員で、孤独な男です。奇巧の発売を毎月、待ちかねているのですが、新しい本を手にしたときの感動は、とても口では言いあらわせません。ぼくの趣味は鞭打ちなど残酷なものより、ひっそりとした縛りなどが大好きです。ぼくは吉永小百合と園まりの大ファンですが、もちろんこの二人は、こちらの方には全然関係がないので、ぼくは彼女の写真の上に猿ぐつわを噛ませ、緊縛して自分をなぐさめている次第です。そこで編集部の方に二つばかり、お願いがあります。第一にどの先生でもかまいませんから、次の想像図を載せて下さい。立姿で園まりが柱に縛られています。乱れたブラジャーの一方から乳房があらわです。縄は乳房の上に一卷き、乳房の下に二巻き、太腿と足首にも強く巻かれていて、花の模様の入ったパンティが何とも可憐です。猿ぐつわを噛まされて、もだえ苦しむ、まりちゃん。その足元には小百合ちゃんが転がされています、一応、洋服はつけていますが、胸と足首に無残な縄が……。乱れたミニスカートの中から

真白な清潔そうなパンティが、あらわです。日本風の猿ぐつわに何も言うことが出来ない……。これは、ぼくの長年、夢に見た光景です。ぜひ、お願いします。第二は一月号にテレビ映画の縛り場面の写真入り紹介があったのですが、これからも映画に限らず、広範囲に写真入りで紹介してほしいと思います。

(刈谷市・金岡直行)

大阪の新居美和子さん。貴女の悩みがわかるような気がします。他人に言えないSMに対する興味私も貴女と同じように口に出して言うこともできず、ごく普通の結婚をしておりますが、最近になってどなたかSMプレイの相手になってくれる人はいないものかという欲望が特に強くなって困っております。私は現在四十二才、貴女の希望にピッタリという感じがいたします。現在の機構では直接お目にかかることはむづかしいと思えますので、せめて誌上でのおつきあいを、お願いしたいと思えます。女性を全裸にして縛り上げ、猿ぐつわをはめて、肛門責め鼻責めなど徹底的にやってみたい反面女性の手で全裸にされ、身動きも

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れやV

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れゆV

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れえV

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 一〇〇〇円
中河恵子 略号八れぬV

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号八れねV

開股された股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号八れのV

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号八れむV

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やかV

高小手に悶える全裸

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やきV

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やくV

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やもV

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やしV

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やみV

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 五〇〇〇円
大塚・東浦 略号八なるV

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬめV

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬねV

八の字の開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しみV

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しけV

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しこV

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しらV

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しれV

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しわV

お申込みは大阪阿倍野局私書箱

第14号(箕田京二宛)へ願います。

できないぐらい嚴重に縛り上げられて流腸責め、ローソク責め、足なめ等、されてみたいという、S M両方の願ひをもっております。このようなことが現実に行なわれるわけもなく、単なる空想の段階に過ぎませんが、貴女は果していずれの方でしょうか。二月号のお呼びかけでは何等、具体的などころがなく、わずかにSの方が強いのではないかという感じがします。がもしS性であれば私の方はMとしておつきあいをお願いします。誌上では空想の段階からは発展しませんから、お互いに夢を綴り、満たされぬ希望を果たしてはどうかと思ひます。お返事をお待ちしております。(徳島・中島明夫)

城山さん、夏以来のあなたの呼びかけを見て、その中にあなたの初めて縛られるの記にお目にかかるれるかなと思つていましたところ少しも事態が進展しないので、いささか残念、かつ、口惜しく思ひます。大体は傍観者ながら、場所もまあ離れているわけでもないし少々表立つかと思ひますが、どこかでお会いしましょう。先ず最初は少し、お話しする方がよいと思ひます。つまり、それぞれの役割

に同意するまでは対等で自由だということですよ。特に専門家ではありませんが、ロープと針金があれば、たいていのことはできるでしょう。あとは、ローソク、クリップ、羽毛、液体を吸い上げて押し込む管などの小道具を少々用意すればよろしい。気がむけば、どうぞ。(東京・堀田野次郎)

首乗り、顔乗りなど、貴女様のお尻に敷かれて、ご奉仕いたします。東京及び近郊の方、年令は問いません。何卒、哀れな男の希望を叶えて下さい。又、遠地の女王様は文通にお知らせ下さい。当方会社員、二十九才のM男。(東京・田村)

男の子とも女の子とも、およそぼくの持っていた奇クの、奥底のイメージを実生活で、汗まみれで追い求め、その彼方を、幾枚かの紙片を借りて探し続け、そして、やはり喪い、あるいは捨てざるを得なかった、ぼくの今。それはガキとしてのガキなりの奇クへの片想いの一季節が去ってしまった証なのでしょう。ぼくの昨年十一月京に遊んだ冷えた触感が「読者通信」として返送されてきた二月二

全裸後手柔肌縛り 大手札三枚一組 略号△こよ 四〇〇円	乳房強烈膨隆責め 大手札三枚一組 略号△こわ 四〇〇円	海老責めに苦悶する 大手札三枚一組 略号△こお 四〇〇円	全裸の緊縛全身晒し 大手札三枚一組 略号△こほ 四〇〇円	煙草責めに喘ぐ女 大手札三枚一組 略号△こぬ 三〇〇円	緊縛麗姿に映えるライト 大手札三枚一組 略号△こほ 四〇〇円	腎部強調後手縛り 大手札三枚一組 略号△こほ 四〇〇円	羞恥に悶える全裸緊縛 大手札三枚一組 略号△こほ 四〇〇円	ホステスの緊縛姿態 大手札三枚一組 略号△こほ 四〇〇円	二つ折りで責める女体 大手札三枚一組 略号△こほ 四〇〇円	十五日の夜、そう想えて泣いてしまったのです。奇クの愛のイメージが巨大すぎるなら、迷わずガキのままに彷徨うんだ、と。だから永遠に生を選び続けるのなら、ガ
脈打つ全裸の臨月腹 大手札三枚一組 略号△こふ 四〇〇円	臨月腹の革紐股間縛り 大手札三枚一組 略号△こや 四〇〇円	猿轡の臨月妊婦腹縛り 大手札三枚一組 略号△こよ 四〇〇円	卓上の股間縛り狂態 大手札三枚一組 略号△こほ 四〇〇円	羞恥の足挙げ責め 大手札三枚一組 略号△こほ 四〇〇円	悦虐責めの女体終着駅 大手札三枚一組 略号△こほ 四〇〇円	片足挙げの鞭打ち責め 大手札三枚一組 略号△こほ 四〇〇円	柔肌に弾ける惨酷な答 大手札三枚一組 略号△こほ 四〇〇円	あぐら縛りの女体鑑賞 大手札三枚一組 略号△こほ 四〇〇円	対談用に縛られた女 大手札三枚一組 略号△こほ 四〇〇円	牛の物腰で、奇クの幸いを少しでもやろうと、許されることなら。こんなぼくの、単一なわがままをお許し下さい。(東京・呪詛夢)

○ 刺青、いれずみ、彫物、がまん入墨等と、いろいろに書かれ、今ではその使い方も混同されているが、特にそれが女性の肌に彫られたものの、素晴らしさは他に類を見ないものであり、且、女性でも隠れた愛好者も多くおられることと、私も愛好者の一員として、それらの資料や外国の写真をも数多、所有し、海外の有名彫物師とも文通ある者として、同好の志と文通の上、お互いの趣味を開発向上させ、精華させたいと願う者であります。同好の方々の多数のお便りお待ちしております。
(千葉・田口)

○ エネマに関するレポートを、職業が興味深く読んでいます。ですが、たくさんの方が大きな間違いをおかしておられることに気づきましたので、専門家の立場からお知らせしておきます。というのは盲腸（正しくは虫垂炎）のとき、手術前に浣腸は決しておこないません。なぜなら化膿を起こしたりしてしまいます（エソ性という）浣腸の刺戟で切れてしまつて膿が腹腔に入り、腹膜炎を起こす危険性があるためです。浣腸は手術後に

なつてガスが出ず、腸管が麻痺を起こして、むろん排便もなくパンパンにはつてしまつたときに（鼓腸という）おこないます。主として、石けん水による高圧浣腸ですが、ときにはグリセリンも用います。「経験」とお書きになつていても、大抵は創作のために書くが如き誤りをおかしておられると思うのですが、きわめて重要なことなので、ご参考までに申し上げます。
(千葉・竹庵生)

○ 私は二十四才の女性ですが一年ほど前に、ふとした動機で「花と蛇」を読み、その耽美さに魅せられ、その後、奇クを継続購読いたしております。編集者の方にお願ひしますが、「花と蛇」の旧号の挿画を特集号にして発刊して下さい。私の心は「花と蛇」に魅せられつくしております。「読者もアイデアを提供しよう」という意見を寄せられた方がございましたがこの快美の世界を、より以上のものにするため、大いに賛成でございます。過去において、春太郎と夏次郎の登場によって、京子がアヌス責めにされるくだりがございましたが、これは一読者のアイデアが採用されたとか。このときは

頁数も三十頁に及び、しかも新しい感覚の表現で、生き生きと美しくも悩ましい女体が羞恥にのたうつさまを余すところなく、あらわされておりました。団鬼六先生の華麗な筆が、快美、悦虐の極致に躍り、私をして無限の微妙な意識の中に耽溺せしめるよう、読者のみなさまのアイデアをお送り下さいませ。今までに奇クに寄せられたアイデアの中にも、なかなか捨て難いものがあると思います。黒人とのからみ、犬や蛇とのかみ。嘲笑の騒ぎの場ではなく、違った雰囲気、好事家達の中央にて行う、大鏡の前の全裸ストリップやオナニショール。千代による直接のレス責めなど、期待しております。宮城みち子様。若い貴女は男の人に浣腸してもらいたいとか、空想の中で最も恥かしいことをお願いするかもしれないとか書いていらっしやいました。それは貴女の二十才の若さが言わせることです。男の人はもっと先にのぼして、私と同性のプレーをしましょう。イチジクでは心もとない貴女に充分な刺激を与えてあげます。倒錯の快感に貴女の陰微な箇所は慄えるでしょう。私は同性の羞恥に震える姿態に異常な執着を感じます

開脚縛りの上、前後をコケシで充分、責めてあげますから、安心して私に貴女の若々しく、むっちりした体をあずけて下さい。私は高価なポラロイドを持っておりまして、貴女の排便ショールや排尿ショールを撮ってあげます。若いときの記念として秘蔵されては如何でしょうか。「花と蛇」の静子夫人と京子や小夜子のように、貴女と私を一つにつなぎ、耽美の世界を放浪する器具を作つて持っております。私の柔らかな箇所を味わつてみて下さい。貴女よりの良き返事をお待ちしております。
(神戸市・小杉千恵)

○ 奇ク三月号での門真市の藤原笑子さんの一文を拝読、貴女の勇氣に敬意を表し、何となく文通による交際でもしてみたいと思ひました。私は四十三才ですが妻はSMの世界に対しては理解がない、いや、むしろ拒否し軽べつが目で見えようとしません。たとえ実際のプレイが行なわれなくとも、せめてSMの世界を語りあえる、そんな女性との交際を永年求めてくるのです。恐らく貴女の元に殺到するであろう、数多くのSMの男性を考えると、私ごとき者が名

次号(六月号)は四月二十五日に発売いたします

乗りをあげてもと、絶望的になりながらも、こうして一文を呈したくなったのは、貴女が押しつけがましいところがない、控え目な、まじめな人であるように思えるからです。もし私の一文に目を止めていただけたら、せめての文通なりとお許し下されば幸甚です。

(京都・橋本生)

○ 早春の候貴誌ますますご隆昌の事と拝察お喜び申し上げます。小生貴誌の熱心な愛読者ですが小生の好みは艶やかな女体責めの中で特に光沢に富んだ青竹による女の羞恥拷問責に非常に興味があります。竹と女との取り合わせはどこか歴史的、芸術的なおもむきがあるって異色の面白味があるようです。(小生は竹についてかねてから研究中です)ふしとふしとの間の長いすんなり伸びた雌竹に属する青竹の艶やかさ、その竹の表面は磨けば磨くほどに緑の美しい光沢に輝き、その臭いにも男のセックス的なものがあります。この他竹学に依ればなかなか興味深いもの

です。さらにこの竹を音楽的に分析しますと尺八という独特の音色となり、セクシイに連想すれば性器接吻ということにもなり、これらセクシイな管を持つものには日本的なものは、この青竹と西洋的にプラス(金管楽器)があります。が、プラスの方では音色的に木管に属している金管のサキソフォーン、サククスとして親しまれ、その英字を一字替えるだけでセックスフォーンとなります。他にもトランペット、トロンボーン、ホルン、チューバ等何れもセクシイなイメージを秘めた物が多い。トロンボーンはスライド管の抜き差しに依る発音に、その奏法に男女のまじわりを連想させられる。ある女の子はその奏法とたくましい音色(時にはミュートつけて甘い夢幻的音色にもなる)にしばれてトロンボーンという金管と奏者に魅力をおぼえたこととです。プラス楽器とか青竹などのセクシイな面白いネタが他にも沢山ありますが、いずれまたの機会に一愛読者として投稿させていただきます。(岐阜県各務原市・南明)

○ 『青少年に悪書を読まないで下さい』この文章を良く考えてみるといかに責任転嫁な言葉か分る。人格の形成は金喜老の例でも分るように、周囲の環境がどうであろうと、自己の形成期において、ごく一般的な踏みはずした道を選択した自由意志こそ責めらるべきではないか。私は学生時代から奇クや今は廃刊になった裏窓などを読みそれと併行して激しい勉強もやっていた。現在法律を学んでいるが、六法を読むかたわら、心の糧として奇クを読み他の者が苦しむ勉強からのスランプの期間が私には短いように思う。六法の世俗の世界から、奇クの性本能を揺さぶられるような幻想の世界へ自己を超越させることにより生ずるのだと思う。奇クの主流はサドとマゾであると思うが、その現代における意義を考えてみた。古代から新しい過去までSMはある特定の人々により隠微に営まれたことだろう。最近のSMはそうとは思わない。明確に性の型の特異な変形から一般的な変型へ健康的という言葉を使用し得る位に変化していると思う。性の快楽は人間専有のものだとい

出がSMにあるのではないか。奇クのファンなら文章のSMズミから感じることもだろう。単細胞の人々が企及する奇クへの弾圧と奇クの発展への理解における相関関係は我々若い世代と未来での生活に相対的影響を及ぼしそうなので悩める小羊は杞憂している。読者はいかに。山本氏の文章が載らなくて淋しい。山本氏の文章から感じられる背後のゾクゾクするような現代感覚ニヒリズムはどうしたのだ辻村氏の甘いピエロの様な感覚とは同じウインドウに入れてこそ二人が映えるのではないか。

(東京都・山田一郎)

○ マゾヒズムに五体をしびらせ悶える女性、そんな女性は、この現世に実在するものでしょうか。奇クの愛読者となつてから四年有余私はいつもこのような疑問にとりつかれ尚かつ、そのようなM女性の実存を夢見ながら、奇クを読み耽っております。小説に、映画にテレビに、幾多のM女性が登場してきますが、いずれもそれはドラマの上の絵空ごとであり、所詮は単なる演技に過ぎないと思うのです。重ねて私は声を大にして問いたい。本当にこの世にMの女性は

存在するものだろうか。ロープで緊縛され、両手を吊られ、柔肌に鞭が炸裂し、或は又犬のように四つ這いになり、首輪をはめられ、手錠足枷に、くさりをじゃらじゃらさせながら、マゾの喜びに官能をわななかせると——そんな女性がいるのだろうか。この私の切なる疑問と願望にに応じてくれる女性が実際に居られたら、是非とも私の目の前に出現し立証してくれませんか。年令は18才から40才までの女性なら、顔や容姿の美醜は問いません。四月の日曜日の午後、仙台の東宝ビル入口にある書店において願い、映画雑誌を手にとって読んでいて下さい。但し必ず右手

小指に白い繻帯を巻いて下さい。小生は同じく左手の小指に同じ物を巻いて行きます。その日、正真正銘のM女性が出現することを熱望しペンをおきます。

(仙台市・H生)

奇譚クラブという雑誌は読んでいてまったく面白い。秘められた欲望を各自読者通信その他によって伝えてくれる。色々お話ししたい方が大勢おられるのに、住所がわからないのは、まったく残念に思います。通信でも随分お目にかかりますが、私の奇癖は下着フェチです。始めてこの本を手にした時、「私は下着フェチです」とい

う文章が出ると、何か自分の秘密をまったく知らない他人によって語られているように感じたのか、つい怒りを感じたのを、おぼえています。私は二十二才の青年ですが、下着フェチといっても、今のところ思想上のことと、まだ女の人の下着を手にしたこともなく、バー街の裏道に干してある妖しい想いをさせるような下着、ブルーピンク、フリルのついた物など、もしその下着を脱ぎすてたすぐ温かみのあるものを手にすることが出来たら、どんなに狂喜するだろうと思ったりします。友人の家でも、その高校生の妹さん、ちょっと好きそうな姉さん、そのほっそ

りとした柔肌の腰部を被っている下着は一体どんなだろう。もしその下着を下さいといったら、どうだろうなどと考えたりします。この頃は女性の読者の方が多くなつてうれしく思います。その全部の方が私の願いをきいて下さると嬉しいのですが。毎日毎日匂いのついた女性の下着をほしいと思つています。頭の中で匂いを想像するのは、ただもんもんとするばかりで、一枚の下着に、とうてい及ぶものではないでしょう。また浣腸プレイ、SMフォトにも興味あります。その点SMカメラハントに参加できるといいのですが。

(奈良県・青木和夫)

本誌既刊号在庫一覧表

既刊雑誌在庫案内

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少な御注文願います。お早い目に○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三力月以上予約注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担をお願いします。多数一括してお求めの際は、小包にて発送申し上げます。

昭和41年3月号	昭和41年2月号	昭和41年1月号	昭和40年12月号	昭和40年11月号	昭和40年9月号	昭和40年8月号	昭和40年7月号	昭和40年6月号	昭和40年5月号
(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)

☆編集後記☆

○今月は、辻村隆氏の精力的なカメラ・ハント「イン・トーキョウ第二夜」をはじめ、シナリオ「お静受縛譜」八風流極道軒▽及び、「いれずみ地獄」八小谷和勝▽と、相当に長いものを載せる結果になった。出来るだけ各嗜好のものをと心掛けて、枚数の多いものは分割収載を考えていたのであるが、どうもすこし間が抜けるようだ。作品によっては可能のようだが、連載物以外はやはり読み切りの方がよさそうである。ただ、その結果、限られた誌面のことで、他を圧迫することになってしまふところに悩みが残る。

○「読みごたえある雑誌」を目標にしている現在、枚数の長短にかかわらず、コクのある

ものを求める気持は強いのであるが、本誌としては「読ませるもの」勿論望ましいことながら、文の巧拙よりやはり素直な「体験記」「告白」ものを重視するべきだと思う。しかし、その心構えで投稿を拝見しているつもりだが「卒直なる告白」とは単に「性の露呈」なのだろうか？　と考える時がある。

○制約の、自粛のという枠以外に、ここまで書いてしまつては、折角のそこに至るまでの「特殊なる感受性主張」が、ボヤケてしまう結果になるのではと思うものが多い。その大部分がそうであるといつても過言ではない。「アブノーマルな性」といふと「人間の性」には違ひはなからうが、特色としてはその「セックス・アッピール」を何に依つて得たかを重視すべきではなからうかと思うが如何？

「懸賞原稿募集」

△体験、告白、手記▽

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千円以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語▽

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはとて思ふ作品は必ず誌上に取上げて貰ふ。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万円迄贈呈。

△感想、論評、批判▽

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

△（映画、雑誌）通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千元以上の賞金贈呈。

○御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに依らないことになっております。故

悪しからず御諒承願います。◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致してあります。故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

△読者通信原稿▽

巻末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放してあります。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆本誌御購読の榮☆

予約に限り
一月分(1冊)三五〇円入送20円▽
三月分(3冊)一〇五〇円入送共▽
半年分(6冊)二一〇〇円入送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。毎月二十日前後、印刷完成と同時に重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

五月号 (第二十三巻第五号)
昭和四十四年四月二十日 印刷
昭和四十四年五月一日 発行

編集人 杉原虹児
発行人 北村俊夫
印刷人 村田俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号 発行所 暁出版株式会社

郵便番号558
△振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大局特別取扱承認雑誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されたように充分に注意して編集いたしました。しかし、本誌成人向として発行を企図しておりますが、本誌上、十八才未満の方には絶対販売下されません。特にくれぐれもお願ひ申し上げます。